

一般国道8号  
糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ

六反田南遺跡  
前波南遺跡

2008

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道8号  
糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ

ろく たん だ みなみ 遺跡  
六反田南遺跡  
ぜん なみ みなみ 遺跡  
前波南遺跡

2008

新潟県教育委員会  
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

# 序

一般国道8号は、新潟市を起点とし京都市に至る、北陸地方と京阪神地方を結ぶ日本海側の幹線国道であり、新潟県の経済・文化の交流発展に大きな役割を果たしてきました。

しかし、現在の糸魚川市域の国道8号は、渋滞・交通事故・降雪時の交通障害、騒音などの交通環境の悪化が深刻な問題となっています。糸魚川東バイパス建設事業は、このような問題を解決し、幹線道路としての役割や地域の生活道路としての機能を回復させるために計画されました。

本書は、この糸魚川東バイパスに先立って調査した六反田南遺跡・前波南遺跡の発掘調査報告書です。調査によって、六反田南遺跡からは古墳時代初頭の集落跡の一端が検出されました。また、前波南遺跡では弥生時代から中世の河川跡が見つかり、多くの遺物が出土しました。特に古代の木製品は刀子鞘や鋤、田下駄、木筒、籠編物など様々な種類が見られ、当時の人々の暮らしぶりを知る貴重な資料となりました。

今回の調査結果が、地域の歴史を解明するための資料として広く活用されるとともに、県民の方々の埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に際して糸魚川市教育委員会、地元の方々には多大なる御協力と御援助をいただきました。また、国土交通省北陸地方整備局高田河川国道工事事務所には、発掘調査から報告書刊行に至るまで格別のご配慮をいただきました。ここに厚く御礼申し上げます。

平成20年10月

新潟県教育委員会

教育長 武藤克己

## 例 言

- 1 本報告書は、新潟県糸魚川市大字大和川字六反田 1035-1 ほかに所在する六反田南遺跡、新潟県糸魚川市大字大和川字前波 639-1 ほかに所在する前波南遺跡の発掘調査記録である。
- 2 この調査は、一般国道 8 号糸魚川東バイパスおよび北陸新幹線の建設に伴い、国土交通省および鉄道建設・運輸施設整備支援機構から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したもので、調査主体である県教委は財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に依頼した。
- 3 事業団は掘削作業等を株式会社吉田建設に委託して発掘調査を実施した。
- 4 出土遺物及び調査・整理作業に係る各種資料（含観察データ）は、一括して県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。
- 5 遺物の注記は、六反田南遺跡の略記号「六反ミ」、前波南遺跡の略記号「ゼンナミ」とし、調査年度・出土地点・層位などを併記した。
- 6 本書の図中で示す方位は、すべて真北である。ただし、ここでいう「真北」は、日本平面国家座標の X 軸方向を示す。
- 7 遺物番号は種別に関わりなく通し番号とし、本文及び観察表・図面図版・写真図版の番号はすべて一致している。
- 8 本文中の注は脚注とし、頁ごとに番号を付した。また、引用・参考文献は著者および発行年（西暦）を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。また、本文中の敬称は略した。
- 9 調査成果の一部は現地説明会（平成 18 年 11 月 3 日）で公表しているが、本報告をもって正式な報告とする。
- 10 本報告書の作成にあたり、航空写真撮影・遺構の図化・自然科学分析は以下の機関に委託した。  
航空写真撮影……………J・T 空撮  
遺構の図化……………株式会社東北測量設計社  
自然科学分析……………バリノ・サーヴェイ株式会社
- 11 遺構図および遺物実測図のトレース及び各種図版作成・編集に関しては、株式会社セピアスに委託してデジタルトレースと DTP ソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。また、遺物写真撮影はデジタルカメラ（ニコン D100）で撮影し、遺構写真とあわせて CD 化して編集を行った。
- 12 本書の執筆は春日真実（埋文事業団調査課 班長）・富野義昭（同 主任調査員）・加藤 学（同 主任調査員）・小川真一（同 文化財調査員）・坂上有紀（同 嘱託員）・細井佳浩（株式会社吉田建設埋蔵文化財調査部 調査員）・矢部英生（同 調査員）・高橋 敦（バリノ・サーヴェイ株式会社）がこれにあたり、編集は坂上が担当した。執筆分担は以下のとおりである。  
第 1 章・第 2 章 2B・第 3 章 3C・第 5 章 1・5・6：春日  
第 2 章 1：小川  
第 2 章 2A：加藤・春日  
第 3 章 1・2・3A・3B、第 5 章 2・3：坂上  
第 3 章 3D,E,F：富野  
第 3 章 4・第 4 章 4：高橋  
第 4 章 1・2・3E・第 5 章 4：細井  
第 4 章 3A～D：矢部
- 13 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くの御教示・御協力を賜った。ここに記して厚くお礼申し上げる。（敬称略 五十音順）  
伊藤 秀和 柿田 祐司 木島 勉 北野 博司 笹沢 正史 望月 精司 山岸 洋一  
糸魚川市教育委員会



# 目 次

第 I 章 序 説 .....	1
1 調査に至る経緯 .....	1
A 国道 8 号糸魚川東バイパス .....	1
B 北陸新幹線 .....	2
C 分布調査と試掘確認調査 .....	2
2 調査と整理作業 .....	4
A 試掘確認調査 .....	4
B 本発掘調査 .....	4
C 調査体制 .....	5
D 整理作業 .....	6
第 II 章 遺跡の位置と環境 .....	7
1 地理的環境 .....	7
2 歴史的環境 .....	8
A 周辺の主な遺跡 .....	8
B 文献資料からみた古代・中世の西頸城 .....	12
第 III 章 六反田南遺跡 .....	14
1 調査の概要 .....	14
A グリッドの設定 .....	14
B 基本層序 .....	14
2 遺 構 .....	16
A 概 要 .....	16
B 記述方法 .....	16
C 各 説 .....	17
3 遺 物 .....	21
A 古墳時代前期の土器 .....	21
B 縄文時代の土器 .....	26
C 古墳時代後期以降の土器・陶磁器 .....	28
D 石 器 .....	32
E 木 製 品 .....	33
F 金属製品 .....	35
G 土 製 品 .....	35
4 自然科学分析 .....	36
第 IV 章 前波南遺跡 .....	39
1 調査の概要 .....	39

A	グリッドの設定	39
B	基本層序	39
2	遺構	40
A	概要	40
B	各説	40
3	遺物	44
A	土器・陶磁器	44
B	土製品	49
C	金属製品	49
D	石器	49
E	木製品	50
4	自然科学分析	53
第V章 まとめ		57
1	編年軸の設定	57
2	六反田南遺跡出土土器の編年的位置づけ	60
3	六反田南遺跡の遺構について	61
4	前波南遺跡の出土遺物からみた遺跡・遺構の時期について	62
5	六反田南遺跡の柱材について	63
6	遺跡の存続期間	74
	〈要約〉	87
	〈引用・参考文献〉	88
	〈六反田南遺跡遺構観察表〉	94
	〈六反田南遺跡遺物観察表〉	98
	〈前波南遺跡遺構観察表〉	104
	〈前波南遺跡遺物観察表〉	107

## 挿図目次

第1図	一般国道8号糸魚川東バイパスの 法線と道跡の位置 …………… 1	第13図	前波南道跡出土木製品切片の顕微鏡写真 … 56
第2図	試掘確認調査トレンチ位置と 本発掘調査範囲 …………… 3	第14図	前波南道跡川村9～12段階 における土器と石器 …………… 62
第3図	道跡の位置と周辺の主な道跡 …………… 11	第15図	古墳時代の柱材1 …………… 67
第4図	六反田南道跡グリッド設定と土層柱状図 …… 15	第16図	古墳時代の柱材2 …………… 68
第5図	道構の平面形態と断面形態の分類 …………… 16	第17図	古墳時代の柱材3・古代の柱材1 …… 69
第6図	道構埋土の堆積形状の分類 …………… 16	第18図	古代の柱材2 …………… 70
第7図	六反田南道跡土器分類図 …………… 22	第19図	古代の柱材3・縄文時代の柱材 …… 71
第8図	六反田南道跡包含層出土土器重量分布図 … 27	第20図	姫川—早川間の道跡1 …………… 77
第9図	六反田南道跡における古墳時代後期以降の 土器・陶磁器の変遷 …………… 31	第21図	姫川—早川間の道跡2 …………… 78
第10図	六反田南道跡出土木製品切片の 顕微鏡写真 …………… 38	第22図	姫川—早川間の道跡3 …………… 79
第11図	前波南道跡グリッド設定と土層柱状図 …… 39	第23図	姫川—早川間の道跡4 …………… 80
第12図	前波南道跡における土器・陶磁器の変遷 … 48	第24図	姫川—早川間の道跡5 …………… 81
		第25図	姫川—早川間の道跡6 …………… 82
		第26図	姫川—早川間の道跡7 …………… 83
		第27図	姫川—早川間の道跡8 …………… 84

## 表目次

第1表	六反田南道跡主要グリッドの座標 …… 14	第9表	前波南道跡出土の土器・陶磁器 …… 44
第2表	六反田南道跡古墳時代後期以降の 土器・陶磁器 …………… 28	第10表	前波南道跡樹種同定結果 …… 54
第3表	須恵器の胎土 …………… 28	第11表	編年対応表 …………… 59
第4表	古代土器編年の暦年代 …………… 29	第12表	六反田南道跡SD196・SD200器種構成 … 61
第5表	六反田南道跡出土石器石材・種別一覧 … 32	第13表	六反田南道跡SD196・SD200 溝口縁部形態の比率 …………… 61
第6表	六反田南道跡出土木製品器種構成 …… 33	第14表	柱材観察表(1) …………… 72
第7表	六反田南道跡樹種同定結果 …………… 37	第15表	柱材観察表(2) …………… 73
第8表	前波南道跡主要グリッドの座標 …… 39	第16表	道跡動向表 …………… 85

## 図版目次

### 【図面】

図版1	六反田南道跡 道構全体図
図版2	六反田南道跡 道構分割図(1)
図版3	六反田南道跡 道構分割図(2)
図版4	六反田南道跡 道構分割図(3)
図版5	六反田南道跡 道構分割図(4)
図版6	六反田南道跡 道構個別図(1)
図版7	六反田南道跡 道構個別図(2)
図版8	六反田南道跡 道構個別図(3)
図版9	六反田南道跡 道構個別図(4)
図版10	六反田南道跡 道構分割図(5)
図版11	六反田南道跡 道構分割図(6)
図版12	六反田南道跡 道構分割図(7)

図版13	六反田南道跡 道構個別図(5)
図版14	六反田南道跡 道構個別図(6)
図版15	六反田南道跡 道構個別図(7)
図版16	六反田南道跡 道構個別図(8)
図版17	六反田南道跡 古墳時代前期の土器(1)
図版18	六反田南道跡 古墳時代前期の土器(2)
図版19	六反田南道跡 古墳時代前期の土器(3)
図版20	六反田南道跡 古墳時代前期の土器(4)
図版21	六反田南道跡 古墳時代前期の土器(5)
図版22	六反田南道跡 古墳時代前期の土器(6)、 縄文土器・古墳時代後期から古代の土器
図版23	六反田南道跡 中近世の土器・陶磁器、石器(1)
図版24	六反田南道跡 石器(2)

- 図版 25 六反田南遺跡 木製品 (1)  
図版 26 六反田南遺跡 木製品 (2)、金属製品、土製品  
図版 27 前波南遺跡 遺構全体図  
図版 28 前波南遺跡 遺構分割図 (1)  
図版 29 前波南遺跡 遺構個別図 (1)  
図版 30 前波南遺跡 遺構個別図 (2)  
図版 31 前波南遺跡 遺構分割図 (2)  
図版 32 前波南遺跡 遺構個別図 (3)  
図版 33 前波南遺跡 遺構個別図 (4)  
図版 34 前波南遺跡 遺構個別図 (5)  
図版 35 前波南遺跡 土器・陶磁器 (1)  
図版 36 前波南遺跡 土器・陶磁器 (2)

#### 【写真】

- 図版 47 六反田南遺跡 遺跡近景・SD196 遺物出土状況  
図版 48 六反田南遺跡 SD196・200 完掘・  
26～30 列完掘・32～37 列完掘・基本層序  
図版 49 前波南遺跡 遺跡遠景・基本層序・  
旧河道土層断面・遺物出土状況  
図版 50 六反田南遺跡 遺構個別写真 (1)  
図版 51 六反田南遺跡 遺構個別写真 (2)  
図版 52 六反田南遺跡 遺構個別写真 (3)  
図版 53 六反田南遺跡 遺構個別写真 (4)  
図版 54 六反田南遺跡 遺構個別写真 (5)  
図版 55 六反田南遺跡 遺構個別写真 (6)  
図版 56 六反田南遺跡 遺構個別写真 (7)  
図版 57 六反田南遺跡 遺構個別写真 (8)  
図版 58 六反田南遺跡 遺構個別写真 (9)  
図版 59 六反田南遺跡 遺構個別写真 (10)  
図版 60 六反田南遺跡 遺構個別写真 (11)  
図版 61 六反田南遺跡 遺構個別写真 (12)  
図版 62 六反田南遺跡 古墳時代前期の土器 (1)  
図版 63 六反田南遺跡 古墳時代前期の土器 (2)  
図版 64 六反田南遺跡 古墳時代前期の土器 (3)

- 図版 37 前波南遺跡 土器・陶磁器 (3)、土製品、  
金属製品、石器 (1)  
図版 38 前波南遺跡 石器 (2)  
図版 39 前波南遺跡 木製品 (1)  
図版 40 前波南遺跡 木製品 (2)  
図版 41 前波南遺跡 木製品 (3)  
図版 42 前波南遺跡 木製品 (4)  
図版 43 前波南遺跡 木製品 (5)  
図版 44 前波南遺跡 木製品 (6)  
図版 45 前波南遺跡 木製品 (7)  
図版 46 前波南遺跡 木製品 (8)  
図版 65 六反田南遺跡 古墳時代前期の土器 (4)  
図版 66 六反田南遺跡 古墳時代前期の土器 (5)  
・縄文土器・古墳時代後期以降の土器・陶磁器 (1)  
図版 67 六反田南遺跡 古墳時代後期以降の  
土器・陶磁器 (2)、石器 (1)  
図版 68 六反田南遺跡 石器 (2)、木製品、  
金属製品、土製品  
図版 69 前波南遺跡 遺跡近景・調査区全景  
図版 70 前波南遺跡 遺構個別写真 (1)  
図版 71 前波南遺跡 遺構個別写真 (2)  
図版 72 前波南遺跡 遺構個別写真 (3)  
図版 73 前波南遺跡 遺構個別写真 (4)  
図版 74 前波南遺跡 土器・陶磁器 (1)  
図版 75 前波南遺跡 土器・陶磁器 (2)  
図版 76 前波南遺跡 石器、金属製品、木製品 (1)  
図版 77 前波南遺跡 木製品 (2)  
図版 78 前波南遺跡 木製品 (3)  
図版 79 前波南遺跡 木製品 (4)  
図版 80 前波南遺跡 木製品 (5)  
図版 81 前波南遺跡 木製品 (6)

# 第1章 序 説

## 1 調査に至る経緯

### A 国道8号糸魚川東バイパス

高田平野の西に広がる西頸城地域では、北アルプスから続く山地や丘陵が日本海へと急激に高度を下げるため、その変化にとんだ地形は美しい景観を作り出すとともに、そこに住む人々の生活に大きな影響を与えている。

糸魚川市域は、古代から北陸道の難所といわれた親不知・子不知がすぐ西に位置し、また「塩の道」として知られる松本街道の日本海側の基点として、古くから交通の要所として栄えてきた。それも周辺の自然地形がもたらした恵恩のひとつであろう。現在でも同地内を通過する国道8号は、北陸自動車道とともに、関西・北陸方面と新潟県域を結ぶ主要幹線道路である。また地元においては、山地と海岸を結び、南北に延びる道路を、東西方向に連結・連絡する重要な生活道路としての役割を担ってきた。

しかし、近年の自動車交通量の増加は通勤・通学時間帯を中心に糸魚川周辺地域で慢性的な渋滞を引き起こしている。地元でも、渋滞の解消や交通安全の確保を含めた交通環境の改善策を求めていた。建設省（現国土交通省、以下、国交省）はその状況を踏まえて、糸魚川東地区の交通混雑の解消と幹線ネットワークの充実と強化を目的に、国道8号糸魚川東バイパス建設（糸魚川市間脇～同市押上に至る6.9km）を平成元年に事業化した。これを受け、国交省と新潟県教育委員会（以下、県教委）との間では、計画用地内における埋蔵文化財の分布調査・試掘確認調査等に関する協議が本格化した。



第1図 一般国道8号糸魚川東バイパスの法線と遺跡の位置  
(国土地理院発行「糸魚川」1：50,000原図 平成8年発行)

## B 北陸新幹線

北陸新幹線は、全国新幹線鉄道整備法に基づき建設される新幹線鉄道である。東京を起点とし、上越新幹線高崎駅で分岐して、長野市・上越市・糸魚川市・富山市・金沢市・福井市等の主要都市を經由し、新大阪に至る延長約700km（うち東京・高崎間105kmは上越新幹線と共用）の路線である。このうち、高崎・長野間は、平成9年10月から営業運転している。北陸新幹線の全通により、北陸地方と首都圏・関西圏を短時間で結び、日本海沿岸地域の産業・経済・文化の交流発展にも多大な効果をもたらすものと期待されている。

上越市から富山市までの約110kmの区間は、平成5年9月に糸魚川市～魚津市間が新幹線鉄道規格路線としての工事実施計画が認可され、平成13年4月には上越～糸魚川間の新規着工及びフル規格化が決定した。これを受けて、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構（以下、鉄道・運輸機構）と県教委との間で、建設用地内における埋蔵文化財の分布調査・試掘確認調査等に関する協議が本格化した。

## C 分布調査と試掘確認調査

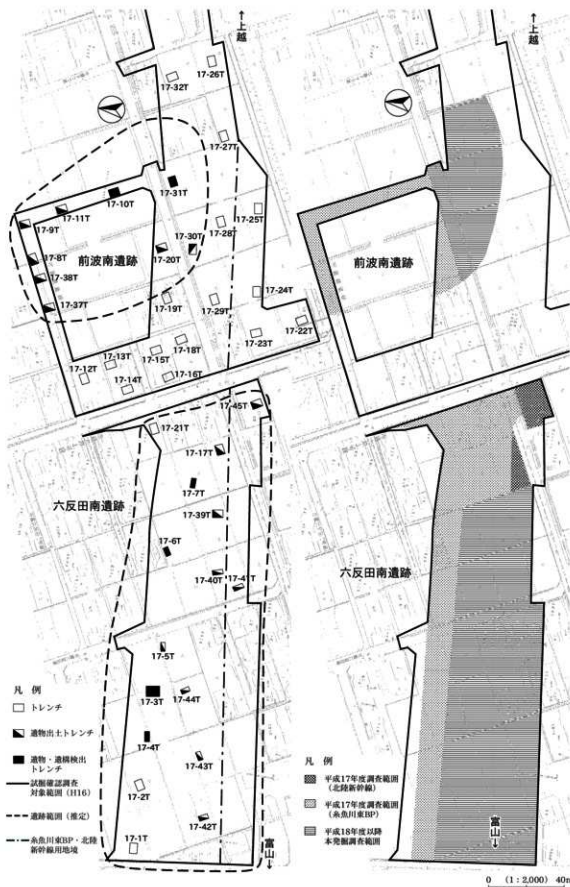
平成11年度に国交省から分布調査の依頼を受けた県教委は、これを財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に依頼し、埋文事業団では10月13・14日に予定法線内を中心に分布調査を実施し、地表の遺物の採集に努めた。その結果、糸魚川市梶屋敷字薬師堂ほかの地点で数点の遺物を採集し、法線内数か所に遺跡が存在する可能性があることを報告している。

これを受けて県教委は国道8号糸魚川東バイパス用地の試掘確認調査を実施することとなった。県教委から委託を受けた埋文事業団は、平成17年10月15日～11月10日（実質15日間）の間、市道東山線から市道町山崎線の間の国道8号糸魚川東バイパス用地で試掘・確認調査を行った。調査の結果、45か所のトレンチのうち4か所で遺構、23か所で遺物を検出した。遺構・遺物を検出したトレンチの分布は、市道大原1号線周辺の遺構・遺物が出土しない地点を挟んで東西に二分でき、これらの地点はこれまで遺跡が存在することが認識されていなかったことから、東側の地点を前波南遺跡、西側を六反田南遺跡とした。事業団と県教委は前波南遺跡3,848m<sup>2</sup>、六反田南遺跡12,840m<sup>2</sup>の本発掘調査が必要であると判断し、県教委はこのことを国交省に報告している。

また、平成13年5月に鉄道・運輸機構から分布調査の依頼を受けた県教委は、同年10月に分布調査を実施し、地表の遺物の採集に努めた。その結果、周知の姫御前遺跡ほかの地点で数点の遺物を採集し法線内数か所に遺跡が存在する可能性があることを県教委に報告している。

これを受けて県教委は北陸新幹線用地の試掘確認調査を実施することとなった。県教委から委託を受けた埋文事業団は、平成17年11月11日～11月15日（実質3日間）の間、市道アワラ線から市道町山崎線の間の北陸新幹線用地で試掘・確認調査を行った。調査の結果、16か所のトレンチのうち8か所で遺物が出土した。遺物が出土した地点は、国道8号糸魚川東バイパスで新たに発見された六反田南遺跡に隣接することから、六反田南遺跡の範囲が拡大するものと考えられた。事業団と県教委は六反田南遺跡3,580m<sup>2</sup>の本発掘調査が必要であると判断し、県教委はこのことを鉄道・運輸機構に伝えている。

その後県教委、国交省、鉄道・運輸機構の三者は協議を重ねた。前波南遺跡・六反田南遺跡の本発掘調査必要面積は、合計20,268m<sup>2</sup>と広大であり、糸魚川東バイパス・北陸新幹線などの工事工程を考慮した結果、平成18年度には六反田南遺跡3,330m<sup>2</sup>（国道8号糸魚川東バイパス3,070m<sup>2</sup>、北陸新幹線260m<sup>2</sup>）、



第2図 試掘確認調査トレンチ位置と本発掘調査範囲

前波南遺跡 1,150m<sup>2</sup>（国道8号糸魚川東バイパス関連）の本発掘調査を実施し、残りの地点については、平成19年度以降本発掘調査を実施することとなった。

## 2 調査と整理作業

### A 試掘確認調査（第2図）

前波南遺跡・六反田南遺跡に係る試掘確認調査は、平成17年10月15日～11月15日（実質18日間）の間、糸魚川市大和川において、一般国道8号糸魚川東バイパスおよび北陸新幹線用地合計29,980m<sup>2</sup>（糸魚川東バイパス26,400m<sup>2</sup>、北陸新幹線3,580m<sup>2</sup>）を対象とし実施した。調査の方法は工事用地内に試掘坑（トレンチ）を任意に設定したうえで、重機（バックホウ）及び人力による掘削・精査を行い、その後、土層の堆積状況、トレンチ位置、遺構・遺物の検出状況等を図面・写真等に記録するものである。トレンチの掘削深度は2mを目途とした。調査面積は972m<sup>2</sup>（糸魚川東バイパス737m<sup>2</sup>、北陸新幹線235m<sup>2</sup>）であり、試掘確認率は3.4%（糸魚川東バイパス2.8%、北陸新幹線6.6%）である。

調査の結果、対象地の西側3～7・17・39～45トレンチ、および東側8～10・20・30・31・37・38トレンチで遺物が出土した。遺物包含層までの深度は1m～30cm、包含層の厚さは5～30cmであった。3～5・42～44トレンチでは、弥生時代末～古墳時代初頭頃の土器を中心に、50点前後がそれ以上の遺物が出土し、これらの中には砥石・ヒスイ剥片も存在し、弥生時代末～古墳時代初頭頃の玉作遺跡の可能性が考えられた。また、3トレンチで土坑・ピット、4トレンチで土坑、7トレンチで溝、10・31トレンチでは川道と思われる落ち込みを検出した。

試掘・確認調査対象地はこれまで遺跡の存在が知られていなかった地点であるため、西側の遺構・遺物が出検されたトレンチのまとまりを六反田南遺跡、東側の遺構・遺物が出検されたトレンチのまとまりを前波南遺跡とし、六反田南遺跡16,420m<sup>2</sup>、前波南遺跡3,848m<sup>2</sup>の本発掘調査が必要となった。

### B 本発掘調査

#### 1) 六反田南遺跡

平成17年度の試掘確認調査で本発掘調査が必要と判断された16,420m<sup>2</sup>のうち、3,330m<sup>2</sup>（糸魚川東バイパス3,070m<sup>2</sup>、北陸新幹線260m<sup>2</sup>）の本発掘調査を平成18年度に実施した。

**実施事前準備・排水処理施設設営等** 平成18年5月8日から本発掘調査に着手するため、4月10日に事務所設置等の諸準備に取りかかり、4月24日から開渠掘削を開始した。開渠の設定は調査区の全周ではなく、農業用水路からの注し水が予測される南側のみ限定し、ほかの部分は包含層掘削と併行しながら重機もしくは人力で開削することとした。試掘確認調査の結果から、現地表から包含層までの堆積が1mを超える地点もあり、こうした地点は、法面の勾配を1割5分と緩めに設定しながら開渠を掘削した。

**重機掘削** 平成18年4月17日から盛土・旧表土等の掘削を行った。盛土・表土は、調査員立会いのもと重機により掘削した。遺物包含層は基本層序のⅢ層であるが、遺物が希薄な地点は、Ⅲ層まで連続して重機で掘削し、5月23日には重機による掘削を終了している。

**人力掘削等** 人力による掘削は、平成18年5月8日から開始した。遺物が定量確認できる地点は、ホソ・移植ゴテ・竹ペラなどを用い慎重に掘削した。遺物の取り上げは2m毎の小グリッド（第三章1参照）を基本とし、遺構出土の遺物はこれに遺構名を付した。なお、遺構番号は、遺構の種類（土坑・溝・ピット



など)に関わらず、連番とした。

**写真撮影** 現地の遺構等の個別写真撮影は人力掘削と平行して各調査員がおこなった。35mmリバーサルフィルム(ISO100)の撮影を基本として、メモ写真などでデジタルカメラを使用した。また、J・T空撮にラジコン・ヘリコプターによる航空写真撮影を委託し、平成18年8月3日に実施した。

**掘り残り確認** 航空写真撮影後遺構・遺物が多く検出された地点を中心に、重機で10～50cm程度掘削を行い、掘り残した遺構が無いか確認した。この結果、溝2条を検出した。

**土壌水洗** 玉類の製作に関連すると思われる緑色凝灰岩・ヒスイの剥片等が確認できた。これらが確認できた地点を中心に、掘削土を地点名を付した土嚢袋に入れ水洗を行った。土壌水洗は、主に現地で行い、8月4日から開始し、9月22日に終了した。

**現地説明会** 現地説明会は実施しなかったが、平成18年11月3日(金・祝日)にほかの遺跡(山岸遺跡:糸魚川市田伏)の現地説明会にあわせて、調査成果の一部を公表した。

**市道・農業用水路部分の調査** 平成18年度の調査必要範囲と市道(町山崎線・六反田線)や農業用水路が重複している地点の調査は、工事工程にあわせ断続的に調査を実施した。調査は9月26日に開始し、11月15日に終了した。これによって、平成18年度の六反田南遺跡の現地作業が全て終了した。

## 2) 前波南遺跡

平成17年度の試掘確認調査で本発掘調査が必要と判断された3,848m<sup>2</sup>のうち1,150m<sup>2</sup>(糸魚川東バイパス関連)の本発掘調査を平成18年度に実施した。

**事前準備・排水施設設置など** 六反田南遺跡と同様平成18年5月8日から本発掘調査に着手するため、4月10日に事務所設置等の諸準備に取りかかった。調査区幅が狭いこともあり暗渠は設置せず、開渠を重機もしくは人力で開削した。現地表から包含層までの層厚が1mを超える地点もあり、こうした地点は、法面の勾配を1割5分と緩めに設定しながら開渠を掘削した。

**重機掘削** 平成18年4月17日から盛土・旧表土等の掘削を行った。盛土・表土は、調査員立会いのもと重機(バック・ホー)により掘削した。遺物包含層は基本層序のⅢ層であるが、遺物が希薄な地点は、Ⅲ層まで連続して重機で掘削し、5月22日には重機による掘削を終了している。

**人力掘削等** 人力による掘削は、平成18年5月8日から開始した。掘削の方法は六反田南遺跡に準じている。7月20日には、現地の掘削作業はほぼ終了し、8月3日に航空写真撮影を行い現地の作業は終了した。

**写真撮影** 六反田南遺跡と同じ。

**現地説明会** 六反田南遺跡と同様に現地説明会は実施しなかったが、平成18年11月3日(金・祝日)に他遺跡(山岸遺跡:糸魚川市田伏)の現地説明会にあわせて、調査成果の一部を公表した。

## C 調査体制

調査体制は以下のとおりである。

### 1) 試掘・確認調査

調査期間 平成17年10月15日～11月15日

調査主体 新潟県教育委員会(教育長 武藤 克己)

調査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団(理事長 武藤 克己)

総括 波多 俊二（事務局長）  
管理 長谷川二三夫（総務課長）  
庶務 長谷川 靖（総務課主任）  
調査総括 藤巻 正信（調査課長）  
指導 寺崎 裕助（調査課試掘確認調査担当課長代理）  
調査担当 寺崎 裕助（調査課試掘確認調査担当課長代理）  
調査職員 田中 一徳（調査課嘱託員）

## 2) 本発掘調査

期 間 平成18年4月1日～11月15日（六反田南遺跡）  
平成18年4月1日～8月3日（前波南遺跡）  
調査主体 新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）  
調査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 武藤 克己）  
総括 波多 俊二（事務局長）  
管理 齋藤 栄（総務課長）  
庶務 長谷川 靖（総務課班長）  
調査総括 藤巻 正信（調査課長）  
指導 寺崎 裕助（調査課担当課長代理）  
調査担当 春日 真実（調査課班長）  
調査職員 畠野 義昭（調査課主任調査員）  
飯坂 盛泰（同上）  
坂上 有紀（調査課嘱託員）  
支援組織 株式会社吉田建設  
現場代理人 大野 哲也  
調査員 細井 佳浩 矢部 英生  
補助員（整理） 矢部千栄子、落谷 容子、中原 友子、五十嵐チヨエ、植木 紀子

## D 整理作業

整理作業は、現地調査と平行しながら進めた。遺物の水洗および注記の一部、台帳類の整備を現地事務所で行い、遺物の注記・接合・復元・実測・写真撮影、図面類の修正・レイアウト、原稿作成などを新潟市西蒲区の株式会社吉田建設整理事務所で実施した。整理の体制は本発掘調査の体制と同じである。

## 第二章 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境

六反田南遺跡・前波南遺跡が所在する糸魚川市は、平成17年3月19日に旧頸城郡能生町・同青海町と合併し、新潟県の最西端に位置することとなった。市域の北は日本海に面し、南を長野県、西を富山県と接する。糸魚川市は、古くから史跡松本街道の日本海側起点として知られている。「塩の道」とも呼ばれるこの古道は、糸魚川から長野県松本までのおよそ30里（120km）におよぶ峻険な山越えの道であり、海をもたない内陸部へ塩や魚介類を送る道として重要な役割を担ってきた。現在も姫川沿いに長野県へ通じる国道148号線とJR大糸線、海岸線沿いを通過する北陸自動車道・国道8号線・JR北陸本線の交点にあたる交通の要所となっている。

糸魚川市は、南北に流れる姫川とほぼ一致するように、フォッサマグナの西縁にあたる「糸魚川-静岡構造線」が分布する。この構造線を境界にして、地質学的に西南日本と東北日本に分けられている。構造線以西の地層は、主に古生代石炭紀〜ペルム紀に至る青海-蓮華変成岩帯など、古生代・中生代の堆積岩・火成岩より成り立っている。青海-蓮華変成岩帯は、その断層面に蛇紋岩・輝緑岩・変はんれい岩などが介在する複雑な構造を有しており、ひすい輝石岩・青海石・奴奈川石など希少な岩石が含まれている。なかでも、「ひすい輝石岩」は小滝川や青海川で産出されることが知られており、「小滝川の硬玉産地」・「青海川の硬玉産地及び硬玉岩塊」が天然記念物に指定されている。一方、この構造線以东の地層は主に新第三紀・第四紀の新しい時代の堆積岩・火成岩より成り立っており、構造線の東西で地質が大きく異なることがわかる〔鈴木2000・小林2000〕。

市域の南側には、飛騨山脈の北延主稜と頸城山地がある。飛騨山脈には、県内最高峰の小蓮華山（2,769m）をはじめとして2,000m級の山々が連なる。その主稜は北に進むにしたがって高度を急速に減じ日本海に没している。この急崖が「親不知・子不知」である。石灰岩からなる黒姫山（1,221m）・明星山（1,188m）では山岳カルストが発達しており、日本最深の白蓮洞（513m）など多数の洞穴が存在する。市域には、ここから産出する石灰岩を資源とした化学工業地帯が形成されている。

頸城山地は、新第三紀以降の堆積層が隆起した丘陵と、長野県との県境をなす雨飾山（1,963m）や海谷山地など火山性岩石を主体とする山塊から構成されており、さらにその背後には焼山（2,400m）が位置する。標高400m以下の小起伏山地域では、主に新第三紀の砂泥岩層から形成されており、地下水量が増大する融雪期、梅雨期、初冬などには、崩落・地すべりが発生する〔鈴木2000〕。地すべり等防止法制定のきっかけとなった櫛川地すべり（1947年発生）など、著名な地すべり地が多い地域でもある。

これらの山地を源流にして、青海川・田海川・姫川・海川・早川などが北流し日本海に注ぐ。中でも姫川はこの地方最長の一級河川であり、全長約60kmに及ぶ。長野県青木湖北部の湿地を源流とし、長野県小谷村を経て糸魚川市で日本海に注いでいる。これらの河川沿いには河岸段丘がみられるが、特に姫川と海川の河口岸に発達している。この段丘は高位の洪積段丘から低位の沖積段丘まで6段に細分されている〔鈴木1982〕。高位の段丘には縄文時代〜弥生時代、低位の段丘には縄文時代〜古代、沖積段丘には古代の遺跡が分布しており、遺跡の時期が下がるにしたがって高位から低位へとその分布する主体面

を移動させている〔寺崎1988〕。

これらの河川はいずれも急流で、かつ海底が深いため、沖積平野は発達していない。最も広い沖積地は姫川と海川の河口間に形成された扇状地で、この扇状地を中心に狭い海岸平野が広がる。このほかの平坦地は、河川沿いにわずかな谷底平野が細長く形成されるのみである。また、北東-南西に平滑に広がる海岸線沿いには砂丘列が形成されており、姫川河口左岸の須沢では最大幅300m、最大高11.5mを測る〔鈴木1982〕。市街地や主要幹線は、この砂丘上と沖積地など、限られた平坦地に細長く展開している。

## 2 歴史的環境

### A 周辺の主な遺跡

糸魚川市域における弥生時代～中世・近世の主な遺跡分布は、第3図のとおりである。姫川右岸の糸魚川地区では、標高100m以下の緩傾斜の丘陵が発達し、特に標高50m前後の河岸段丘上に遺跡が多く分布する。また、近年、北陸新幹線建設に伴う発掘調査等によって、狭い平野部においても遺跡分布が濃密であることが明らかになっている。居住に適した平坦地に限られるため、土地利用が特定の範囲に集中した結果と考えられる。

#### 弥生時代

弥生時代の遺跡としては大塚（新洲）遺跡（12）、原山遺跡（46）、一の宮遺跡（18）、後生山遺跡（20）、笛吹田遺跡（22）などが存在する。

大塚（新洲）遺跡・原山遺跡は姫川右岸に位置し隣接する。ともに縄文時代晩期から弥生時代前期の遺跡である。大塚（新洲）遺跡出土の弥生時代前期の土器は、遠賀川式系・水神平式系・浮線文系・亀ヶ岡式系などで構成され、当地が東西日本あるいは日本海側と内陸（を通じて太平洋側）を結ぶ結節点であることをよく示している。また、ヒスイや滑石を素材とした玉作りも行われている。玉類の組成や製作技術は縄文時代以来の伝統を受け継いだものと指摘されている〔寺崎・田中ほか1988〕。

一の宮遺跡は、延喜式内社叙奈川神社の論社である天津神社境内に所在する。古墳時代の滑石製玉類の製作遺跡として著名だが、弥生時代中期・後期の土器も確認できる〔糸魚川市役所1986〕。

後生山遺跡は、姫川と海川に挟まれた丘陵上に位置する弥生時代後期を中心とする遺跡である。竪穴建物4棟、土坑、溝などが検出され、北方に広がる平野部との比高差は約30mであり、いわゆる高地性集落と考えられる。ヒスイ・緑色凝灰岩の原石や筋砥石などが出土しており、集落内では玉作りが行われていた〔木島ほか1986〕。また、3号住居跡から出土した土器群は北陸系土器を主体とし、後期初頭に位置づけられるもので、新潟県内における弥生時代後期土器編年の基準資料となっている〔滝沢2005など〕。

笛吹田遺跡は後生山遺跡の北方に広がる平野上に立地する遺跡であり、弥生時代後期の方形周溝墓と推測される溝が検出されている〔安藤ほか1978〕。

#### 古墳時代

古墳時代の遺跡は、玉作りに関連する遺跡が特徴的に発見されている。姫御前遺跡（21）と笛吹田遺跡（22）は近接する遺跡である。笛吹田遺跡は弥生時代後期から続く遺跡であるが、前期～中期を中心とする玉作遺跡で、白玉・勾玉・管玉・砥石等が出土し、玉作用の特殊ビットや方形周溝墓とみられる遺構が検出されている〔安藤ほか1978〕。また、近年、都市計画道路建設に伴う発掘調査が断続的に行われ、竪穴建物、井戸や釣瓶を伴う井戸の検出や琴柱状石製品の出土などの成果が目目されている〔山岸

2006・2007)。なお、笛吹田遺跡と姫御前遺跡は、昭和50(1975)年に別個の遺跡とされるまでは、「姫御前遺跡」という名称で同一の遺跡として捉えられていた[土田1978]。両遺跡の間に遺跡の空白が存在することが確認されているようであるが、年代的に重複することから相互に関連する遺跡であろう。

大角地遺跡(5)は、昭和10(1935)年の朝日新聞に「石器時代の玉作り遺跡か。倉若七郎氏が青海町で発見した考古学上の宝庫」と紹介されている。その後、青木重孝氏によって蓄積された資料が契機となり、学会で注目されるようになり、勾玉の製作過程「オガクチ技法」[寺村1966]の標識遺跡としても知られるようになった。昭和45・48(1970・73)年には、都市計画道路建設に伴う発掘調査が行われ、工作用特殊ビットをもつ玉作工房跡が検出され[寺村・安藤ほか1979]、中期の滑石製玉類の製作関連資料が多数出土している。また、平成17年には北陸新幹線建設に伴う発掘調査が行われ、勾玉・白玉の製作関連資料が出土している[加藤ほか2006]。

田伏遺跡(34)は、中期～後期の遺跡である。昭和45(1970)年に行われた発掘調査では、滑石製の白玉・管玉・勾玉・子持勾玉や紡錘車の製作関連資料が多数出土しており、玉作遺跡であることが明らかにされている[関1972]。また、祭祀系土器の出土や滑石製模造品の大量出土から、玉作に伴う祭祀が行われた可能性が指摘されている[糸魚川市役所1986]。

一の宮遺跡(18)は、天津神社境内に所在する。大正8(1919)年に高橋健自氏によって発掘調査されており、後期の土器とともに有孔円版・勾玉・白玉等の祭祀遺物が多数出土している[糸魚川市役所1986]。相山林羅は一の宮遺跡を祭祀遺跡としており[相山1972]、一の宮遺跡から出土した玉類は、笛吹田・田伏・大角地など、近隣の製作遺跡との関連性が指摘されている[関1972]。なお、天津神社境内の奴奈川神社は、『延喜式』神名帳に記載される「奴奈川神社」の論社である。

三ツ又遺跡(45)は姫川右岸の山間に位置する遺跡で、古墳時代中期の竪穴建物3棟、土坑などが検出され滑石製白玉・勾玉・管玉・紡錘車・有孔円版やこれらの未製品、ヒスイ原石・剥片・勾玉未成品、緑色凝灰岩原石・剥片や砥石が出土している[木島1988a・1989a]。

このように糸魚川地域では、滑石製の玉作が盛んに行われた遺跡の存在が特筆される。また、北陸新幹線建設に伴い発掘調査された本遺跡(27)、姫御前遺跡(前期)(21)、横マクリ遺跡(前期)(29)においても玉作の存在が確認されている[新潟県教育委員会ほか2007]。小規模な集落においても、数は多くないものの未製品を含む玉類がほぼ例外なく出土しており、玉作が行われていたと考えられる。ヒスイ・滑石等の石材原産地を控える当地域においては、縄文時代以来、伝統的に玉作りが盛んに行われていた。

## 古 代

青海地区(旧青海町域)における古代の遺跡は、集落跡と竈跡が検出されている。姫川河口近くに位置する須沢角地遺跡(7)は、昭和62(1987)年・平成17(2005)年に発掘調査が実施され、7世紀～10世紀の集落跡であることが明らかにされている[土田ほか1988、辻2006]。また、須沢角地遺跡の西南西1kmの丘陵裾には西角地古竈跡(6)が存在する。竈体の一部・竈壁・焼土とともに多量の須恵器が出土しており[寺村・安藤ほか1979]、8世紀末～9世紀初頭の竈跡と考えられている[春日1998]。

糸魚川地区(旧糸魚川市域)の姫川右岸に位置する道者ハバ遺跡(10)では、掘立柱建物や井戸といった遺構とともに、多量の須恵器・土師器のほか、灰輪陶器・緑輪陶器が多く出土した。当地方の中心的役割を担った遺跡と推定されている。また、詳細は不明だが近接して須恵器窯も存在する[山岸2001a]。

糸魚川地区のうち海川と早川に挟まれた田伏・大和川・梶屋敷周辺では北陸自動車道建設に伴い、岩野下(岩野D)遺跡(47)、岩野A遺跡(48)、岩野E遺跡(32)、小出越遺跡(33)、立ノ内遺跡(41)等が

調査され、近年では工場・県道などの建設に伴い山崎 A・B 遺跡 (30・31) が調査された。

岩野下遺跡は 8 世紀後半から 10・11 世紀にかけて断続的に営まれた遺跡で、掘立柱建物 7 棟、竪穴建物 1 棟が検出され、土師器・須恵器・灰軸陶器・墨書土器・転用硯・土錘・フイゴ羽口などが出土している [高橋・遠藤<sup>ほか</sup>1987]。岩野 A 遺跡は岩野下遺跡の北東に近接する遺跡、岩野 E 遺跡は岩野下遺跡の東に近接する遺跡で、ともに墓穴の可能性が考えられる長方形の土坑がまともって検出された。このうち岩野 A 遺跡では焼土とともに 9 世紀後半頃の土師器無台椀がまともって出土している [高橋<sup>ほか</sup>1986]。

小出越遺跡では 9 世紀前半を中心とする土師器焼成遺構や竪穴建物などが検出されており [鈴木 1988]、立ノ内遺跡からは焼土遺構とともに大型平底の製塩土器、フイゴ羽口など出土している [高橋 1988]。

山崎 A・B 遺跡では大型の掘立柱建物に近接して数百点に及ぶ土師器食膳具を廃棄した土坑などが発見された [木島 2007]。これらの調査成果により、丘陵部における奈良・平安時代の多様な生活が明らかになりつつあるが、六反田南遺跡・前波南遺跡の立地する平野部の遺跡については不明点が多い。

## 中 世

青海地区では、山城跡や経塚の存在が知られている。勝山城跡は、標高 328m の勝山山頂に築かれている。天正年間 (1573～1582) 頃、越中への前進基地として築城されたといわれており、戦国時代は同方面を押さえる要衝であったと考えられている [平野・渡辺 1986]。寺地の南方、松山の尾根上に南北 500m にわたって築城された松山城跡 (2) は、標高 170m の地点に本丸跡があり、空堀や帯郭・堀郭で幾重にも固められている。石垣に所在する天神山経塚 (1) は、1919 (大正 8) 年に調査され、仁安 2 (1167) 年の銘のある珠洲焼の経筒が発掘されている [金子 1975]。寺地遺跡 (4)・須沢角地遺跡 (7) は、遺構は明確ではないが中世の陶磁器が一定量出土している [佐藤・相羽<sup>ほか</sup>2002、土田<sup>ほか</sup>1988]。

糸魚川地区では、御山遺跡 (9)・中平遺跡 (15)・古川遺跡 (16)・水保観音堂境内 (44)・北平遺跡 (25)・クワノ町遺跡 (24)・竹花遺跡 (17) 等が知られている。

観音菩薩立像 (重要文化財) を安置する水保観音堂境内からは中世陶磁器類を出土していることから、水穂寺跡との関係が考えられている [山岸・田村 2004]。また、段丘～丘陵上には、中世後期～近世初期の原山十三塚 (14) や山崎三十三塚 (26) [木島 1989b] が分布する。

糸魚川地区のうち田伏・大和川周辺では、岩野 B 遺跡 (49)・山崎 A・B 遺跡 (30・31)・立ノ内遺跡 (41)・岩倉遺跡 (39) 等の調査が行われている。

岩野 B 遺跡は海川右岸の台地上に位置し 15 世紀後半頃と考えられる東西約 50m、南北約 60m に溝を巡らせた方形館とこれに伴う掘立柱建物跡などが検出され、青磁碗などが出土している [山岸 2001b]。

立ノ内遺跡は、早川左岸の台地上に位置し 15～16 世紀と考えられる 1×9 間 (4.6×19.7m) で二面に縁もしくは庇 (1.1m) が付く大型の掘立柱建物を中心とする建物群が検出され、多量の土師器皿が出土した [高橋 1988]。西側の山頂に位置する金山城跡 (40) は立ノ内遺跡に関連する山城と推測でき、要害と居館の関係と考えられる [高橋 1988]。

岩倉遺跡は早川左岸の平野部に位置する遺跡で、15 世紀の水田跡、中世末～近世初めと考えられる礎石建物が検出され、轡・小札・鉄鑑などの馬具・武具類や鉄鍋などが出土した [山本<sup>ほか</sup>2003]。また、近年の北陸新幹線や国道 8 号糸魚川東バイパス建設に伴う山岸遺跡 (37)、横マクリ遺跡 (29) 等の調査が行われている [新潟県教育委員会<sup>ほか</sup>2007]。これらの調査により、平野部における中世遺跡の様相が明らかにされつつある。



第3図 遺跡の位置と周辺の主な遺跡

## B 文献資料からみた古代・中世の西頸城

## 古 代

古代には、新潟県一帯は越国の一部であった。『日本書紀』持統6(692)年9月の条に「越前国司」の記述があることから、この頃には越国は越前・越中・越後に分割されていた。佐渡も含めた越国分割の詳細な時期は不明だが、天武天皇12(683)～14(685)年の国境画定の時期の可能性が高い[鎌江1993]。この頃の越後国は阿賀野川以北を指しており、頸城郡は越中国に属していた[山田1986など]。『続日本紀』大宝2(702)年の3月の条に越中国の4郡を越後国に分割したことが記されている。この4郡は、頸城郡・古志郡・蒲原郡・魚沼郡を指すものと考えられている[米沢1980]。さらに和銅元(708)年に越後国に設置された出羽郡が、和銅5(712)年に出羽国として分立された。これにより、佐渡を除く現在の新潟県の領域が定まったと考えられている[金子1981・山田1986など]。なお、『和名類聚抄』には「国府在頸城郡」とあり、頸城郡内に越後国府があったと考えられる。

頸城郡は越後国の南西端に位置し、天平勝宝4年(752)10月造東大寺司藤(正倉院文書)にはその名が見られる。『和名抄』(東急本)には「久比支」の訓を付している。頸城郡の郷は沼川・都有・栗原・荒木・板倉・高津・物部・五十公・夷守・佐味の10郷が知られており、六反田南遺跡・前波南遺跡は頸城郡沼川郷に含まれる。「沼川」は『和名抄』では高山寺本・東急本とも「奴乃加波」の訓を付す。

延長5(927)年成立した『延喜式』の兵部省には越後の駅・伝馬として、「滄海8疋、鶺石・名立・水門・佐味・三嶋・多太・大家各5疋、伊神2疋、渡戸船2疋(土御門家本では船2艘)、伝馬頸城・古志郡各8疋」と記されている。滄海駅は糸魚川市(旧青海町)青海に比定でき、鶺石は同市(旧能生町)鶺石に所在した駅と考えられる。沼川郷の範囲を能生川流域から青海川流域周辺までとするならば、沼川郷には2つの駅が存在したことになる。

越後国最初の駅である滄海駅は馬8疋と他駅の5疋に比べ多い。越後国境にある越中国佐味駅も8疋であり、これは海岸沿いが急崖をなす親不知・子不知が陸路の難所であったためであろう。また陸路のほかに海路も重要な交通路として利用されたと思われる。糸魚川市の東側に隣接する上越市名立沖からは揚陸須恵器水瓶が報告されており[春日2007a]、これは海上交通が物資の運搬ルートとして一定の役割を担っていたことを示しているものと考えられる。

『延喜式』神名帳に記載された神社(いわゆる式内社)には、頸城郡のものとして奴奈川神社・大神社・阿比多神社・居多神社・佐多神社・物部神社・水嶋磯部神社・菅原神社・五十君神社・江野神社・青海神社・円田神社・斐田神社の13社が知られる。このうち奴奈川神社・大神社・佐多神社・青海神社の4社は沼川郷に所在したものと考えられている。奴奈川神社は糸魚川市一の宮の天津神社・同市田伏の奴奈川神社・同市能生の白山神社、大神社は糸魚川市一の宮の天津神社・同市大野の大野神社・同市平の大神社、佐多神社は糸魚川市宮平の鶴神社・同市北山の佐多神社などの各論社がある。また、青海神社は糸魚川市青海の青海神社と推定されている[花ヶ前2002]。1郷に4つの式内社が存在する地域は稀であろう。

## 中 世

沼川郷地頭 吉田家本追加傍例条(『中世法制史料集 第一巻 鎌倉幕府法』参考資料九九)には、史料1がおさめられている。この史料は、沼川郷地頭代による何らかの干渉に対し、北条時政・義時の下知「執事御方御下知」を根拠に、公方祈禱所であることを主張しその不当を訴えた白山寺僧侶の訴訟が、公方(將軍家)の「仰之詞」が無いため、「公方御下知」(將軍家の御教書)には准じられぬ、として退けられたもの



である。

史料には年号が記されていないが、執権が発給した「執事御方御下知」と將軍家の「仰せ」が記されている「公方御下知」とが区別され、かつ將軍家を「公方」と呼称していることから、弘安新御式目に代表される弘安7（1284）における安達泰盛の一連の改革年以降のものと考えられ、また安達泰盛は弘安8（1285）年の霜月騒動で亡くなっていることから、弘安7（1284）年以降のそう速くない時期のものと推測できる〔網野1972〕。

史料に表れる白山寺は糸魚川市能生にある白山神社であろう。また、地頭「備前々司」は名越宗長と考えられ、名越宗長は、豊前・安芸・能登の守護を務めた有力者であり〔佐藤1971〕、文永・弘安の役およびそれ以降の元に対する臨戦体制下で得宗を支える主要勢力の一つであったと考えられている〔川添1987〕。なお、名越宗長は『武家年代記裏書』によれば延慶2（1304）年に没したことが記されている〔佐藤1971・川添1987など〕。

**沼川郷の範囲** 糸魚川市一の宮天津神社所藏懸仏の文安6（1449）年6月20日付の裏板墨書銘に「奉懸御正鉢越後国沼河保一宮天津社」とあり、明応7（1498）年上杉房能寄進状（伊勢古文書集）には「越後国久引郡西浜布川之保西小味御年貢五貫」の田地五反と太刀を伊勢神宮へ寄進したことがみえる。小味は能生川右岸に所在する糸魚川市（旧能生町）小見と考えられる。糸魚川市（旧青海町）横立の横立七所神明社所藏鐃口の永正15（1518）年4月24日付銘文には「頸城郡西浜沼川保内横立村」とある〔平野・渡辺1986〕。これらのことから、13世紀後半に「沼河郷」と呼称された地域は15世紀中葉には「沼河保」と呼称・記載されるようになり、また「沼河」は「布川」・「沼川」と記される場合もあった。その範囲は、能生川流域から青海川流域周辺までと考えることができ、現在の糸魚川市（旧能生町・糸魚川市・青海町）の範囲と概ね一致する。中世の沼河郷（保）が、古代の沼川郷の範囲を受け継いだものとするならば、古代の沼川郷も現在の糸魚川市域にほぼ一致する範囲であろう。

**糸魚（井）川** 糸魚川の地名は至徳4（1387）年9月の市川頼房軍忠状に「越州糸井川」とあり（本間市川文書）、南北朝期にはすでにみられる。天津神社神宮寺梵鐘の永享4（1432）年9月9日銘には「大旦那糸井川道浄次郎左衛門尉」ら当地の住人の名前が見られる。また、寛正6（1465）年、寛忠の紀行文「善光寺紀行」、延徳3（1491）年の冷泉為広の「越後下向日記」などにもその地名が見られ、越後府中（直江津）と北陸諸国や近畿地方を結ぶ陸路の拠点の一つであったと考えられる。また、「糸井（魚）川」は港町としても発展を遂げていたものと思われ、やや時期が下るが天正年間（1573～92）年末に豊臣秀吉が津輕から鷹を運ばせた時には、停泊地として能生・糸魚川・青海などの各湊を指定している（津輕文書）〔小村ほか編1989〕。なお、青海沖や名立沖からは揚陸珠洲焼きが複数報告されており〔吉岡1994など〕、中世には日本海の海上交通が物資の運搬ルートとして盛んに利用され、糸魚川に存在した港もその役割の一端を担っていたものと思われる。

一  
雖爲執事御方御下知、依無仰詞、被棄置法事、奉行矢野兵庫允、越後國沼河郷内白山寺供僧與地頭備前・司殿御代官相論、當寺爲公方御所購所之條、北條殿并右京大夫殿御下知柄焉之由、供僧等雖申之、依無仰之詞、不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>准<sub>二</sub>公方御下知、被<sub>レ</sub>棄置供僧訴訟<sub>一</sub>畢、

史料1

## 第三章 六反田南遺跡

### 1 調査の概要

#### A グリッドの設定

六反田南遺跡のグリッドは前波南遺跡と共通するように設定した。前波南遺跡も含めると平成16年度の調査区は、鉤形の張り出し部分を含む複雑な形状であり、前波南遺跡も含めた調査区の中央付近に位置する糸魚川東バイパスセンター杭№56を基準とし、調査区全域がカバーできるよう10m単位の方眼を設定した。その結果、グリッドの基準線の方位は7°16′30″東偏している。

グリッドの呼称は、東西方向については算用数字を用い調査区東端から西に向かって「1・2・3・4……」、南北基準線はアルファベットを用い南から北に向かって「A・B・C・D……」、基準線の交点を「1A・1B・1C……」とし、南東隅の交点の名称を用いた。10m単位のグリッドはさらに2m単位25個に分割し、南東隅が1、南西隅が5、北東隅が21、北西隅が25となるよう番号を付し、1A15のように連名で呼称した。主なグリッド交点の旧測地系の座標は第1表のとおりである。

測点	X (m)	Y (m)
14B	116443.366	-53612.727
14E	116473.124	-53616.526
14H	116502.883	-53629.325
37E	116443.999	-53844.675

第1表 六反田南遺跡主要グリッドの座標 (旧測地)

#### B 基本層序

基本層序はⅠ～Ⅵ層に区分される。調査区は東西約250mにわたるが、若干の起伏はあるものの平坦な地形を呈している。よって調査区の層序もほぼ一定の堆積を示すが、Ⅳ層またはⅤ層が欠落する場所がある。Ⅳ層を遺構確認面としたが、29・30列付近ではⅣ層が欠落していたためⅤ層を遺構確認面とした。各層位の特徴は以下のとおりである。

Ⅰ層：オリープ黒色粘土 (5Y3/1) 現水田耕作土。

Ⅱ層：灰黄褐色シルト (10YR4/2)。炭化物を少量含む

Ⅱ層：オリープ黒色シルト (5Y3/1)。炭化物を少量含む。

Ⅲ層：灰色粘土 (5Y4/1) 炭化物を含む。遺物包含層。主に古墳時代前期の遺物を含む。

Ⅳa層：灰色粘土 (5Y6/1)

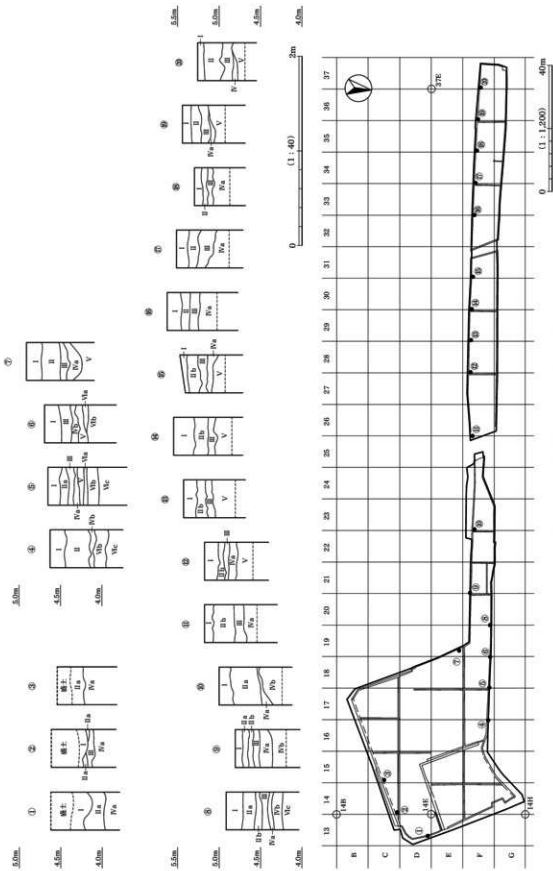
Ⅳb層：灰色シルト (5Y7/1)

Ⅴ層：オリープ褐色砂 (2.5Y4/3)

Ⅵa層：灰白色シルト (5Y7/1) Ⅳb層に近似している。

Ⅵb層：灰色シルト質粘土 (5Y6/1)

Ⅵc層：灰色粘土 (5Y6/1)



第4図 六反田南遺跡グリッド調査と土層柱状図

## 2 遺 構

## A 概 要

遺跡では土坑59基、溝71条、ピット97基、性格不明遺構4基が検出された。32・33列で検出した溝からは古墳時代前期を主体とする土器が多く出土した。この溝は調査区の南側へ続いており全容は不明だが、円形または方形にめぐると推測される。また、溝に囲まれた部分からは柱根を有するピットが1基検出されたことから、周溝をもつ平地式住居である可能性が高い。

遺跡は、古墳時代の玉作りで有名な田伏玉作遺跡からわずか900mに位置し、包含層からは玉作関係の石器も微量だが出土している。そのため32・33列の出土遺物が多い遺構（SD196・197・200・213、SK218）では土壌をサンプリングして水洗を行い、見逃しがちなチップ類の検出につとめた。しかしながら、そういった遺物は全く出土しなかったため、採取したサンプルのうち、3割終了した時点で水洗作業を打ち切った。

13～24列では遺物はほとんど出土していない。検出した遺構は、平面形態から土坑や溝として番号を付し調査を行ったが、不整形を呈し底面に凹凸があるもので、堆積状況からも性格不明の落ち込みが大半を占めると考えられる。特に16～18列ではIV層が薄いもしくは堆積しておらず、遺構確認段階でV層が現れている状況であった。図版53の壁面セクションやSK71で顕著に示されるように、V層を地山としIV層を覆土とする遺構が特徴的であるが、上述のとおり性格不明の落ち込みが大多数と考えられる。

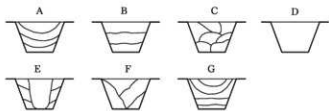
## B 記 述 方 法

遺構種別は略称を用い、土坑=SK、溝=SD、ピット=P、不明遺構= SXとした。遺構名はこれらの略称と通し番号を組み合わせて表現した。遺構番号は種別に関係なく通し番号としている。

本文では、遺構の種別ごとに説明を行う。基本的に各説は主要な遺構のみにとどめ、観察表で示しきれない情報を記載した。したがって、個別遺構の情報については、観察表を参照されたい。



第5図 遺構の平面形態と断面形態の分類  
[加藤 1999]



A レンズ状	複数層がレンズ状に堆積する。
B 水平	複数層が水平に堆積する。
C ブロック状	ブロック状に堆積する。
D 卓層	覆土が単一層のもの。
E 柱根	柱根と思われる土層が堆積するもの。
F 窪位	窪みに堆積するもの。
G 水平レンズ	覆土下位は水平に、上位はレンズ状に堆積するもの。

第6図 遺構埋土の堆積形状の分類  
[高田 2004 を一部改定]

平面形態および断面形態の分類は『和泉A遺跡』で示した加藤 学の分類 [加藤1999]、覆土堆積状況は『青田遺跡』で示した荒川隆史の分類 [荒川2004] による。

観察表の記載について 径50cm以上のものを土坑とし、それ以下はピットとした。規模は平面形の長径・短径の最大値、深度は確認面から最深部までの値である。全体が検出できなかった遺構についても、推定できるものは推定値を記した。遺構底面の凹凸が著しい場合は、断面形の欄に、皿状といった形状を追加して彎曲と記載した。

## C 各 説

検出した遺構は、出土遺物から古墳時代前期を中心とするものと思われるが、遺物が出土せず時期が特定できないものも多数存在する。したがって、説明は種別ごとに行うこととする。

### 1) 土 坑

59基検出した。主なものは29～32列に分布するが、深度は浅く、覆土は単層もしくは2層のものが多数を占める。遺物は全体的に少なく、特に13～24列では古代以降のものが散見される程度である。13～24列に分布する、不整形で底面の凹凸が著しいものはSXに分類すべきかもしれない。

#### SK37 (図版8・52)

16C・Dに位置する。長径75×短径59×深さ25cmを測る。平面形は不整形、断面形は半円状を呈する。土層は斜位に堆積しており特異である。風倒木痕との可能性も考えたが、平面的な特徴は出現していない。出土遺物はない。

#### SK96・103・234 (図版13・14・54・56)

覆土は2層に分かれ、それぞれ基本層序のⅢ・Ⅳ層に対応する。SK96・103からは遺物の出土はなく、レンズ状堆積で底面に凹凸があることから、自然の落ち込みとも考えられる。234からは土器が微量出土している。

#### SK235・265 (図版11・13・57)

29Fに位置する。この付近は遺構が重複している265が最も古く、次いでSX333、SK235・SD257の順である。遺物は、SK235とSD257、SX333で出土したが、いずれの土器も古墳時代前期に含まれ、時期差は認められない。

#### SK255・264 (図版13・55・57)

29・30Fに位置する。楕円形を呈する深さ15cm程度の浅い土坑で、形態が近似している。この2つの土坑配置から、調査区外30F2付近を中心とした周溝を有する平地式建物の存在を想定して調査を進めた。これらにつながる土坑または溝は検出されなかった。また、255・264の南側にもピットは全く検出されなかった。SK255からは土器が微量出土した。

#### SK219 (図版15・58)

32Fに位置し、80×76cmの規模を測る。1・2層は炭化物を多量に含むが、遺物は土師器が少量出土したのみである。当初覆土は3層と考え調査を進めたが、下に覆土が存在することが判明した。4層は灰色砂である。3層を掘りあげた時点で、地山はV層の砂層であったため、判断を誤ってしまった。4層発掘中は湧水が著しく、壁面が崩壊するなど作業は困難であった。土器が少量出土した。

**SK218** (図版15・58)

32Fに位置する。74×68×63cmの規模を測り、断面形はU字状を呈する。3層はIV層との区別が難しい。検出面から30cmの深さ(2層)でヒスイの原石が出土している。遺物はどの層でも認められるが、1・2層からの出土が多い。また、2層底面付近から土器と礫がまとまって出土した。土器はほとんど接合しなかった。

**SK122** (図版15・58)

37Fに位置する。周辺にはピットが数基あるのみで、孤立したような形となっている。263×153×深さ65cmの規模を測る。平面形は不整形、断面形は台形状を呈する。調査区内では最大の土坑である。覆土は17層に細分できたが、おおまかには粘土・シルト・砂がブロック状に混じる層、シルト層、粘土層の3つに分かれる。前者は下部に堆積し、上部に粘土層とシルト層が堆積する。4・5・12層は堅くしまりのある粘土層であった。1層は攪乱である。遺物は5層からの出土が最も多く、土器のほか滑石製の管玉未製品が出土した。そのほか、3層、6層と8層から土器が微量出土している。

## 2) 溝

**SD18** (図版2・6・50)

14・15Dに位置する。西から東にかけて幅が広がる。それにともない断面形がV字状から半円状に変わる。西側の上部2層が東側の下部2層に対応し、西から東へ層が傾斜していることがわかる。これら2層のうち下層には植物遺体が多量に含まれる。SD36(図版4・7)はこれよりやや小規模だが、1層目がIVa層に対応する層、その下に植物遺体を含む層となっており覆土の堆積状況が近似する。

**SD82** (図版3・7・51)

14Fに位置する。断面形はV字状を呈する。南側は単層だが、北側では覆土が3層に分かれる。SX61に切られる。遺物の出土はない。

**SD52** (図版4・8・52)

17C・Dに位置する。断面形は、V字状ないし半円状を呈する。3層は調査区内においてところどころで認められる粗い砂層に対応する。

**SD73** (図版5・9・53)

16Fに位置する。16F内で蛇行している。断面形はV字状または皿状である。セクション49の5層はV層に近似している。遺物は出土していない。

**SD1021** ほか (図版10・54)

21～24列で検出された溝はほとんどが北東から南西方向に貫流している。ただし規模は様々で間隔も一定ではない。また、遺物がほとんど出土しなかったことから時期も特定できず、これらに関連づけるのは困難である。

**SD201** (図版11・14・56)

26グリッドに位置し、南北方向を貫流する。最大幅373cmを測り、調査区外にのびる溝である。断面形は皿状、底面は凹凸が著しい。壺26が北東側の斜面からつぶれた状態で出土した(図版56)。この壺は口縁部が欠損している。頸部以下の残存率は高く、比較的整ったかたちをしていることから、人為的な要因である可能性も考えられる。

**SD212・222・227** (図版11・12・14・17・57)

方形にめぐり、もしくは方形にめぐると考えられる溝である。全体の大きさはそれぞれ約3m・6m・5.4mである。平地式建物である可能性を考え調査を進めたが、遺構確認面では柱跡となり得るようなピットは検出できなかった。そのためⅣa層上面での遺構調査終了後、重機でⅤ層もしくはⅥ層まで掘削し、周溝内のピットや柱根の有無を確認したが、そのような遺構は全く検出されなかった。

**SD196・197** (図版12・16・59・60)

32・33F・Gに位置する。SD200は32F14・19で196と合流する。平面ではSD200が196を切っているように見えるが、明確な切りあい関係は認められなかった。197は平面形から別番号を付したが、200同様明確な切りあい関係は見られない。SD272などの支流を除くと、円形にめぐるようにみえる。33F7・12で柱根を有するピットが検出され(P277)、平地式建物の周溝である可能性が考えられる。そのため、上記の溝同様、Ⅵ層まで重機で掘削してピットなどの有無を確認したが、遺構は検出されなかった。

遺物は古墳時代前期の土器が大半を占め、そのほか貝殻状剥片・磨石類・木片などが少量出土した。出土レベルは検出面とほぼ同じか若干下であり、底面からはほとんど出土していない。平面的な分布は粗密が認められ、特に33F22～24ではまばらな状態であった。

土器は小片が多い。摩耗し脆くなった状態のものが多く、注意深く取り上げを行ったが、取り上げた時点で割れてしまったものもある。33F15・34F16では比較的残存率の良い状態で、壺の口縁部(87)と底部(92)、小型甕(80)が3個体隣接して出土した。87と92は別個体である。これらの土器片は接合するものが少なく、遺構内で破片から一個体として復元できたものは皆無である。

**SD200** (図版12・16・59)

32F・Gに位置する。深度や立ち上がりの度合いはSD196と酷似している。出土遺物もSD196同様、古墳時代前期の土器が大多数を占め、そのほか貝殻状剥片・磨石類・木片などが少量出土した。遺物集中範囲は2か所認められた。1か所は32F8の東側斜面から底面、もう1か所は32F14・19の西側斜面(SD196側)から底面にかけてである。特に32F14・19では細片の比率が高い。溝の低位から底面にかけて、水平な状態で出土した。土器の状態はSD196同様摩耗した小片が多く、接合しないものがほとんどである。

**SD213** (図版12・16・60)

33Gに位置する。調査区外へのびているため全形は不明である。覆土はSD196に比して砂粒が多く、Ⅲ層とは全く異なる土である。遺物は主に北側で出土しており、古墳時代前期の土器、礫石が出土した。

**3) 性格不明遺構****SX333** (図版11・13・57)

29Fに位置する。SK265を切り、SK235・SD257に切られている。土器が少量出土している。SD238と連続しており、切り合い関係は不明である。SD238からは微量の土器しか出土しておらず時期決定は困難であるが、時期差が認められるようなものではない。

## 4) ピ ッ ト

ピットは主に30・31列に分布する。P277では柱根が認められた。また、貧弱ではあるが柱根や柱根のまわりを固める礎板と思われるものがP204・P232・P1003から出土したことから、掘立柱建物の可能性を考え検討したが、建物として認識できるまでにはいたらなかった。

## P277 (図版15・59)

32F7に位置する。規模は62×59cmを測る。半截し4層まで掘り進めたが底面が確認できなかったため、断ち割ったところ柱根を検出した。柱根は直径25cm、残存長85cmを測る。柱根は北側にやや傾斜している。柱根の底面は比較的平坦に加工されているが、掘り形は確認されなかった。遺物は土器・石器が微量出土した。「A概要」で記述したように、SD196が円形にめぐらせば、平地式住居の柱穴である可能性が高い。

## P232 (図版14)

31F18に位置する。規模は38×29cmを測る。掘り進めていくうち湧水が著しく、調査を中断したが、その後壁面が崩壊し板材と思われるものが現れた。セクション図は中断前の図であるため、その板材は示されていない。土器などの遺物は出土していない。

## 5) 杭 (図版13・16)

大きく分けて2か所で検出した。1か所はSD95・100周辺、もう1か所は33Fである。前者はSD95・100の覆土を切って打ち込まれている。この覆土は基本層序のⅡ層に対応していることから、これらの杭は、近世以降のものと考えられる。後者もSD196覆土を切って打ち込まれていることから、古墳時代よりは新しい時期の所産と考えるが、時期特定には至らなかった。



### 3 遺 物

六反田南遺跡からは、古墳時代前期を主体として古代・中世・近世の遺物が出土した。遺物量は浅箱で土器70箱、石器5箱、木製品14箱、金属製品1箱である。図化にあたっては遺構から出土したものを中心に、種類や器形を網羅するよう選択した。包含層出土遺物は、遺構出土遺物に見られなかったものを中心に抽出した。

#### A 古墳時代前期の土器

##### 1) 記述方法

掲載した遺物については、出土位置・法量・調整・胎土・色調などを観察し、巻末の遺物観察表としてまとめた。よってこの項では観察表から読み取れない情報を中心に、特徴的な遺物について記述を行う。最初に遺構・次に包含層出土土器について述べる。遺構の順序は「2遺構」の記述順序に準ずる。

ここで胎土について少し述べたい。本遺跡出土土器の胎土は基本的に径1～3mmほどの長石・金雲母・白色粒子・砂礫を含み、稀に海綿骨針・黒雲母を含むものがある。その中でも礫を含まず粒子の細かいものが散見できる。器種は供献具に限定されるため(例99・137)、作りわけとまではいかないにしても、区別している可能性がある。

文様について 本遺跡出土土器においては数点ではあるが凹線文系の文様を施すものが見られる。滝沢氏の分類〔滝沢1993〕を参考にし以下のように呼称する。

凹線文：指や布で施された沈線文

擬凹線文：櫛状工具により施された沈線文

擬擬凹線文：ヘラ状工具により施された沈線文。1条ずつ施文する。

##### 2) 分 類

分類にあたっては『シンボジウム 新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』の滝沢規朝氏の分類〔滝沢2005a〕などを参考にした。細分類は出土数の多い壘についてのみ行った。(第7図)

#### 壘

最も多く出土したが、破片資料が多く全体の器形が明らかなのはほとんどない。3種に細分類した。

A類 有段口縁を呈し、口縁部に擬凹線文が施されるもの。

B類 有段・受口状口縁を呈し、口縁部が無文のもの

1類 受口状口縁のもの。

2類 それ以外のもの。

C類 いわゆる「く」の字状口縁のもの。

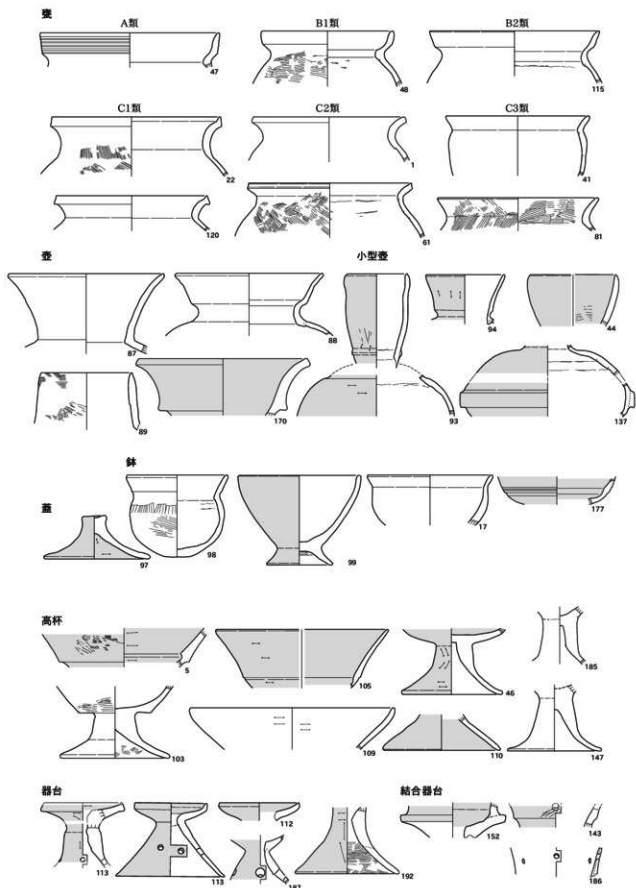
1類 口縁端部がつまみ上げられ、上下またはどちらかに拡張するもの。

2類 口縁端部が面取りされるもの。

3類 口縁端部が面取りされないもの。

#### 壺

口縁部が外反して立ち上がり広口のもの(87)が最も多く見られる。中型または大型では口縁部が直立



第7图 六反田南遺跡土器分類図

(S-1/4)

し短頸のもの(89)や、有段口縁を呈し口縁部が外反するもの(88)がある。小型では、北陸系の有段頸壺(93)や、有段口縁を呈するやや広口のもの(94)が認められる。小型壺は赤彩されるものが多い。

#### 蓋

全形が明らかなものは1点である。裾部がハの字状に開く器形のみ認められる。頂部は平らなものと、中央がやや凹むものがある。

#### 鉢

出土数は少ない。小型のものがほとんどである。有段口縁を呈し身が深いもの(98)、碗形で台を有するもの(99)、口縁部が外反し頸部が屈曲するもの(17)と身が浅いもの(177)がある。

#### 高杯

全体の器形がわかるものは出土していない。口縁部形態をみると、有段口縁を呈し口縁部が外反するもの(5など)、有段口縁を呈し杯部が鉢形のもの(105)、口縁部が内湾する東海系(109など)が見られる。

#### 器台

小型器台が大多数を占める。口縁端部にバラエティーが見られるものの、大きくは2種類に分けられる。受部が直線的に開くもの(144)と、受部が内湾して立ち上がるもの(113)がある。

#### 結合器台

口縁部もしくは受部破片のみの出土である。いわゆる「<sup>704</sup>鈎付き結合器台」[滝沢2005b](152)と、受部が突出しないもの(143)の2種類が見られる。

### 3) 各 説

#### SK255 (図版17 2・3)

甕・壺がある。3はヨコナデにより外面を有段状につくり出す。底部は、ハケ調整と同一工具によるヘラケズリによってつくり出されている。

#### SK211 (図版17 8)

8は壺または鉢の台部と思われる。ハケメが明瞭に残る。器面は摩耗しているが、内面上部まで赤彩が施されている。

#### SK218 (図版17 9～13)

少量ながら甕・壺・鉢・高杯が出土しているが、小片が多く図化に堪えうるものが少ない。10は甕C1類としたが、口縁部の外反度は弱く、頸部はしまらない。10・12は弥生時代後期に属する可能性が高い。

#### SD201 (図版17 22～26)

甕・壺がある。23は口径26.2cmを測る大型の甕である。口縁外面には全面的にススが厚く付着しているが、体部には全く認められない。24・25は壺の底部と思われる。24は器厚3.5mmと薄く、精良である。内外面に赤彩が施される。25は丸底で、接地面付近は外面ヘラケズリ、内面ナデ調整だが、体部はヘラミガキが施される。26は一括で出土した壺である(図版56)。口縁部は欠損しているが体部の残存率は高い。体部最大径から下部にススが付着している。内面調整は底部が螺旋状のハケ、そのほかの部位はヘラナデである。

#### SD257 (図版18 29～32)

甕・壺・高杯がある。29は口縁部に擬似擬凹線文の施される壺である。沈線は幅1mm、間隔が一定ではなく重なり合うところがあるなど、やや粗雑な印象である。30は高杯または器台の脚部である。透

孔は4か所と予想される。31は杯底部が欠損しているが、稜は認められず碗形を呈するものと考えられる。32の高杯は5同様、杯部にヘラミガキがなされるが、ハケメが明瞭に残る。

#### SD1001 (図版 18 35)

35は高杯とした。わずかに内湾する口縁部を持つ。ヘラミガキが施されているようだが、粗雑である。

#### SD213 (図版 18 36~46)

甕・壺・蓋・高杯がある。39は底径から甕とした。底部内面には高さ5cmほどまで炭化物が全周するように付着しているが、それより上部には全く見られず境界は明瞭である。底部外面もハケ調整である。42は台付装飾壺の体部である。突帯には擬似擬凹線文が施される。沈線は深く鋭い。44は球胴の体部を持つ小型壺と思われる。内外面ヘラミガキ・赤彩されるが内面にはハケメが残る。46は丁寧なつくりで、内面も上位まで平滑に調整される。

#### SD196 (図版 18 ~ 20 47~114)

甕・壺・蓋・鉢・高杯・器台がある。47は有段口縁の擬凹線甕である。甕A類は、この1点のほかに包含層出土の細片があるのみである。48は受口状口縁の甕で、この1点のみ確認された。口縁端部は面取りされない。体部はヘラケズリ調整だが、単位は判然としない。体部をヘラケズリするものは、本遺跡出土土器では稀である。50はB1類、有段部がやや長い。頸部との境で欠損している。51はB2類である。内面は稜を持たないが、外面には粘土帯を貼り付けて有段にしていると思われる。稜線は鋭い。49は口縁つまみあげにより端部が薄く作られているため、欠損が多く見られる。52は頸部にも稜を有する。いわゆる「コ」の字状口縁の甕に近い形態である。本遺跡での出土例は少ない。体部ハケ調整の後、口縁部ヨコナデが施される。53・54は口縁端部に幅広い面を有するもので、このような形態も少量ながら出土している。口縁端部下端には沈線が1条描かれる。58~69は甕C2類としたが、口縁部の長さや外反度、端部形態は様々である。62の口縁部外面は、ヨコナデの後ハケが施される。70・78・80~82は甕C3類とした。78は口縁外面の調整が粗雑で凹凸が著しく、接合痕が多く見られる。80は口縁から底部まで50%弱残存しているが、その半分は摩耗が著しく、ハケが消えている。摩耗している部分とそうでない部分が明瞭に分かれる。底部はヘラケズリによって作り出されている。

71~74は甕、76は壺の底部と考えられる。底部の立ち上がりは外反するものより内湾するものの方が多く見られる。73は土器を持ち上げた状態で、胴部から底部に向かってハケ調整を行う。そのため底部外周がやや盛り上がり、断面は逆凹状になっている。こういった調整のものは、73のほか数点出土している。76の外面はヘラミガキが施されるが方向・単位は判然としない。内面はナデ調整される。84・85は、底部外面中央がくぼんでいる。73のような整形を行った後、底部を平らにしたものであろうか。外面にもハケが施されている。

79・86は胎土が異質である。混入物の種類は在地と変わらないが、白色粒子を多く含んでおり器面がザラついている。79は櫛描波状文が施され、箱清水式系甕の口頸部であると思われる。86は内面上部に炭化物がめぐるように厚く付着している。同一個体ではないが79は同系統の甕底部になるとと思われる。

88は広口の有段口縁甕である。口縁上部はヨコナデにより若干凹凸が認められ、外方に開く。89は器面の剥落が著しく、厚く剥がれている部分がある。粘土帯の接合部分で欠損している。93は口縁部・体部破片を図上復元した。細頸の台付装飾壺である。外面は全面ヘラミガキが施されるが、口縁部は調整方向が不明瞭である。肩部に稜を有する。94は頸部が非常に短い。器壁は非常に薄く、丁寧なつくりである。95は対照的に器壁が厚くぼてりとした印象だが、つくりは丁寧で胎土も緻密である。内外面に亦

彩が施される。

97の蓋は内外面とも赤彩されるが、器面の剥落が著しく、痕跡が一部残る程度である。98はヨコナデにより有段口縁をつくり出す。体部外面は粗いハケで調整されるが、同じ工具でヨコナデを行っていると考えられる。体部下半は特に器面の剥落が著しい。100は小型壺と考える。口縁部を欠くため全体の器形は不明だが、あまり見られない器形である。東北系であろうか。胎土は在地と変わらない。99は図上復元したものである。口縁部は内湾気味に立ち上がる。台部内面は中央部付近にハケを残し裾部にはヨコナデが施される。外面は赤彩されるが摩耗が著しい。胎土は緻密である。

103は杯底部に比して底径が大きい器形である。杯部外面、脚部内面にはハケメが残る。104は口縁部が大きく外反する器形で、口縁端部を拡張させ上面を水平にしている。弥生時代後期の所産である可能性がある。106・109は口縁が内湾、110は裾部が内湾気味にすぼまる器形である。109・110は東海系と思われる。106については、器壁が厚くぼつりとしており東海系とは異なる印象である。碗形を呈する器形であろうか。丁寧な調整が施される。113は端部をつまみ上げし、端部に面を持つ。114は杯部底面が欠損しており、高杯の可能性が高い。脚部内面調整は下部ヨコナデ、上部はナデ上げられる。透孔は見られないが、残存率が低い透孔が存在した可能性もある。

#### SD200 (図版20・21 115～148)

壺・壺・鉢・高杯・器台がある。壺B類は有段部の種があまり明瞭でないものが多い。118は口縁部径に比して頸部がしまらない器形である。ヨコナデが明瞭である。121は頸部外面のハケが強く器面に凹みが見られる。

130は器壁が厚く最大15mmにもなる。大型の壺と考えられる。137は図上復元したものである。無文の貼付突帯がめぐる。胎土は砂礫が少なく緻密である。138は壺の底部と思われる。薄手で、粗いハケで調整されるが、ハケメが明瞭に残る。内面中央部分は器壁がさらに薄くなる。頸部平野で多く見られる形態であるという [滝沢2005c]。138・141はヘラケズリ、139・140はハケ調整が底部外面に施される。

142は器台または高杯の脚部である。有段で裾部は大きく開く。裾部部はつまみ上げされる。弥生時代後期にさかのぼる可能性が高い。143はやや小ぶりだが、結合器台と考える。有段上部に円形の透孔が1か所あり、その周辺のみハケが残る。段の有無という点では異なるが、正尺C遺跡 [土橋ら2006] No.86のような器形になると推測される。144は図上で復元したものである。受部と脚部との境はヨコナデによる稜を有し、脚上部は筒状を呈する。口縁部は欠損している。

#### SX333 (図版21 149～153)

壺・壺・蓋・器台が出土している。150は有段口縁の壺で、月形式から続く系統のものと考えられる。口縁部は直線的に開くが外反度は弱い。151・152はいわゆる「鈎付き結合器台」 [滝沢2005b] と考えられる。受部のみ破片資料であるため透孔の形状や全体の器形は不明である。受端部・受部と口縁部の境は、一部が粘土紐接合面で剥落している。接合面にはヘラ状工具によるキザミが施されたことがわかる。受部外面は薄く剥離している。153は鉢または台付裝飾壺の台部と思われる。

#### P267 (図版21 156)

口縁部破片はこの1点のみである。広口の壺と思われる。口縁部は短く、端部に広い面を有する。体部のハケは明瞭で、口縁部ヨコナデの後に施されたことがわかる。

## P1003 (図版21 157)

甕・高杯が少量出土した。157はC2類の甕で、口縁端部は引き伸ばされて垂下する。本遺跡では稀な例である。

## 包含層 (図版22 160～192)

160～168は甕である。164はC3類、頸部の屈曲が弱くなだらかな器形であるが、体部内面に強いナデ調整が施され頸部に明瞭な稜を持つ。口縁上部はハケがナデ消される。165はハケが明瞭である。ヨコナデの後に施されており、一定の間隔でハケが施され文様のようにも見える。167は甕の底部と考えられるが、内面に赤彩される。類例は現在のところ認められない。

169～175・177は壺である。172は頸部内面に鋭い稜を有する。173～175は台付裝飾壺の体部であるが、すべて異なる突帯を持つ。174は突帯に凹線文を施す。細い棒状浮文が2個貼り付けられる。残存率が低いため、貼付の単位は不明である。175も174同様凹線文が見られるが、174のように突帯の上下端が盛り上がるほどヨコナデは強くない。また、173・175は体部最大径の部分で内面に稜を有し算盤玉形の器形になると推測されるが、174は内面の稜が認められない。

176は小型高杯であろうか。内面に明瞭な稜を有し杯底部径は8.4cmと小さい。類例が現在のところ認められない。177は体部が浅い鉢であろうか。口縁部と体部の境に鋭い沈線2条とナデによる浅い沈線が1条、描かれる。179は壺または甕の底部であるが、底部外面はドーナツ状を呈する。180はおそらく鉢の底部である。上げ底に作られ、体部との境には指頭圧痕が残る。186～192は器台である。186は結合器台の口縁部である。受部が突出しない器形になると考えられる。この部分については薄い粘土紐を重ねて作られているのが観察される。円形の透孔は6個と推定される。188は受部と脚部境に細い貼付突帯を有する。貼付突帯を有するものは、本遺跡ではこの1点のみである。類例は少ないが上越市中島廻り遺跡 [小島1991] に数点認められる。190の脚部内面は、下部赤彩されるのに対し上部は凹凸が著しく、その差が顕著である。裾端部はつまみ上げられる。191の受部中央の孔は他個体に比較して非常に小さく、直径5mmである。192脚部の外面は丁寧にヘラミガキされ、内面はハケメが明瞭である。185・191・192は透孔をもたない。

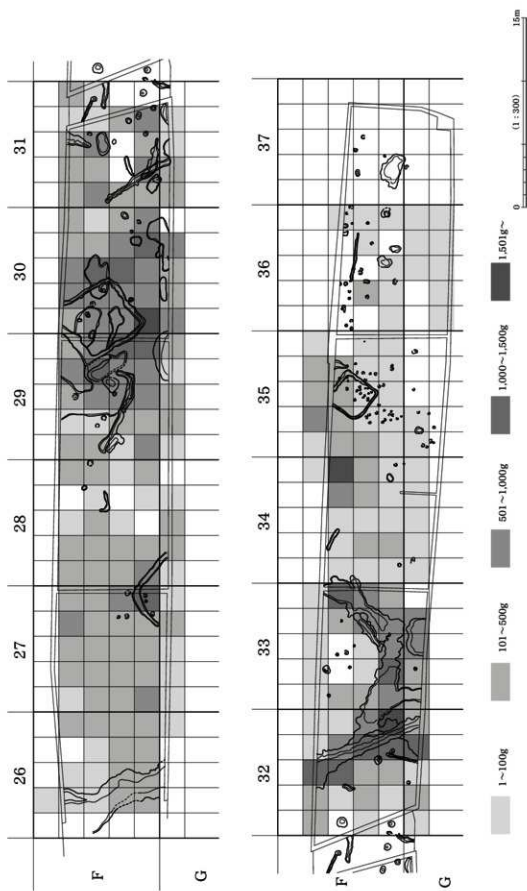
最後に、包含層出土土器の重量分布を第9図に示した。13～25列では100g以上出土したグリッドはなく、散在する程度であった。このため26～37列までの分布図のみ掲載する。

まず注目されるのが、34F15を中心とした部分で濃密な分布が認められることである。ここでは遺構は検出されなかったのだが、包含層中から掘り込まれた遺構を見逃してしまった可能性がある。反省をこめて記しておきたい。35F11～15の調査区外に分布する部分は、調査区壁面を整形する際に出土したものである。

それ以外では、遺構の分布にほぼ重なるようなあり方を示しているが、37列では土器が全く出土していない。SK122という大きな土坑が存在するが、掘り込みが深い遺構はこの土坑のみであり、ほかはほとんど浅い遺構であることと関係があると考えられる。また、SD196・200に囲まれた部分は希薄であり、柱穴が検出されたグリッドも空白域となっていることを記しておきたい。

## B 縄文時代の土器 (図版22 193)

1点のみ出土した。193は口縁上部にRL縄文が施され、下部はヘラナデの後沈線が2条描かれる。縄文原体の感じから大木系または馬高系であろうか。中期中葉から後葉のものと考えられる。



第8図 六反田南遺跡包含層出土土器重量分布図

## C 古墳時代後期以降の土器・陶磁器

## 1) 概 要

土師器、須恵器、白磁、青磁、瀬戸・美濃、珠洲、越前、肥前系陶器、肥前系磁器、越中瀬戸などが確認できる(第2表)。

時期別に組成を見ると、古墳時代中～後期は須恵器杯蓋と甕のみ、古代(奈良・平安時代)は須恵器の杯類が大半を占めるが、このような組成は一般的とはいえない。当期の煮炊具を古墳時代前期のものと誤認している可能性があるだろう。

中世は珠洲が大半を占め、白磁・青磁などの輸入陶磁器や瀬戸・美濃は少ない。近世は肥前系磁器が最も多いが、肥前系陶器・越中瀬戸も確認できる。

種類	器種	口縁部 残存率/36	破片数	備考	種類	器種	口縁部 残存率/36	破片数	備考
土 師 器	無台杯	21.5	22		珠 洲	(横)鉢	13	20	
	小甕	1	12			甕R	0	3	
	長甕	0	1			甕T	0	1	
	鉢	0	1			甕Rか甕T	0	1	
長甕か鍋	0	1		甕		1.5	1		
黒色土器	甕	2	1		甕か甕T	0	32		
	有台杯	0	1		磁器系陶器	鉢鉢	0	1	
須 恵 器	杯蓋	9.5	5	古墳時代の杯蓋含む	甕か甕	0	7	近世のものも含む?	
	有台杯	17	26		碗	9	4	小型の碗含む	
	無台杯	27	16		皿	37	35		
	有台杯か無台杯	0	5		碗か皿	0	4		
	横瓶	0	1		鉢	5	5		
	長頸瓶	5	2		鉢鉢	20.5	23	須恵唐津含む	
	壺・瓶類	0	5		壺・瓶	5	12		
	甕	0	9	古墳時代の甕含む	厚鉢	4	1		
	甕か横瓶	0	3		碗	25.5	26		
	白 磁	碗	3.5	7		皿	48.5	29	
白 磁	碗	5	2		碗か皿	2.5	6		
	皿	0	1		徳利	0	4		
瀬戸・美濃	碗	5	4		香炉	0	1		
	皿	4.5	4		碗	0	1		
志 野 磁	脚皿	0	1		皿	10	14		
	皿	2	2		壺	19	29	厚鉢の底面含む?	
土師質土器	皿	0	12		鉢鉢	4.5	5		
	小皿	2	2		碗	10.5	24		
合計 口縁部残存率 330/360 破片数 445片					京焼系陶器	皿	0	1	
					信楽系陶器	碗	3.5	8	
						灯明台	6	1	

第2表 六反田南遺跡古墳後期以降の土器・陶磁器

分類	特徴	須恵器窯
A群	石英・長石・雲母など花崗岩起源の大型の鉱物を多く含む粗い胎土。	阿賀北地域の須恵器窯の主体的な胎土。
B群	軟質の白色小粒子を定量含む胎土。きめ細かいB1と、砂質の強いB2の2種がある。小型の有台杯・無台杯にはB1、そのほかの器種にはB2が主に用いられる。	佐渡市(旧佐渡郡須賀町)小泊窯跡など佐渡市南西部の須恵器窯の胎土。
C1群	小型の石英・長石を少量含む比較的精良で粘土質の強い胎土。C3群は高田平野西部に点在する浅寺窯跡群などの須恵器窯に主体的にみられる胎土である。	上越地域では高田平野東部の未野・日向窯跡群で主体的な胎土。他地域では新潟市東部の新津(丘陵)窯跡群、長岡市東部の東山(丘陵)窯跡群でも主体的な胎土である。阿賀北の須恵器窯の野一にもみられる胎土。
C2群	海緑輝針を定量含む砂質の強い胎土。	長岡市西部の計和島村から三島郡出雲崎町にかけて分布する西古志窯跡群や浅田川流域に点在する須恵器窯に主体的にみられる。
C3群	砂質もしくはシルト質で均質な胎土。	高田平野西部に点在する浅寺窯跡群などの須恵器窯に主体的にみられる胎土。
D群	その他	

第3表 須恵器の胎土



		600			650			700			750			800			850			900			950		
時期	I期	II期			III期			IV期			V期			VI期			VII期								
		1	2	3	1	2	1	2	1	2	3	1	2	1	2	3	1	2	3						
歴史を代ると	飛鳥I				飛鳥II 新羅政権以前				神龜二年 (520)	西暦742 747 755年	長閑京				貞觀五年 (863)							延長六年 (926)			
註		(1)					(2)			(3)	(4)			(5)							(6)				

- (1) 伴作した須恵器の形態から推定。須恵器編年・年代は〔西口1993〕に従う。  
 (2) 長岡市下ノ西遺跡でⅡ2期を中心とした土器に伴作した木簡の記年銘〔田中 靖a=2003〕  
 (3) 742年はⅣ2期と考えられる滝寺7号窯に伴作した板木の伐採年代の上限。775年は削除されたであろう這村部を加味した伐採推定年代。Ⅳ2期の上限がこの中に納まると考えており、Ⅳ2期が西暦742～776年の間ということではない。  
 (4) 上越市今池遺跡でⅣ3期の土器に伴作した密Gが長岡京出土のものに類似〔坂井a=1984〕  
 (5) 〔日本三代実録〕に記録されている地震が発生した年。長岡市八幡林遺跡・新潟市釈迦堂遺跡でこの地震と考えられる新羅・噴砂を確認〔田中1994・江口2000〕。  
 (6) 長岡市門新遺跡でⅤ2期の土器器底に伴作した漆製の記年銘〔田中1995〕。

第4表 古代土器編年の暦年代

## 2) 各 説

古墳時代の須恵器は陶色編年〔田辺1981〕、古代の土器は第4表、須恵器の胎土の分類は第3表、青磁・白磁は横田・森田分類〔横田・森田1978〕・森田分類〔森田1982〕・〔上田1982〕、瀬戸・美濃は藤澤編年〔藤澤2002〕、珠洲は吉岡編年〔吉岡1994〕、肥前系陶磁器は大橋編年〔大橋1989〕に拠る。以下時期ごとに記述する。

### 古墳時代中～後期 (図版22 194・195)

須恵器杯蓋(194)と須恵器甕(195)が確認できる。194は天井部にロクロケズリを行う。小片のため口径は不確定だが復元径は14cmと大型である。195の詳細な時期は不明だが、194と胎土が類似することから古墳時代のものだと判断した。

### 奈良・平安時代 (図版22 196～207)

須恵器杯蓋(196) 口径15.8cmの大型の杯蓋で口縁端部の屈曲は長い。胎土はC1群である

須恵器有台杯(197～200) 口径13.8cmと大型の197と口径12cm前後になると思われる198～200がある。図示したものはいずれも胎土はC1群である。

須恵器無台杯(201) 底部ヘラキリで、口径12.4cmとやや大型である。胎土はC1群である。図示しなかったが、底部糸切りで胎土C3群のものも出土している。

須恵器長頸瓶(202・203) 202は口縁部、203は頸部の破片である。202の口縁端部には細かな欠けが連続的にみられる。

須恵器甕(204) 頸部の破片で波状文と3条の沈線が確認できる。

黒色土器皿(205) 口縁部が大きく開く施軸陶器模倣の皿である。黒色処理は口縁部外面まで及ぶ。

黒色土器有台椀(206) 器面の摩滅が著しい。観察表には「ロクロナデ?」と記載したが、非ロクロ成形の黒色土器の可能性も考えられる。

土師器無台椀(207) 底部破片であり、器壁は比較的厚い。

### 中 世 (図版23 208～223)

白磁皿(208・211) 208は口禿げの皿である。口縁部外面中位付近に片切彫りの幅広の沈線が2条

巡る。211は見込に乳白色の貫入がみられる軸葉がかかる。高台は無軸である。

青磁椀(209・210) 209は口縁部破片で外面にヘラ描き蓮弁紋があり、軸葉には貫入がみられる。210は底部破片で見込には片切彫りによる花文がみられる。また、高台内側は無軸である。

瀬戸・美濃天目椀(212) 途中で屈曲し、直立気味に伸びた口縁部が端部付近でわずかに外反する。

瀬戸・美濃御皿(213) 底部は回転糸切り、口縁部内外面に淡い緑色の軸葉がかかる。

瀬戸・美濃皿(214・215) 214は底部破片であり、削り出しで断面三角形の高台がつき、高台内側も施軸する。215は口縁部破片であり、外反し端部は比較的広い面を持つ。

志野皿(216) 菊皿の底部破片と考えられ高台は断面三角形の削り出し高台である。

土師器(217・218) 皿(218)と小皿(217)がある。ともにロクロ成形・回転糸切りである。

珠洲(219～223) 甕・壺・すり鉢の三点セットが確認できるが、壺・甕は胴部破片のみのため図示しなかった。219～221は鉢の口縁部破片で、端部が上方に屈曲する219・220と内傾し波状文を施す221がある。223・224は底部破片で、223には卸目が確認できないが、224は卸目が密に入る。2点とも内面と底部外面の摩耗が著しい。

越前 甕もしくは壺とすり鉢が確認できるが、ともに体部破片のため図示しなかった。

近 世(図版23 224～231)

肥前系陶器(224～227) 大橋編年Ⅰ・Ⅱ期の皿を中心に図化した。224は見込に四か所の胎土目があり、高台内側には漆による記号がみられる。225は緑反形の皿口縁部、226は底部破片である。227は内端設置の高台がつく。口縁部の形状から碗の可能性もある。226・227の見込・高台には目痕は確認できない。

越中瀬戸(228～231) 228は皿。見込みに菊花の印刻がみられる。229は壺の口縁部、230は壺または匣鉢の底部破片、231はすり鉢の口縁部破片である。いずれも褐色もしくは赤褐色の軸葉がかかる。17世紀前半かこれ以降のものであろう。

### 3) 土器・陶磁器の年代(第10図)

図化した土器・陶磁器の編年の位置付けを確認する。194は口径約14cmと大型で、天井部と口縁部の境に稜、口縁端部に面を持ち、天井部をヘラケズリすることからMT15段階前後のものであろう。195もこの頃のものと考えて矛盾はない。

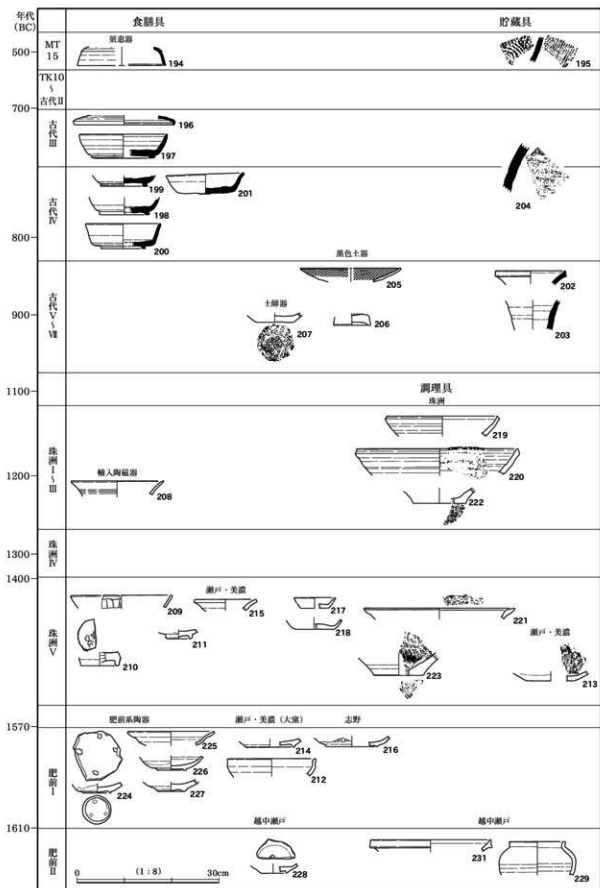
杯蓋196・有台杯197は口径が大きく古代Ⅲ期の可能性が高い。また有台杯198～200・無台杯201は口径12cm前後(になるもの)であり、196・197に後続し、古代Ⅳ期を中心とする時期であろう。

黒色土器皿205は施軸陶磁器を模倣したものであることから、Ⅴ期以降と考えられるが口径16.0cmと大型であり、Ⅶ期まででは下らないであろう。黒色土器有台碗206、底部が厚い土師器無台碗207はⅦ期の可能性が考えられる。

須恵器甕・瓶類は時期の決定が難しいが、口頸部に波状文と沈線がある甕204はⅢ・Ⅳ期、長頸瓶202・203はⅤ期以降の土器群に伴う可能性が高い。

珠洲すり鉢のうち口縁端部が上方に屈曲する219・220、内面に卸目が確認できない222は吉岡編年Ⅰ～Ⅲ期のものと考えられ、口売げの白磁皿はこの時期に伴うものであろう。

口縁端部に波状文がみられる珠洲すり鉢221は吉岡編年Ⅴ期のもので考えられ、卸し目が密に入る珠洲すり鉢223、ヘラ描き蓮弁紋の青磁椀209、見込に花文のある青磁椀210、白磁皿211、土師器皿



第9図 六反田南遺跡における古墳時代後期以降の土器・陶磁器の変遷 (S=1:8)

218・同小皿 217もこれと近接した時期のものと考えられる。また瀬戸・美濃215もこれに近い時期の可能性がある。

肥前系陶器皿のうち見込に胎土目がある224は大橋編年1期のものである。瀬戸・美濃天目鉢212、皿214、志野皿216も近接した時期と考えられる。肥前系陶器225～227もこれに近いかや下る時期のもの、越中瀬戸228はこれよりやや下る時期のものと考えられる。

## D 石 器 (図版23・24 232～253)

石器は総出土数174点を数えた。磨石類(30点)や砥石(24点)などが多く出土した。そのほかには玉作の工用品や石斧などがみられた。石材別出土数でみると安山岩が39点(総出土数の22.4%)と最も多く、磨石類20点、砥石10点の出土があった。ついで砂岩が33点(19.0%)で、磨石類9点、砥石8点の出土であったが剥片も9点確認した。緑色凝灰岩では玉作関連と考えられる資料がみられた。鉄石英は25点の出土があったが、確実な玉作工用品と考え得るものはみられなかった。以上の石材のほかには玉随やチャートなど10種みられたが、それぞれ出土数は10点に達していない。個々の石器の年代については不明であるが、滝沢編年〔滝沢2005a〕の5・6期に属するものが多いと考える。

	安山岩	砂岩	緑色凝灰岩	鉄石英	玉随	チャート	凝灰岩	泥岩	ヒスイ	滑石	蛇紋岩	石英	黒曜石	石灰岩	軟泥岩	
原 石	1			14	1	4		3	6	1	2				2	34
磨 石 類	20	9					1									30
工 程 品			23							2	2					27
砥 石	10	8					4	2								24
剥 片	4	9		2	3	2		1				2	1			24
チ ャ ッ プ			4	9	4							1	1			19
貝殻状剥片石斧	4	1														5
用途不明	3	2					1								1	5
石 核	2				1	1										4
打製石斧	1										1					1
磨製石斧												1				1
計	39	33	27	25	9	7	6	6	6	3	5	3	2	2	1	174

第5表 六反田南遺跡出土石器石材・種別一覧

### 打製石斧(232)

片面に自然面を残す。剥片を素材とし、側縁部に対して表裏両面からの二次加工が簡単に施されている。石材は砂岩である。

### 貝殻状剥片(233)

片面に自然面を残し、刃部には二次加工の痕跡は確認されず、周縁部も鋭とはいえない。右側上部に敲打痕がみられる。SK264からの出土である。

### 磨石類(234～238)

用途が限定されていれば、磨石または砥石、あるいは凹石と呼称するところだが、一個体に複数の使用法が見てとれるので、ここでは一括して磨石類と呼ぶこととする。234は敲打により上下両端部が著しく欠損し、寸詰まりな形状となっている。側面は摩耗が確認される。235は234と同様、上下端部には敲打痕がみられる。裏面はほぼ全面が磨られている。236は扁平な形状で、周縁部には敲打痕が確認される。237は中央部に径2cmほどの窪みがみられる。また、窪みの周囲や側面には摩耗が確認される。238の上端部には敲打による剝離痕がみられる。

### 磨製石斧(239)

蛇紋岩製の磨製石斧である。基部のみであるが全体的によく磨かれている。

## 玉作工程品 (240～249)

ヒスイや緑色凝灰岩など、玉作関連遺物が出土した。ヒスイは全部で6点、滑石は3点、緑色凝灰岩はチップまでも含めて27点を確認した。完成品の出土はなかったが、緑色凝灰岩の玉作の工程を窺い知ることができる。なお、緑色凝灰岩の玉作工程段階については尾崎氏の分類【尾崎2005】を参考にして、四段階に分類した。すなわち、第一段階：原石・石核、第二段階：角柱状素材、第三段階：研磨、第四段階：穿孔・研磨、である。

240および241はともに玉作工程の第一段階である。240は表面の一部が研磨されている。241にもわずかに研磨痕がある。

242・243・244は第二段階の資料である。242には細かな剝離加工が施されている。243には随所に研磨によって平坦に加工された痕跡が確認される。244は柱状に加工した後、側縁に剝離加工を施して、素材を成形したのであろう。この側縁調整は、出土がこの1点のみであるため、多くの加工品に対しておこなわれたかどうかは不明である。

245は素材の全面に研磨を施して、均整のとれた若干丸みを帯びた四角柱形状としている。穿孔痕はみられないが、丁寧な研磨痕を待つ第三段階の資料である。

6点検出されたヒスイには、完成品や柱状に加工された工程品はみられなかったが、246に見るように加工の出発点とも言える粗く割られた原石がSK218から出土した。247は節理面を2面と自然面を持つ鋭角的な形状の素材である。

滑石の加工品は2点が検出された。248はSK122より検出された多角柱状の形態の遺物である。側面はもとより、上端部にも研磨が施されている。249の色調は褐色で6面すべてに丁寧な研磨が施され、小さいながらも断面形・平面形は方形で板状の形に整えられている。

## 砥石 (250～253)

250は砂岩製の砥石である。研磨面中央部にかけて若干のふくらみを有する。研磨面の中でも特に左側で強く研磨される。下半部には金属刃器によると思われる線状痕が確認される。SD196からの出土品である。251は右側縁部に線状痕が同方向に向かって走っている。表面左側には幅0.5cm、長さ12cmに渡って筋状の磨痕が確認され、玉作砥石の可能性もある。上部側面には敲打痕がある。裏面も平坦な形状であるが、砥石としての使用痕は確認されない。252は茶褐色の泥岩からなる。左右側面と上面には擦切痕があり、成形する際の工程を知る手がかりとなろう。253は薄い板状を呈す。表裏両面には線状痕が鮮明に確認される。250・251は弥生時代末～古墳時代の玉作用、252・253は古代～中世もしくはそれ以降の鉄器用のもと考えられる。

## E 木製品 (図版25・26 254～273)

木製品は、生活用具・板材・杭・柱根などが出土した。総点数は174点であり、その内訳は第6表に示すとおりである。個々の木器の年代については不明だが、近世(以降)のものが含まれている可能性がある。

検出数が76本と最も多かった杭について、木取りは丸木取りと偏ミカン割りとともに19本(杭全体の25.0%)、ついで割り出しが9本(11.8%)、ミカン割りと偏半割りがそれぞれ8本(10.5%)、半割りと板目が6本(7.9%)、流れ柱目が1本(1.3%)であった。杭の検出は大グリッド22F

種類	部種	点数	比率	
食器具	箸	1	0.6%	
	容器	動物部材	6	3.4%
		植物部材	6	3.4%
		粒	1	0.6%
埋葬具	円形板	3	1.7%	
	下駄	2	1.1%	
建築材等	柱根	5	2.9%	
	板材	65	31.6%	
その他	杭	76	43.7%	
	棒材	12	6.9%	
	用途不明	7	4.0%	
		174	100.0%	

第6表 六反田南遺跡木製品器種構成

で48本と圧倒的に多かった。板材は、柾目が23点、板目が26点と、柾目・板目の大きな差はみられなかった(流れ柾目は6点)。なお、木取りについては、杭や板に限らず猪狩氏〔猪狩2004〕の分類に準拠した。以下に示す。

- 丸 木 取 り 木口面にのみ加工が施されているもの。
- 半 割 り 樹芯を通して、2分割されたもの。
- 偏 半 割 り 樹芯を通らずに2分割されたもの。芯持ちと芯去りに分けられる。
- ミカン割り 樹芯を通して1/2以下に分割されたもの。断面は扇形を呈すもの。
- 偏ミカン割り 樹芯を通らずに1/2以下に分割されたもの。芯持ちと芯去りに分けられる。
- 削り出し 側面を削り出して、断面が円形や四角形を呈するもの。芯持ちと芯去りに分けられる。
- 板 目 木口面において、長辺に平行するように木目が認められるもの。板材に対して用いる。
- 柾 目 木口面において、長辺に直交するように木目が認められるもの。板材に対して用いる。
- 流 れ 柾 目 木口面において、長辺に斜行して木目が認められるもの。板材に対して用いる。

#### 下 駄 (254)

無歯である。使用により、鼻緒周辺部が窪んでいる。それぞれの横緒穴の外側部分にも窪みが認められる。裏面は全体的に荒れており、とくに後部に向かうにしたがって摩擦の度合いが強い。

#### 円形板 (255)

円形容器の底板と考えられる。裏面は荒れている。側面には釘や釘痕等は見られず、容器の底部にはめ込んで使用したと考えられる。

#### 栓 (256)

截頂円錐形を呈す。長さは3cm、最大幅3cmを測る。スギの芯持ち材からなる。

#### 箸 (257)

SX61からの出土である。上端面は平坦に加工してある。中間部および先端部が欠損しており、先端が尖らせてあったかどうかは不明である。

#### 曲物部材 (258)

曲物の側板と考えられる。結合痕は確認できないが、薄手の作りである。

#### 結物部材 (259)

板目杉材からなる。中央部やや下方に緩やかな括れを有す。先端部は欠損している。

#### 板 材 (260・261・269)

260はP232の底面で検出された。杉を流れ柾目に木取りされた板材である。261はマツ属を流れ柾目に加工した板材である。上部右側に一か所小孔がある。269は杉を素材とし、大ぶりに形成された柾目の板材である。板状に加工されているが、表面には大きな起伏が見られる。側面も丁寧な加工は確認されない。

#### 棒 材 (262)

断面を正方形に加工した杉の削り出しである。先端部に向かうに従ってなだらかに削られており、楔や容器の栓としての使用が考えられる。

#### 杭 (263～268)

クスノキ科から木取りされた263以外は、どれも先端をよく尖らせてある。264・265・267は栗を

半割りとしたものである。266は松風を素材とし、ミカン割りの木取りである。268はクスノキ科の芯持丸木材である。自然木の湾曲した部分を除去してまっすくにしようと試みた痕跡がみられる。

#### 柱 根 (270～273)

いずれも杉を素材としており、割り出し加工で仕上げたと考えられる。底面は鋭角的ではなく、平坦に仕上げられている。270は底面にほど近い部分に3cm×1.5cm程の楕円形の穴がおり、何かの再利用品の可能性もある。271は扁平な六角形の断面を呈す。272には素材成形時の加工痕がよく残されている。272・273には、木材伐採時の平らな切断面が残されて底面が加工された痕跡が一部認められる。ピット内や近隣のグリッドから出土した土器から考え滝沢編年〔滝沢2005a〕の5・6期のものと考えられる。

### F 金属製品 (図版26 274～282)

#### 銭 貨 (274～277)

いずれも中国北宋のものである。274は1004年初鋳の景德元寶（真書）である。275は1023年初鋳の天聖元寶（真書）である。276は1086年初鋳の元祐通寶（行書）である。277は1101年初鋳の聖宋元寶（篆書）である。

#### 鑿 (278～280)

278は上端が耳掻き状に成形されており、欠損はない。279は小ふりに作られている。欠損は見られない。280は全長20cmを超え、上端は耳掻き状に成形されている。

#### 煙 管 (281・282)

281は雁首である。比較的薄い銅板を折りまげて作られ、表面に接合痕を残している。282は雁首と吸い口である。やや厚手の銅板を折りまげて作られている。表面に接合痕を残し、羅字が収まる部分の接合には裂けが確認される。

### G 土 製 品 (図版26 283～285)

#### 土 鐘 (283～285)

いずれも土師質である。漁用の網の鐘として使用されたものであろう。283・284は長さ7cm程度、直径4.1cm前後である。形状もよく似ている。検出地点（23F21・22F12）がそう離れてはいないことから、両者は関連があるのかもしれない。285は長さ5.2cm、直径3.8cmとややずんぐりとした形であり、使用により下方開口部内側が摩耗している。重量は283が96.7g、284が95.9g、285が55.4gである。個々の年代は不明であるが、滝沢編年〔滝沢2005a〕の5・6期の土器が多く出土している地点からは外れていることから、これ以外の時期（古代～中世）のものである可能性が高い。

## 4 自然科学分析

新潟県糸魚川市大和川に所在する六反田南遺跡は、小富士山を源とする前川の左岸、海岸沿いに形成された砂丘後背の沖積地に立地している。本遺跡の発掘調査の結果、古墳時代～鎌倉・室町時代の遺構・遺物が確認されている。

本報告では、発掘調査時に出土した柱材、杭材等の建築・土木材や、板材等の木製品について樹種同定を行い、各木製品の樹種及び木材利用について検討する。

### 1) 試料

試料は、柱材、杭材、板材等の木製品20点(試料番号1-20)である。試料の詳細は、結果とともに第7表に示す。

### 2) 分析方法

各木製品について、木取及び加工痕等について観察を行った後、剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柃目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製する。芯持丸木等の3断面の切片作成が困難な木製品については、接合面や破損部を対象として数mm角の木片を採取し、木片から3断面の切片を作成している。切片は、ガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東(1982)、Wheelerほか(1998)、Richterほか(2006)を参考としている。また、各樹種の木材組織配列の特徴については、林(1991)、伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考としている。

### 3) 結果

結果を第7表に示す。試料は、針葉樹2種類(マツ属複雑管束亜属・スギ)と広葉樹2種類(クリ・クスノキ科)に同定された。以下に、各種類の解剖学的特徴等を記す。

#### マツ属複雑管束亜属 (*Pinus* subgen. *Diploxylon*) マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道及び水平樹脂道が認められる。分野壁孔は窓状となり、放射仮道管内壁には顕著な顕菌状の突出が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。

#### スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

#### クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属



環孔材で、孔間部は2-3列、孔間外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

#### クスノキ科 (Lauraceae)

散孔材で管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単または2個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-20細胞高。柔組織は周囲状および散在状。

#### 4) 考 察

分析対象とされた木製品は、建築・土木材(柱・杭)や用途不明の木製品(板材・板状木製品・棒状木製品・円形木製品・箸状木製品・用途不明品)からなる。これらの木製品からは、針葉樹2種類(マツ属複雑管束亜属・スギ)と広葉樹2種類(クリ・クスノキ科)の計4種類が認められたが、全体的にスギ材が多く利用される傾向が認められる。

器種別の樹種構成に着目すると、建築・土木材の柱材は全て割材であり、樹種はいずれもスギであった。一方、杭は、芯持丸木と割材(半裁、1/4分割、1/3分割)からなり、芯持丸木はクスノキ科、割材にはマツ属複雑管束亜属、クリ、クスノキ科の3種類が認められた。加工方法による樹種の差異は認められないが、杭には、柱材や木製品に多く認められたスギが1点も認められない点は注目される。

木製品は、板材、板状木製品、棒状木製品、円形木製品、箸状木製品、用途不明品からなり、柾目、或いは板目となる板材が多く、このほかに、削出丸木(箸状木製品)、芯持材(用途不明品)も含まれる。いずれも用途等の詳細は不明であるが、試料番号18の用途不明品は栓に似た形状を示す。また、試料番号19は、3か所に穿孔が認められ、下駄の台のような形状を示す。これらの試料は、板材にマツ属複雑管束亜属が1点認められたほかは全てスギであり、板状を呈する製品には主としてスギが利用されていたことが窺われる。

なお、今回認められた樹種の特徴をみると、針葉樹のスギは、木理が直道で割裂性が高く、加工が容易とされる種類とされ、水分の多い土地を好む種類である。マツ属複雑管束亜属は、針葉樹材としては比較的重硬で強度が高く、加工は容易とされる種類であり、海岸砂丘等に生育するクロマツや、二次林を構成するアカマツが含まれる。一方、広葉樹のクリは重硬で強度および耐朽性が高いといった特徴があり、二次林等に生育する一般的な樹種である。クスノキ科は、暖温帯常緑広葉樹林を構成する種類や林内に生育する落葉低木など様々であり、材質も比較的重硬なものからやや軽軟なものまである。このうち、スギを除いた種類は、本地域で現在も見られる種類であり、当該期にも利用可能であったと考えられる。スギについては、植林等により本来の自生地は明らかではないが、杉沢の沢スギ(富山県入善町)等にみられる

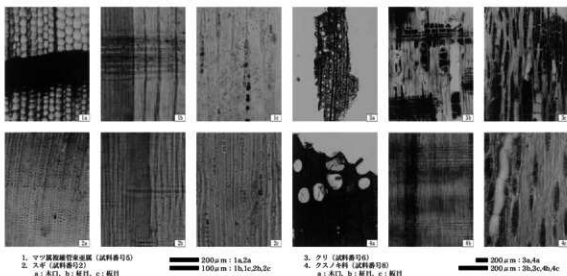
試料№	割合%	グリッド	遺構名	層位	種類	本取	樹種	備考
1	273	33F12	P277		柱組	割材	スギ	
2	272				柱組	割材	スギ	
3	270	34F21	P282		柱組	割材	スギ	
4	271	31F24	P204		柱組	割材	スギ	
5	266	35F18	杭215		杭	1/3割材	マツ属複雑管束亜属	
6	265	33F21	杭280		杭	1/4割材	クリ	
7	264	22F22	杭149		杭	半裁材	クリ	
8	263	22F13	杭167		杭	芯持丸木	クスノキ科	
9	262	33G2	杭279		杭	1/4割材	クリ	
10	269	32G5	SD200	覆土	板材	柾目	スギ	
11	261	32F22		Ⅲ	板材	柾目	マツ属複雑管束亜属	
12	262	15D2		Ⅲ	棒状木製品	分割角材	スギ	
13	258	20F22		Ⅲ	板状木製品	柾目	スギ	
14	259	19F9		Ⅲ	板状木製品	柾目	スギ	
15	260	31F18	P232	底面	板材	柾目	スギ	
16	255	18F2		Ⅲ	円形木製品	板目	スギ	
17	257	14F11	SX61	覆土	箸状木製品	削出丸木	スギ	
18	256	16D24		Ⅱ~Ⅲ	用途不明品	芯持材	スギ	栓状製品
19	254	17E6		Ⅱ~Ⅲ	板状木製品	芯持	スギ	孔3か所
20	263	22F14	杭160		杭	割材	クスノキ科	

第7表 六反田南遺跡樹種同定結果

ように、日本海側では扇状地扇端部の湧水点付近等の沖積地に生育地が認められることや、本地域におけるこれまでの木製品の分析調査成果を参考とすると、スギは周辺の沖積地にも生育しており、入手・利用しやすい環境にあった可能性があるが、この点については、当時の古植生に関わる分析調査成果と合せて検討することが望まれる。

## 引用文献

- 林 昭三 1991 日本産木材 顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫 1995 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ, 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫 1996 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ, 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫 1997 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ, 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫 1998 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ, 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫 1999 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ, 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編) 2006 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐野健三・安部 久・内海泰弘 (日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*] 鳥地 謙・伊東隆夫 1982 図説木材組織, 地球社, 176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].



第10図 六反田南遺跡出土木製品切片の顕微鏡写真

## 第IV章 前波南遺跡

### 1 調査の概要

#### A グリッドの設定

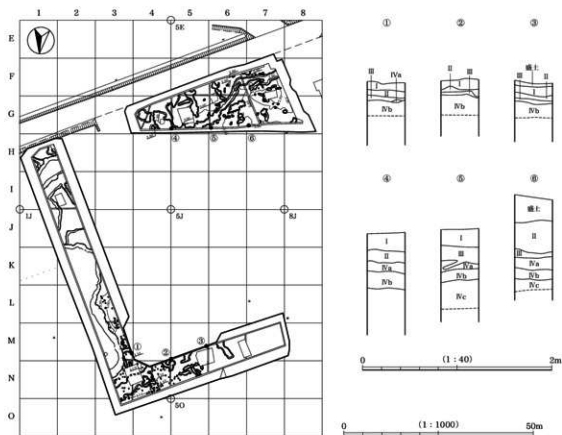
前波南遺跡のグリッドは六反田南遺跡と共通するものを設定した。グリッドの方位、名称などについては第三章1A(14p)を参照。主なグリッド交点の旧測地系の座標は第8表のとおりである。

測点	X (m)	Y (m)
1J	116539.184	-53493.904
5E	116484.521	-53527.251
5J	116502.883	-53629.325
5O	116583.716	-53539.914
8J	116530.320	-53563.341

第8表 前波南遺跡主要グリッドの座標(旧測地)

#### B 基本層序

前波南遺跡の基本層序は、上位からI層・II層・III層・IVa層・IVb層・IVc層の7層に分層が可能である。I層は現水田の耕作土、II層は主に中世以降の遺物包含層、III層は主に古墳時代、古代の遺物包含層である。IVa層はIVb層への漸移的な層で、IVb層を古墳時代以降の遺構確認面とした。調査区北側ではII層、III層、IVa層の層厚が薄く、また後世の擾乱を受けているなど、遺物の年代と出土層位が一致しないことがある。調査区東側はI層、II層を除くと旧河道の堆積層がほぼ全面に広がり、さらに掘り下げ



第11図 前波南遺跡グリッド設定と土層柱状図

てIV層を確認面として旧河道の範囲を確定した。各層位ごとの特徴は以下のとおりである。

I層：暗褐色土。現水田耕作土。

II層：黒褐色砂質シルト。主に中世以降の遺物を包含する。

III層：暗青灰色粘土。3～5mmの炭化物を多く含む。主に古墳時代、古代の遺物を包含する。

IVa層：灰色粘土。青灰色粘土を小ブロック状に含む。III層からの変化は漸移的である。

IVb層：灰色砂質シルト。

IVc層：灰色シルト。IVa層～IVc層の変化は漸移的である。

## 2 遺 構

### A 概 要

前波南遺跡の調査では、土坑6基、ピット139基、溝状遺構11条、性格不明遺構11基、杭列1列、川跡1条が検出された。これらは古墳時代から中世にわたるものと思われるが、一部の溝や旧河道を除き、遺物を伴うものがほとんどなく、時期を明らかにできないものが大半である。調査区は西側の三角形の部分（以下、三角部分という。）とL字状の部分（以下、市道部分という。）からなる。三角部分では自然流路と考えられる溝とその周囲に不整形や楕円形の土坑や杭列を検出した。市道部分の北東側には柱穴と思われるピットを多数検出した。市道部分南側の大半は旧河道で占められ、中層から河床にかけて、主に古墳時代中期と奈良時代の土器と多数の木製品が出土した。

### B 各 説

各遺構については観察表を作成しており、ここでは主要なものについて種別ごとに説明を行う。なお、記述方法は六反田南遺跡に準じており、ここでの説明は省略する。

#### 1) 土 坑

SK6（図版28・29・71）

7Gに位置する。平面形は不整形で、長径333cm、短径42cm、深さ42cm、断面形は弧状である。覆土は6層に分層され、斜位に堆積する。遺物は出土していない。

SK31（図版28・29）

6G15に位置する。平面形は楕円形で、長径141cm、短径105cm、深さ8cm、断面形は弧状である。覆土は暗灰色粘土の単層である。遺物は出土していない。

SK32（図版28・29）

6G19・20に位置する。平面形は楕円形で、長径177cm、短径84cm、深さ6cm、断面形は弧状である。覆土は暗灰色粘土の単層である。遺物は出土していない。

SK36（図版28・29）

7F23・24に位置する。平面形は楕円形で、長径116cm、短径69cm、深さ4cm、断面形は皿状である。覆土は暗灰色粘土の単層である。遺物は出土していない。

SK37（図版28・29・72）

7G3に位置する。平面形は楕円形で、長径242cm、短径163cm、深さ9cm、断面形は弧状である。

覆土は5層に分層され、斜位に堆積する。遺物は出土していない。

#### SK38 (図版28・29)

7G15、8G11に位置する。平面形は楕円形で、長径111cm、短径88cm、深さ11cm、断面形は弧状である。覆土は灰色シルトの単層である。遺物は出土していない。

## 2) ピ ッ ト

### 3～5L～Oのピット (図版33・73)

三角部分の西側に28基ある。平面形は楕円形ないし円形で、長径23～100cm、短径19～65cm、深さ1～10cm、断面形は弧状や皿状である。覆土は暗灰色粘土など単層である。遺物はP22から陶器や土師器の小片が少量出土した。これらは深度が浅く、規則的な配置がみられないことから有機的な関係にはなく、建物などを構成しないと考えられる。

### 4～8F・Gのピット (図版28)

市道部分の北東側に111基ある。平面形は楕円形ないし円形で、長径17～80cm、短径17～59cm、深さ5～28cmである。断面形はU字状が多く、半円状、弧状が続く。覆土は暗灰色粘土や灰色粘土などの単層が大半である。これらの多くは建物を構成すると思われるが、構造等は明らかにできなかった。遺物はP134から土師器の小片が少量出土したが、ほかのピットからは遺物の出土はなく、時期は不明であるが、周辺の包含層出土遺物やピットの規模や覆土から古代～中世にかけてのものと推測される。

## 3) 杭 列 (図版30・46・72)

5G、6Gに位置する。SD2とその両側約8mの間に長さ30～50cm、径5cmほどの杭が11本、不等間隔で打ち込まれている。構築時期は不明であるが、杭列を構成する杭の1本(図版46-151)が旧河道の下層から出土した杭(図版46-149)と先端の加工がよく似ていることから、古代に構築されたと考えられる。なお、7Fからは本杭列と同様の性格を有すると考えられる杭が1本、単独で出土している。

## 4) 溝

### SD2 (図版28～30・71)

5Gから7Fに位置する東西に長い溝で、東西ともに調査区外へ延びている。長さ26.5m、幅1.6m、深さ7～15cmで、断面形は弧状である。覆土は単層、または2層に分層され、レンズ状に堆積する。主な遺物は土師器高杯(図版35-19)、須恵器有台杯(図版36-39)、片側が斜めに切断された、木道の可能性のあるスギ材(図版46-43)が出土している。上層からは中世の陶器破片も出土しているため、古代から中世にかけての流路と考えられる。

### SD3 (図版28・29・71)

7Fに位置する溝で、西側でSD2に合流する。長さ5m、幅0.95m、深さ33cmで、断面形は弧状である。覆土は4層に分層され、レンズ状に堆積する。遺物は土師器小片が少量出土している。

### SD4 (図版28・29・71)

4Gから5G東側に位置する、ごく浅い溝である。蛇行する溝は長さ21mほど、幅0.5～2m以上、深さ2cmで、断面形は皿状である。覆土は暗褐色シルトの単層である。遺物は出土していない。

**SD5** (図版28・29)

5F, 5Gに位置する。長さ7.2m、幅2m、深さ5cmで、断面形は皿状である。覆土は暗褐色灰色シルトの単層である。遺物は出土していない。南側は調査区外へ延びており、規模や覆土が類似するSD4と調査区外で合流する可能性がある。

**SD7** (図版28・29)

6F, 6Gに位置する溝で、北側でSD2に合流し、南側は調査区外へ延びている。長さ5.9m以上、幅1.3m、深さ4cmで、断面形は皿状である。覆土は暗褐色灰色シルトの単層である。遺物は出土していない。SD4, SD5, SD7は平面形、断面形、覆土から自然流路と考えられる。

**SD43** (図版28・29)

8G17に位置する溝で、北側は調査区外へ延びている。長さ119cm以上、幅110cm、深さ8cmで、断面形は弧状である。覆土は暗灰色粘土の単層である。遺物は出土していない。

**SD46** (図版28・29)

7F22・23に位置する溝で、西側でSK37を切っている。長さ170cm以上、幅50cm、深さ6cmで、断面形は弧状である。覆土は暗灰色粘土の単層である。遺物は出土していない。

**SD181** (図版31・32)

3N24・25, 3N4・5に位置する。長さ354cm以上、幅70cm、深さ9cmで、断面形は皿状である。覆土は褐色灰色砂質シルトの単層である。遺物は出土していない。南側で旧河道と接するが、新旧関係は不明である。

**SD182** (図版31～33)

3M19・20に位置する溝で、東側は旧河道と接し、西側は調査区外へ延びている。長さ190cm以上、幅115cm、深さ2cmで、断面形は皿状である。覆土は灰色粘土の単層である。遺物は出土していない。旧河道との新旧関係は不明である。

**SD183** (図版31・32)

21に位置する溝で、南側は旧河道に合流し、北側は調査区外へ延びている。長さ6m以上、幅78cm、深さ6cmで、断面形は弧状である。覆土は明青灰色粘土の単層である。遺物は出土していない。

## 5) その他の遺構

**SX8** (図版28・29・72)

6Gに位置する。平面形は不整形で、長径500cm、短径185cm、深さ8cm、断面形は弧状である。覆土は暗褐色灰色シルトの単層である。遺物は土師器小片が少量出土している。

**SX9** (図版28・29)

6F10・15, 7F6・11に位置する遺構で、南側部分の多くは、調査区外へ広がっていると考えられる。平面形は不整形で、長径256cm、短径94cm以上、深さ8cm、断面形は弧状である。覆土は暗灰色粘土の単層である。遺物は土師器小片が少量出土している。

**SX171～177** (図版31・32・73)

4N, 5M, 5Nに位置する不整な溝状の遺構である。7基あり、深さは4～8cmで、断面形はいずれも皿状である。覆土は褐色灰色シルトや暗青灰色粘土の単層である。遺物はSX171, SX173, SX177から土師器小片が少量出土しているが、時期は不明である。また、西側に群在するピット群との新旧関係も判

然としない。これらは、平面形や覆土から同一の遺構と考えられるが、性格は不明である。

#### SX178 (図版31・32・73)

6Mに位置する遺構で、南側は調査区外へ延びている。長さ4.9m以上、幅1.6m、深さ1cmで、断面形は皿状である。覆土は灰色シルトの単層である。遺物は土師器小片や陶器小片がごく少量、古銭(図版37-76)が1点出土している。古銭の鋳造時期と遺構の時期が一致するかは不明である。

#### SX179・180 (図版31・32)

3N、4Nに位置する不整な溝状の遺構である。SX179は、長さが10.8m以上、幅2.1m、深さ8cmで、断面形は皿状である。覆土は褐灰色シルトの単層である。遺物は土師器小片が少量出土したが、時期は不明である。SX180は4Nの西側でSX179に合流する。長さ4m、幅85cm、深さ3cmで、断面形は皿状である。覆土は褐灰色シルトの単層である。遺物は出土していない。SX179は、覆土の特徴から考え周辺に群在するピット群の埋没後にできたものと考えられる。

### 6) 旧 河 道 (図版31・32・34・74)

2Hから3Nにかけて南北に蛇行する川跡で、北側、南側とも調査区外へ延びている。長さ50m以上、幅は1・2H・1で約8m、深さは0.7～1.3mほどである。河床からは、南半の西岸や両岸では緩やかに、北半の西岸では急に立ち上がる。覆土は大きく6層に分層できる。基本上層のⅡ層に相当する1層、2層は北半で確認でき、主に中世の遺物が少量出土した。褐色土の3層から灰色砂の5層は全体に1m前後の厚さがあり、南半では5層から弥生時代後期や奈良時代の土器、北半では4層から河床にかけて古墳時代中期の土器が主に出土した。また、全体の3～5層からは多くの木製品、自然木が出土した。6層はⅢ層に相当する暗灰色粘土で、部分的に河岸に薄く堆積する。遺物は主に古墳時代中期頃のものと同推される土器の小破片が少量出土した。本川跡は弥生時代後期から奈良時代頃にかけて、各時期の遺物とともに埋まっていき、中世にはほぼ埋まり、湿地帯として現代まで残ったと考えられる。

## 3 遺 物

## A 土器・陶磁器

## 1) 概 要

前波南遺跡から出土した土器・陶磁器類をまとめると第9表になる。Ⅱ層とⅢ層からは、珠洲・肥前系陶磁・越中瀬戸・京焼系陶器が多数出土した。さらに、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器や、青磁・白磁なども出土した。旧河道から出土した土器・陶磁器類は、古墳時代～古代の土師器・須恵器が主体を占め、縄文土器や中・近世のものも出土した。

種類	器種	口縁部 残存率/36	破片数	備考	種類	器種	口縁部 残存率/36	破片数	備考
縄文土器	深鉢	0	5		土師質土器	小皿	0	1	
	高杯	63.5	110			皿	0	2	
	小型壺	0	87			惣焼	0	1	
	器白	0	1		珠 洲	深鉢	17	25	
	杯	39	21			壺及種	0	2	
弥生土器	鉢	59.5	200			壺	1	1	
土師器	壺	142	1,034		安曇系陶器	壺小壺丁種	0	26	
	壺	24.5	13			壺	0	4	
	小壺	0	1			碗	6	1	
	製塩土器	3	9			皿	10.5	24	
	無台陶	0	1		肥前系陶器	碗小皿	2	2	
	不明	0	984			深鉢	3	6	
黒色土器	無台陶	1	4			壺	0	5	
	杯蓋	5	5			鉢	2.5	5	
	有台杯	16.5	4			瓶類	0	1	
	無台杯	6.5	7			その他	2	5	火鉢?香炉?行平?など
須恵器	有台杯か無台杯	0	2			碗	0	6	
	壺・瓶類	0	8		肥前系磁器	皿	25	8	
	壺	0	3			碗小皿	0	4	
	不明	0	1			徳利	12	1	
青 磁	碗	0	2			瓶類	0	3	
	皿	4	1			香炉	7	2	
白 磁	碗	4	2			皿	8.5	12	
	皿	2	2			碗	2	2	
青 花	皿	0	1		越中瀬戸	碗小皿	0	1	
	皿	3	4			深鉢	0	2	
瀬戸・美濃	碗	0.5	1	天目碗		壺	20	35	深鉢の底面含む?
					京焼系陶器	皿	0	1	
						碗	15	14	
						碗小皿	0	4	

合計 口縁部残存率 507.5/36  
破片数 2,718片

第9表 前波南遺跡出土の土器・陶磁器

## 2) 各 説

## a 縄文時代の土器 (図版35 1~4)

1は深鉢の口縁部である。口縁は外傾し、口唇部に向かって肥厚する。内面の口唇部直下には細い隆帯が走る。器面の摩耗が著しいため、外面の調整・施文は判然としない。2は胴部の小片である。外面には楕円形の隆帯がみられ、また斜め方向からの刺突文が散在する。3は深鉢の胴部下半である。垂下する隆帯が2本みられ、その脇を棒状工具によって刺突される。外面には縄文によるものと思われる施文が見られるが、器面の摩耗が著しいため詳細は不明である。4は深鉢の口縁部である。外面には半截竹管による半隆帯が2本走る。内面は暗灰色、外面は灰黄色を呈する。胎土は1~3と比較して精良である。



## b 弥生時代の土器 (図版35 5~8)

5・7は壺である。5は頸部が外反する直口壺である。肩部には稜がみられるが、張り出しは弱い。7は体部と底部の破片をもとに図上復元した。体部は球状に大きく膨らみ、しっかりした平底がつく。6は高杯・器台などの脚部と考えられる小片である。内外面とも赤彩される。8は壺の口縁部である。口縁部は外反し、端部が丸い。

## c 古墳時代～古代の土器 (図版35～36)

## 遺構出土土器

土師器 (9～32) 9・10は二重口縁壺である。9の内面段部は不明瞭であり、わずかに膨らみが見られる程度である。口縁部は外傾する。10は口縁部と頸部～体部の資料をもとに図上復元した。内外面とも段部は明瞭である。口縁部は強く外反し、端部は面状を呈する。口縁～頸部内面では器面の剥落が顕著である。11は壺の体部上半である。内面には輪積痕が顕著に残る。12は平底の小型壺である。体部は下膨れし、下半には弱い稜がみられる。底面～体部にスガが広がる。13は体部が球状に大きく膨らむ壺である。外面はミガキによって仕上げられるが、その整形は粗雑である。

14はいわゆる小型壺である。口縁部はわずかに内湾しながら開く。体部は下膨れし、下半には弱い稜がみられる。15は口径に比して身の浅い小型の碗である。凹状の窪みが回り頸部が作出され、口縁端部は強く外反する。

16・17は高杯の杯部である。いずれも口縁部と杯底部の境には稜をもち、口縁部は外傾する。17の内面は、器面の剥落が顕著である。18～26は脚部であり、このうち18では杯底部もわずかに残存する。18・22・25は脚上部が緩やかに膨らむが、19～21では膨らみが弱く直線的である。18・20の内面はへら状工具でナデ調整が施される。21は内面に輪積痕が残るものの、器面の摩耗が著しいために調整が判然としない。22の外面下半には幅約3～5mmの凹帯が巡る。23は内面の輪積痕を棒状工具で縦方向にナデ調整する。24は脚上部が短く、裾部が「ハ」字状に開く。外面には杯部貼付け時のものと思われるへら状工具痕が残る。25は裾部で屈曲し大きく開く。26は「ハ」字状に開く裾部片である。端部は斜め上方に反る。

27～32は「く」字状口縁の壺で、いずれも口縁端部が丸い。27の体部外面の調整は判然としないが、ハケメ調整によって仕上げられたものであろうか。器面全体にスガが広がる。28の口縁端部には強い稜がみられる。体部外面はハケメ調整であるが、粗雑である。外面にはスガが厚く付着する。29は体部の膨らみが弱い。底部外面から体部下端付近にはへらケズリを行う。体部内面下半には薄いコゲが見られる。30は口縁部と体部の境に稜が作出される。31の口縁部は強く外傾する。32は小型の壺で、口縁端部を丸くおさめるが、整形が粗雑なため端部の厚さが一定しない。体部内面には指頭圧痕が残る。また、胎土に中粒～粗粒砂の混入が目立つ。

須恵器 (38・39・42) 38・39は有台杯である。38の体部は直線的にのびる。底部は厚手で、見込の外端は大きく盛り上がる。高台は、外端が丸みをおび内端接地する。底部外面には大きく「\*」のへら記号が施される。39の高台の断面は方形であり、内端には稜がみられる。42は長頸瓶であり、口縁～頸部がわずかに欠損するものの、頸部～底部がほぼ完存している。2本の沈線が巡る長い頸部をもち、口縁部は強く開く。肩部は強く張り出し、稜がみられる。高台は外端が丸みをおび、内端接地をする。外面と、

内面の口縁～頸部には暗オリーブ色の自然軸がかかる。

#### 包含層出土土器

須恵器 (33～37・40・41) 33は甕の底部であろうか。外面にはカキメが施され、内面はクロコナデの凹凸が残る。34は擬宝珠状を呈する杯蓋のつまみである。端部はやや丸みをおび、中央部に向かって盛り上がる。35・36は杯蓋の口縁部小片である。35の口縁端部は下方に屈曲してやや外反する。36ではわずかに屈曲して丸くなる。37は甕の体部である。外面の調整は平行タタキの後カキメ、内面は円形タタキの後クロコナデである。40は器壁の薄い杯型の体部である。体部は直線的にのびる。41は無台杯の小片である。体部は外傾し、口縁端部では器壁が薄く、底部に向かって肥厚する。35と37は遺構精査中にIV層上面で出土した。

#### d 中・近世の土器・陶磁器 (図版36～37)

#### 遺構出土土器

珠洲 (50) すり鉢の口縁部である。わずかに内傾する端面がみられるが、内端および外端の稜は不明瞭である。端面の直下には2本の沈線が巡る。

#### 包含層出土土器・陶磁器

白磁 (43) 内面の口縁端部が無軸の「口先げの白磁」である。口縁部はゆるやかに外反する。

青磁 (44) 腰部で強く屈曲し、口縁部が強く外反する稜花皿である。内面の口縁部には片切彫りによる波状文等の文様が施される。

青花 (45) 見込に暗緑灰色の施文がみられる皿である。施文のモチーフは不明である。高台は逆台形状であり、豊付は無軸である。また、高台内の一部分にも軸がかからない。

瀬戸・美濃 (46・47) 46は口縁部が強く外反する椀である。淡黄色の軸には貫入がみられる。47は皿底部の小片である。内面と、外面の高台脇には浅黄色の軸がかかり、高台と高台内は無軸である。高台の断面は方形であり、内端の稜がシャープである。また、高台脇は強く屈曲する。

土師質土器 (48) 回転糸切りの小皿である。暗灰色を呈しており、胎土は精良・焼成は堅緻である。

珠洲 (49・51～62) 49は甕の口縁～肩部である。口縁は「く」字状に短く外反し、端部は強くナデ調整され面状を呈する。肩部には矢印状図文の刻印が施される。51～54はすり鉢の口縁～胴部である。口縁端面はわずかに内傾し、いずれも6～9条を単位とする波状文がみられる。51の端面内端には強い稜がみられ、その下部が強く屈曲する。54の端面内端にも稜がみられるが、51に比べて弱い。52・53では端面の稜がやや不明瞭となる。55・56は鉗目が施されるすり鉢の胴部である。鉗目の単位は不明である。57は壺の底部である。胎土には石英や砂粒等が多く含まれる。内底にはタール状の付着物がみられる。58～62は、甕もしくは壺の破片資料である。58の外面には暗緑灰色の自然軸が薄くかかる。59・62は焼成が特に堅緻である。60は焼成不良のため灰白色を呈する。

越前 (63・64) 63は甕の体部である。外面には灰オリーブ色の自然軸が厚くかかり、内面には庄痕と思われる窪みが数個みられる。64は遺構精査中にIV層上面で出土したすり鉢である。小片のため鉗目の単位は不明であるが、2cmの幅に6条が確認される。鉗目の直上には沈線が巡る。

唐津 (65・66) 65は、腰部にオリーブ黒色の軸がわずかに残り、内面は無軸の皿である。高台はシャープに削り出され、断面は逆三角形である。高台内には浅い溝が巡る。66は、腰部と見込に浅黄色の軸がかかる椀である。高台は粗く削り出され、断面は方形を呈する。高台内には縮縮皺がみられる。

越中瀬戸(67~70) 67は小型の甕である。腰部が強く屈曲し、胴部は外傾する。内面は全体に、外面は口縁の周辺部に鉄軸がかかる。68は見込に印花文が施される皿である。高台の断面は逆三角形を呈する。見込の周囲および腰部には灰赤色の鉄軸がかかる。69は暗赤褐色の錆軸が全面にかかる折縁皿である。胴部は外傾する。高台は小さく、断面は逆三角形となる。70は底部外面に2本の沈線が巡る甕である。内面は全体に、外面は沈線付近まで光沢のある鉄軸がかかる。

瓦器(71) 内外面に暗灰色の黒斑が広がるすり鉢である。小片のため卸目の単位は不明であるが、3条が確認される。

### 3) 土器・陶磁器の年代について

縄文土器2・3は小片であり、また摩耗が著しいため型式は不明であるが、刺突文の特徴から中期後葉~後期前葉のものであろうか。4は口縁部に半截竹管文が施されることから、北陸系の中期前葉の土器群である新保・新崎式〔加藤1988など〕のものである。

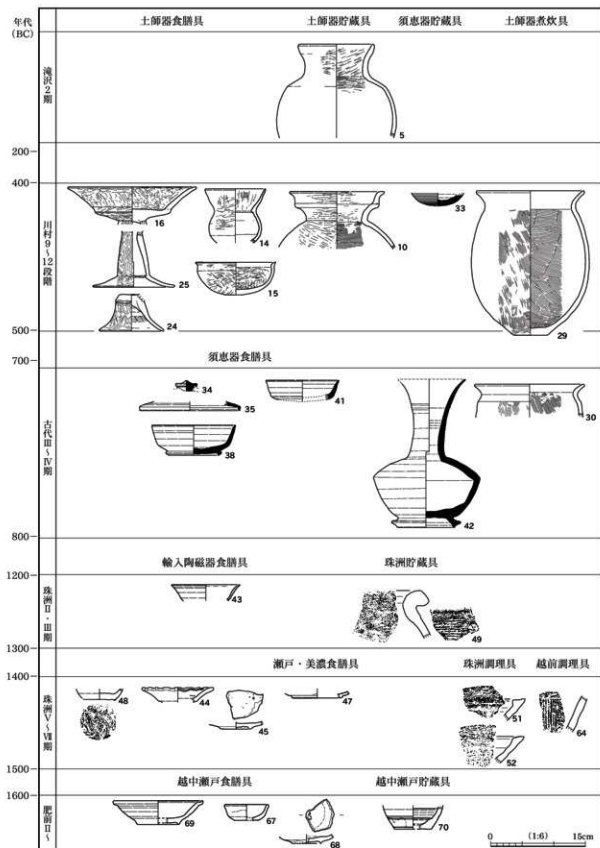
弥生土器のうち直口壺5は滝沢編年〔滝沢2005a〕2期前後のものであろう。5と同じく旧河道5層から近接して出土した7・8も同じ時期のものと考えたい。6は小片であるため詳細な時期は明らかではないが、弥生土器に含めておく。

古墳時代の土器器には口縁端部が強く外反する甕15、杯部外面に稜をもつ高杯16など川村編年〔川村2000〕9~10段階のものがみられる。二重口縁壺10、小型壺12、裾部で強く屈曲し大きく開く脚部をもつ高杯25、甕29も当該期のものと考えられる。なお、9~12段階は田辺編年のTK73もしくはTK216~TK47に比定できるものと考えている。

須臾器有台杯38は身が浅く体部が外傾し、また底部が突出することから今池編年〔坂井1984〕のⅡ期のものであり、春日編年〔春日1999・2005〕のⅣ1期に相当する。杯蓋35も同時期のものであろう。長頸瓶42は口縁~底部までほぼ完存する貴重な資料である。長い頸部をもち口縁部が大きく開き、肩部が強く張り出すことから、笹澤編年〔笹澤2003〕のⅢ-1期にあたり、その年代は8世紀前葉~中葉に比定される。上越市(旧神崎町)木崎山遺跡〔戸根ほか1992〕の3号竪穴住居や、同市三角田遺跡〔澤田ほか2006〕の下層SD113bやSD170出土の資料に類例を求めることができる。

いわゆる「口禿げの白磁」43は森田分類〔森田1982〕のA群に該当する。A群は、13世紀中頃~14世紀前半に輸入されたものと考えられている。青磁種花皿44は、紀淡海峡で採取された中国陶磁に類例がありその年代は15世紀前後~15世紀中葉頃と考えられているが〔上田1982〕、15世紀末~16世紀前半頃とする見解もある〔鶴巻1999〕。中世後期の青花については、器型や各部位の文様の組み合わせをもとに分類・編年がまとめられた〔小野1982〕。44は、小野分類のいずれに該当するかは不明であるが、概ね15~16世紀のものであろうか。

48は底径や体部立ち上がりから、15世紀のロクロ成形土器〔水澤2005〕と考えられる。本遺跡から出土した珠洲には時期幅がみられる。甕49は口縁部の形態から吉岡編年〔吉岡1994b〕のⅡ~Ⅲ期、口縁端面に波状文のみられるすり鉢51・52はⅤ~Ⅵ期にそれぞれ比定される。すり鉢50も当該期のものであろうか。越前が日本海側の各地に流通するようになったのは15世紀前半頃〔岩田1997〕、越中瀬戸の生産開始は16世紀末と考えられていることから〔宮田1997〕、本遺跡から出土した資料もそれ以降のものであろう。本遺跡出土の代表的な土器・陶磁器の年代を示すと第12図になる。



第12図 前波南遺跡における土器・陶磁器の変遷

## B 土 製 品 (図版37)

## 土 玉 (72)

外形はおおよそ円形であり、側面は扁平で中央部が大きく膨らむ。両端部を貫通する0.8～0.9cmの円孔が穿たれる。器面の剥落が著しい。

## 土 鐘 (73～75)

いずれも土師質である。73・74はいずれも中央部が大きく膨らむが、74はより大振りである。73は両端部を貫通する約1.1cmの円孔が、74は約1.6cmの円孔が穿たれる。75は細身であり、約1cmの円孔が穿たれる。また、胎土には長石類・黒雲母・砂粒等が多く含まれている。74・75の外面には、焼成時のものと思われる黒斑が広がる。

## C 金 属 製 品 (図版37)

## 銭 貨 (76～78)

本遺跡からは8枚の銭貨が出土したが、ここでは中国銭3枚を掲載した。76は初鋳621年の開元通寶で、SX178から出土したものである。77・78は初鋳1408年の永樂通寶である。このうち78はIII層から出土した。掲載外の銭貨はいずれも寛永通寶で、保存の良い3枚は新寛永である。うち2枚は裏面に11波が刻まれる四文銭、1枚は一文銭である。

## 煙 管 (79～81)

79は雁首である。表面に接合痕を残す。頸部が太く、火皿のつけ根の湾曲が弱い。80は吸口であり、表面に接合痕を残す。79と80はいずれも銅製である。81は銀製のものと思われる吸口であり、肩部に葉をモチーフにした線刻が施され、接合痕は擦り消されている。

## D 石 器 (図版37・38)

## 石 鏃 (82)

基部に抉入のある凹基無茎鏃である。先端部はわずかに欠損するが、側縁は直線的に開く。

## 貝殻状剥片 (83～85)

83・84は正面に自然面を残し、楕円形を呈する。周縁は極めて鋭利であり、下部には細かな剥離がみられる。83は下縁が直線的である。85は円形を呈し、下縁は直線的で、また一定の厚みをもち、83や84のような鋭利さはみられない。

## 有溝石鏃 (86)

おおよそ対称形に丁寧な成形が施される。短軸方向の中央部には幅約1.7～2.2cmの凹部が巡る。

## 磨石類 (87～89)

87は長さが19cmの磨石であり、本遺跡のものとしては最大級である。下面は強く敲打され、その周囲には剥離痕がみられる。正面下部は特に大きく剥離する。上面・左側面・右側面にも敲打痕が残る。また、正面中央と裏面には磨面が広がり、線状痕が散在する。88・89はヒスイ製である。88は下端に敲打痕がみられる。89は周縁が敲打され、その敲打による剥離もみられる。下面は荒れが顕著であることから、ほかの部分に比べて特に強く敲打されたものと考えられる。

## 滑石製未成品 (90)

右側面と上面が欠損するが、残存部は切り削って成形しサナギ状を呈する滑石製模造品の未成品と考えられる。下部に抉りに施され、その先端部を丸く成形しているのが特徴である。上部には溝状に抉られた痕跡がみられることから、下端と同様に丸く整形されていたものと思われる。滑石製模造品の未成品と考えられる。

## 砥石 (91～93)

91は左側面の側縁に溝がみられる中粒砂岩製の有溝砥石である。4面はほぼ平らに仕上げられる。左側面の側縁の溝は半円形の断面である。右側面にも浅い溝がみられ、この溝も研磨に用いられた可能性がある。92は上方が肉厚で下方に向かって薄くなり、おおよそ直方体を呈する砥石である。正面・裏面とともに左右側面の下半が磨り減っている。砥面には細かい線状痕が散在する。93は小片であるが、正面と、正面と上面のなす稜の部分が磨り減っている。砥面には細かい線状痕が顕著に見られる。上面には平行にのびる削痕がみられるが、これは素材の切り出し時についた切断痕の可能性がある。

## E 木 製 品

## 1) 概 要

前波南遺跡の調査では、約1,800点の木製品が出土した。これらのほとんどは旧河道の3～5層の出土品である。個々の木製品の時期は、出土層位や形態的特徴からでは明確にできないが、出土土器の主体を占める。古墳時代中期や奈良時代のものが多いと考えられる。種類別では、細長い薄板状の用途不明品が約8割を占め、ほかの製品を圧倒している。樹種はスギがほとんどと思われ、横櫛や弓状木製品などで異なる樹種が使われる程度である。

木製品の報告は種類別に主要な60点について行う。各木製品の出土地点、法量、木取り、樹種については観察表に記載しており、ここでは各種類の出土状況や制作技法を中心に記載する。なお、分類や部位の名称等については、主に『木器集成図録 近畿古代篇』[国立奈良文化財研究所1985]を参考とした。分類項目は農具、工具、祭祀具、容器、用途不明品、建築部材、編み物製品、杭、木筒とし、以下で各項目に従って説明する。

## 2) 各 説 (図版39～46)

## 農 具 (94～96)

今回の調査で出土したすべての木製品の中で、農具と考えられるものは3点のみであった。94は刃部と柄部を一本から作り出した一本鋤である。図上右側の肩部は、なで肩状であるが、左側は切断されたためか判然としないが、水平な肩部と思われ、明らかに非対称である。表面には無数の刃物痕跡が認められる。95は鼻緒孔3孔の田下駄である。平面形は前部が弧状、後部が三角形状、横断面は弧状、縦断面は前部が反り上がる弧状を呈する。後部両面には前後方向の整形痕を明瞭に残す。重量感のある田下駄である。96は大足の横木と考えられる。残存する片側には細長い柄があり、この部分を大足を構成する縦木の方形、ないし長方形を呈する柄穴に差し込んだと考えられる。

## 工 具 (97)

97は刀子鞘と考えられる。内面を刀子形にくりぬいた、断面が弧形のもの。外面には整形痕を明瞭に残すが、つくりは良く、優品である。本来、同様なもの2本を合わせ、細紐で固く締めていたと推測され

る。長さ23.6cm、幅3.2cm、厚さ1.3cm、樹種はスギである。

#### 祭祀具 (98)

98は陽物形と考えられる。スギの割材の上部を亀頭状に加工したもので、上部には明瞭な整形痕を残す。残存長は13.4cm、幅3.1cm、厚さ1.5cm、木取りは柃目である。

#### 服飾具 (99)

99はイスノキ製の横櫛で、半分近くが欠損していると考えられる。長方形で肩部に丸味をもたす型式で、現存櫛歯幅6.8cmあたり54枚の歯を挽き出している。現存幅7.2cm、高さ4.3cm、厚さ0.9cmで、表面は非常に平滑に仕上げられている。

#### 容器 (100～102)

容器の出土は曲物3点のみであった。100は円板の中央に大ききな方形の孔があげられたもので、円形曲物の蓋板と考えられる。101、102は小型の円形曲物の底板、あるいは蓋板と考えられるものである。

#### 用途不明品 (103～129)

単独で製品となるもの、製品を構成する部材の一つとなるもの、特徴的に加工されたもので、用途が不明な小型のものを一括した。

103は薄板状の部材である。左右の長さは59.8cmで、左右両端で弱く括れている。断面は片側が尖っており、その端部付近に38個の小孔が並んでいる。紡織具の機織部材と考えたが、類例に当たれず確証がない。104はイスガヤ製の弓状木製品である。弦や櫛がなく、丸木材の表面には小枝の凹凸が残り、片側の先端は鋭角に削り出すのみである。105は角柱状の部材で、2か所に丁寧なつくりの抉りをもつ。両端部も丸く仕上げられている。106、107は断面三角形を呈するもので、106は表裏面に平滑に仕上げられ、表面下部に段をもつ。107は下部に2か所の切り込みが残る。108は角板材の両側面に深い切欠きをいれる。109は刀形状を呈する製品である。刃先にあたる部分は特に鋭角に仕上げられておらず、また全体の整形も粗く、祭祀具を意識したものでない可能性がある。

110～113、123、124は断面形が円形、ないし楕円形を呈する棒状木製品である。110は片側の先端近くを削り有頭部を作り出す、いわゆる有頭状木製品である。平面形状は、頭部木口面が平坦となり、抉りは「く」の字形状となる。112は一端が杭先状に細くなる。113の一端は強く絞られたことにより有頭状を呈する。114～119は細長い板材の両端、あるいは一端を鋭く尖らしたものである。120は細い角棒の側面3か所に、半円形の切欠きをいれたもの。火鑽板の断片か。121、122は細長い薄板で、表裏とも平坦に削られている。旧河道では同様の薄板で、長さが短いものが多数出土した。125は片側のみ翼状に張り出し、下部の断面形が三角形となるものである。126～129は木屑、または加工痕を持つ木製品で、一端、あるいは両端を斜めに削る。

#### 建築部材 (130～143)

大型の板材、角材、楕孔のある大型、小型材などを建築部材としたが、各部材の用途は大半が不明である。また、ほかの製品の部材や杭、矢板に転用されたものも含まれる可能性がある。

130～135は板材である。130、131は残存部位の中央が湾曲するもので、131には幅5cmの楕円形をした楕孔が穿たれている。132は1か所、133は2か所に長方形の楕孔が穿たれている。134、135は一端を鋭角に削りだしたもので、杭、矢板に転用したのと考えられる。

136～143は角材、割材である。136は一端に楕がある。137、138は一方の幅が広くて厚く、もう一方の幅が狭くて薄い材で、138には楕孔が穿たれている。双方とも丁寧な整形である。139は割材。

140は一方に段差部を削り出している。141、142は杭、矢板に転用したものと考えられる。143は両側2か所が湾曲している。

#### 杭・その他(144～151)

144～146は芯持丸木材の杭である。先端は144が1方向から鋭角に、145が2方向から鈍角に、146が2方向から鋭角に削り出されている。146は長さが2.56mあり、本遺跡出土の木製品の中で最長である。

147は板目材を鈍角に先端を削り出したもので、先端側が炭化している。149～151は割材や板目材を周縁数方向から数度にわたり先端を削り出したもの。149、151の先端は平坦、150は鋭角である。

148はSD2内の落ち込みから、ほぼ水平な状態で出土した。枝を除いた木の片側が斜めに裁断されている。木道の可能性もあるが、木表面に歩行に起因するような磨減が認められないため、用途は不明である。樹種はスギ、長さは2.01mである。

#### 網代(152)

152は網代である。旧河道北側3M17・22の4層からの出土で、周辺の同一層位から古墳時代中期の土師器が多く出土している。編み物は30cm四方の範囲で二段、ほぼ水平な状態で認められ、すぐ近くでは同一個体のヒゴが散在していた。編み物を構成するヒゴはスギ製で、幅2.5cm、厚さ0.2cmほどである。編み方は網代編みで、2本超2本潜1本送りで編まれている。製品の種類は不明である。

#### 木簡(153)

153は旧河道2J23の3層より出土した。細長い薄板を上端部は三角形状に加工している。残存する長さは10.8cm、幅2.3cm、厚さ0.2cmで、下部は欠損している。表面の釈文案は「出口〔雲力〕or〔宮力〕□〔 〕×」で、「出」以外の判読は困難である。出土層位と周辺から出土する須恵器から8世紀頃の所産と考えられる。木簡の釈文については田中一穂から教示を受けた。

### 3) 木製品の年代について

旧河道からは約1,800点の木製品が出土したが、各製品の年代を形状などから特定できるものはほとんどない。3～5層から出土したこれらは、層位ごとに各種類の形状や出土比を異にしている様相はなく、また板状、棒状の製品が、斜位や直位の状態で複数の層位を貫く状況も多く認められた。さらには、樹種、整形が同様の細長い薄板状木製品は旧河道全体の3～5層から出土しており、木製品全体での年代幅はさほどないのではないかと考えている。よって、同様の出土状況である土器は奈良時代と古墳時代中期の土器であることから、今回出土した木製品の大半が奈良時代か古墳時代中期の所産の可能性が高い。ただ、古墳時代中期は3層からの出土がないため、より多くの木製品が奈良時代頃のものではないかと推測される。



## 4 自然科学分析

新潟県糸魚川市大和川に所在する前波南遺跡は、小富士山を源とする前川の右岸、海岸沿いに形成された砂丘後背の沖積地に立地している。なお、同左岸には古墳時代～鎌倉・室町時代の遺構・遺物が確認された六反田南遺跡が立地している。本遺跡の発掘調査の結果、弥生時代～中・近世の遺構・遺物や自然流路が確認されており、特に、調査区東部の自然流路（旧河道）からは多くの木製品が出土している。

本報告では、上記した自然流路等から出土した木製品を対象に樹種同定を行い、各木製品の樹種や木材利用について検討する。

### A 出土木製品の樹種同定

#### 1) 試料

試料は、木製品60点（試料番号1～60）である。試料の詳細は、結果とともに第10表に示す。

#### 2) 分析方法

各木製品について、木取及び加工痕等について観察を行った後、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柃目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を製作する。芯持丸木等の3断面の切片作成が困難な木製品については、接合面や破損部を対象として数mm角の木片を採取し、木片から3断面の切片を作成している。切片は、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作成する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、鳥地・伊東（1982）、Wheelerほか（1998）、Richterほか（2006）を参考としている。また、各樹種の木材組織配列の特徴については、林（1991）、伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考としている。

#### 3) 結果

結果を第10表に示す。木製品は、針葉樹2種類（スギ・ヒノキ科）と広葉樹2種類（イスノキ・トネリコ属）に同定された。以下に、各種類の解剖学的特徴等を記す。

##### スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

##### ヒノキ科 (Cupressaceae)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1～10細胞高。

##### イスノキ (*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.) マンサク科イスノキ属

試料No.	報告No.	グリッド	遺構名	層位	種類	木取	樹種
1	98	3K21	旧河道	4層	陶物器?	紐目	スギ
2	109	2J19	旧河道	4層	用途不明(板状)	紐目	スギ
3	101	2K10	旧河道	3層	曲物(底or蓋)	紐目	スギ
4	100	2K4	旧河道	3層	曲物(蓋)	紐目	スギ
5	153	2J23	旧河道	3層	木簡	板口	スギ
6	102	3L21	旧河道	3層	曲物(底or蓋)	紐目	スギ
7	97	1H15	旧河道	4層	刀子鞘	紐目	スギ
8	121	3M17	旧河道	4層	板	板口	スギ
9	119	2K14	旧河道	4層	用途不明(角材状)	頸材	スギ
10	132	3N4	旧河道	5層	穴のある材(板状)	紐目	スギ
11	105	2K19	旧河道	5層	用途不明(棒状)	閉出丸棒	スギ
12	110	2H6	旧河道	3層	横溝のある棒	閉出丸棒	スギ
13	95	1H3,1H4	旧河道	3層	田下駄	板口	スギ
14	120	7M6	遺構	用途不明(板状)	板口	スギ	
15	124	1H24	旧河道	用途不明(棒状)	閉出丸棒	スギ	
16	99	1H15	旧河道	3層	藤(横藤)	—	イスノキ
17	111	3N12	旧河道	4層	網?	閉出丸棒	スギ
18	151	3M17	旧河道	5~IV層	杭	頸材	スギ
19	117	2L6	旧河道	4層	部材(板状)	板口	スギ
20	114	3M22	旧河道	5層	杭状(板状)	板口	スギ
21	147	2H1	旧河道	3~4層	柱?(板状)	板口	スギ
22	137	3M22	旧河道	5層	部材(板状)	板口	スギ
23	108	2K9	旧河道	5層	用途不明(板状)	紐目	スギ
24	140	2K13	旧河道	4層	部材(板状)	板口	スギ
25	103	2L5	旧河道	5層	機織具?(板状)	板口	スギ
26	96	2J23,24	旧河道	3層	大足?	紐目	スギ
27	113	2K3-3	旧河道	3層	用途不明(角棒状)	頸材	スギ
28	107	1I	旧河道	4層	用途不明(板状)	紐目	スギ
29	133	5G16		IV上層	穴のある材(板状)	紐目	スギ
30	104	1H10	旧河道	5層		芯持丸棒	ヒノキ科
31	149	6G13		IV層	杭	頸材	スギ
32	150	5G19		IV層	杭(板状)	板口	スギ
33	112	2K2	旧河道	5層	網	閉出丸棒	スギ
34	152	3M17,22	旧河道	4層	電網物	板口	スギ
35	139	3M18	旧河道	4層	部材(角材)	頸材	スギ
36	135	2L4	旧河道	4層	部材(板状)	紐目	スギ
37	126	1I		4層	用途不明(板状)	板口	スギ
38	138	3M22	旧河道	5層	貫穴のある材	頸材	スギ
39	131	2K18	旧河道	4層	穴のある材	紐目	スギ
40	142	2K25	旧河道	3層	杭	頸材	スギ
41	130	3M17,18	旧河道	4.5層	部材(網板状)	板口	スギ
42	145	1I3	旧河道	4.5層	杭	芯持丸木	スギ
43	148	6P20	SD2	1層	用途不明	半截木	スギ
44	143	2J24	旧河道	3層	部材(角材)	頸材	スギ
45	141	3K20	旧河道	4層	材(板状)	板口	スギ
46	94	2H1,6,21	旧河道	4層	籠	板口	スギ
47	129	3M17,18	旧河道	4.5層	部材(板状)	芯持	トネリコ属
48	144	2J19	旧河道	3層	杭	芯持丸木	スギ
49	128	2K20	旧河道	4層	材(板状)	板口	スギ
50	115	2K5	旧河道	4層	用途不明(断面三角形)	頸材	スギ
51	106	1I	旧河道	4層	用途不明(板状)	板口	スギ
52	122	1H20	旧河道	3層	用途不明(網板状)	板口	スギ
53	123	3N7	旧河道	4層	用途不明(網板状)	板口	スギ
54	118	3M14,15	旧河道	4~5層	用途不明(板状)	板口	スギ
55	116	1I	旧河道	4層	用途不明(板状)	板口	スギ
56	125	2K18	旧河道	4層	用途不明(板状)	紐目	スギ
57	127	2K13	旧河道	4層	部材(角材)	頸材	スギ
58	136	2K14	旧河道	5層	部材(角材)	頸材	スギ
59	134	2K15	旧河道	3層	用途不明(板状)	板口	スギ
60	146	3M12,17	旧河道	4層	杭	芯持丸木	スギ

第10表 前波南遺跡樹種同定結果

散孔材で、道管は横断面で多角形、ほとんど単独で散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は階段穿孔を有し、段数は5段前後。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-200細胞高。柔組織は、独立帯状または短接線状で、放射方向にほぼ等間隔に配列する。

#### トネリコ属 (*Fraxinus*) モクセイ科

環孔材で、孔圈部は1-3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、単独または2個が放射方向に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1-3細胞幅、1-20細胞高。

## 4) 考 察

分析対象とされた木製品は、工具(刀子類・柄?)・農耕具(鋤・田下駄・大足?)・紡織具(機械具?)・容器(曲物・籠編物)・服飾具(櫛)・文房具(木簡)・祭祀具(陶物形?)・建築部材(柱?)・土木材(杭・杭状)・用途不明(板・部材・穴のある材・横溝のある棒・貫穴のある材・用途不明)に分類される。木製品の木取は、板状や角材状等の割材加工を施す製品が多く、芯持材は少ない傾向にある。なお、現時点では、各試料の年代観は不明であるため、ここでは木製品の樹種及びその傾向について考察を行う。

樹種同定の結果、木製品60点のうち57点がスギに同定された。スギは、板状を呈する資料に多く認められたほか、芯持丸木の杭や薄い板目板を組んだ籠編物等にも利用されていることから、多くの木製品にスギが利用されていたことが窺われる。このようにスギが多用される傾向は、隣接する六反田南遺跡で確認されているほか、高田平野周辺の古代~中世の遺跡においても、木製品にスギが多く利用される傾向が認められている [バリノ・サーヴェイ株式会社2003a, 2004; 三村・植田2003]。

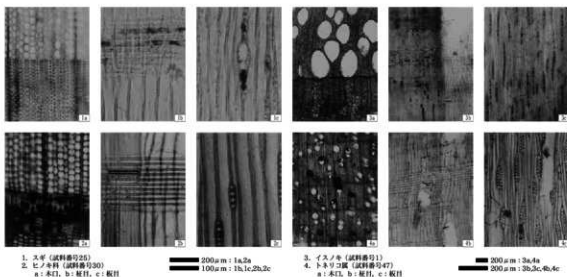
スギは、水分の多い土地を好む種類であり、木理が通直で割裂性が高く、加工の容易な種類である。本遺跡では、板状を呈する木製品にスギが多いという点から、スギの材質的な特徴を利用したことが指摘されるものの、スギ材を容易に入手できる環境であったかは、当該期の植生に関わる調査成果が少ないため、今後の課題である。

一方、スギ以外の樹種では、ヒノキ科、イスノキ、トネリコ属の3種類が1点ずつ認められた。ヒノキ科は、弓反りの芯持丸木(試料番号30)であるが、器種は不明である。ヒノキ科は、スギと同様に木理が通直で割裂性が高く、加工が容易で耐水性が高い種類である。試料は、径が細いことから枝等を利用してしていると推測されるが、年輪幅が狭く、通常のヒノキ科木材よりも硬い印象がある。トネリコ属は、板状の部材(試料番号47)に認められた。トネリコ属は、重硬で強度が高い材質を有するが、スギとは材質が異なるため、用途等が異なる可能性がある。トネリコ属は、低湿地に生育するヤチダモ等を含むことから、スギと共に周辺低地に生育していた可能性がある。また、ヒノキ科は、一般的に尾根上等に生育する種類が多いことから、後背の丘陵や山地等に生育していた樹木に由来する可能性がある。

イスノキは、横櫛(試料番号16)に認められた。イスノキは、極めて重硬で強度が高く、緻密なことから細かな加工に適する種類とされている。民俗事例では、櫛の用材として、ツゲに次ぐ良材とされており、本地域周辺では八反田遺跡(上越市)[株式会社パレオ・ラボ2002]、仲田遺跡(上越市)[三村・植田2003]等でイスノキを用いた櫛が確認されている。なお、イスノキは、暖温帯常緑広葉樹林の構成種であり、本地域には自生していなかったと考えられる。このことから、イスノキが自生する西日本方面から製品、或いは、原材料が持ち込まれた可能性があるが、詳細については今後の課題である。

## 引用文献

- 林 昭三 1991 日本産木材 顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫 1995 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ, 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫 1996 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ, 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫 1997 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ, 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫 1998 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ, 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫 1999 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ, 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 株式会社パレオ・ラボ 2002 木製品の樹種同定「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第110集 八反田・高畑遺跡 北陸自動車道上越春日・木田地区発掘調査報告書Ⅶ」新潟県教育委員会, 49-55.
- 川村忠洋 1983 曽根遺跡出土木材の識別, 新潟大学農演報, No.16, 75-82.
- 三村昌史・植田弥生 2003 仲田遺跡出土木製品の樹種「新潟県埋蔵文化財調査報告書第128集 北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅱ 仲田遺跡」新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団, 35-41.
- パリオ・サーヴェイ株式会社 2003a 自然科学分析「新潟県埋蔵文化財調査報告書第120集 一般国道253号上越三和道路関係発掘調査報告書Ⅰ 下割遺跡Ⅰ」新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団, 26-29.
- パリオ・サーヴェイ株式会社 2004 木製品の樹種同定「新潟県埋蔵文化財調査報告書第134集 上越三和道路関係発掘調査報告書Ⅱ 下割遺跡Ⅱ」新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団, 39-44.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編) 2006 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*]
- 島地 謙・伊東隆夫 1982 図説木材組織, 地球社, 176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].



第13図 前波南遺跡出土木製品切片の顕微鏡写真

# 第V章 ま と め

## 1 編年軸の設定

### 編年軸の概要

六反田南遺跡・前波南遺跡の調査成果をまとめるために、編年軸を設定する必要がある。編年軸の基準とするのは土器・陶磁器の編年であり、主に既存の土器・陶磁器編年を用いる。弥生時代後期～古墳時代前期は滝沢規朗による編年〔滝沢2005a〕、古墳時代は川村浩司氏の編年〔川村2000〕、古代（概ね6世紀末～12世紀前半）は第4表（第3章29p）に従う。なお、越後における弥生後期～古墳時代・古代の土器編年は石川県加賀地域を対象とした田嶋明人の研究〔田嶋1986・1988〕が大きな影響を与えている。

中世（12世紀中葉～16世紀）は吉岡康暢による珠洲焼編年〔吉岡1994〕、藤沢良祐による古瀬戸・大窯の編年〔藤沢1997・2002〕、品田高志・水澤幸一の中世土器の編年〔品田1999、水澤2005〕、近世（17世紀以降）は大橋康二による肥前陶磁の編年〔大橋1989など〕に従う。これらをまとめると第11表となる。なお、第11表の暦年代および「資料（主に頸城地域）」については、滝沢1～9期は滝沢規朗〔滝沢2005〕、川村6～16段階は川村浩司〔川村2000〕、古代Ⅰ～Ⅶ期は春日真実〔春日1999・2005〕・小田由美子〔小田2004〕、古代Ⅷ～珠洲Ⅳ期是水澤幸一〔水澤2005〕、珠洲Ⅴ期～品田Ⅴ期是水澤幸一〔水澤2005〕・品田高志〔品田1999〕の各論考を参考にして作成した。

なお、古代後半から中世の時期区分については、在地の土器群の変遷を詳細に検討した水澤の土器編年を用いるべきと考えるが、西暦を用いた時期区分であり、水澤の10世紀4～12世紀2についてはここで用いる年代観と齟齬があるため用いなかった。

### 時代名称

以下の記述では、各時期区分とは別に、滝沢1～3期を弥生時代後期、滝沢4～6期を弥生時代終末期、滝沢7～川村7段階を古墳時代前期、川村8～11段階を古墳時代中期、川村12～16段階を古墳時代後期、古代Ⅰ～Ⅳ期を古代前期、古代Ⅴ～Ⅶ期を古代後期、珠洲Ⅰ期～Ⅳ期を中世前期、珠洲Ⅴ期～品田Ⅴ期を中世後期と呼称する場合がある。

### 留意点

表11については以下の7点に留意する必要があると考えている。

- ① 滝沢4・5期と漆町4・5群土器〔田嶋1986〕の対応関係に齟齬が生じている可能性がある。田嶋明人は漆町3～6群土器を再検討し、外来系土器や小型器台およびこれとセットとなる小型壺・鉢が漆町4群土器から出現することを確認し、従来、漆町3・4群が月影式、漆町5・6群に白江式がそれぞれ対応するとしていたものを、月影式を漆町3群土器に限定し、白江式を漆町4～6群に対応する土器様式した。〔田嶋2007〕。これに従うならばこれまで滝沢5期とされていた資料の一部に漆町4群と並行する土器群が存在する可能性が考えられる。
- ② 滝沢9期～川村7段階と漆町9～11群土器との対応関係にも齟齬が生じている可能性がある〔田嶋2006〕。後述する川村8段階の土器群の評価とも関連するが、越後の既存の資料を用いて滝沢9期～川村7段階の間を3期に区分することは難しいと考えている。ここでは川村6・7段階を一括りとし2分

したが、滝沢9期とした中に漆町10群に並行する土器群が含まれている可能性がある。

- ③ 川村8段階、品田1990・1992Ⅲ1期、漆町12群土器、広瀬5期は表11では平行関係にあるが、品田Ⅲ1期の基準資料である柏崎市礼坊遺跡SK2a出土土器を川村は7期とする〔川村2000〕。また田嶋は漆町12群土器を「確実な伴例は無いが最古の須恵器が伴う段階」〔田嶋1986〕で、広瀬6期と平行関係にあるとする〔田嶋1992〕が、青山博樹は広瀬5期と平行するとしている〔青山1997〕。これについては、ここではとりあえず以下のように考える。川村は5段階から7段階までを一連の様式としたうえで柏崎市礼坊遺跡SK2aを7段階に位置づけているが、粗製の小型壺は確認できないものの屈折脚の高杯が定量あり、小型器台やこれとセットとなる小型壺・鉢が欠落する組成は滝沢9期以来の土器群とは区別すべしと考へ、従来どおり品田1990・1992Ⅲ1期=川村8段階の資料とする。漆町12群土器と広瀬(古墳)編年(および須恵器編年)との対応関係については青山の指摘〔青山1997〕に従い、漆町12群土器と広瀬5期が平行関係にあり須恵器は原則伴わない段階と考へる。また、川村8段階(品田1990・1992Ⅲ1期)と漆町12群土器も概ね並行する時期と考へたい。
- ④ 川村9段階～16段階は、越後の既存の資料では、土器器の型式・様式をここまで細分できないと考へる。ここでは川村9～11段階(TK73～TK23)、12段階(TK47)、13～15段階(MT15～MT85)、16段階(TK43)の4期に区分する。なお、川村9～11段階は短脚の高杯の有無(あるいは多寡)、13～16段階は土師器杯・釜(甕)の形態からそれぞれに細分できるものとして考へているが、これについては資料の蓄積後検討したい。
- ⑤ 古代V～Ⅶ期の暦年代については多様な意見がある。古代Ⅶ3期(田嶋Ⅶ2期(新))を例にとると、水澤幸一は10世紀末とするが、田嶋は11世紀第2四半期としている。また、壺Gが伴件している例があることからV期の年代を8世紀末ないしは9世紀初頭にすべきという意見もある。
- ⑥ 資料が少ないため珠洲Ⅳ期の土師器皿の様相が不明である。このため珠洲Ⅱ・Ⅲ期あるいは珠洲Ⅴしている土師器の中に本来珠洲Ⅳ期平行の土師器皿が含まれているとする意見があるかもしれない。
- ⑦ 品田Ⅱ～Ⅳ期については、品田高志と水澤幸一の編年観に若干の違いが見られる。品田は至徳寺519遺構出土土器群を同4・19遺構出土土器群に後続するものとし、春日山内堀地区SD22・SE52・SK57と同時期のものとするが、水澤は至徳寺519遺構出土土器群と同4・19遺構出土土器群を近接した時期とする。また、品田は春日山内堀地区D22・SE52・SK57出土土器群を同SD2・4・29出土土器群に先行するものとするが、水澤は明確な区別をしない。ここでは、至徳寺519遺構出土土器群と同4・19遺構出土土器群については水澤に従い同時期のものとして品田Ⅱ期の資料とし、春日山内堀地区D22・SE52・SK57出土土器群と同SD2・4・29出土土器群の前後関係については品田に賛同し、前者を品田Ⅲ期、後者を品田Ⅳ期の資料とする。なお水澤が16世紀第2四半期から第3四半期とする阿賀野市堀越館跡SK51は品田Ⅲ期とした土師器(春日山内堀地区SD22・SE52・SK57)と対比できる資料と考へる。

以上のように問題点・検討課題を多く含む編年案であるが、上記の時期区分を用いることにより、研究者により最大で50年以上異なる暦年代や、研究者により開始・終焉の認識が異なる古墳時代(前期・中期・後期)・古代(前期・後期)・中世(前期・後期)という時代区分のみを用いるよりも、明確な記述ができるものとする。

西暦	時代	時期区分	浅沢 2005	川村 2000	田嶋 1986・88	品田 1990・92	広瀬 1991 (古墳番号)	田辺 1981	資料 (主に瀬城地域)	
400-	後期 浅沢	1期	1期						我生山3号在	
		2期	2期						上ノ平・矢代山2号在	
		3期	3期			漆町3群			百両山10号土坑	
		4期	4期			漆町4群			横山1号在 (長岡市)	
		5期	5期	1段階		漆町5群	I-1		津倉田SK104	
	前期	6期	6期	2段階		漆町6群	I-2		中島塚1号	
		7期	7期	3段階		漆町7群	I-3	1期	津倉田SK461	
		8期	8期	4段階		漆町8群	I-4	2期	一之江SI233	
		9期	9期	5段階		漆町9群	II-1	3期	津倉田SD66	
		10期	10期	6段階		漆町10群	II-2	4期	一之江SK3294	
500-	中期	6・7段階							一之江SK679・304	
		8段階								
		9段階								TK73
		9～11段階								TK216
										TK208
	後期	12段階								TK23
		13～15段階								TK47
										TK209
										TK10
										TK10
600-	前期	16段階	春日 1999	16段階						
		I 1期	I 1期							TK43
		I 2期	I 2期							TK209
		I 3期	I 3期							
		II 1期	II 1期							
	後期	II 2期	II 2期	坂井 1984						
		III 1期	III 1期							
		III 2期	III 2期							
		IV 1期	IV 1期	IV期						
		IV 2期	IV 2期	IV期						
700-	前期	IV 3期	IV 3期	IV期						
		V 1期	V 1期	V期						
		V 2期	V 2期	V期						
		VI 1期	VI 1期	VI期						
		VI 2・3期	VI 2・3期	VI期						
	後期	VI 1期	VI 1期	VI期						
		VI 2期	VI 2期	VI期						
		VI 3期	VI 3期	VI期						
		VII期	VII期	VII期						
		VIII期	VIII期	VIII期						
800-	前期	IX 1期	IX 1期	IX期						
		IX 2期	IX 2期	IX期						
		IX 3期	IX 3期	IX期						
		X 1期	X 1期	X期						
		X 2期	X 2期	X期						
	後期	X 3期	X 3期	X期						
		XI 1期	XI 1期	XI期						
		XI 2期	XI 2期	XI期						
		XI 3期	XI 3期	XI期						
		XII期	XII期	XII期						
900-	前期	IX 1期	IX 1期	IX期						
		IX 2期	IX 2期	IX期						
		IX 3期	IX 3期	IX期						
		X 1期	X 1期	X期						
		X 2期	X 2期	X期						
	後期	X 3期	X 3期	X期						
		XI 1期	XI 1期	XI期						
		XI 2期	XI 2期	XI期						
		XI 3期	XI 3期	XI期						
		XII期	XII期	XII期						
1000-	前期	IX 1期	IX 1期	IX期						
		IX 2期	IX 2期	IX期						
		IX 3期	IX 3期	IX期						
		X 1期	X 1期	X期						
		X 2期	X 2期	X期						
	後期	X 3期	X 3期	X期						
		XI 1期	XI 1期	XI期						
		XI 2期	XI 2期	XI期						
		XI 3期	XI 3期	XI期						
		XII期	XII期	XII期						
1150-	前期	IX 1期	IX 1期	IX期						
		IX 2期	IX 2期	IX期						
		IX 3期	IX 3期	IX期						
		X 1期	X 1期	X期						
		X 2期	X 2期	X期						
	後期	X 3期	X 3期	X期						
		XI 1期	XI 1期	XI期						
		XI 2期	XI 2期	XI期						
		XI 3期	XI 3期	XI期						
		XII期	XII期	XII期						
1200-	前期	IX 1期	IX 1期	IX期						
		IX 2期	IX 2期	IX期						
		IX 3期	IX 3期	IX期						
		X 1期	X 1期	X期						
		X 2期	X 2期	X期						
	後期	X 3期	X 3期	X期						
		XI 1期	XI 1期	XI期						
		XI 2期	XI 2期	XI期						
		XI 3期	XI 3期	XI期						
		XII期	XII期	XII期						
1300-	前期	IX 1期	IX 1期	IX期						
		IX 2期	IX 2期	IX期						
		IX 3期	IX 3期	IX期						
		X 1期	X 1期	X期						
		X 2期	X 2期	X期						
	後期	X 3期	X 3期	X期						
		XI 1期	XI 1期	XI期						
		XI 2期	XI 2期	XI期						
		XI 3期	XI 3期	XI期						
		XII期	XII期	XII期						
1400-	前期	IX 1期	IX 1期	IX期						
		IX 2期	IX 2期	IX期						
		IX 3期	IX 3期	IX期						
		X 1期	X 1期	X期						
		X 2期	X 2期	X期						
	後期	X 3期	X 3期	X期						
		XI 1期	XI 1期	XI期						
		XI 2期	XI 2期	XI期						
		XI 3期	XI 3期	XI期						
		XII期	XII期	XII期						
1500-	前期	IX 1期	IX 1期	IX期						
		IX 2期	IX 2期	IX期						
		IX 3期	IX 3期	IX期						
		X 1期	X 1期	X期						
		X 2期	X 2期	X期						
	後期	X 3期	X 3期	X期						
		XI 1期	XI 1期	XI期						
		XI 2期	XI 2期	XI期						
		XI 3期	XI 3期	XI期						
		XII期	XII期	XII期						
1600-	前期	IX 1期	IX 1期	IX期						
		IX 2期	IX 2期	IX期						
		IX 3期	IX 3期	IX期						
		X 1期	X 1期	X期						
		X 2期	X 2期	X期						
	後期	X 3期	X 3期	X期						
		XI 1期	XI 1期	XI期						
		XI 2期	XI 2期	XI期						
		XI 3期	XI 3期	XI期						
		XII期	XII期	XII期						
近世	前期	IX 1期	IX 1期	IX期						
		IX 2期	IX 2期	IX期						
		IX 3期	IX 3期	IX期						
		X 1期	X 1期	X期						
		X 2期	X 2期	X期						
	後期	X 3期	X 3期	X期						
		XI 1期	XI 1期	XI期						
		XI 2期	XI 2期	XI期						
		XI 3期	XI 3期	XI期						
		XII期	XII期	XII期						

第11表 編年対応表

## 2 六反田南遺跡出土土器の編年の位置づけ

本遺跡ではSD196・SD200から多くの土器が出土した。遺構全体を検出していないことや遺物出土状況からみれば良好な一括資料とは言えないが、ある程度のまとまりが認められる。よってこれら土器群の編年の位置づけについて考えてみたい。

### SD196

土器組成は甕が55%と最も多く、ついで小型壺、小型器台、高杯、壺と続きそれぞれ10%前後である。器台・結合器台は出土していない。(第12表)

甕の分類構成をみると、A類(有段縦四縁)0.8%、B類(有段無文)13.3%、C類(く字口縁)80.3%である。C類が圧倒的多数を占めるが、微量ながらA類が存在する。B1類(受口状)は本遺構においてのみ認められる(第13表)。また、C類のなかでは2類(端部面取り)が70%強、1類(端部つまみ上げ)20%弱、3類(端部丸)10%となっている。口縁部を拡張するものの中には、端部に幅広い面を持つものもあり、体部以下の形態は不明だが弥生時代まで遡るような古い要素も見られる。

滝沢氏は、5～6期において信濃川流域では1類が多く見られるのに対し、頸城平野・柏崎平野では2類が主体となる傾向があるといい、それが地域差である可能性を指摘されている[滝沢2005c]。本遺跡例も2類が主体であり、その傾向に一致する。また、B類が定量存在しA類が微量ながらも認められることから、滝沢5～6期の様相を示していると考えられる。

高杯には杯部鉢形の105、東海系の109・110などがある。105内面の種は明瞭であり5期に位置づけられよう。また、台付裝飾壺93や有段口縁の小型鉢98など、5期における特徴的な器種が揃う。これらは赤彩されるものが多い。ただし、104の高杯はその器形と端部を拡張する点から、2期(弥生時代後期)の所産である可能性もある。

本溝では、供献土器がやや目立つ感がある。小型壺・小型器台・鉢の比率は25%、高杯・器台を合わせて34%に達する。類例として、胎内市西川内南遺跡SD1218(2号円形周溝状遺構)[野水<sup>ほか</sup>2005]は6期に位置づけられているが、器種構成比率は甕58%に次いで小型壺・小型鉢23%である。小型土器に高杯・器台を合わせた比率は36%になり、本遺構はほぼ同様の比率を示す。ただし、同じく6期の新潟市正尺C遺跡SZ439[土橋<sup>ほか</sup>2006]では甕56～59%で同じだが、小型土器・高杯類の比率は26%と少ないため、一概に比較はできない。

以上のことから、SD196出土土器は弥生時代まで遡る個体が存在する可能性はあるが、全体として5～6期に位置づけられよう。

### SD200

土器組成は甕が67%、ついで壺13.5%、小型器台10.9%である。蓋は出土していない。(第12表)

甕の分類構成をみると、B類17.3%、C類76.6%でA類は見られない。C類の中では2類64%、1類と3類がそれぞれ18%で1類と3類がほぼ同量となっている(第13表)。SD196とは比率が若干異なるが、B2類は内面の段も比較的明瞭なものが見られることなどから、同じく5～6期に位置づけられよう。

SD196では供献具が高い割合を示したのに対し、SD200では高杯・小型壺が少ないため比率は低めである。台付裝飾壺、結合器台がそれぞれ1点ではあるが出土している。143は有段上部に透孔を持ち、珍



SD196	残存率	%	破片数	%	SD200	残存率	%	破片数	%	SD196・200	残存率	%	破片数	%
壺	345.5	56.70	1233	39.90	壺	250.5	67.20	1560	41.20	壺	596	60.00	2793	40.61
甕	42	6.80	385	12.40	甕	50.5	13.50	188	5.00	甕	92.5	9.30	573	8.33
壺か甕	0		2	0.06	壺か甕	0		0		壺か甕	0		2	0.03
甕	19	3.10	4	0.11	甕	0		0		甕	19	1.90	4	0.06
鉢	9	1.40	26	0.83	鉢	1	0.30	1	0.02	鉢	10	1.00	2	0.40
高杯	55.5	8.90	64	2.10	高杯	16.5	4.40	25	0.70	高杯	72	7.20	89	1.30
高杯か器台	3.5	0.60	6	0.20	高杯か器台	0		8	0.20	高杯か器台	3.5	0.30	14	0.20
小型壺	80	12.90	34	1.10	小型壺	9	2.40	9	0.20	器台	5	0.50	7	0.10
器台	0		4	0.10	器台	5	1.30	3	0.06	結合器台	0		1	0.01
結合器台	0		0		結合器台	0		1	0.02	小型器台	106.5	10.70	84	1.22
不明	0		1311	42.40	不明	0		1929	51.00	不明	0		3240	47.11
計	620.5	100.00	3093	100.00	計	373	100.00	3784	100.00	計	993.5	99.90	6877	99.99

第12表 六反田南遺跡SD196・SD200器種構成

しい器形だが、正尺C遺跡に類似資料があり結合器台の一種と考える。小型器台はSD196 同様の約10%を占め、受部が直線的に立ち上がり口縁端部に面を持つもの(144)や、受部が内湾するもの(145)が見られる。ただし142の高杯脚部は有段で裾部が大きく開く。104のような杯部を持つ器形となり、2期に属する可能性が高い。よってSD200もSD196同様、弥生時代まで遡る個体が存在する可能性はあるが、全体として5～6期に位置づけられよう。

以上、2つの遺構出土土器について検討を行ったが、そのほかの遺構出土土器、包含層出土土器も同様の様相を呈する。このことから、本遺跡出土土器は5～6期を中心として若干前後の時期幅を持つものと考えられる。

本来であれば、糸魚川地域における比較検討をすべきところである。しかしながら当該期の資料を有する遺跡としては一の宮遺跡・笛吹田遺跡のみであり、一の宮遺跡では正式な発掘調査が行われておらず、笛吹田遺跡については未報告のため比較することができない。今後の調査による資料増加を待ち改めて検討したい。

### 3 六反田南遺跡の遺構について

第2節で述べたとおり、13～24列では性格不明の落ち込みが大半を占める状況であり、遺物もほとんど出土しない状況から、構築時期の特定は困難である。26～37列で検出した遺構についても、遺物の出土しない遺構も多くあり、それらについては判断し兼ねるが、出土土器の様相から、おおむね5～6期を中心とした時期のものと考えられる。

遺構の分布は29～33列を中心としている。調査区内の標高をみると33列付近が最も高く、東西に向かって緩やかに傾斜していることから、わずかながらも標高の高いところに遺構が集中していると言える。

32・33列ではSD196・SD200が検出されている。これらの溝は第3章2節Cで述べたように、周溝を有する平地住居である可能性がある。33F10では溝が収束すると推測され、陸橋部分になる可能性

SD196	残存率	%	% (類別)	破片数	%
A (有段凹縁)	3	0.8	0.8	4	0.40
B1 (有段受口)	24	6.8		13	1.00
B2 (有段無文)	23	6.5	13.3	16	1.30
C1 (<字縁み)	51.5	14.6		22	1.80
C2 (<字面)	201.5	57.2		91	7.40
C3 (<字丸)	30	8.5	80.3	48	3.90
信州系	0	0.0		8	0.60
不明	19.5	5.5		1034	83.60
合計	352.8	99.9		1236	100.00

SD200	残存率	%	% (類別)	破片数	%
A (有段凹縁)	0	0.00	0.00	0	0.00
B1 (有段受口)	0	0.00		0	0.00
B2 (有段無文)	44	17.30	17.30	24	1.54
C1 (<字縁み)	34.5	13.60		14	0.89
C2 (<字面)	125.5	49.30		64	4.10
C3 (<字丸)	35	13.70	76.60	14	0.90
信州系	0	0.00		1	0.06
不明	15.5	6.10		1445	92.51
合計	254.5	100.00		1562	100.00

SD196・200	残存率	%	% (類別)	破片数	%
A (有段凹縁)	3	0.50	0.50	4	0.10
B1 (有段無文)	67	11.00		40	1.40
B2 (有段受口)	24	4.00	15.00	13	0.50
C1 (<字縁み)	86	14.20		36	1.30
C2 (<字面)	327	53.90		155	5.50
C3 (<字丸)	65	10.70	78.80	62	2.30
信州系	0	0.00		9	0.30
不明	35	5.70		2479	88.60
合計	607	100.00		2798	99.90

第13表 六反田南遺跡SD196・SD200口縁部形態の比率

も考えられる。柱穴は1か所しか検出していないことから、支柱穴の配置は不明であり、住居部分は調査区外に広がると考えられる。周堤も確認されなかった。

本年度調査区で検出した部分から推定復元すると、周溝内側の径が約13mと推測される。古墳時代前期の類例を見ると、上越市津倉田遺跡〔笹澤ほか1999〕・胎内市西川内南遺跡〔野水ほか2005〕では約9.5m、新潟市正尺C遺跡では約13m、三条市吉津川遺跡〔田村2005〕では約11～14mのものがあ、規模はやや大きい当該期の範囲に入っている。しかし、周溝を有する建物の周辺には掘立柱建物・竪穴住居・土坑などほかの遺構がまとまる傾向が見られると言う〔野水ほか前掲〕。本遺跡では土坑が数基あるのみである。ピットは存在するものの掘立柱建物として復元するには至らなかった。今年度調査区内で見られる限り、周辺の遺構はまばらで建物らしき遺構も存在しないと思われるが、断定はできない。

本年度調査区の南側は今後調査を行う予定である。遺跡は西側に約250m広がると推測されており、本年度調査区は集落の東端にあると考えられる。全容は今後の調査で明らかになろう。改めて検討したい。

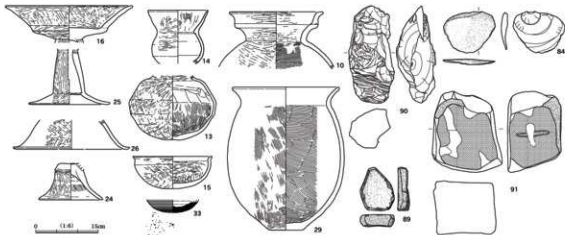
#### 4 前波南遺跡の出土遺物からみた遺跡・遺構の時期について

前波南遺跡は、調査区南西側の自然流路と考えられる溝とその周囲に不整形や楕円形の土坑や杭列などが検出された三角部分、北東側に群在するピット群、東側の旧河道部分に大きく分けることができる。

三角部分では遺物を伴う遺構が少ない。調査区を東西に縦断するSD2から出土して図示したのは土師器高杯の脚部片19、須恵器有台杯の底部片39のみで、そのほかは時期不明の土師器の破片などが少量出土するのみであった。よって流路として流れのあった時期は古墳時代から古代であったと考えられる。

調査区の北東側3～5MNにかけての層厚の薄いⅡ～Ⅲ層からは、古代の土師器、須恵器、中・近世の陶磁器の小破片などが混在して多く出土した。これらを取り上げ、Ⅳ層を確認面として調査した結果、多くのピットが検出された。これらの多くは建物を構成すると思われるが、構造等は明らかにできなかった。ピットからの遺物の出土はほとんどなかったため、時期の特定は困難であるが、規模や覆土から古代～中世頃の所産と考えたい。

調査区東側を南北に走る旧河道からの主な出土遺物は、3Mの上層1層から珠洲、2J～3Mの下層4～6層から川村9～12段階（古墳時代中期）の土師器、1H・1の3～5層から古代Ⅲ・Ⅳ期の須恵器、1・2Hの5層から滝沢2・3期（弥生後期）の土器、全体の3～5層から多くの木製品が出土した。とくに河



第14図 前波南遺跡川村9～12段階の土器と石器

床近くからは滝沢2・3期と川村9～12段階の土器がやや多く出土していることから、滝沢2期から川村12段階頃に最も規模が大きく、古代Ⅲ・Ⅳ期ごろには埋没が進み、中世までにはほぼ埋まり、その後は湿地帯として残ったと考えられる。なお滑石製模造品の未製品(90)、ヒスイ製印き石(88・89)、砂岩製の砥石(91)、貝殻状剥片石器(83～85)は、川村9～12段階の遺物と比較的接近した地点・層序から出土していることから、同時期の可能性を考えたい。

以上のように、前波南遺跡からは縄文時代から中・近世にわたる遺物が出土したが、各時代の集落などの状況は明らかにできなかった。ただ、古墳時代から古代にかけては、川跡に廃棄された豊富な出土遺物から、近接する場所に集落の存在が推測される。

## 5 六反田南遺跡の柱材について

### はじめに

六反田南遺跡では滝沢5～6期の柱根が5点出土し、うち4点を図示した(図版26 270～273)。4点はいずれも割材(芯去材)で、樹種同定を行った結果、いずれも「スギ」であった。以下では、越後の古墳時代前後の主な柱材を概観し、その位置づけを検討したい。ただし、実物の実見はほとんど行っており、柱材に関する記述の多くは各報告書に従い、必要に応じ実測図から読み取れる情報を加えている。

### 柱材の着目点

樹種や木取り、使用された建物の種類に注意したい。樹種については、広葉樹かスギなどの針葉樹かが重要と考える。樹種は専門機関に依頼し、「正目・板目・木口三方向の切片を実態顕微鏡で観察し、現生標本などと比較」し同定したものが大半と考えるが、同定方法が明示されていない報告書もあるため、これ以外の方法により樹種同定を行ったものが含まれている可能性もある。

木取りについては芯持材か芯去材かに留意する。芯持材よりも芯去材が、強度は優れているものと考えている。建物の種類については、近年調査例が増加しており、六反田南遺跡でも検出された周溝を持つ平地式建物にどのような柱材が用いられているか注意したい。

また、柱材底面の形状、柱材の断面形なども注意すべき点である。底面の形状は概ね平坦なものや尖っているものに大別でき、尖っているものは伐採時の切斯痕が残っている場合と意図的に尖らせたものが存在すると思われる。これについては、側面や底面の加工痕の切り合い関係の観察が必要と考えるが、十分検討できていない。断面形も重要な要素と考えるが、これについても十分検討できなかった。これらについては、今後の課題としたい。

### 古墳時代の柱材

越後において古墳時代の柱材が出土した遺跡としては、本遺跡のほかに、村上市(旧岩船郡荒川町)道端遺跡、胎内市(旧北蒲原郡中乗町)六斗時遺跡、同市西川内北遺跡、同市土居下遺跡、新潟市(旧豊栄市)正尺C遺跡、新潟市東区遺跡、新潟市(旧新津市)舟戸遺跡、加茂市丸湯遺跡、南魚沼市(旧南魚沼郡六日町)余川中道遺跡、上越市下剗遺跡、上越市一之口遺跡などがある。以下、遺跡毎に出土した柱材の概要を記述する(第15～17図)。

### 村上市道端遺跡 [前川ほか2005・2006]

胎内川右岸の扇状地末端付近に位置する。縄文時代から古代まで断続的に営まれた遺跡で、古墳時代は前期[前川ほか2005]と後期[前川ほか2006]の柱材が検出されている。

古墳時代前期は滝沢6・7期を中心とする時期である。周溝を持つ平地式建物・棟持柱掘立柱建物・掘立柱建物・杭列などが検出され、柱材が出土している。樹種は「コナラ属」・「トネリコ属」・「ヤマグワ」・「エゴノキ属」・「ハンノキ属」などが確認できる。木取りは芯持材が主体を占め、芯去材は少ない。また、底面は平坦なものが多い。トネリコ属を用いた断面円形の芯去材(206)がみられたSB4は1×2間の小型の掘立柱建物である。杭列にはいずれも芯持(丸)材が使用され、樹種同定を行ったものすべてが「ハンノキ属」であった。

古墳時代後期は川村12～15段階のものである。1×2間の掘立柱建物が1棟検出されている。柱材は5点が図示されており、芯持材が3点、芯去材が2点である。底面は平坦なものが多い。このうち芯持材1点の樹種同定を行っており、「ヤマグワ」とされている。

#### 胎内市(旧北蒲原郡中条町)六斗鉢遺跡 [岡安ほか2004]

胎内川左岸の扇状地末端付近に位置する。川村9～11段階を中心とする時期の遺跡である。亀甲形に配置された「杭列」が2単位検出されており、報告書では「草壁の間仕切り程度の、簡単な空間」の可能性が指摘されている。棟持柱を持つ簡易な建物が存在したと思われる。柱材は16点図示されている。芯持材と芯去材が確認でき、芯持材が主体を占める。底面は平坦なものは少なく伐採時の切断痕を残しているものが多い。図示したものを全点樹種同定が行われており、いずれも「ヤナギ属」である。

#### 胎内市(旧北蒲原郡中条町)西川内北遺跡 [野水ほか2005]

胎内川左岸の扇状地末端付近に位置し、間層を挟んで2枚の遺物包含層が確認された。上層は古代Ⅳ期を中心とする時期、下層は滝沢6～11期を中心とする時期である。下層からは掘立柱建物・棟持柱建物・周溝を持つ平地式建物などが検出されている。柱材は20点図示されており、芯持材と芯去材が確認でき、芯持材がやや多い。樹種は「トネリコ属」・「コナラ属」・「ヤナギ属」・「クリ」・「スギ」が確認でき、「トネリコ属」が多い。「スギ」とされた3例はいずれも2号円形周溝状遺構のもので、断面が円形もしくは多角形状の芯去材で底面は平坦である。2号円形周溝状遺構は、外径15.6m、内径は南北11.2m、東西9.1mの周溝を持ち、主柱穴が4本あるいは5本の平地式建物で、時期は滝沢6期と考えられる。なお、遺跡からは小型鏡が出土しており、遺跡に近接して城ノ山古墳(滝沢8期前後)が存在する。

#### 胎内市(旧北蒲原郡中条町)土居下遺跡 [細井ほか2006]

胎内川左岸の扇状地末端付近に位置し、西川内北遺跡に近接する。滝沢5期～川村6・7段階を中心とする時期の遺跡であり、水田跡・河道・堰やピットなどが検出された。柱材は1点図示され、芯持材で底面は伐採時の痕跡を残し凸状となる。樹種同定が行われておりコナラ属という同定結果である。

#### 新潟市北区(旧豊栄市)正尺C遺跡 [土橋ほか2006]

阿賀野川右岸の砂丘上に位置し、滝沢6期を中心とする遺跡である。掘立柱建物・周溝を持つ平地式建物が検出されている。柱材は2点図示されており、ともに芯持材で樹種は「クリ」である。528はSB1732の柱材であり、底面はほぼ平坦である。

#### 新潟市南区東園遺跡 [朝岡2003]

信濃川右岸の亀田砂丘上に位置する。滝沢5～9期を中心とする遺跡であり、竪穴建物などが検出された。柱材は11点図示されている。図示されたものはいずれも芯持材である。樹種は「クリ」である。S11は主柱穴が一辺約7mになる隅丸方形の竪穴建物であり、柱材は直径16～18cm前後で、底面は平坦である。樹種はいずれも「クリ」である。時期は滝沢9期前後と考えられる。

SB2は、詳細な時期は不明だが、楕円形に柱穴が巡る平地式の建物もしくは掘方か削平された竪穴建

物と考えられ、柱材は底面が平坦なものと尖るものがある。直径も6～8cmと小型である。樹種同定は行われていないが、報告書では「クリ」の可能性が高いとされている。

#### 新潟市秋葉区(旧新津市)舟ノ遺跡 [川上1995]

新津丘陵の裾付近の沖積平野微高地上に位置する遺跡で、川村9～11段階を中心とする時期の遺跡であり、竪穴建物や柱穴列などが検出されている。12点の柱材が図示されており、樹種には「クリ」・「ケヤキ」・「ナラ」・「チャンチン」が確認でき、「クリ」が多い。SI2は一辺約6.5mになると考えられる竪穴建物で、主柱穴は4本である。主柱穴の建て替えが確認でき、7本の柱材と1本の杭が確認できた。柱材はいずれも径約15cmの丸材で、底面は平坦である。樹種は「クリ」・「ケヤキ」・「ナラ」が確認できる。

#### 新潟市秋葉区(旧新津市)沖ノ羽遺跡 [星野ほか1996]

信濃川の支流能代川右岸の沖積平野微高地上に位置する。古墳時代～中世にかけて断続的に営まれた遺跡である。明確な建物跡は確認されていないが、川村8段階と考えられる柱穴が2基確認され、柱穴からは柱材が出土した。2点とも径約30cmの大型の芯持材である。樹種同定は行われていないが、「スギ」の可能性が指摘されている。

#### 加茂市丸湯遺跡 [伊藤ほか2000]

信濃川右岸の沖積平野微高地上に位置する。滝沢8～川村6・7段階を中心とする遺跡であり、柱穴列などが検出されている。柱穴列は柱穴底面に「枕木」・「腕木」を敷いた上に柱材を据えている。柱材は4点図示されており、芯持材2と芯去材2である。樹種は「トネリコ属」・「ヤマウルシ」・「ケンボナシ属」・「オニグルミ」である。

#### 南魚沼市(旧南魚沼郡六日町)余川中道遺跡 [飯坂ほか2005]

越後の内陸部、信濃川の支流、魚野川左岸の扇状地に位置する。川村12～14段階を中心とする時期の遺跡である。柱材は4点が図示されており、芯持材3、芯去材1である。樹種は、「クリ」と「ヤマグワ」がある。芯持材3点はいずれも「クリ」、芯去材1点は「ヤマグワ」である。

#### 上越市下割遺跡 [山崎ほか2004]

関川右岸の沖積平野微高地上に位置する。古墳時代～中世にかけて断続的に営まれた遺跡である。古墳時代の柱材は1点が図示されている。木取りは芯持ち材、樹種は「オニグルミ」である。詳細な時期は不明で滝沢6期から川村8段階の時期幅が考えられる。

#### 上越市一之口遺跡 [鈴木ほか1994]

関川左岸の沖積平野微高地上に位置する。古墳時代～中世にかけて断続的に営まれた遺跡である。川村13段階～古代1期の柱材が7点図示されている。川村13～15段階の竪穴建物SI113の柱材は3点図示されており芯持材1、芯去材2、古代1期の竪穴建物SI104の柱材は4点図示されており芯去材4である。樹種は7点とも「クリ」である。1183・1182・775～778は幅が1m前後を測る大型の柱材である。

#### 糸魚川市六反田南遺跡(本書)

早川と海川に挟まれた沖積平野微高地上に位置する。縄文時代から中世まで断続的に営まれた遺跡であるが、遺跡の中心は滝沢編年5・6期頃と思われる。柱材は4点を図示した。4点はいずれも芯去材で、樹種同定は「スギ」であった。断面形は円形もしくは楕円形が2例(272・273)、略方形が1例(271)、扇形が1例(270)である。底面の形状は、270は底面が尖るが、ほかは概ね平坦である。このうち、273は直径約13mになると考えられる周溝を持つ平地式建物の柱材であり、径24.0cmを測る。

以上のように、越後における古墳時代の柱材は「クリ」・「オニグルミ」・「トネリコ属」などの広葉樹が主体を占め「スギ」は少ない。六反田遺跡のように柱材が「スギ」のみで占められる様相は、越後の中では特異なものといえる。

#### 古代・縄文時代の柱材について

本来ならば古墳時代と前後する弥生時代と古代の柱材の検討を行いたかったが、管見では越後においては弥生時代の柱材の検出例はほとんど無い。以下では、縄文時代と古代の柱材を検討する。

#### 縄文時代の柱材

縄文時代の柱材が一定量出土した遺跡として新発田市（旧北蒲原郡加治川村）青田遺跡〔荒川ほか2004〕、新潟市（旧西蒲原郡巻町）御井戸遺跡〔前山ほか2003・2004・前山2005〕、糸魚川市（旧西頸城郡青海町）寺地遺跡〔寺村ほか1987〕などがある。これらはいずれも縄文時代晩期を中心とする遺跡である。御井戸遺跡では「クリ」、青田遺跡では「クリ」・「コナラ節」の芯持材が大半を占めるが、寺地遺跡では「スギ」が大半を占め芯持材のほかに芯去材あるいは割材が相当量見られる（第19図）。金沢市新保チカモリ遺跡では「クリ」の芯去材が柱材として多く用いられている。寺地遺跡の「スギ」の多用は北陸の中においても特異な存在である〔小島1987〕。

なお、寺地遺跡では縄文時代晩期のスギを中心とする埋没林が検出されており〔佐藤・相羽ほか2002〕、縄文時代晩期以降周辺にスギが豊富に存在する環境であった可能性がある。

#### 古代の柱材

越後における古代柱材の検出例は相当量存在すると考えられるが、以下では古墳時代との関連を考えるうえで、古代Ⅱ～Ⅳ期の資料を中心に検討する。阿賀北地域では村上市（旧岩船郡荒川町）高柳B遺跡（Ⅳ期）〔吉井1996〕、阿賀野川以南の越後平野では燕市三角田遺跡下層（Ⅱ～Ⅲ1期）〔松島2001〕、頸城地域では上越市三角田遺跡〔澤田ほか2005〕を取り上げる（第18・19図）。

村上市高柳B遺跡では2棟の掘立柱建物と検出されそれぞれ2点ずつ樹種同定が行われ、4点ともクリであった。1号建物は2点とも底面が平坦な芯去丸材、2号建物は杭状に尖る芯去丸材である。

燕市三角田遺跡下層では5棟の掘立柱建物・平地式建物が検出され多数の柱材が検出されている。樹種には「キハダ」・「トネリコ属」・「ヤマウルシ」・「オニグルミ」・「ヤマグワ」などが確認でき、「トネリコ属」が多い。木取りは芯持材が多いが、芯去材も定量見られる。

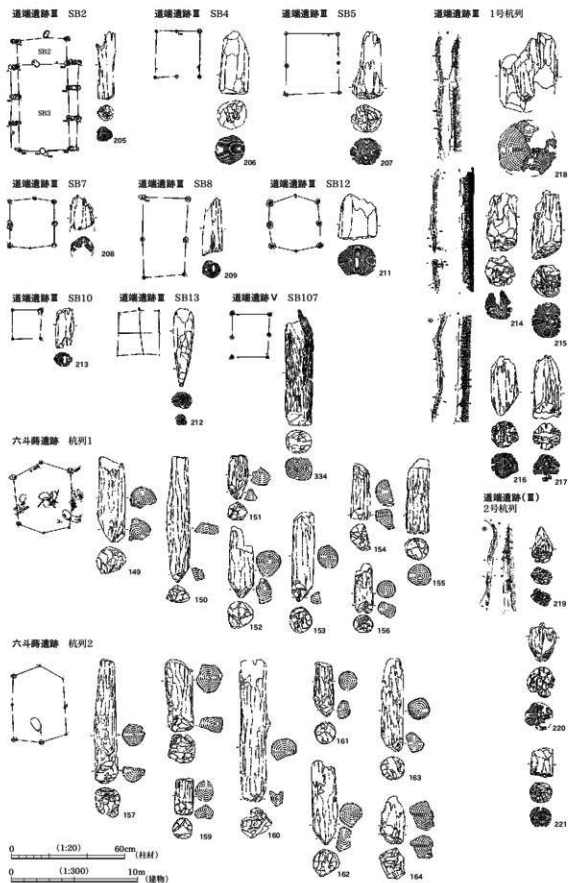
SB5は「キハダ」・「ヤマウルシ」・「トネリコ属」など複数の樹種が確認でき、底面も平坦なものが多い。一方、SB7は全て「トネリコ属」であり底面に伐採時の痕跡を残すものが多い。またSB9も樹種同定が行われた2点はいずれも「オニグルミ」である。底面が尖るもの多くは断面の形状から伐採時の切断痕が残っているものと考えられる（SB6 42～44・46・48・56など）。

上越市三角田遺跡下層では4棟の掘立柱建物・平地式建物が検出された。柱材の樹種は「オニグルミ」・「カツラ」・「トネリコ属」・「ヤマグワ」などが使用されており、「オニグルミ」が多い。木取りは芯持材と芯去材が拮抗する。底面の形状は底面が尖るものが大半で、これらの多くは伐採時の切断痕を残したものと考えられる。

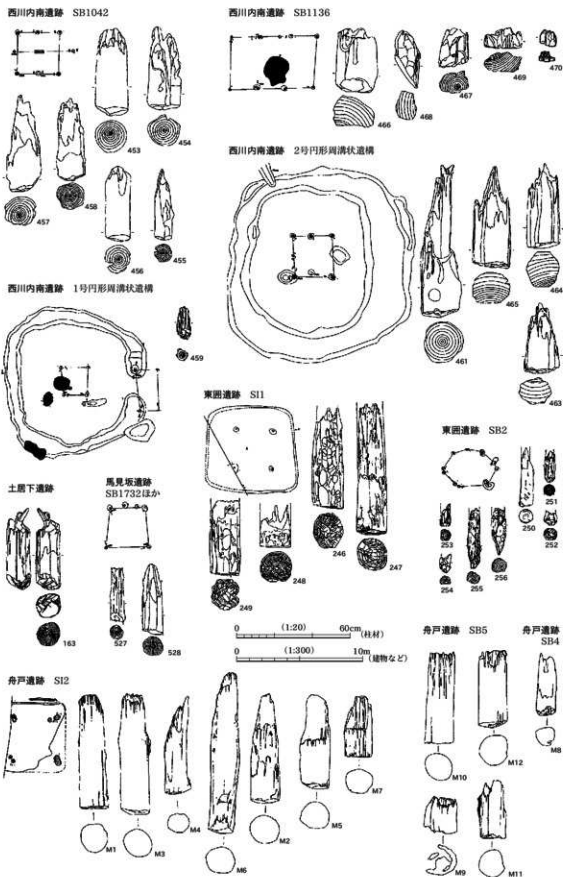
これら3遺跡には柱材としてのスギの使用は確認できず、古代Ⅱ～Ⅲ・Ⅳ期においても広葉樹が柱材の主体を占めていた可能性は高いものと考えている。

#### 小 結

以上、越後における古墳時代の柱材について概観した。上記の検討から指摘できる項目は、それぞれの



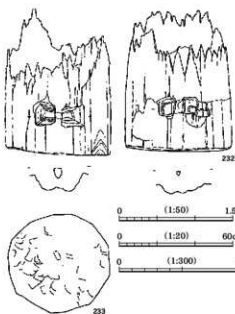
第15図 古墳時代の柱材1 (前田a-2005・2006、岡安a-2005から作成)



第16図 古墳時代の柱材2 (野水aa=2005, 藤井aa=2006, 土橋aa=2006, 朝岡aa=2003, 川上aa=1995から作成)



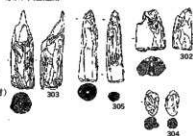
沖ノ羽遺跡 B地区



丸岡遺跡 1号櫓列



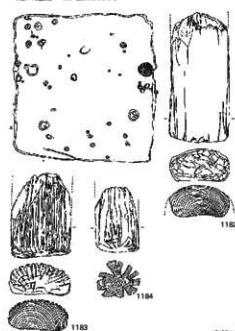
余川中道遺跡



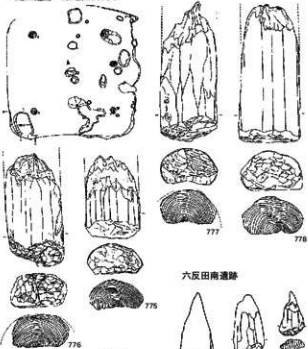
下割遺跡Ⅱ



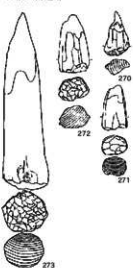
一之口遺跡 東地区SI113



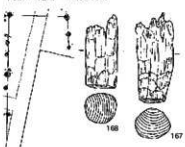
一之口遺跡 東地区KS1104



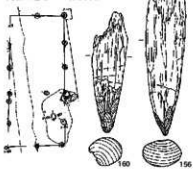
六反田南遺跡



高柳PB遺跡 1号建物跡

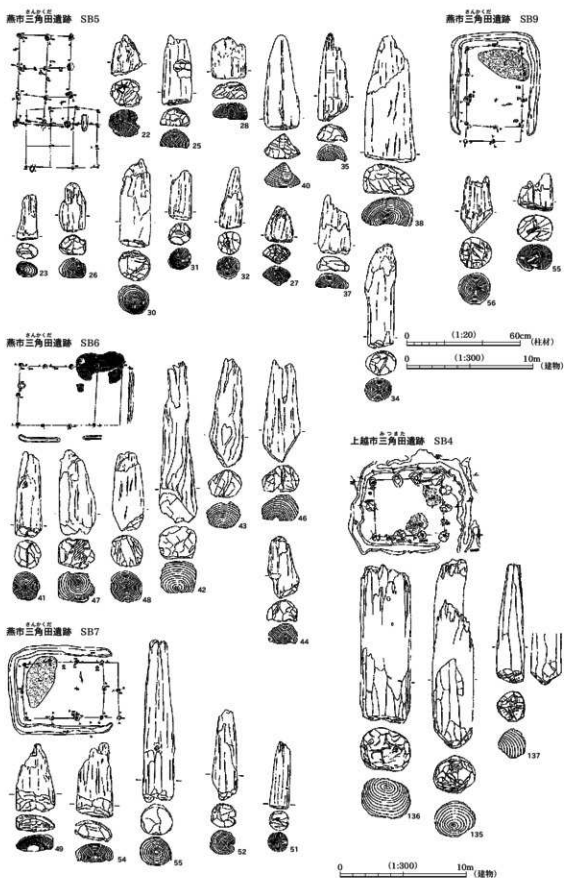


高柳B遺跡 2号建物跡



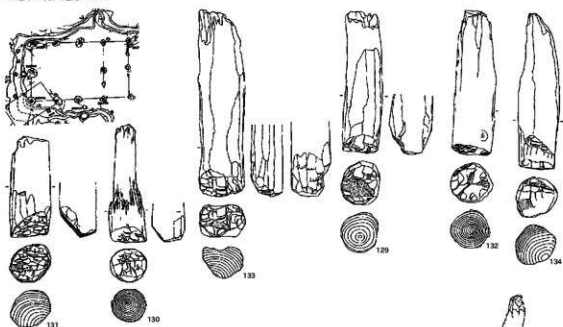
第17図 古墳時代の柱材3・古代の柱材1

(星野<sup>1996</sup>、伊藤<sup>2000</sup>、飯取<sup>2005</sup>、山崎<sup>2004</sup>、鈴木<sup>1994</sup>、吉川<sup>1996</sup>、本書から作成)

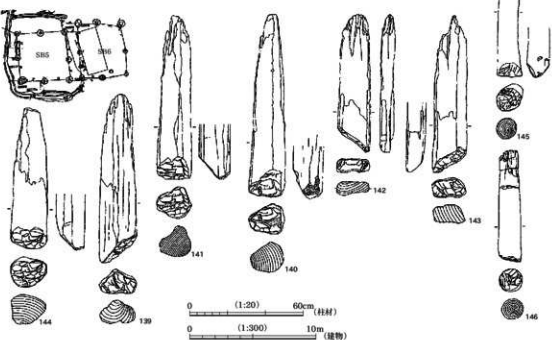


第18図 古代の柱材2 (松島2001, 澤田as>2006から作成)

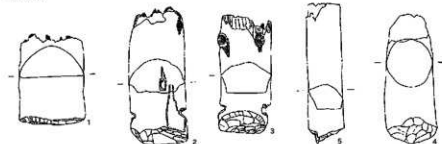
上総市三角田遺跡 SB3



上総市三角田遺跡 SB5



寺地遺跡



第19図 古代の柱材3・縄文時代の柱材 (澤田=2006, 寺村=1987から作成)

## 5 六反田南遺跡の柱材について

No.	本町村(旧本町村)	遺跡名など	建物等	樹種	木取り	横断面	底面	時期	文献	備考
205	村上市(岩船塚瓦川町)	遺跡遺跡Ⅲ	SB2	コナラ	芯材材	円	平坦	滝沢6・7期	前川aa-2005	
206	村上市(岩船塚瓦川町)	遺跡遺跡Ⅲ	SB4	トネリコ属	芯材材	円	平坦	滝沢6・7期	前川aa-2005	
207	村上市(岩船塚瓦川町)	遺跡遺跡Ⅲ	SB5	コナラ	芯材材	円	凸状	滝沢6・7期	前川aa-2005	
208	村上市(岩船塚瓦川町)	遺跡遺跡Ⅲ	SB7	コナラ	芯材材	円	一	滝沢6・7期	前川aa-2005	
209	村上市(岩船塚瓦川町)	遺跡遺跡Ⅲ	SB8	コナラ	芯材材	円	一	滝沢6・7期	前川aa-2005	
211	村上市(岩船塚瓦川町)	遺跡遺跡Ⅲ	SB12	ヤマブ	芯材材	円	平坦	滝沢6・7期	前川aa-2005	
212	村上市(岩船塚瓦川町)	遺跡遺跡Ⅲ	SB13	エゾノミズ	芯材材	円	軌状	滝沢6・7期	前川aa-2005	
213	村上市(岩船塚瓦川町)	遺跡遺跡Ⅲ	SB10	トネリコ属	芯材材	円	平坦	滝沢6・7期	前川aa-2005	
214	村上市(岩船塚瓦川町)	遺跡遺跡Ⅲ	1号杭列	ハンノキ	芯材材	円	凸状	滝沢6・7期	前川aa-2005	
215	村上市(岩船塚瓦川町)	遺跡遺跡Ⅲ	1号杭列	ハンノキ	芯材材	円	凸状	滝沢6・7期	前川aa-2005	
216	村上市(岩船塚瓦川町)	遺跡遺跡Ⅲ	1号杭列	ハンノキ	芯材材	円	凸状	滝沢6・7期	前川aa-2005	
217	村上市(岩船塚瓦川町)	遺跡遺跡Ⅲ	1号杭列	ハンノキ	芯材材	円	凸状	滝沢6・7期	前川aa-2005	
218	村上市(岩船塚瓦川町)	遺跡遺跡Ⅲ	1号杭列	ハンノキ	芯材材	円	凸状	滝沢6・7期	前川aa-2005	
219	村上市(岩船塚瓦川町)	遺跡遺跡Ⅲ	2号杭列	ハンノキ	芯材材	円	凸状	滝沢6・7期	前川aa-2005	
220	村上市(岩船塚瓦川町)	遺跡遺跡Ⅲ	2号杭列	ハンノキ	芯材材	円	凸状	滝沢6・7期	前川aa-2005	
221	村上市(岩船塚瓦川町)	遺跡遺跡Ⅲ	2号杭列	ハンノキ	芯材材	円	凸状	滝沢6・7期	前川aa-2005	
324	村上市(岩船塚瓦川町)	遺跡遺跡Ⅴ	SB107	ヤマブ	芯材材	円	平坦	川村13・15段階	前川aa-2006	
149	駒内市(北流原部中条町)	六ヶ岳遺跡	杭列1	ヤナギ属	芯材材	円	凸状	川村9～11段階	関安aa-2006	
150	駒内市(北流原部中条町)	六ヶ岳遺跡	杭列1	ヤナギ属	芯材材	円	凸状	川村9～11段階	関安aa-2006	
151	駒内市(北流原部中条町)	六ヶ岳遺跡	杭列1	ヤナギ属	芯材材	多角	凸状	川村9～11段階	関安aa-2006	
152	駒内市(北流原部中条町)	六ヶ岳遺跡	杭列1	ヤナギ属	芯材材	円	凸状	川村9～11段階	関安aa-2006	
153	駒内市(北流原部中条町)	六ヶ岳遺跡	杭列1	ヤナギ属	芯材材	円	凸状	川村9～11段階	関安aa-2006	
154	駒内市(北流原部中条町)	六ヶ岳遺跡	杭列1	ヤナギ属	芯材材	円	凸状	川村9～11段階	関安aa-2006	
156	駒内市(北流原部中条町)	六ヶ岳遺跡	杭列1	ヤナギ属	芯材材	円	凸状	川村9～11段階	関安aa-2006	
155	駒内市(北流原部中条町)	六ヶ岳遺跡	杭列1	ヤナギ属	芯材材	円	平坦	川村9～11段階	関安aa-2006	
157	駒内市(北流原部中条町)	六ヶ岳遺跡	杭列2	ヤナギ属	芯材材	円	凸状	川村9～11段階	関安aa-2006	
158	駒内市(北流原部中条町)	六ヶ岳遺跡	杭列2	ヤナギ属	芯材材	円	凸状	川村9～11段階	関安aa-2006	
159	駒内市(北流原部中条町)	六ヶ岳遺跡	杭列2	ヤナギ属	芯材材	円	凸状	川村9～11段階	関安aa-2006	
160	駒内市(北流原部中条町)	六ヶ岳遺跡	杭列2	ヤナギ属	芯材材	円	平坦	川村9～11段階	関安aa-2006	
161	駒内市(北流原部中条町)	六ヶ岳遺跡	杭列2	ヤナギ属	芯材材	円	凸状	川村9～11段階	関安aa-2006	
162	駒内市(北流原部中条町)	六ヶ岳遺跡	杭列2	ヤナギ属	芯材材	円	凸状	川村9～11段階	関安aa-2006	
163	駒内市(北流原部中条町)	六ヶ岳遺跡	杭列2	ヤナギ属	芯材材	円	凸状	川村9～11段階	関安aa-2006	
164	駒内市(北流原部中条町)	六ヶ岳遺跡	杭列2	ヤナギ属	芯材材	多角	凸状	川村9～11段階	関安aa-2006	
457	駒内市(北流原部中条町)	西内南遺跡	SB1042	ヤマブ	芯材材	円	凸状	滝沢6～11期	野水aa-2005	
458	駒内市(北流原部中条町)	西内南遺跡	SB1042	クリ	芯材材	円	平坦	滝沢6～11期	野水aa-2005	
453	駒内市(北流原部中条町)	西内南遺跡	SB1042	トネリコ属	芯材材	円	平坦	滝沢6～11期	野水aa-2005	
456	駒内市(北流原部中条町)	西内南遺跡	SB1042	トネリコ属	芯材材	円	平坦	滝沢6～11期	野水aa-2005	
454	駒内市(北流原部中条町)	西内南遺跡	SB1042	コナラ	芯材材	円	平坦	滝沢6～11期	野水aa-2005	
455	駒内市(北流原部中条町)	西内南遺跡	SB1042	コナラ	芯材材	円	平坦	滝沢6～11期	野水aa-2005	
466	駒内市(北流原部中条町)	西内南遺跡	SB1136	トネリコ属	芯材材	多角	凸状	滝沢6～11期	野水aa-2005	
468	駒内市(北流原部中条町)	西内南遺跡	SB1136	トネリコ属	芯材材	多角	凸状	滝沢6～11期	野水aa-2005	
467	駒内市(北流原部中条町)	西内南遺跡	SB1136	トネリコ属	芯材材	多角	平坦	滝沢6～11期	野水aa-2005	
469	駒内市(北流原部中条町)	西内南遺跡	SB1136	トネリコ属	芯材材	多角	平坦	滝沢6～11期	野水aa-2005	
470	駒内市(北流原部中条町)	西内南遺跡	SB1136	トネリコ属	芯材材	多角	平坦	滝沢6～11期	野水aa-2005	
459	駒内市(北流原部中条町)	西内南遺跡	2号円形溝遺構	ヤナギ属	芯材材	円	凸状	滝沢9・10期	野水aa-2005	
461	駒内市(北流原部中条町)	西内南遺跡	2号円形溝遺構	クリ	芯材材	円	平坦	滝沢9期	野水aa-2005	
465	駒内市(北流原部中条町)	西内南遺跡	2号円形溝遺構	スギ	芯材材	多角	平坦	滝沢9期	野水aa-2005	
464	駒内市(北流原部中条町)	西内南遺跡	2号円形溝遺構	スギ	芯材材	多角	平坦	滝沢9期	野水aa-2005	
463	駒内市(北流原部中条町)	西内南遺跡	2号円形溝遺構	スギ	芯材材	多角	平坦	滝沢9期	野水aa-2005	
163	駒内市(北流原部中条町)	土屋下遺跡	一	コナラ	芯材材	円	凸状	滝沢5～11期	観いaa-2006	
527	新潟市(豊栄市)	正尺C遺跡	一	クリ	芯材材	円	凸状	滝沢6期	土橋aa-2006	
528	新潟市(豊栄市)	正尺C遺跡	SB1732	クリ	芯材材	円	平坦	滝沢9期前後	土橋aa-2006	
249	新潟市(新潟市)	東洞遺跡	SI1	クリ	芯材材	円	平坦	滝沢9期前後	朝岡aa-2003	
248	新潟市(新潟市)	東洞遺跡	SI1	クリ	芯材材	円	平坦	滝沢9期前後	朝岡aa-2003	
246	新潟市(新潟市)	東洞遺跡	SI1	クリ	芯材材	円	平坦	滝沢9期前後	朝岡aa-2003	
247	新潟市(新潟市)	東洞遺跡	SI1	クリ	芯材材	円	平坦	滝沢9期前後	朝岡aa-2003	
253	新潟市(新潟市)	東洞遺跡	SB2	芯材材	円	凸状	滝沢6～10期	朝岡aa-2003	クリか	
254	新潟市(新潟市)	東洞遺跡	SB2	芯材材	円	凸状	滝沢6～10期	朝岡aa-2003	クリか	
255	新潟市(新潟市)	東洞遺跡	SB2	芯材材	円	凸状	滝沢6～10期	朝岡aa-2003	クリか	
256	新潟市(新潟市)	東洞遺跡	SB2	クリ	芯材材	円	軌状	滝沢6～10期	朝岡aa-2003	
250	新潟市(新潟市)	東洞遺跡	SB2	芯材材	円	平坦	滝沢6～10期	朝岡aa-2003	クリか	
251	新潟市(新潟市)	東洞遺跡	SB2	芯材材	円	凸状	滝沢6～10期	朝岡aa-2003	クリか	
252	新潟市(新潟市)	東洞遺跡	SB2	芯材材	円	凸状	滝沢6～10期	朝岡aa-2003	クリか	
M1	新潟市(新潟市)	舟戸遺跡	SI2	クリ	円	円	平坦	川村9～11段階	川上1995	
M3	新潟市(新潟市)	舟戸遺跡	SI2	クリ	円	円	平坦	川村9～11段階	川上1995	
M4	新潟市(新潟市)	舟戸遺跡	SI2	クリ	円	円	平坦	川村9～11段階	川上1995	
M6	新潟市(新潟市)	舟戸遺跡	SI2	クリ	円	円	平坦	川村9～11段階	川上1995	
M2	新潟市(新潟市)	舟戸遺跡	SI2	ヤナギ	円	円	平坦	川村9～11段階	川上1995	
M5	新潟市(新潟市)	舟戸遺跡	SI2	ヤナギ	円	円	平坦	川村9～11段階	川上1995	
M7	新潟市(新潟市)	舟戸遺跡	SI2	ヤナギ	円	円	平坦	川村9～11段階	川上1995	
M10	新潟市(新潟市)	舟戸遺跡	SB5	クリ	円	円	平坦	川村9～11段階	川上1995	
M9	新潟市(新潟市)	舟戸遺跡	SB5	ヤナギ	円	円	平坦	川村9～11段階	川上1995	
M12	新潟市(新潟市)	舟戸遺跡	SB5	クリ	円	円	平坦	川村9～11段階	川上1995	
M11	新潟市(新潟市)	舟戸遺跡	SB5	クリ	円	円	平坦	川村9～11段階	川上1995	

第14表 柱材観察表(1)

No.	市町村(旧市町村)	遺跡名など	建物等	樹種	木取り	横断面	底面	時期	文献	備考
M8	新都市(新津市)	舟ノ瀬跡	SB4	クリ		円	凸伏	川村9～11段階	川上1995	
233	新都市(新津市)	沖ノ羽遺跡B地区	—	—	芯持材	円	平	川村8段階	星野aa-	スギか
232	新都市(新津市)	沖ノ羽遺跡B地区	—	—	芯持材	円	平	川村8段階	星野aa-	スギか
4	加茂市	丸山遺跡	1号櫓列	トネリコ属	芯持材	多角	凹伏	滝沢9・10期	伊藤aa-2000	
2	加茂市	丸山遺跡	1号櫓列	ヤマウルシ	芯持材	円	凹伏	滝沢9・10期	伊藤aa-2000	
1	加茂市	丸山遺跡	1号櫓列	オニグルミ	芯持材	四角	平	滝沢9・10期	伊藤aa-2000	
3	加茂市	丸山遺跡	1号櫓列	ケンボクシ属	芯持材	四角	平	滝沢9・10期	伊藤aa-2000	
303	南魚沼市(南魚沼郡六日町)	余田中道遺跡1	—	クリ	芯持材	円	平	川村12～15段階	飯坂2005	
305	南魚沼市(南魚沼郡六日町)	余田中道遺跡1	—	クリ	芯持材	円	平	川村12～15段階	飯坂2005	
302	南魚沼市(南魚沼郡六日町)	余田中道遺跡1	—	クリ	芯持材	多角	平	川村12～15段階	飯坂2005	
304	南魚沼市(南魚沼郡六日町)	余田中道遺跡1	—	ヤマグワ	芯持材	四角	凸伏	川村12～15段階	飯坂2005	
248	上越市(上越市)	下道遺跡II	—	オニグルミ	芯持材	平円	枕伏	滝沢6～川村8段階	山崎aa-2004	
1183	上越市(上越市)	一之口遺跡東地区	SI113	クリ	芯持材	平円	平	川村13～15段階	鈴木aa-1994	
1184	上越市(上越市)	一之口遺跡東地区	SI113	クリ	芯持材	円	平	川村13～15段階	鈴木aa-1994	
1182	上越市(上越市)	一之口遺跡東地区	SI113	クリ	芯持材	平円	平	川村13～15段階	鈴木aa-1994	
776	上越市(上越市)	一之口遺跡東地区	SI104	クリ	芯持材	円	凸伏	古代I期	鈴木aa-1994	
775	上越市(上越市)	一之口遺跡東地区	SI104	クリ	芯持材	平円	凸伏	古代I期	鈴木aa-1994	
777	上越市(上越市)	一之口遺跡東地区	SI104	クリ	芯持材	平円	凸伏	古代I期	鈴木aa-1994	
778	上越市(上越市)	一之口遺跡東地区	SI104	クリ	芯持材	平円	平	古代I期	鈴木aa-1994	
273	南魚沼市(南魚沼市)	六反田南遺跡	円形溝状遺跡	スギ	芯持材	円	平	滝沢9期	本書	
272	南魚沼市(南魚沼市)	六反田南遺跡	—	スギ	芯持材	多角	平	滝沢5・6期	本書	
270	南魚沼市(南魚沼市)	六反田南遺跡	—	スギ	芯持材	多角	凸伏	滝沢5・6期	本書	
271	南魚沼市(南魚沼市)	六反田南遺跡	—	スギ	芯持材	四角	平	滝沢5・6期	本書	
168	村上市(岩船郡荒川町)	高瀬B遺跡	1号建物跡	クリ	芯持材	円	平	古代IV期	古井1996	
167	村上市(岩船郡荒川町)	高瀬B遺跡	1号建物跡	クリ	芯持材	多角	平	古代IV期	古井1996	
160	村上市(岩船郡荒川町)	高瀬B遺跡	2号建物跡	クリ	芯持材	円	枕伏	古代IV期	古井1996	
165	村上市(岩船郡荒川町)	高瀬B遺跡	2号建物跡	クリ	芯持材	円	枕伏	古代IV期	古井1996	
22	燕市(燕市)	三角田遺跡	SB5	キハダ	芯持材	円	平	古代II～III期	松島2001	
25	燕市(燕市)	三角田遺跡	SB5	キハダ	芯持材	平円	平	古代II～III期	松島2001	
28	燕市(燕市)	三角田遺跡	SB5	キハダ	芯持材	平円	平	古代II～III期	松島2001	
40	燕市(燕市)	三角田遺跡	SB5	キハダ	芯持材	平	平	古代II～III期	松島2001	
35	燕市(燕市)	三角田遺跡	SB5	ヤマウルシ	芯持材	平円	凸伏	古代II～III期	松島2001	
23	燕市(燕市)	三角田遺跡	SB5	トネリコ属	芯持材	円	平	古代II～III期	松島2001	
26	燕市(燕市)	三角田遺跡	SB5	トネリコ属	芯持材	多角	平	古代II～III期	松島2001	
30	燕市(燕市)	三角田遺跡	SB5	トネリコ属	芯持材	円	平	古代II～III期	松島2001	
31	燕市(燕市)	三角田遺跡	SB5	トネリコ属	芯持材	円	平	古代II～III期	松島2001	
32	燕市(燕市)	三角田遺跡	SB5	トネリコ属	芯持材	円	平	古代II～III期	松島2001	
27	燕市(燕市)	三角田遺跡	SB5	トネリコ属	芯持材	平	平	古代II～III期	松島2001	
36	燕市(燕市)	三角田遺跡	SB5	トネリコ属	芯持材	平円	凸伏	古代II～III期	松島2001	
37	燕市(燕市)	三角田遺跡	SB5	トネリコ属	芯持材	平円	平	古代II～III期	松島2001	
38	燕市(燕市)	三角田遺跡	SB5	トネリコ属	芯持材	平円	平	古代II～III期	松島2001	
34	燕市(燕市)	三角田遺跡	SB5	トネリコ属	芯持材	円	平	古代II～III期	松島2001	
56	燕市(燕市)	三角田遺跡	SB9	オニグルミ	芯持材	円	凸伏	古代II～III期	松島2001	
59	燕市(燕市)	三角田遺跡	SB9	オニグルミ	芯持材	円	平	古代II～III期	松島2001	
41	燕市(燕市)	三角田遺跡	SB6	トネリコ属	芯持材	円	凸伏	古代II～III期	松島2001	
47	燕市(燕市)	三角田遺跡	SB6	トネリコ属	芯持材	多角	凸伏	古代II～III期	松島2001	
48	燕市(燕市)	三角田遺跡	SB6	トネリコ属	芯持材	円	凸伏	古代II～III期	松島2001	
42	燕市(燕市)	三角田遺跡	SB6	トネリコ属	芯持材	多角	凸伏	古代II～III期	松島2001	
43	燕市(燕市)	三角田遺跡	SB6	トネリコ属	芯持材	多角	凸伏	古代II～III期	松島2001	
46	燕市(燕市)	三角田遺跡	SB6	トネリコ属	芯持材	平円	凸伏	古代II～III期	松島2001	
44	燕市(燕市)	三角田遺跡	SB6	トネリコ属	芯持材	平円	凸伏	古代II～III期	松島2001	
49	燕市(燕市)	三角田遺跡	SB7	ヤマグワ	芯持材	平円	平	古代II～III期	松島2001	
54	燕市(燕市)	三角田遺跡	SB7	ヤマウルシ	芯持材	平円	平	古代II～III期	松島2001	
55	燕市(燕市)	三角田遺跡	SB7	ヤマグワ	芯持材	円	平	古代II～III期	松島2001	
52	燕市(燕市)	三角田遺跡	SB7	ヤマグワ	芯持材	円	凸伏	古代II～III期	松島2001	
51	燕市(燕市)	三角田遺跡	SB7	ヤマグワ	芯持材	円	平	古代II～III期	松島2001	
136	上越市(上越市)	三角田遺跡	SB4	カヅラ	芯持材	円	凸伏	古代I期	澤田aa-2006	
135	上越市(上越市)	三角田遺跡	SB4	カヅラ	芯持材	多角	平	古代I期	澤田aa-2006	
137	上越市(上越市)	三角田遺跡	SB4	オニグルミ	芯持材	多角	凸伏	古代I期	澤田aa-2006	
131	上越市(上越市)	三角田遺跡	SB3	オニグルミ	芯持材	多角	凸伏	古代I期	澤田aa-2006	
130	上越市(上越市)	三角田遺跡	SB3	カヅラ	芯持材	円	凸伏	古代I期	澤田aa-2006	
133	上越市(上越市)	三角田遺跡	SB3	オニグルミ	芯持材	多角	平	古代I期	澤田aa-2006	
129	上越市(上越市)	三角田遺跡	SB3	オニグルミ	芯持材	円	凸伏	古代I期	澤田aa-2006	
132	上越市(上越市)	三角田遺跡	SB3	オニグルミ	芯持材	円	平	古代I期	澤田aa-2006	
134	上越市(上越市)	三角田遺跡	SB3	オニグルミ	芯持材	多角	平	古代I期	澤田aa-2006	
144	上越市(上越市)	三角田遺跡	SB5	オニグルミ	芯持材	多角	凸伏	古代I期	澤田aa-2006	
139	上越市(上越市)	三角田遺跡	SB5	オニグルミ	芯持材	多角	凸伏	古代I期	澤田aa-2006	
141	上越市(上越市)	三角田遺跡	SB5	オニグルミ	芯持材	多角	凸伏	古代I期	澤田aa-2006	
140	上越市(上越市)	三角田遺跡	SB5	オニグルミ	芯持材	多角	凸伏	古代I期	澤田aa-2006	
142	上越市(上越市)	三角田遺跡	SB5	オニグルミ	芯持材	四角	凸伏	古代I期	澤田aa-2006	
143	上越市(上越市)	三角田遺跡	SB5	オニグルミ	芯持材	四角	凸伏	古代I期	澤田aa-2006	
145	上越市(上越市)	三角田遺跡	SB5	オニグルミ	芯持材	四角	凸伏	古代I期	澤田aa-2006	
146	上越市(上越市)	三角田遺跡	SB5	オニグルミ	芯持材	円	平	古代I期	澤田aa-2006	

\*各は各報告書の遺物番号に一致する。建物等の名称は各報告書で使用された名称を用いた。時期は本書第1版を参照。

第15表 柱材観察表(2)

視点により多様であろうが、以下の3点に注目し、その理由・背景などについて考える。

- ① 古墳時代～古代Ⅲ・Ⅳ期の柱材は「クリ」・「ハンノキ属」・「トネリコ属」・「オニグルミ」などの広葉樹が一般的で「スギ」は少ない。「スギ」が柱材として使用されている建物は六反田南遺跡円形周溝状遺構および西川内北遺跡2号円形周溝状遺構であり、ともに滝沢6期前後の大型の周溝を持つ平地式建物である。
- ② 糸魚川市周辺では縄文時代以来「スギ」が柱材として多く使用されていた可能性が高い。
- ③ 滝沢7期～川村16段階にかけて確実な「スギ」の柱材は確認できない。

①については柱材として「スギ」を用いる建物（を作った集団）がほか（の集団）より北陸以西の西日本と強い関連を持っていた可能性を考慮してもよい。西川内北遺跡では小型鋸が出土しており、近接して滝沢8期前後の城ノ山古墳が存在する点は上記の推定と矛盾しない。

一方、六反田南遺跡におけるスギの使用は、②を考慮するならば縄文時代以来の伝統を踏襲していると評価することもできる。ただし、これについては糸魚川市周辺では弥生時代前期から滝沢4期の柱材の検出例が無く、ほかの時代の柱材の検出例も無いことから、資料の増加を待って検討する必要があるだろう。なお、六反田南遺跡の東に隣接する前波南遺跡では、川村9～12段階もしくは古代Ⅲ・Ⅳ期と考えられる杭材にスギが多用されており、当期の遺跡周辺にスギが豊富に存在した可能性が考えられる。

③については、滝沢5・6期に比べ調査事例が少なく、かつ糸魚川周辺での分析事例が無いため、柱材としての使用頻度が低い「スギ」が確認されていない可能性がある。しかし、越後の土器様相は滝沢2期～7・8期頃までは北陸と類似点が多いが、滝沢9期以降は北陸との相違点が多くなり、関東北部や信濃・東北南部との関連が強くなる〔春日2006など〕。こうした土器様相との関連を考慮してもよいだろう。

## 6 遺跡の存続期間

### 目的と方法

六反田南遺跡と前波南遺跡は前川を挟んで近接する一連の遺跡と考える。以下では、六反田南遺跡と前波南遺跡の存続期間を確認し、発掘調査が行われた近隣の他遺跡の存続期間と比較・検討したい。比較・検討の対象とする遺跡は、姫川から早川の間に所在する弥生時代～中世の遺跡で、発掘調査報告書等が刊行され、遺跡の様相が把握できるものに限定する。当地では、北陸自動車道建設等に伴い、南部の丘陵地を中心に調査例の蓄積がある。これらの遺跡と六反田南遺跡・前波南遺跡などの平野部に位置する遺跡の存続期間の異同について検討し、その理由についても考えてみたい。遺跡の存続期間は土器・陶磁器によって決定し、土器・陶磁器の編年・年代は本章1に従う。

### 六反田南遺跡・前波南遺跡

**六反田南遺跡** 縄文時代中期末～後期初めの深鉢（図版22：193ab）、滝沢2期までさかのぼる可能性のある高杯（図版20：104）が確認できるが、土器がまとまって出土するのは滝沢5・6期からである。当期には平地式建物と推測できる円形もしくは方形に巡ると推測される溝（SD196）と柱穴が確認でき、周溝と考える溝からは多量の土器が出土した（図版18～20：61～112）。また、少量だがヒスイ・緑色凝灰岩を用いた玉作り関係資料（図版24：240～246）も確認できる。滝沢7～川村10段階の土器は確認できないが、川村13段階前後と推測できる須恵器杯蓋・甕（図版22：194・195）が確認できる。滑石を用

いた玉作り関連資料(図版24:248・249)はこの時期に伴う可能性があるだろう。川村14段階から古代Ⅱ期の遺物は確認できず、再度遺物が確認できるようになるのは古代Ⅲ期からで、古代Ⅳ期の須恵器は定量、古代Ⅴ～Ⅶ期の遺物は少量確認できる。以後、珠洲ⅠないしはⅡ～Ⅲ期・珠洲Ⅴ期・品田Ⅴ期(以降)の遺物が定量確認できるが、古代Ⅶ期・珠洲Ⅳ期・品田Ⅱ・Ⅲ期(に並行する時期)の土器・陶磁器は未確認である。

**前波南遺跡** 縄文時代中期の土器(図版35:1~4)、滝沢2~3期前後の壺と高杯が器台脚部(図版35:5・6)が確認できる。滝沢4期~川村7段階の土器は未確認だが、川村9~12段階の土師器は相当量確認でき(図版35:36:9~29・31・32)、これらに伴うと考える須恵器(図版36:33)も確認できる。貝殻剥片状石器(図版37:83~85)、ヒスイ製叩き石(図版38:88・89)、滑石製模造品の木製品(図版38:90)や砂岩製の砥石(図版38:91)も当期の可能性が高い。川村13段階~古代Ⅱ期の遺物は未確認で、古代ⅢないしはⅣ期~Ⅴ期前後の遺物が確認できる。以後、珠洲Ⅱ・Ⅲ期前後の陶磁器は少量、珠洲Ⅴ期~品田Ⅱ期前後の陶磁器は定量確認でき、古代Ⅵ~珠洲Ⅰ期、珠洲Ⅳ期、品田Ⅲ~Ⅴ期の資料は確認できない。

#### 平野部の遺跡(第20・26・27図)

平野部に立地する発掘調査が実施された遺跡として、岩倉遺跡・田伏玉作遺跡・笛吹田遺跡・鉄砲町遺跡などがある。また、平野部に立地する遺跡とするには問題があるかもしれないが、丘陵裾付近に立地する遺跡として水穂観音堂境内遺跡の調査が行われている。

岩倉遺跡は国道8号糸魚川バイパス建設に伴い発掘調査が行われた。珠洲Ⅳ期~品田Ⅱ期前後の土器・陶磁器が出土しており、珠洲Ⅳ期~品田Ⅱ期前後の水田跡、肥前Ⅱ期かそれ以降の礎石建物跡が検出されている。出土遺物は土器・陶磁器以外に鉄製の罎・小札・鉄鎌・鍋などが出土している[山本ほか2003]。

田伏玉作遺跡は閉地造営に伴い発掘調査が行われた。調査の結果川村9段階~古代Ⅰ期の土師器・須恵器、滑石製玉類・同未成品・玉作工具類が出土した[関ほか1972]。

古屋敷A遺跡は都市計画道路建設などに伴い発掘調査が実施された。古代Ⅴ期を中心とする時期の須恵器、古代Ⅵ・Ⅶ期の灰軸陶器、珠洲Ⅱ~Ⅴ期の陶磁器が出土している[山岸2005]。

笛吹田遺跡は小学校建設・都市計画道路建設などに伴い複数回にわたって発掘調査が行われている。滝沢2期、滝沢6期~川村8・9段階頃の土器、ヒスイ・緑色凝灰岩・滑石を用いた玉作資料、玉作工具、琴柱形石製品、木製釣瓶などが出土している。また、少量ではあるが古代Ⅴ・Ⅵ期頃の土師器・須恵器が確認できる[安藤ほか1987、山岸2005・2006]。

水穂観音堂境内遺跡は道路建設に伴い発掘調査が行われている。古代Ⅶ期もしくは珠洲Ⅰ~Ⅲ期の遺物が少量、珠洲Ⅴ~品田Ⅱ期の遺物が定量出土している[山岸ほか2004]。

鉄砲町遺跡は道路建設にともない発掘調査が実施された。遺構物の大半は近世のものだが、古代Ⅶ期~珠洲Ⅰ期、品田Ⅱ期の遺物が出土し、掘立柱建物が1棟検出された[山岸2003]。

#### 丘陵・台地上の遺跡(第21~27図)

丘陵・台地に立地する発掘調査が実施された遺跡として岩野A遺跡・岩野E遺跡、岩野下遺跡、立ノ内遺跡、小出越遺跡、後生山遺跡、原山遺跡、大塚(新朝)遺跡、割口下遺跡、美山遺跡、古川B遺跡、三ツ又遺跡などがある。

立ノ内遺跡は北陸自動車道建設に伴い発掘調査が行われた。滝沢7~9期前後の土師器壺、古代Ⅴ期の土器が定量、古代Ⅶ期の土器が少量、これらいずれかに属すると考えられる製塩土器が焼土遺構とともに

多量に出土しており、フイゴ羽口も確認できる。また珠洲Ⅱ・Ⅲ期の土器・陶磁器が少量、珠洲Ⅴ期～品田Ⅱ期の土器・陶磁器が多数出土しており、特に珠洲Ⅴ期～品田Ⅱ期の土師器皿の出土量が多い。当期の遺構には面積130m<sup>2</sup>を超える大型のもの（SB38）を中心とする26棟の掘立柱建物や溝・土坑などが検出された。背後の金山城跡に対応する居館とされている〔高橋ほか1988〕。

岩野下遺跡は北陸自動車道建設に伴い発掘調査が行われた。古代Ⅳ期と古代Ⅵ～Ⅶ期の土器が定量出土しており、竪穴建物1棟、掘立柱建物7棟が検出された。掘立柱建物の中には平面積71.3m<sup>2</sup>を測る大型のもの（SB3）も存在する。出土遺物には転用硯、墨書土器、須恵器椀・鉢・鉄鉢、土鍾、フイゴ羽口などがある。また珠洲Ⅱ～品田Ⅱ期の陶磁器が少量確認できる〔高橋ほか1987〕。

岩野A遺跡は北陸自動車道建設に伴い発掘調査が行われた。墓穴の可能性が考えられる土坑が多数検出されている。出土遺物は古代Ⅴ期の須恵器が少量、古代Ⅵ期の土師器が定量確認できるほか、珠洲Ⅳ期のすり鉢が出土した。〔高橋1988〕。

岩野E遺跡は北陸自動車道建設に伴い発掘調査が行われた。岩野A遺跡の南に接する遺跡で、岩野A遺跡に類似した土坑が多数検出され、古代Ⅳ期と古代Ⅵ期の土器が少量出土した〔高橋ほか1986〕。

小出越遺跡は北陸自動車道建設に伴い発掘調査が行われた。古代Ⅴ・Ⅵ期の土師器生産に関係する遺跡で、竪穴建物3基、土師器焼成遺構7基が検出され、土師器が大量に出土した〔鈴木1988〕。

後生山遺跡は笛吹田遺跡南方の丘陵上に立地する遺跡で、滝沢1～2期を中心とする竪穴建物5棟、土坑・溝などが検出されている。竪穴建物の中には玉作工房と考えられる遺構もある。土器のほかに緑色凝灰岩・ヒスイを用いた玉作関連資料、ヒスイ勾玉などが出土した〔木島1986・1987、山岸1999〕。

鶴口下遺跡は北陸自動車道建設に伴い発掘調査が行われた。古代Ⅵ期の土師器・須恵器・灰軸陶器が出土しており、掘立柱建物もしくは掘り込みが後世に削平された側柱建物、竪穴建物のカマドの残欠、溝・土坑と思われる焼土遺構が検出されている〔鈴木1989〕。

美山遺跡は、鶴尾口下遺跡に近接する遺跡で、遺構は確認されていないが古代Ⅳ・Ⅴ期の土師器・須恵器が少量、古代Ⅶ期を中心とする土師器が定量出土している〔鈴木1989〕。

新羽（大塚）遺跡は糸魚川市総合体育館建設および北陸自動車道建設に伴い発掘調査が実施された。糸魚川市総合体育館建設に伴う調査では、竪穴建物5棟、土坑・ピットが検出され、古代Ⅴ・Ⅵ期の土器が出土した〔糸魚川市役所1986〕。北陸自動車道建設に伴う調査では古代Ⅵ期の土坑・ピットが検出されたほか、沢の中から古代Ⅳ期～Ⅴ期の土師器・須恵器、品田Ⅱ～Ⅳ期の土師器皿が出土している。

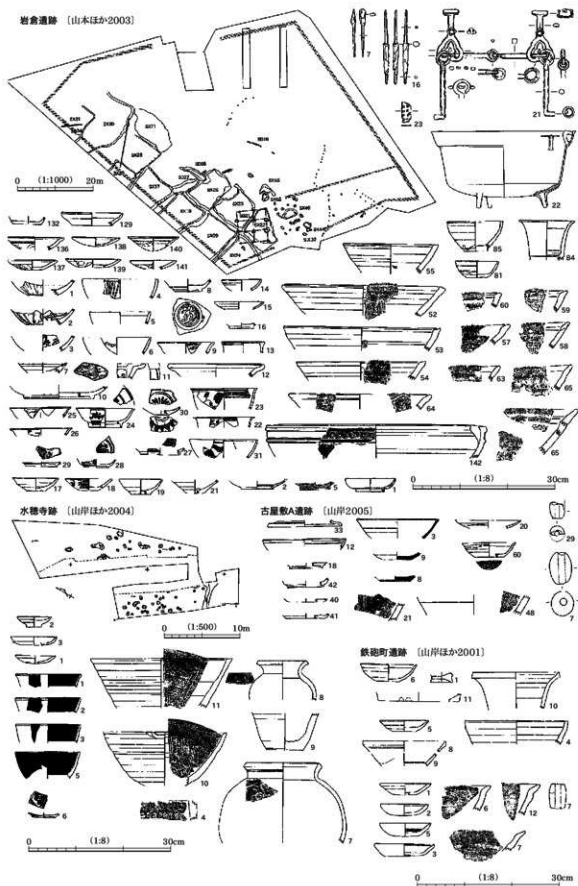
原山遺跡は新羽（大塚）遺跡に隣接する遺跡で宅地造成および北陸自動車道建設に伴い発掘調査が行われている。宅地造成に伴う調査では詳細な時期は不明だが古代の竪穴建物2棟、鍛冶炉<sup>2</sup>基検出されている〔糸魚川市役所1986〕。北陸自動車道建設に伴う調査では、弥生時代～中世の遺構は明確ではないが、川村9～11段階の土器、古代Ⅴ～Ⅶ期もしくは珠洲Ⅰ期の遺物が少量出土した〔寺 ほか1988〕。

古川B遺跡は河川改修に伴い発掘調査が行われた。姫川右岸の低位段丘上に位置する遺跡で、竪穴建物2棟、土坑・溝が検出された。古代Ⅵ期の須恵器杯蓋、珠洲Ⅱ期のすり鉢が出土した。調査区全域から鉄滓が出土したことから近接して鍛冶などの製鉄関連の遺構が存在する可能性が高い。〔山岸2001a〕。

三ツ又遺跡はゴルフ場建設に伴い発掘調査が行われた。姫川右岸の山間地に位置する遺跡で、川村8～11段階の土師器、滑石・ヒスイ・緑色凝灰岩を用いた玉作関連遺物が出土し、工房跡と推測される竪穴建物3棟、土坑・溝などが検出されている〔木島1988・1999〕。

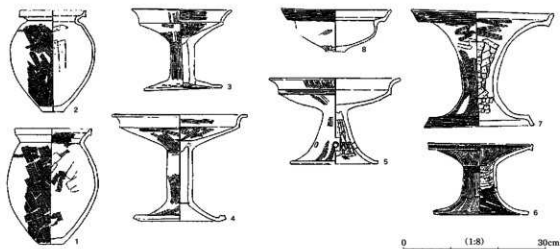
これらの動向をまとめると第16表となる。



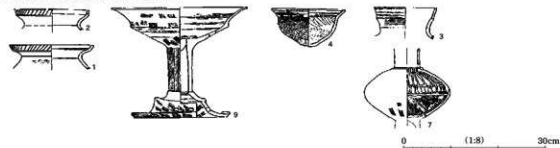


第20図 姫川—早川間の遺跡1

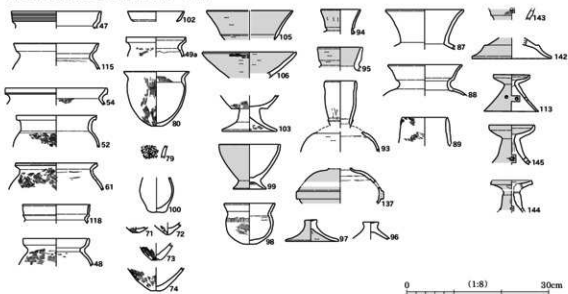
後生山3号住居(縄沢1期) (木島1988b)



笛吹田満B-C(縄沢2期) (寺村ほか1978)



六反田南遺跡SD198-200(縄沢5-6期) (本書)

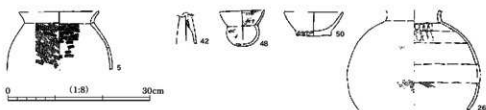


笛吹田2号住居出土土器(縄沢7期) (山岸ほか2005)

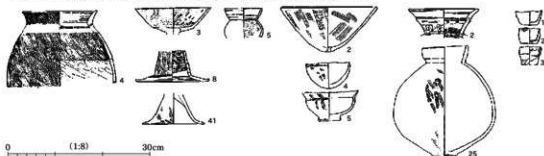


第21図 姫川-早川間の遺跡2

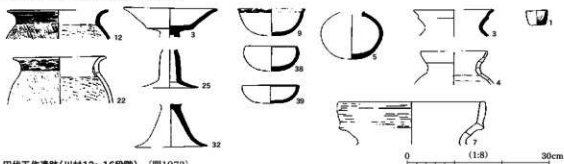
笛吹田2G-Ⅲ出土土器(川村6-7段階)〔大森ほか1984〕



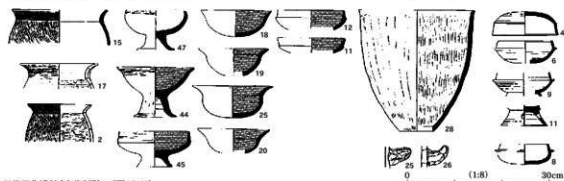
笛吹田玉作用特種ピット、I-Ⅲ区、17G-Ⅲ(川村8段階)〔寺村ほか1978、木島ほか1979〕



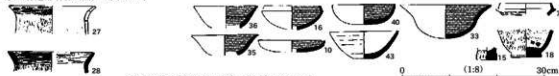
田伏玉作遺跡(川村9~11段階)〔岡1972〕



田伏玉作遺跡(川村12~16段階)〔岡1972〕



田伏玉作遺跡(古代I期)〔岡1972〕



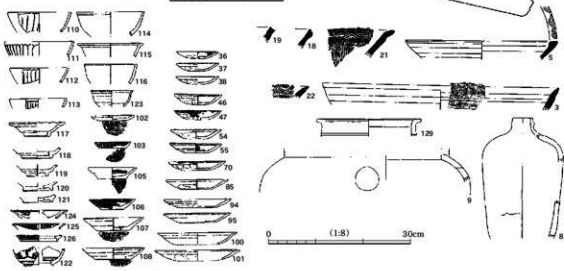
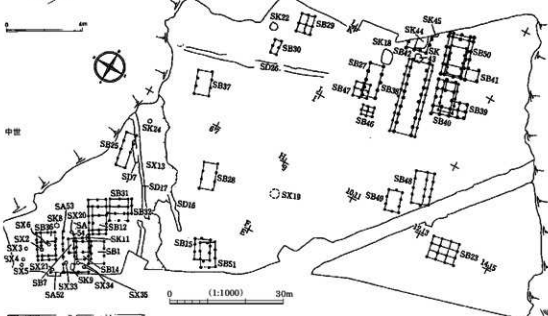
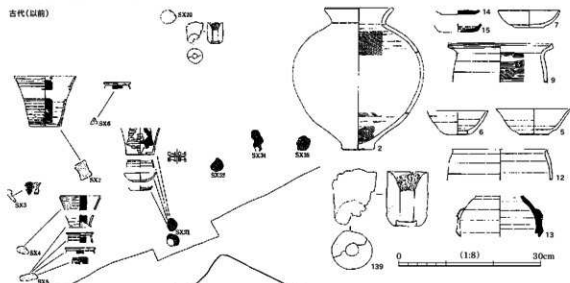
笛吹田遺跡(古代V-VI期)〔寺村ほか1978〕



第22図 姫川-早川間の遺跡3

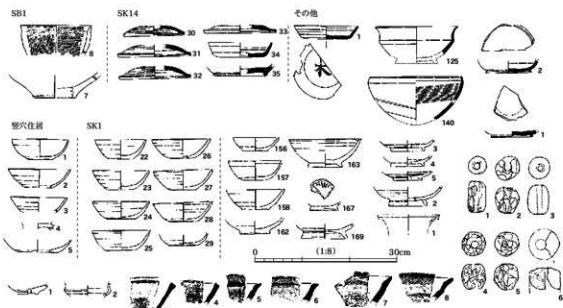
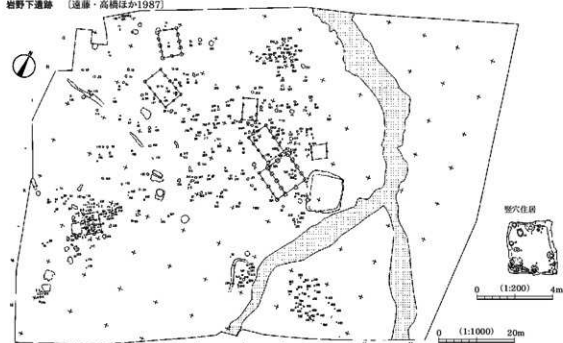
立ノ内遺跡 [高橋ほか1988]

古代(以前)

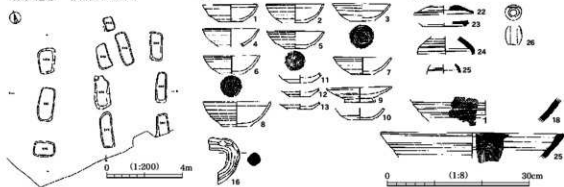


第23図 姫川-早川間の遺跡4

岩野下遺跡 [遠藤・高橋ほか1987]

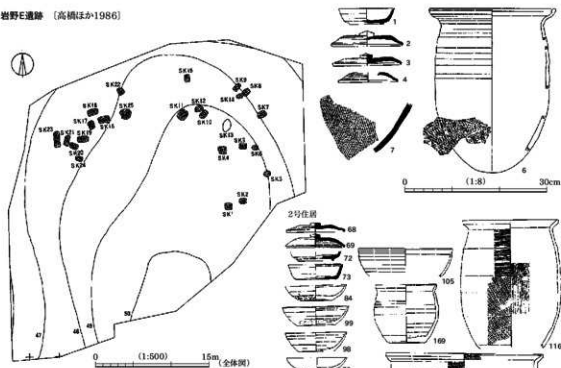


岩野A遺跡 [高橋ほか1986]

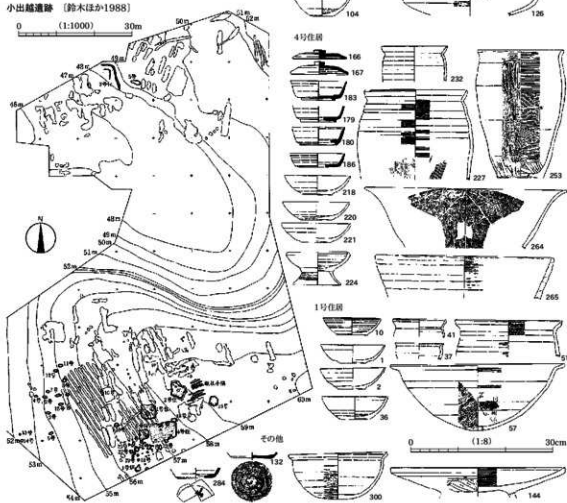


第24図 姫川-早川間の遺跡5

岩野E遺跡 [高橋ほか1986]

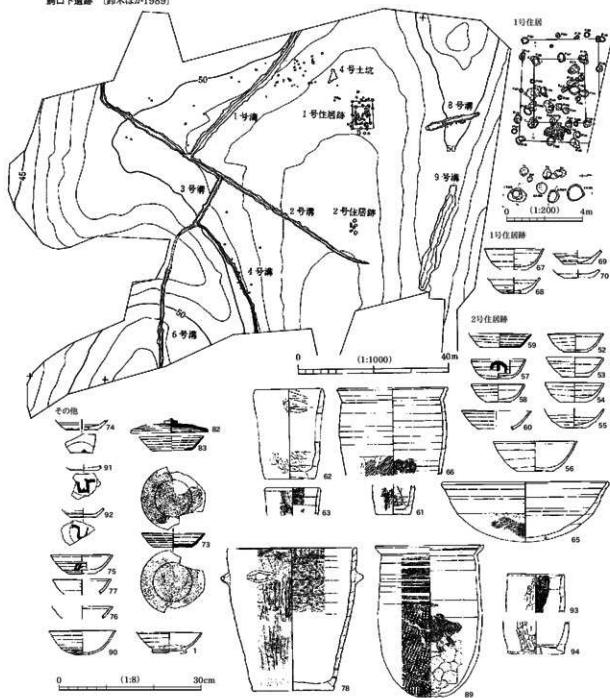


小出越遺跡 [鈴木ほか1988]

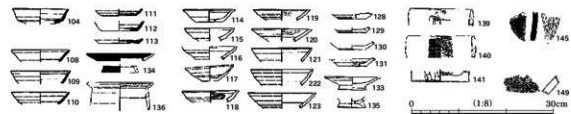


第25図 姫川-早川間の遺跡6

鯛口下遺跡 (鈴木ほか1989)

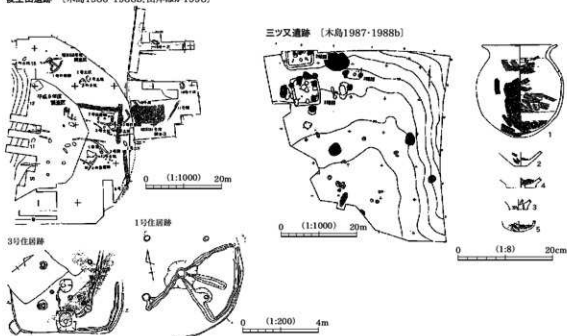


美山遺跡 (鈴木ほか1989)

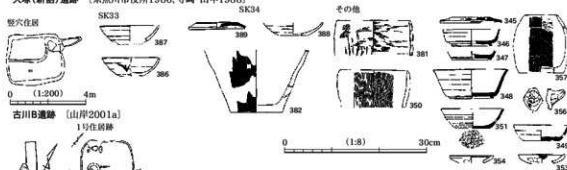


第26図 姫川—早川間の遺跡7

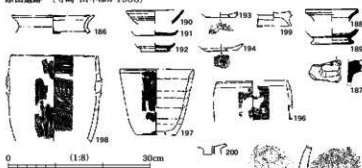
後生山遺跡 [木島1986-1988b, 山岸ほか1998]



大塚(新製)遺跡 [糸魚川市役所1986, 寺崎・田中1988]



原山遺跡 [寺崎・田中ほか1988]



長者ヶ原遺跡(10次) [木島・山岸1996]



第27図 姫川—早川間の遺跡8





## 小 結

上記の検討から、以下の7点を指摘できる。

- ① 滝沢1期ないし2期～川村16段階の遺跡は平野部には一定量見られるが、台地・丘陵上には少ない。また平野部には笛吹田遺跡・田伏玉作遺跡など玉作を行う大規模（と推測される）遺跡が存在する。
- ② 古代Ⅰ期～古代Ⅲ期の遺跡は少なく、古代Ⅱ期の遺跡は未確認である。
- ③ 古代Ⅳ期以降台地・丘陵上で遺跡が増加し、古代Ⅶ期まで確認できる。一方、当期の平野部の遺跡は少ない。当期の台地・丘陵上の遺跡には岩野下遺跡など比較的大型の建物が確認できる遺跡も存在し、鍛冶や土器生産など手工業生産に関連する遺跡もみられる。
- ④ 古代Ⅷ期の遺跡は台地・丘陵上、平野部とも非常に少ない。また、珠洲Ⅰ～Ⅲ期の遺跡も少ない。
- ⑤ 珠洲Ⅳ期～品田Ⅱ期にかけて台地・丘陵上で遺跡が増加する。この中には立ノ内遺跡など、地域の中核的な遺跡も存在する。
- ⑥ 品田Ⅲ期の遺跡は台地・丘陵上、平野部とも遺跡が減少する。

①については後生山遺跡・笛吹田遺跡・田伏玉作遺跡の動向が興味深い。後生山遺跡は滝沢Ⅰ・Ⅱ期を中心とした遺跡、笛吹田遺跡は滝沢Ⅱ期に成立し川村Ⅷ段階まで存続する遺跡、田伏玉作遺跡は川村Ⅸ段階から古代Ⅰ期まで存続する遺跡であり、後生山遺跡の縮小・廃絶と笛吹田遺跡の拡大、笛吹田遺跡の縮小・廃絶と田伏玉作遺跡の成立・拡大は概ね一致する。当期は地点を変えつつ姫川から早川の間で、地域の中核的な集落が継続的に営まれた可能性が高い。

②・③については姫川左岸地域の動向との関連を考えたい。姫川左岸に位置する須沢角地遺跡〔土田ほか1988〕の成立は古代ⅡⅠ期と考えられⅦ期まで存続するが、古代Ⅳ期ないしⅤ期以降集落は縮小傾向にある。これは、姫川～早川間の台地上における集落の動向と表裏の関係にあると推測する。この要因として、姫川左岸は滄海駅が設置された地域である点は考慮しても良い。名立駅が設置されたと考えられる上越市名立区大町周辺には古代ⅡⅡ期には成立していた東川原遺跡〔戸根ほか1987〕が存在し、佐味駅との関連が推測される木崎山遺跡〔戸根・高橋ほか1992〕の成立も古代ⅡⅠ期であり、大家駅に比定される下ノ西遺跡〔田中ほか2003〕の成立もⅡⅠ期である。越後では駅家が設置される地域には、Ⅱ期に成立する遺跡が見られる場合が多い〔春日2006〕。古代Ⅱ期には姫川左岸から早川右岸からそれ以东も含めた区域で集落の再編が行われた可能性が考えられる。

④・⑤については近年発掘調査が行われた山岸遺跡の動向と関連する可能性が高い。山岸遺跡は珠洲Ⅰ期頃に成立する大規模な遺跡であるが、珠洲Ⅳ期に遺跡が拡充し、珠洲Ⅴ期以降縮小すると考えられる〔新潟県教育委員会ほか2007、財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団・吉田国際特定共同企業体2007〕。珠洲Ⅰ～Ⅳ期にかけての山岸遺跡周辺への集約化がほかでの遺跡の減少を生じさせ、珠洲Ⅴ期における山岸遺跡の縮小が立ノ内遺跡などの成立と関連している可能性が高い。

⑥については、既存の集落との重複が考えられる。既存の集落のいくつかが品田Ⅲ期に成立していた可能性がある。

こうした遺跡の動向は越後の他地域と比較した場合、多くの地域でみられるものとそうでないものがある。滝沢ⅠあるいはⅡ期から古墳Ⅰ6段階までの中核的な遺跡が一定区域の中で継続的に確認できる地域は、越後では希で弥生時代から古墳時代にかけて玉作という手工業生産が行われた地域の特性を表している可能性が高い。また珠洲Ⅰ～Ⅳ期の遺跡が少ない状況も他地域では希であろう。一方古代Ⅰ～Ⅲ期の遺跡が少なくⅣ期に遺跡が増加する地域、品田Ⅲ期の遺跡が不明確な地域は県内でも比較的多いであろう。

## 要 約

### 六反田南遺跡

- 1 六反田南遺跡は新潟県西部、糸魚川市大字大和川字六反田 1035-1 に所在する。
- 2 発掘調査は国道 8 号糸魚川東バイパス建設に伴い、平成 18 年度に実施した。調査面積は 3,730m<sup>2</sup> である。
- 3 遺跡は現前川の西側、海岸から約 300m 内陸の沖積低地に立地する。標高は約 5m を測り、現況は宅地・水田である。
- 4 調査の結果、古墳時代前期を中心とする遺構と遺物が検出された。
- 5 SD196・SD200 は円形または方形に巡ると推測され、溝に囲まれた部分からは柱根を有するピットが検出されたことから、周溝をもつ平地式住居である可能性が高い。
- 6 土器は古墳時代初頭のものが大多数を占める。糸魚川地域において当該期の土器様相はこれまで不明瞭であり、貴重な資料となった。ほかに、少量の土製品・石器・石製品・木製品・金属製品、古代～中近世の土器・陶磁器が出土した。

### 前波南遺跡

- 1 前波南遺跡は、新潟県糸魚川市大和川字前波 639-1 ほかに所在する。
- 2 発掘調査は国道 8 号糸魚川東バイパス建設に伴い、平成 18 年度に実施した。調査面積は 1,150m<sup>2</sup> である。
- 3 遺跡は現前川東側の沖積低地に立地する。遺構検出面の標高は約 3.8～4.1m である。
- 4 調査の結果、縄文時代から中・近世にいたる遺構、遺物が検出された。遺構は土坑 6 基、ピット 111 基、溝状遺構 11 条、性格不明遺構 11 基、杭列 1 列、川跡 1 条が検出された。調査区北東に群在するピット群は掘立柱建物の可能性があり、古代～中世の所産と考えられる。調査区東部にある川跡は幅 9m 以上、深さ 1.3m ほどで、蛇行しながら南北に流れている。中層～河床にかけて古墳時代中期と奈良時代の遺物が主に出土した。
- 5 遺物は縄文時代から古代の土器、土製品、石器、中・近世の陶磁器、古銭、古墳時代から古代の木製品が出土した。主な土器としては、古墳時代中期の土師器壺、甕、高杯、奈良時代の須恵器長頸瓶、中世の珠洲焼甕、鉢がある。木製品は、川跡から鋤、田下駄、刀子鞘、横櫓、曲物底板、弓状木製品、網代編み製品、建築部材、杭、木簡などに加え、細い薄板状の木製品が多数出土した。
- 6 古墳時代から古代にかけては、川跡に廃棄された豊富な出土遺物から、近接する場所に集落の存在が推測される。

## 引用・参考文献

- 相沢 央 2004 『第三節 頸城郡の人々と暮らし』『上越市史 通史編1 自然・原始・古代』上越市
- 相田泰臣 2004 『越後における古墳時代後期を中心とした土器の様相』『新潟考古』15 新潟県考古学会
- 青山博樹 1997 『東北部における古墳編年と土器編年の対応についての予察』『福島考古』38 福島県考古学会
- 朝岡政康 2003 『東国遺跡』新潟市教育委員会
- 網野善彦 1972 『関東幕府御教書について』『信濃』第24巻第1号 信濃史学会
- 荒川隆史 2004 『第IV章 遺構』『青田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集 新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史ほか 2004 『青田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集 新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 青木重孝 1973 『調査に至るまで』『大角地遺跡1973年度発掘調査概要』青海町教育委員会
- 青木重孝監修 1976 『糸魚川市史』1 糸魚川市役所
- 安藤文一ほか 1978 『笛吹田遺跡』糸魚川市教育委員会
- 飯坂盛泰ほか 2005 『余川中道遺跡1』新潟県埋蔵文化財調査報告書第139集 新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 猪狩俊哉 2004 『第V章 5 木製品』『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第133集 青田遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 伊藤秀和ほか 2000 『丸湯遺跡・新通遺跡』加茂市文化財調査報告（10）加茂市教育委員会
- 伊藤友久・賈田 明ほか 1999 『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書37 上越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12 榎田遺跡』日本道路公団・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター
- 糸魚川市役所 1986 『糸魚川市史 資料集1 考古編』糸魚川市役所
- 岩田 隆 1997 『越前』『中・近世の北陸—考古学が語る社会史—』桂書房
- 上田秀夫 1982 『14～16世紀の青磁碗の分類について』『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 白居直之ほか 1997 『（財）長野県埋蔵文化財センター発掘報告書25 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15 石川糸里遺跡 第3分冊』日本道路公団名古屋建設事務所・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター
- 江口友子ほか 2000 『釈迦堂遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第100集 新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 大野英里 2003 『越中中央部における古墳出現期の土器様相』『庄内式土器研究』XXVI 庄内式土器研究会
- 大森（木島）勉 1984 『新潟県糸魚川市 笛吹田遺跡範囲確認調査報告書』糸魚川市教育委員会
- 大橋康二 1984 『肥前陶磁の変遷と出土分布』、『北海道から沖縄まで 国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館
- 大橋康二 1989 『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社
- 岡本淳一郎 2003 『「周溝をもつ建物」の基礎的研究』『富山大学考古学研究室論集 蟹気楼—秋山進午先生古希記念—』同書刊行会
- 岡本淳一郎 2003 『富山県西部地域における古墳出現期の土器様相』『庄内式土器研究』XXVI 庄内式土器研究会
- 岡安光彦ほか 2004 『六斗葺遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集 新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 尾崎高宏 2005 『下馬場遺跡 細田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第153集 新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小田由美子 2004 『滝寺古窯跡群 大貫古窯跡群』新潟県埋蔵文化財調査報告書第149集 新潟県教育委員会・財団

## 法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

- 小野正敏 1982 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
- 小村 弉いさ編 1989 「糸魚川市」『角川地名辞典 15 新潟県』角川書店
- 小田木治太郎 1989 「北陸東部における古墳時代開始期の土器様相」『北陸の考古学』II 石川考古学研究会
- 春日真実 1998 「西頸城地域における古代の土器様相」『研究紀要』2 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1999 「第4章 古代 第2節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』高志書院
- 春日真実 2005 「越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について—「今池編年」・「下ノ西編年」・「山三賀編年」の検討を中心に—」『新潟考古』16 新潟県考古学会
- 春日真実 2007a 「越後における古代の煮炊具について」『新潟考古』18 新潟県考古学会
- 春日真実 2007b 「名立神揚屋須志器水甕について」『新潟考古学談話会報』第32号 新潟考古学談話会
- 加藤 学 1999 「第V章 遺構」『和泉入道跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第93集 新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学 2003 『仲田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第128集 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学いさ 2006 『大角地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第173集 新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤三千雄 1998 「新保・新崎式土器様式」『縄文土器大観3』小学館
- 金子拓男 1975 「新潟県青海町天神山経塚出土の陶製経筒と珠洲焼の成立について」『信濃』27-1 信濃史学会
- 金子拓男 1981 「蒲原郡の古代」『三糸市史』上巻 三糸市
- 金子正典・滝沢規朗・丸山一昭 1999 「第3章 弥生時代・古墳時代 第2節 土器 第3項 弥生後期」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 鎌江宏之 1993 「国制の成立—令制国・七道の形成過程—」『日本律令論集』上巻 吉川弘文館
- 川上貞雄 1995 『舟戸遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会
- 川添昭二 1987 「北条氏一門名越（江馬）氏について」『日本歴史』第464号 吉川弘文館
- 川村浩司 1993a 「古墳出現前後における北陸北東部の土器組成」『環日本海地域比較史研究』第2号 新潟大学環日本海地域比較史研究会
- 川村浩司 1993b 「北陸北東部の古墳出現前後の様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 川村浩司 2000 「上越市の古墳時代の土器様相—関川右岸下流域を中心に—」『上越市史研究』第5号 上越市
- 木島 勉いさ 1986 『後生山遺跡』糸魚川市埋蔵文化財調査報告13 糸魚川市教育委員会
- 木島 勉 1987 「後生山遺跡」『昭和61年度 遺跡発掘調査報告書』糸魚川市埋蔵文化財調査報告14 糸魚川市教育委員会
- 木島 勉 1988a 『三ツ又遺跡発掘調査報告書』糸魚川市埋蔵文化財調査報告15 糸魚川市教育委員会
- 木島 勉 1988b 「後生山遺跡」『日本考古学年報』39 日本考古学協会
- 木島 勉 1989a 「糸魚川市三ツ又の古墳時代の集落」『新潟県考古学会第1回大会 研究発表会 発表要旨』新潟県考古学会
- 木島 勉 1989b 「立ノ内遺跡・山崎三十三塚遺跡」糸魚川市埋蔵文化財調査報告第19 糸魚川市教育委員会
- 木島 勉 2005 「後生山遺跡」「笛吹田遺跡」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』第2分冊 新潟県考古学会
- 木島 勉 2007 「山崎A・B遺跡」『第14回 遺跡発掘調査報告会』新潟県教育委員会・糸魚川市教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 木島 勉・山岸洋一 1996 「国指定史跡 長者ヶ原遺跡 第10次調査概報」糸魚川市埋蔵文化財調査報告書第29 糸魚川市教育委員会
- 楠 正勝 2003 「裝飾器台の成立と展開」『庄内式土器研究』XXVI 庄内式土器研究会
- 小島幸雄 1987 「木柱と木製品」『史跡 寺地遺跡』寺村光晴いさ編 青海町教育委員会

- 小島幸雄 1991 『中島廻り遺跡発掘調査報告書』上越市教育委員会
- 小島幸雄・笹澤正史 1999 『津倉田遺跡発掘調査報告書』上越市教育委員会
- 小林巖雄 2000 『1 地形分類図 2 地質概説』新潟県地質図説明書(2000年度版) 新潟県商工労働部商工振興課
- 齋藤秀平 1937 『新潟縣史蹟名勝天然記念物調査報告第七輯』新潟県
- 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団・吉田国際特定共同企業体 2007 『山岸遺跡現地説明会資料』
- 坂上有紀・高橋 保・田海義正 2000 『第四章 遺跡』『平田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第98集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 坂井秀弥 1984 『今池遺跡群における奈良・平安時代の土器について』『今池遺跡・下町遺跡・子安遺跡』新潟県教育委員会
- 坂井秀弥・川村浩司 1993 『古墳出現前後における越後の土器様相』『磐越地方における古墳文化出現過程の研究』『磐越地方における古墳文化出現過程の研究』研究者グループ
- 笹澤正史 2003 『古代一時代概説』『上越市史料編2 考古』上越市史編さん委員会
- 笹澤正史 2005 『頸城地域における弥生時代から古墳時代前期の集落動態』『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』同シンポジウム実行委員会・新潟県考古学会
- 笹澤正史・水澤幸一 2000 『伝至徳寺跡の遺物様相』『上越市史研究』第6号 上越市史専門委員会
- 佐藤俊史・相場重徳<sup>1)</sup> 2002 『寺地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第113集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤進一 1971 『増訂 鎌倉幕府守護制度の研究』東京大学出版会
- 佐藤進一・池内義賢編 1955 『中世法制史料集』第一巻 鎌倉幕府法
- 佐藤俊幸・田海義正<sup>2)</sup> 1992 『新潟県歴史の道調査報告書 第一集 加賀街道 松本街道』新潟県教育委員会
- 澤田 毅・細井佳浩・大島通夫<sup>3)</sup> 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第154集 三角田遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 實川順一 2006 『山岸遺跡II』『埋文にいがた』57 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 品田高志 1989 『越後における古墳時代土器の変遷 柏崎平野の中期～後期を中心に』『柏崎市立博物館館報』4 柏崎市立博物館
- 品田高志 1991 『越後における古墳時代土器の変遷II 前期土器編年の現状と試案』『柏崎市立博物館館報』6 柏崎市立博物館
- 品田高志 1999 『越後における中世後期の土師器皿—京都系土師器第2波の流入と展開—』『京都系土師器皿の伝播と受容—中世後期を中心に—』日本中世土器研究会
- 梶山林継 1972 『神坂峠』『神道考古学講座5 祭祀遺跡特説』雄山閣
- 鈴木郁夫 1982 『1 地形分類図 1 地形概説』新潟県上越地域土地分類基本調査 糸魚川』新潟県農地部総合整備課
- 鈴木郁夫 2000 『1 概説 1 地形概説』新潟県地質図説明書(2000年度版) 新潟県商工労働部商工振興課
- 鈴木公雄 1999 『出土銭貨の研究』東京大学出版会
- 鈴木 茂 2002 『第VI章 自然科学分析 1 花粉分析』『寺地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第113集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木俊成<sup>4)</sup> 1988 『小出越遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第51集 新潟県教育委員会
- 鈴木俊成<sup>5)</sup> 1989 『野口下遺跡 美山遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第54集 新潟県教育委員会
- 鈴木俊成<sup>6)</sup> 1994 『一之口遺跡 東地区』新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 関 雅之 1972 『田伏玉作遺跡』糸魚川市教育委員会
- 関 雅之 1990 『古代細型管状土師器』『北越考古学』3 北越考古学研究会
- 千家和比古 1978 『第4章 遺物 4 土器類』『第5章 総括 2 遺物について』『雷吹田遺跡』糸魚川市教育委員会
- 高橋浩二 2000 『古墳出現期における越中の土器様相』『庄内式土器研究』XXII 庄内式土器研究会
- 高橋浩二 2005 『富山県における高地性集落の解体と古墳の出現』『シンポジウム 新潟県における高地性集落の

- 解体と古墳の出現』同シンポジウム実行委員会・新潟県考古学会
- 高橋 保<sup>13)</sup> 1986 『中原遺跡・岩野A遺跡・岩野E遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第45集 新潟県教育委員会
- 高橋 保 1988 『立ノ内遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第49集 新潟県教育委員会
- 高橋保雄・遠藤孝司<sup>14)</sup> 1987 『岩野下遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第46集 新潟県教育委員会
- 滝沢規朗 1993 「越後における弥生後期以降の土器文様—凹線文系と刺突文を中心に—」『北越考古学』第6号 北越考古学研究会
- 滝沢規朗 1995 「古墳出現前後における集落の動向—越後の集落を考える上での基礎資料として—」『研究紀要』新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 滝沢規朗 2000 「新潟県における弥生後期の土器編年」『東日本弥生時代後期の土器編年』第1分冊 東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会
- 滝沢規朗 2005a 「土器の分類と変遷—いわゆる北陸系を中心に—」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』同シンポジウム実行委員会・新潟県考古学会
- 滝沢規朗 2005b 「新潟県における古墳出現前後に盛行する裝飾器台・結合器台について」『新潟考古』第16号 新潟県考古学会
- 滝沢規朗 2005c 「越後・佐渡における弥生時代後期～古墳時代前期の「く」字甕について」『三面川流域の考古学』第4号 奥三面を考える会
- 田嶋明人 1986 『漆町遺跡出土土器の編年的考察』『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 1988 「古代土器の編年軸設定」『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題』石川考古学会・北陸古代土器研究会
- 田嶋明人 1992 「加賀」『前方後円墳集成』中部編 近藤義郎編 山川出版社
- 田嶋明人 2006 「『漆町編年』と前方後円墳集成編年」『北陸の古墳編年の再検討』富山大学人文学部考古学研究室
- 田嶋明人 2007 「『白江式』再考」『吉岡康暢先生古希記念論集 陶磁器の社会史』吉岡康暢先生古希記念論集刊行会 桂書房
- 田中 靖 1994 『八幡林遺跡』和島村埋蔵文化財調査報告書 第3集 新潟県和島村教育委員会
- 田中 靖 1995 『門新遺跡』和島村埋蔵文化財調査報告書 第4集 新潟県和島村教育委員会
- 田中 靖<sup>15)</sup> 2003 『下ノ西遺跡Ⅳ』和島村埋蔵文化財調査報告書 第14集 新潟県和島村教育委員会
- 田辺昭三 1966 『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
- 田村浩司 2005 「吉津川遺跡」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現（第2分冊）』同シンポジウム実行委員会・新潟県考古学会
- 田村 裕 1987 「鎌倉武士」『新潟県史』通史編2 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 辻 範朗 2006 「須沢角地遺跡」『財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成16年度』財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 土田孝雄 1978 「第2章 調査の経過 1 発掘調査に至るまで」『笛吹田遺跡』糸魚川市教育委員会
- 土田孝雄<sup>16)</sup> 1988 『須沢角地A遺跡発掘調査報告書』青海町教育委員会
- 鶴巻康志 1999 「第5章 中近世 第2節 B 中世後期」『新潟県の考古学』高志書院
- 寺崎裕助 1988 「第1章 遺跡の立地と周辺の遺跡 1.位置と地形」『原山遺跡 大塚遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第50集 新潟県教育委員会
- 寺崎裕助・田中 靖<sup>17)</sup> 1988 『原山遺跡 大塚遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第50集 新潟県教育委員会
- 寺村光晴 1966 『古代玉作の研究』吉川弘文館
- 寺村光晴・安藤文一<sup>18)</sup> 1979 『大角地遺跡—飾玉とヒスイの工房址—』青海町教育委員会
- 寺村光晴<sup>19)</sup> 1978 『笛吹田遺跡』糸魚川市教育委員会
- 寺村光晴・青木重孝・関雅之 1987 『史跡 寺地遺跡』青海町教育委員会
- 戸根与八郎<sup>20)</sup> 1987 『宮ノ平遺跡ほか9遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第47集 新潟県教育委員会

- 戸根与八郎・北村 亮・高橋 保<sup>1)</sup> 1992 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第28集 木崎山遺跡』新潟県教育委員会  
土橋由理子<sup>2)</sup> 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第165集 馬見取遺跡・正尺A遺跡・正尺C遺跡』新潟県  
教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 永井久美男 1994 『中世の出土銭—出土銭の調査と分類—』兵庫県埋蔵銭調査会
- 永井久美男 1996 『日本出土銭総覧 1996年版』兵庫県埋蔵銭調査会
- 奈良国立文化財研究所 1985 『木器集成図録 近畿古代篇』
- 奈良国立文化財研究所 1993 『木器集成図録 近畿原始篇』
- 新潟県教育委員会・糸魚川市教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 2007 『第14回 遺跡発掘調査報告会』
- 西口壽夫 1993 「飛鳥・藤原地域の須恵器」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東2 須恵器』古代の土器  
研究会
- 西頸城郡教育会誌出版部 1930 『西頸城郡誌』
- 野田真弓・茶谷 満<sup>3)</sup> 2005 『鳥取県埋蔵文化財センター調査報告8 青谷上寺地遺跡出土品調査報告1 木製容器・  
かご』鳥取県埋蔵文化財センター
- 野水晃子<sup>4)</sup> 2005 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第146集 西川内北遺跡・西川内南遺跡』新潟県教育委員会・  
(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 花ヶ前盛明 2002 『越佐の神社—式内社六十三—』新潟日報事業社
- 平野団三・渡辺秀雄 1986 「西頸城郡」『日本歴史地名大系15 新潟県の地名』平凡社
- 広瀬和雄 1991 「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』中国・四国編 近藤義郎編 山川出版社
- 藤澤良祐 1993 『瀬戸市史 陶磁史篇Ⅳ』愛知県瀬戸市
- 藤澤良祐 1995 「中世陶器(古瀬戸)」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
- 藤澤良祐 1997 「付録1 古瀬戸編年表」『研究紀要』第5輯 財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター
- 藤澤良祐 2002 「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『研究紀要』第10輯 財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター
- 星野信明<sup>5)</sup> 1996 『沖ノ羽遺跡Ⅱ(B地区)』新潟県埋蔵文化財調査報告書第80集 新潟県教育委員会・財団法人  
新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 細井佳浩<sup>6)</sup> 2006 『土居下遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第166集 新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵  
文化財調査事業団
- 前川雅夫<sup>7)</sup> 2005 『道端遺跡Ⅲ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第142集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵  
文化財調査事業団
- 前川雅夫<sup>8)</sup> 2006 『道端遺跡Ⅴ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第162集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵  
文化財調査事業団
- 前山精明 2005 「御井戸遺跡」『巻町のむかしむかし』巻町叢書第40集 巻町
- 前山精明<sup>9)</sup> 2003 『御井戸遺跡Ⅰ』巻町教育委員会
- 前山精明<sup>10)</sup> 2004 『御井戸遺跡Ⅱ』巻町教育委員会
- 松島悦子 2001 『三角田遺跡』燕市埋蔵文化財調査報告書第1集 燕市教育委員会
- 水澤幸一 2004 「至徳寺遺跡の中世後期土器(補遺)」『上越市史研究』第9号 上越市史専門委員会
- 水澤幸一 2005 「越後の中世土器」『新潟考古』16 新潟県考古学会
- 水澤幸一・鶴巻康志 2003 「至徳寺遺跡」『上越市史叢書8 考古—中・近世史料—』上越市史考古部会
- 宮田進一 1997 「越中瀬戸の変遷と分布」『中・近世の北陸—考古学が語る社会史—』桂書房
- 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 山岸洋一 1989 「後生山遺跡」『平成9年度遺跡発掘調査概報』糸魚川市埋蔵文化財調査報告33 糸魚川市教育  
委員会
- 山岸洋一 2001a 『下大野遺跡群』糸魚川市埋蔵文化財調査報告37 糸魚川市教育委員会
- 山岸洋一 2001b 『糸魚川市遺跡地図(市内詳細分布調査報告書)』糸魚川市埋蔵文化財調査報告書39 糸魚川市  
教育委員会



- 山岸洋一 2003 『糸魚川市鉄砲町遺跡発掘調査報告書』糸魚川市埋蔵文化財調査報告44 糸魚川市教育委員会
- 山岸洋一 2005a 『平成16年度笛吹田遺跡発掘調査概要報告書』糸魚川市文化財調査報告書49 糸魚川市教育委員会
- 山岸洋一 2005b 『古屋敷A遺跡発掘調査報告書』糸魚川市文化財調査報告書50 糸魚川市教育委員会
- 山岸洋一 2006 『平成17年度笛吹田遺跡発掘調査概要報告書』糸魚川市文化財調査報告書53 糸魚川市教育委員会
- 山岸洋一 2007 『笛吹田遺跡—玉類・石製品の大規模な製作工房』『第14回 遺跡発掘調査報告会』新潟県教育委員会・糸魚川市教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山岸洋一・田村公一 2004 『水穂寺跡発掘調査報告書』糸魚川市埋蔵文化財調査報告書47 糸魚川市教育委員会
- 山崎忠良<sup>ほか</sup> 2004 『下割II遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第113集 新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山田英雄 1986 『国郡制の成立・整備』『新潟県史』通史編1 新潟県
- 山田昌久 2003 『考古資料大観 第8巻 弥生・古墳時代 木・繊維製品』小学館
- 山本 肇<sup>ほか</sup> 1988 『三屋原遺跡 三屋原B遺跡 塚ノ越遺跡 四割・杉沢遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第52集 新潟県教育委員会
- 山本肇<sup>ほか</sup> 2003 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第114集 岩倉遺跡』新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 横田賢次郎・森田 勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁について—形式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館
- 吉井雅男 1996 『高柳A遺跡・高柳B遺跡・名割遺跡』荒川町埋蔵文化財調査報告書第3集 荒川町教育委員会
- 吉岡康暢 1994a 『日本海域の土器・陶磁器〔中世編〕』六興出版
- 吉岡康暢 1994b 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 四柳嘉章 1987 『西川島 能登における中世村落の発掘調査』石川県・穴水町教育委員会
- 米沢 康 1980 「大宝二年の越中国四部分割をめぐって」『信濃』32-6 信濃史学会

遺構観察表

六反田南遺跡遺構観察表(1)

凡例

1. 規模 平面径上部の長径・短径の最大値。深度は確認面から最深部までの値である。全体が検出できなかった遺構についても、推定できるものは推定値を記した。
2. 断面形 遺構断面の形状が判明している場合は、形状に追加して彎曲と記載した。
3. 出土遺物 土・土器・陶・陶磁器・石器・石製品 木・木製品 金・金属製品
4. 新旧関係 <:より古い>;>:より新しい(例<SD1-SD1より古い)

種別	番号	グリッド	平面形	断面形	覆土	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面高 (m)	出土遺物	新旧関係
SK	5	13E4	不整形円形	半円状	レンズ状	76	63	26.0	3.79		>SD1
SK	6	14D21	不整形	弧状	斜位	110	74	17.5	3.85		
SK	12	13D17.18.22.23	不整形	弧状彎曲	レンズ状	194以上	92	26.0	3.74		
SK	16	14D11	楕円形	弧状		75	59	25.0	3.77		
SK	20	15D8.9.13.14	楕円形	弧状彎曲	単層	64	57	7.0	4.10		
SK	25	14C22.23・14D2.3	不整形	弧状	水平	193	100	14.0	3.95		
SK	28	14C16	楕円形	半円状	単層	64	50	14.0	3.91		
SK	29	15C5.10	(不整形)	弧状	単層	—	162以上	8.0	4.23		
SK	37	16C24.25・16D4.5	不整形	半円状	斜位?	297	155	70.0	3.47		
SK	39	16C5.10	楕円形	弧状	単層	71	49	8.0	4.10		
SK	44	13D20.25	不整形	半円状彎曲	単層	82	55	25.0	3.78		
SK	45	16C・17C	長方形	半円状	レンズ状	484	169	44.5	3.72	土	
SK	48	18C11.12.16.17	不整形	半円状	レンズ状	220推定	158以上	33.0	4.03		
SK	49	17C・18C	不整形	弧状	水平	254	156	41.5	3.93		>SD50
SK	53	17B21・17C1	(不整形)	弧状	レンズ状	—	202	31.0	3.93		
SK	54	16C6.7.11.12	不整形円形	半円状	レンズ状	222	219	50.0	3.74		
SK	55	17C・17D	不整形	弧状	レンズ状	278	236	31.0	3.93		
SK	59	17B・17C	不整形	弧状彎曲	レンズ状	426推定	253	72以上	3.5以下		
SK	65	13F5	不整形	半円状	レンズ状	75	58以上	29.0	3.69		<SX61
SK	68	14E17.22	不整形	半円状彎曲	ブロック状	124	85	23.0	3.74	土	
SK	71	16F9.10	不整形円形	弧状	単層	88	56	19.5	4.03		
SK	77	16E	不整形	弧状	レンズ状	390	341	27.0	4.05		>SD75
SK	78	17E・18E	不整形	弧状	水平	422	358	15.0	4.19		
SK	83	14F2.7	不整形円形	弧状	単層	90	45	13.0	3.78		>P84
SK	85	14F7	楕円形	弧状	46推定	46	46推定	35.0	3.59		
SK	86	14F8.9	楕円形	半円状	水平	49	36推定	33.0	3.58		
SK	88	14F22.23	(楕円形)	弧状彎曲	単層	59以上	44推定	12.0	3.65		
SK	92	18E9.10.15	不整形円形	半円状	レンズ状	—	188	44.0	3.95		>SX72
SK	93	17F・18F	不整形	弧状	レンズ状	348	267	27.0	4.02	土	
SK	96	19F・20F	楕円形	弧状	レンズ状	158	71	15.0	4.22		
SK	99	21F4.5	不整形	弧状	単層	384推定	105以上	11.0	4.35	土	
SK	101	15F3.4.8.9	不整形	弧状	単層	251	127	20.0	3.74		
SK	103	19F・20F	不整形	半円状	水平	290以上	156	48.0	4.01		
SK	117	36F25	不整形	弧状彎曲	単層	72推定	70	20.0	4.67	土・石	
SK	122	37F・37G	不整形	台形状	ブロック状	263	163	65.0	4.05	土・石	
SK	138	36F24	不整形円形	弧状彎曲	単層	89	52	—	—	土	
SK	140	36F18.23	不整形	弧状彎曲	単層	113	72	13.0	4.77	土	
SK	170	22F17.18.22.23	不整形	弧状	単層	185	136	6.0	4.38	土・木	
SK	188	23F・24F	不整形	弧状	単層	222	116	9.0	4.54	土	
SK	198	34F25	不整形円形	半円状彎曲	単層	65	48	17.0	4.70	土・石	
SK	207	31G4.5	(楕円形)	半円状	レンズ状	144以上	58以上	25.0	4.70	土	
SK	208	31F・31G	長方形	弧状彎曲	単層	144	79	7.0	4.90	土	
SK	211	35G1.2	不整形円形	半円状	水平	64	53	23.0	4.62	土・石	
SK	218	32F18.19.23.24	円形	弧状	水平	74	68	63.0	4.34	土・石・木	
SK	219	32F11	不整形円形	U字状	レンズ状	80	76	76.0	4.14	土	
SK	221	29F・29G・30G	(楕円形)	弧状	単層	388以上	125以上	11.0	4.72	土	
SK	229	30F20	楕円形	弧状	レンズ状	66	47	14.0	4.77	土	
SK	234	31F1.3	楕円形	弧状	レンズ状	184	94	22.0	4.65	土	
SK	235	29F14.15.19.20	不整形	弧状	単層	361	103	22.0	4.63	土	
SK	255	30F12.13	不整形	弧状	レンズ状	353	196	12.0	4.78		<SD222<P267
SK	256	30F19.24	不整形円形	弧状	単層	88	70	8.0	4.80	土	
SK	258	30F24・30G4	不整形	弧状	単層	117	58	7.0	4.88	土	>SD225
SK	259	30F16.17	不整形	弧状	レンズ状	148	95	12.0	4.75		SD260と一連
SK	264	29F・30F	不整形円形	弧状	レンズ状	307以上	187	15.0	4.73	土	<SD237
SK	265	29F13.14.18.19	不整形円形	弧状	単層	134	111	26以上	4.60		
SK	290	31G3	(楕円形)	弧状	単層	144以上	45以上	7.0	4.83		
SK	1013	25F7.12	不整形	弧状彎曲	単層	81	66	—	—		
SK	1020	24F2	不整形	弧状彎曲	レンズ状	114	62以上	20.0	4.44		
SD	1	13D・13E		弧状彎曲	単層	—	92	5.0	3.96		<SK5

六反田南遺跡遺構観察表(2)

種別	番号	グリッド	平面形	断面形	覆土	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	底面高(m)	出土遺物	新旧関係
SD	15	15D		弧状	単層	—	29	3.0	4.14		
SD	17	14D5・15D1		半円状	単層	—	18	9.0	4.04		
SD	18	14D・15D		弧状	レンズ状	—	84	37.0	3.75		
SD	19	14D		弧状	単層	—	53	9.0	3.97		
SD	23	15D4.5		弧状	単層	—	24	4.5	4.19		
SD	24	15D5		半円状	単層	—	28	10.0	4.13		
SD	26	15C14.15		弧状	単層	—	26	2.0	4.24		
SD	27	15C		弧状増曲	単層	—	52	9.0	4.18		
SD	30	15D15		半円状	単層	—	32	13.0	4.11		
SD	32	16D		弧状	単層	—	28	4.0	4.23		
SD	35	14D		弧状	単層	—	36	6.0	4.00		
SD	36	16D8.9.14		弧状	レンズ状	—	116	28.0	3.95		
SD	41	16C		弧状増曲	単層	—	104	—	—		
SD	42	16B24.25・17B21		弧状	単層	—	50	4.0	4.31		
SD	50	17.18C.D		弧状	レンズ状	—	492	22.5	4.17		<SK49
SD	51	17D3.4.5		半円状	単層	—	26	11.0	4.14		
SD	52	17C・17D		V字状	水平	—	188	50.0	3.84		
SD	56	17C11.12		半円状	水平	—	72	17.0	4.06		
SD	57	17B・17C		弧状	水平	—	266	35.0	3.90		
SD	58	17B・17C		弧状増曲	単層	—	120	—	—		
SD	69	14E・15E		半円状	単層	—	54	19.0	3.76		
SD	70	13F・14E・14F		半円状	単層	—	30	11.0	3.81		
SD	73	16F		弧状	水平	—	132	33.0	3.81		>SD74
SD	74	16F		弧状	単層	—	41	5.0	4.10		<SD73
SD	75	16E		弧状	レンズ状	—	112	13.0	4.06		<SK77
SD	76	17D		弧状増曲	単層	—	72	18.0	4.10		
SD	79	18F		弧状	単層	—	67	15.0	4.18		
SD	80	18F		弧状	水平	—	287	16.0	4.12		
SD	82	14F		半円状	斜位	—	64	26.0	3.67		<SX61
SD	87	14F		台形状増曲	水平	116確定	30	23.0	3.72		
SD	89	14F		半円状	単層	—	24	14.0	3.77		土
SD	91	14E・15D・15E		弧状	ブロック状	—	44	7.0	3.90		
SD	94	19F		弧状	単層	—	105	8.0	4.30		
SD	95	21F		弧状	単層	—	327	11.0	4.39	土・陶・石・土師	<SD100a
SD	98	21F		弧状	単層	—	82	5.0	4.40		
SD	100	22F		弧状	単層	—	373	7.0	4.40		>SD95a
SD	110	23F		弧状増曲	単層	—	76	—	—		
SD	118	36F		半円状	単層	—	21	12.0	4.81		
SD	154	23F		弧状	単層	—	47	5.0	4.60		
SD	196	32F・33F・34F		弧状増曲	単層	—	221	17.0	4.82	土・石	<SD200/<SD197a
SD	197	33F		弧状増曲	単層	—	53	10.0	4.88	土	
SD	199	34F		半円状	単層	—	30	17.0	4.80		
SD	200	32F・32G		弧状増曲	単層	—	312	19.0	4.72	土・石・木	>SD196a
SD	201	26F		弧状増曲	レンズ状	—	373	45.0	4.11	石	
SD	205	31F		弧状	単層	—	73	3.0	4.86	土	
SD	209	31F		弧状	単層	—	32	7.0	4.82	土	
SD	212	36F		弧状	単層	—	32	7.0	4.88	土	<P195
SD	213	33G3.4		弧状	単層	—	149以上	21.0	4.77	土・石	
SD	216	35F14		弧状増曲	単層	—	72	—	—		
SD	222	29F・30F		弧状	単層	—	44	18.0	4.69	土・石	>SX333
SD	253	28F		弧状	単層	—	37	8.0	4.67	土	
SD	225	30G		弧状	単層	—	44	5.0	4.79	土	SK330と一連
SD	226	30G		弧状	単層	—	52	7.0	4.81		
SD	227	27F・28・28G		弧状	単層	—	68	10.0	4.65	土	
SD	237	29F		弧状	単層	—	92	15.0	4.73	土・石	>SK264・>SX333
SD	238	29F		弧状	水平	—	330	10.0	4.74		SX333と一連
SD	257	29F		U字状	単層	—	98	34.0	4.51	土・石	
SD	260	29F・30F		弧状	水平	—	32	10.0	4.77		SK259と一連
SD	272	33F・33G		弧状	単層	—	107	9.0	4.84	土	
SD	273	32F		半円状	単層	—	36	20.0	4.78	土	
SD	274	32F・32G		弧状	単層	—	20	8.0	4.85	土	
SD	287	31F		弧状	単層	—	46	13.0	4.50		
SD	288	31F		V字状増曲	水平	—	120	42.0	4.55		
SD	1001	31・32F・G		半円状	単層	—	46	20.0	4.74	土	

遺構観察表

六反田南遺跡遺構観察表 (3)

棟別	番号	グリッド	平面形	断面形	礎土	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面長 (m)	出土遺物	新旧関係
SD	1004	31F		弧状彎曲	単層	—	40	9.0	4.89	土	
SD	1005	31F		弧状	単層	—	24	5.0	4.95		
SD	1010	25F		弧状彎曲	単層	—	16	14.0	4.64		
SD	1012	24F・25F		弧状	単層	—	48	12.0	5.65		
SD	1014	25F		弧状彎曲	単層	—	34	—	—	土	
SD	1016	23F		弧状彎曲	単層	—	85	—	—		
SD	1017	22F・23F		弧状彎曲	単層	—	289	—	—	土・陶	
SD	1019	23F・24F		弧状彎曲	単層	—	114	—	—		
SD	1021	24F		弧状彎曲	単層	—	46	6.0	4.53		
SD	1022	23F		半円状	単層	—	64	13.0	4.44		
P	2	13D14.19	不整形円形	弧状	単層	46	36	8.0	3.97		
P	3	13D9	不整形円形	弧状彎曲	単層	48	34	—	—		
P	4	13D4.5.9.10	楕円形	弧状彎曲	単層	64	28	8.0	3.99		
P	7	14D12	円形	半円状	レンズ状	26	26	10.0	4.13		
P	8	13D5.10	不整形円形	半円状	単層	28	24	14.0	3.90		
P	10	13E5	不整形円形	弧状	単層	33	26	—	—		
P	13	13D25・13E5	円形	弧状	単層	16	12	—	—		
P	14	15D12	不整形	弧状	単層	46	25	—	—		
P	21	15D9	円形	半円状?	単層	30	25	4.0	4.14		
P	22	15D14	楕円形	弧状	単層	52	34	—	—		
P	31	16D11	円形	弧状	単層	48	32	—	—		
P	33	16D6	円形	半円状彎曲	単層	33	24	7.5	4.15		
P	34	16D1.6	円形	弧状	単層	31	31	—	—		
P	38	13D15	円形	弧状彎曲	単層	24	20	—	—		
P	46	13D22	楕円形	弧状	単層	46	32	—	—		
P	62	13E14	円形	弧状彎曲	単層	28	26	—	—		
P	63	13E14	円形	弧状彎曲	単層	24	18	—	—		
P	66	14E11	楕円形	弧状彎曲	単層	30	26	—	—		
P	67	14E16	円形	半円状	単層	36	30	—	—		
P	81	14F3	楕円形	半円状	水平	37	37推定	28.0	3.65	土	
P	84	14F2.3	円形	半円状	単層	45	34以上	15.5	3.79		<SK83
P	111	37F18	円形	弧状	単層	33	27	—	—	土	
P	112	37F17	楕円形	弧状彎曲	単層	54	33	—	—		
P	113	36F15	円形	弧状彎曲	単層	38	30	—	—	土	
P	114	36F15	(円形)	半円状	単層	39以上	31	13.0	4.77		
P	115	36F14	(不整形方形)	半円状	単層	37以上	35	—	—	土	
P	116	37F18	円形	弧状	単層	32	28	—	—	土	
P	119	37F22	円形	半円状	単層	19	18	—	—		
P	120	37G2	円形	半円状	単層	34	25	—	—	土	
P	121	36F19	円形	半円状	単層	24	23	—	—	土	
P	123	36F1	円形	半円状	単層	20	20	—	—		
P	124	36F15	円形	半円状	単層	15	14	—	—	土	
P	125	36F20	円形	半円状	単層	23	20	—	—	土	
P	126	36F12	円形	弧状	単層	44	30	—	—	土	
P	128	36F22.23	(円形)	半円状	単層	29	12以上	—	—		
P	129	36F12	円形	半円状	単層	30	28	—	—	土	
P	130	36F12	円形	半円状	単層	21	19	—	—		
P	131	36F11.12	不整形円形	弧状	単層	58	28	—	—		
P	132	36F11	円形	半円状	単層	26	26	—	—		
P	133	36F11	円形	U字状	単層	26	24	—	—	土	
P	134	36F17	円形	U字状	水平	29	26	50.0	4.42	土	
P	135	36F18	円形	半円状彎曲	水平	33	28	38.0	4.73	土	
P	136	36F18	円形	U字状	水平	28	24	19.0	4.54	土	
P	137	36F12	円形	U字状	単層	20	18	—	—		
P	181	36F11	円形	U字状	単層	26	24	32.0	4.67		
P	182	36F17.18	楕円形	半円状	単層	52	27	—	—		
P	189	23F17	不整形円形	弧状彎曲	単層	53	22	—	—		
P	190	23F25	円形	弧状彎曲	単層	17	16	—	—		
P	191	24F16	円形	弧状彎曲	単層	32	26	—	—		
P	192	24F12	円形	弧状彎曲	単層	18	16	—	—		
P	193	24F12	円形	弧状彎曲	単層	24	22	—	—		
P	194	35G5	不整形	弧状彎曲	単層	42	28	—	—		
P	195	35F14	円形	弧状彎曲	単層	21	20	—	—		
P	202	31F19	円形	(U字状)	レンズ状	43	42	5.0	4.86	土	
P	203	31F24	楕円形	U字状	レンズ状	60	38	28.0	3.63	土	

六反田南通跡道構観察表 (4)

種別	番号	グリッド	平面形	断面形	覆土	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面長 (m)	出土遺物	新旧関係
P	204	31F24	円形	(U字状)	水平	47	44	30以上	4.65以下	土・木	
P	206	31F23	円形	U字状?	単削	40	34	25以上	4.62以下		
P	210	30F25	円形	—	単削	36	27	—	—	土	
P	217	32F24	円形	弧状	単削	40	34	8.0	4.85	土	
P	220	32G3	円形	平円状	単削	27	24	—	—		
P	224	28F9.14	円形	—	単削	42	36	—	—	土	
P	231	27F25	円形	—	単削	27	27	—	—	土	
P	232	31F18	円形	V字状	レンズ状	38	29	35以上	4.5以下	木	
P	236	31F13	円形	平円状?	単削	38	27	40.0	4.65	土	
P	239	28F15	円形	—	単削	48	43	—	—	土	
P	240	29F12	円形	—	単削	39	39	—	—	土	
P	241	27F25	円形	—	単削	26	22	—	—		
P	242	27F24	円形	—	単削	38	32	—	—		
P	243	27F19	円形	—	単削	40	32	—	—		
P	244	27F19	円形	—	単削	28	20	—	—		
P	245	27F20	(円形)	—	単削	43	40	—	—		
P	251	31F22・31G2	楕円形	—	単削	58	46	—	—		
P	252	30F19.20	円形	—	単削	25	25	—	—		
P	253	30F17	円形	—	単削	37	34	—	—		
P	261	29F8	円形	—	単削	47	44	—	—	土	
P	262	30F12.13	円形	—	単削	40	36	—	—	土	
P	263	30F11	円形	—	単削	45	34	—	—		
P	266	29F18	円形	—	単削	33	29	—	—		
P	267	30F12	円形	弧状	単削	79	70	12.0	4.80		>SK255>SD222
P	268	29F12	円形	—	単削	30	28	—	—		
P	269	30F6	円形	弧状	単削	35	26	24.0	4.65		
P	270	29F15・30F11	楕円形	—	単削	73	44	—	—		
P	275	33F6.11	円形	平円状	単削	24	24	—	—		
P	277	33F7.12	円形	U字状	柱状	62	59	101.0	3.99	土・柱類	
P	278	33G2	円形	平円状	単削	24	24	—	—	土	
P	281	33F13	円形	平円状	レンズ状	32	32	18.0	4.84		
P	282	34F21	円形	U字状	単削	28	28	—	—	土・木	
P	283	34G1	(楕円形)	U字状	単削	32以上	26	—	—		
P	284	33F13	円形	平円状	単削	25	22	—	—		
P	285	33F13.18	円形	弧状	単削	19	14	—	—		
P	286	33F12	円形	弧状	単削	24	20	—	—		
P	289	33F14	円形	平円状	単削	21	16	—	—		
P	1002	31F25	円形	U字状	水平	64	50	62.0	5.43	土	
P	1003	31F15	楕円形	V字状	単削	48	36	41.0	4.54	土	
P	1006	32F21	不整形	—	単削	55	48	—	—		
P	1011	25F12.17		弧状彎曲	単削	—	40	3.0	4.73		
SX	61	13E・13F・14F	不整形	弧状彎曲	単削	1325確定	272以上	7.0	3.88	土・陶・木	>SD82・>SK66
SX	64	13E10.15	不整形	弧状彎曲	レンズ状	92	92	9.0	3.94		
SX	72	15D・16.17D.E・18.19E	不整形	弧状彎曲	水平	—	—	36.0	4.03	土	<SK92
SX	90	14F13.18	不整形	平円状彎曲	単削	64	58	23.0	3.59	土	
SX	330	30F・30G	不整形	弧状	単削	184確定	197	7.0	4.79	土	SD225と一連
SX	333	29F	不整形	弧状	単削	462以上	—	12.0	4.73	土・石	>SK265・<SK235 <SD222・237 <SD257
SX	1018	24F	不整形	弧状彎曲	単削	280以上	84	—	—		

遺物観察表

六反田南遺跡 遺物観察表

凡例

- グリッド 遺構出土土層と包含層出土土層が重なった場合は、その位置・層位も記入した。
- 法 量 ( ) は測定値を表す。
- 残存率 口縁部の残存率、口径を36分置して、0.5単位まで計測した。
- 色 調 『新版 標準土色誌』(小山・竹原1994)による。
- 胎 土 胎土中の炭和材を記した。石：石炭；長石：金雲母；黒：黒雲母；角：角閃石；海：海綿骨針；チャ：チャート；白：白色粒子；赤：赤色粒子を表す。
- 調 整 ケズリ：ヘラケズリ；ミガキ：ヘラミガキを表す。また、口：口縁部；頸：頸部；体：体部；底：底部；脚：脚部；受：受部；縁部を表す。
- 付着物ほか 土層の部位名称についての略号は上記と同様である。外：外面；内：内面；下：下手を表す。

六反田南遺跡 古墳時代前期の土器 (1)

層位 No.	出土位置		形状	分類	口径	口径 径高	残存 率/36	色 調				付着物ほか	
	グリッド	層位						胎 土		調 整			内面
								外面	内面	外面	内面		
1	20F19	SK255	赤	C2	16.0	4	長	にがい濁	にがい濁	磨耗	磨耗	体部：スス 口内：一部炭化物	
2	30F12	SK255	赤	B2	10.8	8	長	灰濁	黒濁	ヨコナデ	ヨコナデ		
3	30F12	SK255	黒	B2	12.0	2	5	長・白	にがい濁	にがい濁		口内：一部スス	
4	30O4.5	SK300	赤	C2	15.6	4	長	にがい赤濁	灰濁	ヨコナデ	ヨコナデ		
5	30F25	SK330	高砂				長	赤	赤	ハケ→ミガキ	ミガキ	内面：赤筋	
6	30F11	SK219	3 赤	B2	(13.7)	(2)	長	濁	浅黄濁	ヨコナデ	磨耗	赤・赤筋	
7	30F11	SK219	一 赤		12.8	4	長	赤	にがい濁	ミガキ	磨耗	赤・赤筋	
8	30G2	SK211	1 赤・赤			8(6)	長	赤濁	赤	磨損；ヨコナデ 磨；ハケ	磨損；ヨコナデ	内面：赤筋	
9	30F24	SK218	2 赤	B2	14.0	4	長	にがい濁	にがい濁	ヨコナデ	ヨコナデ		
10	30F23	SK218	2 赤	C2	15.4	4	石・白	濁	赤	口；ヨコナデ 磨；ハケ	ヨコナデ		
11	30F23	SK218	2 赤	C2	18.6	2	全	灰濁	濁	口；ヨコナデ 磨；ハケ	口；ヨコナデ 磨；ハケ	黒濁	
12	30F24	SK218	2 高砂		24.0	4	長・白	赤濁	濁	磨耗	磨耗		
13	30F23	SK218	2 赤			3(2)	長・金	赤濁	灰濁	ハケ	ハケ	内面：縦断面スス	
14	30F25	SK117	赤	C2	21.0	2	石・長・白	にがい濁	にがい濁	ハケ→ヨコナデ	磨耗		
15	30F25	SK117	赤			4	長	灰濁	黒濁	ハケ	ハケ	赤・黒スス	
16	30F25	SK117	高砂				長	赤	浅黄濁	ミガキ；磨損	ハケ	赤・赤筋；遺失1丸40号	
17	30F25	SK198	1 赤		13.2	4	長	にがい濁	にがい濁	磨耗	磨耗		
18	30F25	SK198	1 赤・赤			5(2)	長・白	浅黄濁	灰濁	磨耗	磨耗		
19	37F32	SK122	8 赤	C2	16.0	3	長	灰濁	濁	口；ヨコナデ 磨；ハケ	口；ヨコナデ 磨；ハケ	体部：スス厚く付着	
20	37F32	SK122	5 赤	C2	—	—	長・白	濁	濁	ヨコナデ	ヨコナデ	赤・スス	
21	37F32	SK122	5 赤	C2	—	—	長	黒濁	灰濁	ヨコナデ	ヨコナデ	赤・スス	
22	27G3	SD201	一 赤	C1	18.8	16	長・白	浅黄濁	灰濁	口；ヨコナデ 磨；ハケ	ナデ?	磨耗残い	
23	27G3	SD201	一 赤	C3	28.2	5	長	にがい濁	灰濁	口；ハケ→ヨコナデ 磨；ハケ	ナデ?		
24	20F12,17,18 22	SD201	一 赤			6	長・金	黒濁	黒濁	ミガキ	ミガキ	磨平輪首 内面：赤筋	
25	20F22	SD201	赤			4	石・長・白	明赤濁	明赤濁	上；ミガキ 下；ナデ	上；ミガキ 下；ナデ	体部：スス 体部最大径25.5cm	
26	20F22	SD201	赤			6(2)	長・金・白	灰濁	にがい濁	磨；ハケ 磨；ナデ	体部；ハケ 体部；ハケ	体部：スス 体部最大径25.5cm	
27	30F12	SD212	1 赤				長・白	にがい濁	にがい濁	ヨコナデ	磨耗		
28	27F25	SD227	赤				石・長	にがい赤濁	濁	ミガキ；磨耗	ナデ?；磨耗	赤；赤筋 磨損径5.0cm	
29	20F19	SD257	赤				長	赤	にがい濁	ナデ?；磨内縁	ナデ?	赤；赤筋	
30	20F18	SD257	高砂・ 黒白				長・白	灰濁	にがい濁	ナデ?	ナデ?		
31	20F19	SD257	高砂		(11.6)	3.5	長・白	にがい濁	濁	ミガキ	ミガキ	黒濁	
32	20F17	SD257	高砂				長・濁	赤	黒	ハケ→ミガキ 小片埋込に残る	ミガキ	赤；赤筋	
33	30G3	SD255	赤	C2	23.0	3	長	黒濁	濁	ヨコナデ	ヨコナデ	磨；スス	
34	31F9,14,15	SD1006	赤	C2	29.8	2	石・白	浅黄濁	浅黄濁	磨耗	磨耗		
35	31,32F9	SD1001	高砂		18.6	4	長・金・白	濁	濁	ミガキ	ミガキ	内面：スス	
36		SD213?	赤	C1	17.0	9	長・白	濁	にがい濁	口；ヨコナデ 磨；ハケ	口；ヨコナデ 磨；ハケ	赤；一部スス	
37	33G3	SD213	赤	C2	14.0	4	長	灰濁	にがい濁	ヨコナデ	ヨコナデ	赤・スス	
38	33G4	SD213	1 赤				石・長	浅黄濁	にがい濁	ハケ	ハケ	*最大径24.0cm	
39	33G3.4	SD213	1 赤				長・白	濁	にがい濁	ハケ	ハケ→ナデ	赤；一部/体部内；スス 体部最大径20.0cm 黒濁	
40	33G4	SD213	赤	C2	12.6	5	長・金	にがい濁	濁	ヨコナデ	ヨコナデ		
41	33G3.4	SD213	1 赤	C3	15.2	7	長	濁	にがい濁	ナデ	ナデ	高砂磨損 黒濁	
42	33G3	SD213	赤				長	濁	濁	ハケ→ミガキ	上；ハケ 下；ナデ	赤；赤筋 体部最大径16.0cm	
43	33G4	SD213	高砂		17.6	2	長・金	赤	赤	ミガキ	ミガキ	内面：赤筋	
44	33G4	SD213	赤		(9.0)	2	長	赤濁	赤	ミガキ	ミガキ	内面；赤筋	
45	33G4	SD213	赤				白	濁	磨耗	ハケ→ミガキ	磨損径7.4cm		
46	33G4	SD213	1 高砂			10.5	青・濁・金	赤	にがい濁	ミガキ	磨；ミガキ 磨；ナデ	磨損内縁最大赤筋	
47	33F16	SD196	1 黒	A	19.0	3	長	浅黄濁	浅黄濁	口；磨損縁部 磨；ヨコナデ	ヨコナデ		
48	32F20 + 33F21	SD196	1 黒	H1	14.0	24	長	濁	濁	口；ヨコナデ 磨；ハケ	口；ヨコナデ 磨；ナデ		
49	33F19	SD196	1 黒	C2	12.6	3	21	長	濁	濁	口；ヨコナデ 磨；ハケ	口；ヨコナデ 磨；ナデ	
50	33F16	SD196	1 黒	H1	15.4	6	長・金	灰濁	灰濁	ヨコナデ	ヨコナデ	赤；スス	
51	32F20	SD196	1 黒	B2	20.0	5	白	濁	明赤濁	ヨコナデ	磨耗	磨耗	

## 六反田南遺跡 古墳時代前期の土器(2)

発見 番号	グランド シート	調査 番号	種類	形状	分級	位置 (m)		発見 深さ (cm)	土質	色 澤		装 飾		付随物ほか		
						目標	測高			表面	内面	表面	内面			
52	33P21	SD196	1	瓶	C1	17.0		12	石・金	にのみ・灰焼	浅黄緑	白:ヨコナデ 黒:ハヤ	ヨコナデ	白糸:一筋入ス		
53	33P20	SD196	1	瓶	C1	19.4		5	長・白	にのみ・灰焼	灰黄陶	白:ヨコナデ 浅緑1条	ヨコナデ			
54	33P20	SD196	1	瓶	C1	21.5		5	長・白	灰黄陶	灰黄陶	ヨコナデ	白:ヨコナデ 黒:ハヤ	赤:スス		
55	33P20	SD196	1	瓶	C1	16.2		14	石・金	にのみ・焼	灰黄陶	白:ヨコナデ 黒:ハヤ	ヨコナデ	白糸:一筋入ス		
56	33P21	SD196	1	瓶	C1	17.6		7	浅黄緑	焼	焼	ヨコナデ	白:ヨコナデ 黒:ハヤ			
57	33P15・ 34P16	SD196	1	瓶	C1	16.0		15	長	灰黄陶	灰黄陶	ヨコナデ	ヨコナデ	赤:一筋入ス		
58	33P20	SD196	1	瓶	C2	16.0		5	長・白	にのみ・焼	にのみ・焼	ヨコナデ	白:ヨコナデ 黒:ハヤ			
59	33P20	SD196	1	瓶	C2	14.4		7	長・白	灰黄陶	にのみ・焼	ヨコナデ	ヨコナデ	赤:スス		
60	33P10	SD196	1	瓶	C2	16.0		5	長・白	灰黄陶	にのみ・焼	白:ヨコナデ 黒:ハヤ	白:ヨコナデ 黒:ハヤ	赤:スス		
61	33P6-30	SD196	1	瓶	C2	17.2		32	石・白	浅黄緑	にのみ・焼	白:ヨコナデ 黒:ハヤ	白:ヨコナデ 黒:ハヤ			
62	33P25	SD196	1	瓶	C2	15.8		8	長	にのみ・灰焼	にのみ・灰焼	ヨコナデ	白:ヨコナデ 黒:ハヤ	一筋黒山綫		
63	33P20・ 33P21	SD196	1	瓶	C2	15.2		11	長・白	焼	焼	ヨコナデ	白:ヨコナデ 黒:ハヤ			
64	33P20	SD196	1	瓶	C2	15.8		2	金・白	にのみ・灰焼	灰黄陶	白:ヨコナデ 黒:ハヤ	白:ヨコナデ 黒:ハヤ	内:黒山綫		
65	33P20	SD196	1	瓶	C2	18.0		3	金	灰黄陶	灰黄陶	ヨコナデ	ヨコナデ	白内:スス		
66	33P19.21	SD196	1	瓶	C2	16.0		11	長	灰黄陶	灰黄陶	磨丸	磨丸			
67	33P21	SD196	1	瓶	C2	15.8		4	長・金	にのみ・灰焼	にのみ・灰焼	ヨコナデ	ヨコナデ	白内:スス		
68	33P16	SD196	1	瓶	C2	15.0		5	長	灰黄陶	にのみ・灰焼	白:ヨコナデ 黒:ハヤ	ヨコナデ	赤:スス		
69	33P24	SD196	1	瓶	C2	25.8		2	白	焼	焼	上:ヨコナデ 下:ハヤ	黒山綫			
70	33P20	SD196	1	瓶	C3	15.0		4.5		にのみ・焼	浅黄緑	白:ヨコナデ 黒:ハヤ	白:ヨコナデ 黒:ハヤ	赤:肉付き		
71	33P15	SD196	1	壺か			1.2		陶灰	陶灰	ハヤ	ハヤ	ハヤ			
72	33P20	SD196	1	壺					長・金	にのみ・灰焼	陶灰	ハヤ	ナデ			
73	33P24	SD196	1	壺か			1.8		長	灰黄陶	にのみ・灰焼	ハヤ	ナデ	黒山綫		
74	33P25	SD196	1	壺か			2.3		石・金・赤	にのみ・灰焼	ハヤ	ナデ	ナデ			
75	33P20	SD196	1	壺か			4.2		長	灰黄陶	にのみ・灰焼	ハヤ	ハヤ			
76	33P20	SD196	1	壺か			2		石	陶	にのみ・灰焼	白:昇糸	ナデ			
77	33P21	SD196	1	壺か			6		長	にのみ・灰焼	灰黄陶	白:ヨコナデ 黒:ハヤ	磨丸			
78	33P21	SD196	1	瓶	C3	14.0		8	長	にのみ・灰焼	にのみ・灰焼	白:ヨコナデ(黒) 黒:ハヤ	白:ヨコナデ 黒:ハヤ			
79	33P20	SD196	1	瓶					長・金	灰陶	磨丸或鉄文	ナデ	黒山綫			
80	33P15・ 34P11	SD196	1	瓶	C3	13.8	11.7	2.2	14	石・長	灰黄陶	にのみ・灰焼	白:ヨコナデ 黒:ハヤ	白:ヨコナデ 黒:ハヤ	赤:一筋入ス 黒山綫	
81	33P20	SD196	1	瓶	C3	13.6		4	石・長	灰黄陶	浅黄緑	ハヤ	磨丸	白:ハヤ 黒:ナデ		
82	33P20	SD196	1	瓶	C3	19.0		7	長・金	灰黄陶	浅黄緑	ヨコナデ	ヨコナデ	赤:スス		
83	33P20	SD196	1	壺か					長	灰陶	陶灰	ハヤ	ハヤ			
84	33P20	SD196	1	壺か				4.2		にのみ・灰焼	にのみ・灰焼	ハヤ	ハヤ			
85	33P24	SD196	1	壺か			3.8		長・白	浅黄緑	陶灰	ハヤ	ナデ			
86	33P20	SD196	1	壺か				7	長・青・白	灰黄陶	灰黄陶	磨丸	ナデ	黒山綫赤		
87	33P15・ 34P11	SD196	1	壺			16.4		17	長・金	にのみ・灰焼	にのみ・灰焼	ヨコナデ	ヨコナデ		
88	33P20.25	SD196	1	壺			15.2		9	白	焼	焼	ヨコナデ	磨丸		
89	33P21	SD196	1	壺			9.6		32	長・白	浅黄緑	ハヤ	磨丸	磨丸		
90	33P20	SD196	1	壺					長・白	焼	焼	磨丸	磨丸			
91	33P16	SD196	1	壺					陶	にのみ・灰焼	白:ヨコナデ 黒:ハヤ	ヨコナデ	ヨコナデ	黒山綫:11.7cm		
92	33P15.20・ 34P11	SD196	1	壺か				8.6	石・長・ 金・青	焼	陶灰	ハヤ	上:ハヤナデ 下:ハヤ	ナデ		
93	33P20.21.23・ 32C3	SD196	1	壺			6.4		長・白・赤	赤	にのみ・灰焼	ミガキ	ナデ	赤:赤筋		
94	33P15	SD196	1	壺			8.3		25	白	赤	にのみ・灰焼	ミガキ	ヨコナデ	赤:赤筋	
95	33P20	SD196	1	壺			9.3		14	長	赤	赤	ミガキ	ヨコナデ	内赤:赤筋	
96	33P20	SD196	1	壺					長・白	焼	陶	磨丸	ナデ			
97	33P15	SD196	1	壺			10.9	4.6	長・白	にのみ・灰焼	焼	磨丸	ミガキ	内赤:赤筋		
98	33P15	SD196	1	鉢			10.6	7	白	白	浅黄緑	白:ヨコナデ 黒:ハヤ	ナデ	赤:黒山綫 黒山綫		
99	33P16.21.22 25	SD196	1	鉢			12.6	0.5 6.9	6	長・白	赤	陶灰	ミガキ	磨丸	白:ミガキ 黒:ハヤ	赤:赤筋
100	34P16	SD196	1	壺				3.7		磨丸	灰黄陶	磨丸	磨丸	磨丸		
101	33P20	SD196	1	鉢			13.2		5	長・金	赤	陶	ヨコナデ	ナデ	赤:赤筋	
102	33P15	SD196	1	鉢			11.8		7	長・金	灰黄陶	にのみ・灰焼	ヨコナデ	ヨコナデ	赤:スス	
103	33P14.20	SD196・ 200	1	高杯				11.4		にのみ・灰焼	にのみ・灰焼	ハヤ	ハヤ	ナデ		
104	33P22	SD196	1	高杯			23.0		2	長・白	灰黄陶	陶灰	ミガキ	ミガキ	黒山綫	
105	33P20・ 33C3	SD196	1	高杯	(1.8.0.)			3	長・金	赤	赤	ミガキ	ミガキ	内赤:赤筋		
106	33P15	SD196	1	高杯			19.6		2	長・白	赤	赤	ミガキ	ミガキ	内赤:赤筋	
107	33P22	SD196	1	高杯				10.8	長・金・白	陶灰	陶灰	ミガキ	ナデ	赤:赤筋 黒山綫		
108	33P20	SD196	1	高杯か					長	赤	浅黄緑	ミガキ	磨丸	黒山綫内赤筋赤筋		

六反田南遺跡 古墳時代前期の土器 (3)

発掘 No.	グリッド	出土位置		形状	分類	径線 (mm)		高さ mm	重量 g	色 澤		装 飾		付着物はか
		層位	遺物番号			口径	胴高			表面	内面	表面	内面	
109	33P20・ 33C2	SD196	1	高杯	白灰	21.6		4	長・金	浅黄褐色	沁み	ミガキ	ミガキ	
110	33P21	SD196	1	高杯			12.4		金	赤	沁み	ミガキ	ナデ	頸部内縁部 内縁・赤筋
111	33P20	SD196	1	頸白		8.0		19	石	赤	沁み	ミガキ	ミガキ	内縁・赤筋
112	33P15	SD196	1	頸白		8.4		12	長・金	赤褐色	赤褐色	ナデ	ナデ	内縁・赤筋
113	33P20	SD196	1	頸白		7.6	11.5	26	長・赤	赤	沁み	ミガキ	透孔式かめか 頸部内縁部赤筋	
114	33P23	SD196	1					9.6	金・白	浅黄褐色		ミガキ	頸部内縁部赤筋	
115	33P19	SD200	1	頸	H2	17.8		2	白	沁み	浅黄褐色	ヨコナデ	頸	口内縁・ヨコナデ 体・ナデ
116	33P14.24	SD200	1	頸	H2	17.0		16	長・金	灰黄褐色	横	ヨコナデ	口内縁・ナデ	外縁・一重入
117	33P19	SD200	1	頸	H2	18.0		3	長・白	沁み	浅黄褐色	沁み	ヨコナデ	ヨコナデ
118	33P8	SD200	1	頸	H2	14.2		2	石・長・ 赤・白	横	横	ヨコナデ	ヨコナデ	
119	33P8	SD200	1	頸	C1	14.4		3	長・白	灰黄褐色	浅黄褐色	ヨコナデ	口内縁・ナデ	白縁・一重入
120	33P20	SD200	1	頸	C1	16.0		7	長・赤	沁み	浅黄褐色	沁み	ヨコナデ	頸
121	33P13	SD200	1	頸	C2	14.0		6	長・赤	沁み	浅黄褐色	口内縁・ナデ	ヨコナデ	
122	33P25	SH200	1	頸	C2	18.0		4	白・白	灰黄褐色	灰黄褐色	ヨコナデ	口内縁・ナデ	白縁・一重入
123	33P14	SD200	1	頸	C2	14.5		2	石・金	灰黄褐色	浅黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	白縁・一重入
124	33P19	SD200	1	頸	C2	14.5		6	長	沁み	浅黄褐色	口内縁・ナデ	ナデ	
125	33P13	SD200	1	頸	C2	16.2		3	金・白	灰黄褐色	沁み	口内縁・ナデ	口内縁・ナデ	白縁・一重入
126	33P8	SD200	1	頸	C2 (19.0)			12	石・金	横	横	ヨコナデ	ヨコナデ	
127	33P8.9	SD200	1	頸	C2	17.8		19	長	沁み	浅黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	口内縁・一重入
128	33P8	SD200	1	頸	C2	17.8		4	長・金	沁み	浅黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	白縁・一重入
129	33P8	SD200	1	頸	C3	15.8		3	長・赤	灰黄褐色	浅黄褐色	ナデ	ナデ	
130	33P13	SD200	1	頸		23.6		4	石・赤	浅黄褐色	赤褐色	ヨコナデ	頸	
131	33P24	SD200	1	頸		13.4		7	長	灰黄褐色	赤褐色	頸	頸	
132	33P14.19.24 25・32G5	SD200	1	頸		14.4		15	石・長・白	沁み	浅黄褐色	沁み	ヨコナデ	ナデ
133	33P8	SD200	1	頸		16.3		4	長・白	陶	浅黄褐色	ヨコナデ	頸	
134	33P19・25	SD200	1	頸				15	長	浅黄褐色	頸	頸	頸	頸部径12.0cm
135	33P19	SD200	1	頸				15	長・金	灰黄褐色	灰黄褐色	頸	頸	頸部径12.0cm
136	33P19	SD200	1	頸		9.2		6	長	沁み	浅黄褐色	沁み	ヨコナデ	ヨコナデ
137	33P14	SD196・ 250	1	頸					石・長・赤	赤	陶	ミガキ	ナデ	体部最大径18.0cm 外・赤筋
138	33P19	SD200	1	頸小巻				3.8	長・赤・ 赤・白	灰黄褐色	灰黄褐色	体・ハテ	ハテ	
139	33P8	SD200	1	頸小巻				4.8	石・長・白	灰黄褐色	陶	ハテ	ナデ	
140	33P19.25	SD200	1	頸小巻				6.8	石・長・白	沁み	浅黄褐色	ナデ・ハテ	ナデ	
141	33P19	SD200	1	頸小巻				6.2	長・赤	陶	沁み	ハテ	ナデ	
142	33P14	SD200	1	高杯		16.7			白	赤褐色	横	ミガキ	頸	外・赤筋
143	33P19	SD200	1	結合部					長	赤褐色	灰黄褐色	ミガキ	ハテ	ナデ
144	33P8	SD200	1	頸白		8.4		10	長・赤	赤	沁み	ミガキ	受・ミガキ	透孔式かめか 内縁・赤筋
145	33P8.13.15	SD200	1	頸白		9.3		27	金・白	赤	陶	口内縁・ナデ	ナデ	透孔式かめか 頸部内縁部赤筋
146	33P8	SD200	1	高杯		13.8			長	赤褐色	赤褐色	頸	頸	
147	33P8	SD200	1	高杯		10.0			長・白	浅黄褐色	浅黄褐色	頸	頸	受部内縁部
148	33P8	SD200	1	高杯		12.0			長	赤	沁み	ハテ	ハテ	外・赤筋
149	29P14	SK333	1	頸	C2	15.6		5	長・白	横	横	口内縁・ナデ	口内縁・ナデ	白縁・一重入
150	29P14	SK333	1	頸		16.0		4	長・黒・ 赤・白	陶	浅黄褐色	ミガキ	ミガキ	
151	29P14.19	SK333	1	頸白		18.0		7	長・白	赤	赤	ミガキ	頸	内縁・赤筋
152	29P14.18	SK333	1	結合部					長・金	赤	赤褐色	ナデ	ナデ	内縁・赤筋 受部内縁部11.0cm
153	29P14	SK333	1	結合部		8.1			長・金	沁み	浅黄褐色	ナデ	ヨコナデ	
154	29P8	P501	1	頸	C2	20.8		9	長・白	沁み	浅黄褐色	口内縁・ナデ	口内縁・ナデ	白縁・一重入
155	30P12	P202	1	頸					長	横	横	ヨコナデ	頸	口縁下径14.0cm
156	30P12	P207	1	頸		12.0		9	長	沁み	浅黄褐色	口内縁・ナデ	口内縁・ナデ	
157	31P15	P1003	1	頸	C2	16.8		2	白	陶	沁み	ナデ	ナデ	外縁・一重入
158	31P19	P202	1	頸	C2				長	沁み	浅黄褐色	ヨコナデ	頸	
159	31P19	P202	1	頸白		10.8		9	長・白	陶	浅黄褐色	ミガキ	頸	外・赤筋
160	30P25	部	1	頸	C2	17.0		5	長・金・白	灰黄褐色	沁み	ヨコナデ	ヨコナデ	
161	32P20	部	1	頸	C2	17.0		1	長・金	沁み	浅黄褐色	ハテ	口内縁・ナデ	外縁・一重入
162	30G10	部	1	頸	C2	14.0		4	長	陶	沁み	口内縁・ナデ	口内縁・ナデ	外縁・一重入
163	32P24	部	1	頸	C2	17.0		4	長	灰黄褐色	沁み	ヨコナデ	口内縁・ナデ	外縁・一重入
164	33P15	部	1	頸	C3	12.0		4	長	陶	灰黄褐色	ナデ	口内縁・ナデ	外縁・一重入
165	33P21	部	1	頸	C2	19.8		2	長	横	沁み	ヨコナデ	頸	外縁・一重入
166	32P6	部	1	頸	C2	22.0		2	長・白	沁み	浅黄褐色	口内縁・ナデ	ヨコナデ	外縁・一重入



六反田南遺跡 古墳時代前期の土器 (4)

発見 No.	グリッド	出土位置		形状	分類	法量 (cm)		残存 率 /36	土質	色 澤		装 飾		付着物ほか
		部位	遺構			口径	高さ			底径	表面	内面	表面	
167	30P24	Ⅱ		壺	Ⅱ			3	石	にがい黄緑	赤	ハク	磨粒	内:赤筋
168	30P18	Ⅱ		壺	C2	19.8			石・黒・白	灰黄陶	にがい黄緑	ココナデ	ココナデ	外:黒筋
169	29P25	Ⅱ		壺					石・黒・白	にがい黄緑	陶	ミガキ	ナデ?	頸部緑斑Ox
170	28P21	Ⅱ		壺		17.8		8	石・黒・白	赤	赤	ココナデ?磨粒	ココナデ	内外:赤筋 内外:白筋付近ス
171	30P24・ 31P13.13	Ⅱ		壺		17.8		6	長・金・白	にがい黄緑	灰黄陶	磨粒	磨粒	
172	28P21	Ⅱ		壺		13.0		15	長・白	にがい黄緑	にがい黄緑	白?ココナデ 黒?ハク	白:ココナデ	
173	34P14	Ⅱ		壺					石・長・白	明黄陶	浅黄緑	磨粒	ナデ	体部胎付安帯 体部最大径17.0cm
174	29P25・ 29G5	Ⅱ		壺					長・金・白	にがい黄緑	陶灰	ナデ?	ナデ?	体部胎付安帯に附属文 線粒付スズ本 体部最大径15.2cm
175	33P15	Ⅱ		壺					長・金・白	黄緑	陶灰	磨粒	磨粒	体部胎付安帯に附属文 体部最大径14.2cm
176	29P7	Ⅱ		小笠 高杯か					長・金	赤緑	にがい黄	ミガキ	一部磨粒	外:赤筋 付着物4cm
177	30P23	Ⅱ		鉢か					石・長・金	赤緑	陶灰	磨粒	浅緑3本	ミガキ
178	30P25	Ⅱ		壺			5.2		長	灰黄陶	緑	ナデ?	磨粒	赤筋
179	32P19	Ⅱ		優小壺			6.3		長・金・白	浅黄緑	浅黄緑	ナデ?	ハク	胎付近 底部下ナデ付 黒筋
180	31P22	Ⅱ		鉢?			6.4		長・白	にがい黄緑	浅黄緑	胎付近	ナデ?	
181	31-35E-G 遺土							3.6	長・金・白	にがい黄緑	にがい黄	ナデ?	ハク	
182	31P22	Ⅱ		壺					金・白	赤緑	陶灰	ナデ?	ナデ?	外:赤筋
183	20P20	Ⅱ		壺					石・長・白	赤緑	にがい黄緑	ナデ?磨粒	ナデ?	外:赤筋? つまみ径2.6cm
184	30G1.3.4	Ⅱ		高杯か		18.0		5	石・長・白	赤	赤	ミガキ	ミガキ	内外:赤筋
185	30G3	Ⅱ		高杯か					白	緑	緑	ミガキ	ナデ?	
186	30P25	Ⅱ		胎付 胎付					長・白	にがい黄緑	にがい黄緑	ナデ?	ナデ?	遺孔か破か?
187	29P25	Ⅱ		胎付					長	浅黄緑	浅黄緑	磨粒	磨粒	外:赤筋 遺孔1孔4cm
188	29P25	Ⅱ		胎付					金・白	にがい黄緑	灰黄陶	ナデ?	ナデ?	胎付安帯 遺孔1孔単位不明
189	33P23	Ⅱ		胎付					長・赤	にがい黄緑	ミガキ	ナデ?	ナデ?	外:赤筋 遺孔1孔4cm
190	32P25	Ⅱ		胎付					長・金・白	赤	ハク	ナデ?	ナデ?	内外:赤筋
191	33P15	Ⅱ		胎付					石・長・白	赤陶	陶灰	ミガキ	ナデ?	外:赤筋
192	32G3.4	Ⅱ		遺土か			11.0		長・金・白	赤	にがい黄緑	ミガキ	ハク陶	ハク 黒?ココナデ
193	30P13	Ⅱ		磨粒					長・金	黄陶	にがい黄緑	浅緑1本	ナデ?	

六反田南遺跡 古墳時代後期以降の土器・陶磁器 (1)

No.	グリッド	出土位置		種類	用途	法量 (cm)		残存 率 /36	土質	色 澤			装飾・手法など	制孔方向		
		部位	遺構			口径	高さ			底径	表面	内面			表面	内面
194	35G7	Ⅱ	P1011	黄赤陶	鉢蓋	14.0		2	D	灰	灰	灰	黒点部クロクエリ 白線部クロクエリ	クロクエリ		
195	32G2	Ⅱ		黄赤陶	壺			2	D	灰	灰	灰	格子印き後キキ	同心印あて瓦		
196	24P2.3.7.8	Ⅱ	SD1018	黄赤陶	鉢蓋	13.8		2	C1	灰	灰	灰	白	クロクエリ		
197	17E10・ 18P20	Ⅱ	SX72	黄赤陶	有台鉢	13.8	3.8	9.8	6	C1	灰	灰	灰	胎部胎付へろキリ 白線部クロクエリ	クロクエリ	
198	18P22	Ⅱ・Ⅲ		黄赤陶	有台鉢				3	C1	灰	灰	灰	胎部胎付へろキリ 白線部クロクエリ	クロクエリ	
199	36G4	Ⅱ		黄赤陶	有台鉢			7.2	C1	灰	灰	灰	灰	胎部へろキリ・白線 部クロクエリ	クロクエリ	
200	28P・ 29P6.7.8	Ⅱ		黄赤陶	有台鉢	11.8	4.0	7	1	C1	灰	灰	灰	胎部胎付へろキリ 白線部クロクエリ	クロクエリ	
201	25P12.17	Ⅱ	P1011	黄赤陶	有台鉢	12.4	3.4	9.2	23	C1	灰	灰	灰	胎部胎付へろキリ 白線部クロクエリ	クロクエリ	
202	32P14	Ⅱ		黄赤陶	有台鉢	11.0			5	C2	灰	灰	灰	白	クロクエリ	
203	18E5	Ⅱ・Ⅲ		黄赤陶	有台鉢				1	C1	灰	灰	灰	白	クロクエリ	
204	26P7	Ⅱ		黄赤陶	壺				1	C1	灰	灰	灰	クロクエリ・皮状 文・浅緑3本	クロクエリ	
205	31.32P.G	Ⅱ	SD1001	黄赤 土器	鉢蓋	(16.0)		2	D	黒緑・白	浅黄緑	黄	胎部胎付へろキリ その他クロクエリ	へろミガキ		
206	23P4・ 8.9.10	Ⅱ	SD1016	黄赤 土器	有台鉢			5.8		赤	赤	にがい黄緑	黒	クロクエリ	へろミガキ?	
207	28P8	Ⅱ		土師陶	胎付鉢			5.8		長・黒・ 赤	浅黄緑	浅黄緑	浅黄緑	胎部胎付赤筋付 白線部クロクエリ	クロクエリ	
208	22P23	Ⅱ・Ⅲ		白磁	鉢			4		胎付(胎部・胎 部)	胎付(胎部・胎 部)	胎付(胎部・胎 部)	胎付(胎部・胎 部)	磨り出し高台	クロクエリ	
209	20P9	Ⅱ		青磁	鉢	16.0		2		胎付・灰	胎付(胎部)	胎付(胎部)	胎付(胎部)	胎付(胎部)	胎付(胎部)	胎付(胎部)
210	20P22	Ⅱ		青磁	鉢			5.9		胎付	胎付(胎部)	胎付(胎部)	胎付(胎部)	胎付(胎部)	胎付(胎部)	胎付(胎部)
211	30P11	Ⅱ		白磁	鉢			3.2		胎付	胎付	胎付	胎付	胎付	胎付	胎付
212	27P7	Ⅱ		胎付・ 天目陶	鉢	14.0		2		胎付・灰	胎付(胎部)	胎付(胎部)	胎付(胎部)	胎付(胎部)	胎付(胎部)	胎付(胎部)
213	35P22	Ⅱ		胎付・ 土器	胎付			7.4		胎付	胎付	胎付	胎付	胎付	胎付	胎付
214	28P25	Ⅱ		胎付・ 土器	胎付			7.6		胎付	胎付	胎付	胎付	胎付	胎付	胎付

六反田南遺跡 古墳時代後期以降の土器・陶磁器 (2)

No.	出土位置			種類 口径	口径 高さ	容量 (cc)	残存 率 /36	野土 表面	色 調		遺物・手法など		副産物
	グッド	部位	通稱						内面	外面	内面	外面	
215				甕 灰土	底	9.6	4	緑白・灰白	灰黄 (釉薬)	灰黄 (釉薬)	ロクロナデ	ロクロナデ	
216	20F15	Ⅱ		志野 土器	瓶		8	緑白・灰白	灰白 (釉薬)	灰白 (釉薬)	龍彦陶り出し高台 口縁部印文	ロクロナデ	
217	20F25	Ⅲ		土師器 土器	小瓶	6.4	1.7	4	4	緑白	黒灰	龍彦陶り・赤塗り、口 縁部ロクロナデ	ロクロナデ
218	22-24F	Ⅲ		土師器 土器	瓶		6.2	緑白・粉つ 灰	灰黄	灰黄	龍彦陶り赤塗り、口 縁部ロクロナデ	ロクロナデ	
219	19A18		SI069	Ⅰ	真洲 鉢	23.2			灰	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
220	20F9	Ⅱ・Ⅲ		真洲 鉢	鉢	33.0	3	白・黄	灰	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
221	27F13	Ⅲ		真洲 鉢	鉢	31.6			白・黄	灰	ロクロナデ	ロクロナデ、口縁部 赤塗り、3cmに8本の 筋状文	
222	31F22	Ⅲ		真洲 鉢	鉢		11	白・黄	灰	灰	龍彦木製刷、口縁部 ロクロナデ	ロクロナデ	
223	27G2	Ⅲ		真洲 鉢	鉢		10.6	白・黄	灰白	灰白	龍彦赤塗り、口 縁部ロクロナデ	3.1cmに12本の筋目	
224	16E26	Ⅳ		唐津 瓶	瓶		6.4	4	緑白	灰オリーブ (釉 薬)、埋 (胎土) 赤	龍彦赤塗り出し高台、 口縁部ロクロナデ	ロクロナデ、胎土目 (4箇所)	右
225	27F24	Ⅲ		唐津 瓶	瓶	13.6	4	緑白・灰	灰	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
226	17E8	Ⅱ・Ⅲ		唐津 瓶	瓶		4.3	緑白	明オリーブ灰 (胎土)、灰白 (胎土)	明オリーブ灰 (胎土)	龍彦陶り出し高台、 口縁部ロクロナデ	ロクロナデ	右
227	27G4	Ⅱ		唐津 瓶	瓶		4.7	灰	灰	灰オリーブ (胎 薬)	龍彦陶り出し高台	灰胎、ロクロナデ?	
228	27F7	Ⅱ		越中 瀬戸	瓶		4	緑白	灰	灰黄 (釉薬)、 に赤い埋 (胎土)	龍彦陶り出し高台	胎土に印文	
229	27F7- 29F7	Ⅱ・Ⅲ		越中 瀬戸	壺	11.8	0	灰・に赤い 埋	灰	赤灰 (釉薬)	龍彦陶り出し高台	ロクロナデ	ロクロナデ
230	21F14	Ⅱ・Ⅲ		越中 瀬戸	壺		14.2	灰・に赤い 埋	灰	赤灰 (釉薬)	龍彦赤塗り、体部 ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ
231	19F15	Ⅱ		越中 瀬戸	壺	25.4	3	灰・に赤い 埋	灰	赤灰 (釉薬)	龍彦赤塗り	ロクロナデ	ロクロナデ

六反田南遺跡 石器

No.	出土地点			種 別	石材	重量 (g)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	備 考
	グッド	通稱	部位							
232	27G1-4		Ⅱ	打製石斧	砂岩	189.2	13.9	5.5	2.0	
233	30F6-11	SK264	Ⅱ	貝殻状打石斧	安山岩	131.7	7.3	9.8	1.5	磨打痕あり
234	29F19	SI257	Ⅲ	磨石槌	安山岩	1360.0	13.5	8.8	6.8	上層部・下層部ともに滑しい磨打痕
235	30F19		Ⅲ	磨石槌	砂岩	1560.0	16.6	8.5	6.9	上・下層部に磨打痕
236	33G3	SI213	Ⅲ	磨石槌	安山岩	809.4	15.2	8.4	3.6	磨石としても使用
237	34F12		Ⅲ	磨石槌	安山岩	733.7	9.7	8.4	6.4	内面あり
238	23F22		Ⅲ	磨石槌	安山岩	1044.0	15.0	9.5	4.5	上・下層部には磨打痕
239	32F20		Ⅲ	磨製石斧	蛇紋岩	30.4	3.6	3.9	1.9	矢筈
240	30F6		Ⅲ	管玉工用品 (打製)	緑色燧灰岩	54.8	4.4	6.9	2.0	
241	29F25		Ⅲ	管玉工用品 (原石)	緑色燧灰岩	73.9	4.3	4.8	4.3	
242	35F21		Ⅲ	管玉工用品 (角柱状素材)	緑色燧灰岩	5.9	1.4	2.0	1.5	四角柱状
243	27F25		Ⅲ	管玉工用品 (角柱状素材)	緑色燧灰岩	3.5	1.1	2.5	1.0	四角柱状、磨製
244	36G10		Ⅲ	管玉工用品 (角柱状素材)	緑色燧灰岩	14.8	4.5	1.6	1.7	四角柱状、磨製
245			Ⅲ	管玉工用品 (磨製)	緑色燧灰岩	0.6	2.0	0.5	0.3	四角柱状、磨製
246	33F23	SK218	2	磨石	ヒスイ	32.1	2.2	4.3	1.8	
247	29F12		Ⅲ	磨石	ヒスイ	35.0	2.8	5.3	2.3	
248	37F22	SK122	5	玉工用品 (磨製)	滑石	29.7	4.4	2.3	1.7	多角柱状
249	39F14		Ⅳ	玉工用品 (磨製)	滑石	2.8	1.9	1.3	0.6	四角柱状
250	39F15	SI196	1	砥石	砂岩	2630.0	16.0	15.9	8.1	下半に砥石の磨痕がみられる
251	23F11		Ⅳ	砥石	砂岩	918.7	18.6	14.8	2.0	上層部面に磨打痕
252	30F14		Ⅲ	砥石	瓦片	28.4	4.4	3.0	1.2	
253	26F20		Ⅲ	砥石	瓦片	12.4	5.0	3.0	0.8	

## 六反田南遺跡 木製品

No.	種類	出土位置		測量 (cm)			4取り	材質	備考	
		グリッド	遺構番号	層位	長さ	幅				厚さ
254	下駄	17F6		Ⅱ～Ⅲ	16.7	7.0	1.6	炭化榎目	スギ	小型、無歯
255	片刺板	18F2		Ⅱ	11.5	11.0	1.5	榎目	スギ	木製釘頭板
256	杵	16D4		Ⅱ～Ⅲ	4.0	3.3	3.0	隈り出し	スギ	
257	笮	14F11	SK01	Ⅱ上	16.3	0.5	0.5	隈り出し	スギ	矢筈
258	曲物部材	30F22		Ⅱ	14.7	3.9	0.4	榎目	スギ	曲物部材
259	曲物部材	19F9		Ⅱ	10.4	3.8	0.5	榎目	スギ	
260	板材	31F18	F232	底面	17.3	7.0	1.5	炭化榎目	スギ	
261	板材	32F22		Ⅱ	16.0	12.2	1.3	炭化榎目	サツ属	小孔3ヶ所
262	棒材	15D2		Ⅱ	10.5	2.2	2.1	隈り出し	スギ	横? 杵?
263	杭	22F14	杭160	—	13.7	2.7	2.0	ミカン割り	クスノキ科	
264	杭	30G2	杭279	—	83.1	7.3	6.1	ミカン割り	クリ	よく丸らせてある
265	杭	32F21	杭280	—	50.9	5.0	4.6	ミカン割り	クリ	よく丸らせてある
266	杭	35F18	杭215	—	35.5	7.3	4.2	ミカン割り	サツ属	よく丸らせてある
267	杭	22F22	杭149	—	31.4	4.4	2.0	平割	クリ	よく丸らせてある
268	杭	22F13	杭167	—	24.3	3.8	3.8	丸木取り	クスノキ科	よく丸らせてある
269	板材	32G5	SD200	Ⅱ上	61.6	10.0	1.8	榎目	スギ	
270	柱板	34F21	F282	—	23.3	12.7	8.0	隈り出し	スギ	
271	柱板	31F24	F204	—	23.9	13.0	10.3	隈り出し	スギ	
272	柱板			—	30.8	15.9	12.4	隈り出し	スギ	
273	柱板	32F12	F277	—	93.0	24.0	21.7	隈り出し	スギ	

## 六反田南遺跡 銭貨

報告番号	グリッド	遺構番号	層位	銭貨名	初鋳年	書体	直径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
274	27F19		Ⅱ	草部元貨	1004	武善	2.4	0.1	2.9	加工銭
275	21・23F		Ⅱa	天智元貨	1023	武善	2.5	0.1	3.2	
276	30F13		Ⅱ	元禄通貨	1086	行善	2.5	0.1	2.7	
277	27F24		Ⅱ	享和元貨	1101	善善	2.4	0.1	2.4	

## 六反田南遺跡 金属製品

報告No.	種類	グリッド	遺構番号	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
278	鏃	27F16		Ⅱ	16.9	1.1	0.2	12.6	上部部耳跡さ状
279	鏃	27F16		Ⅱ	12.0	0.7	0.1	4.7	
280	鏃	37G1		Ⅱ	20.7	0.8	0.25	16.5	上部部耳跡さ状
281	押骨 銅百	13F13		Ⅱ?	5.3	0.9	0.7	4.5	銅字跡つよれ
282	押骨 銅百	27G17		Ⅱ	9.3	1.2	1.2	11.4	
283	押骨 銅いYI	27G17		Ⅱ	7.1	1.0	1.0	3.0	

## 六反田南遺跡 土製品

報告No.	種類	グリッド	遺構番号	層位	長さ (cm)	直径 (cm)	重さ (g)	備考
284	土溝	23F21	—	Ⅱ～Ⅲ	7.1	4.2	96.7	
284	土溝	22F12	SK05・06	—	7.7	4.2	95.9	
285	土溝	30F15	—	—	5.2	3.8	65.4	下部開口部、摩耗

遺構観察表

前波南遺跡遺構観察表(1)

種別	番号	グリッド	平面形	断面形	覆土	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面高 (m)	出土遺物	切り合い関係
SK	6	7G7-8-12-13-18	不整形	弧状	削位	333	158	42	3.78		
SK	31	6G15	楕円形	弧状	半掘	141	105	8	3.83		
SK	32	6G19-20	楕円形	弧状	半掘	177	84	6	3.87		
SK	36	7F23-24	楕円形	弧状	半掘	116	69	4	3.84		
SK	37	7G3	楕円形	弧状	削位	242	163	9	3.65		
SK	38	7G15-8G11	楕円形	弧状	半掘	111	88	11	3.78		
SD	2	6G・6G・6F・7F	—	弧状	レンズ状	—	160	7~15	3.80	土・陶・木	
SD	3	7F	—	弧状	削位	—	95	33	3.56	土	
SD	4	4G・5G	—	弧状	半掘	—	—	2	3.91		
SD	5	5F・5G	—	弧状	半掘	720以上	195	5	3.80	土	
SD	7	6F・6G	—	弧状	半掘	590以上	130	4	3.92		
SD	43	8G17	—	弧状	半掘	119以上	110	8	3.74		
SD	44	7F19	—	U字状彎曲	半掘	147	54	23	3.62		
SD	45	7F19-20・24・25	—	弧状	半掘	150	31	10	3.82		
SD	46	7F22-23	—	弧状	半掘	170以上	50	6	3.86		
SD	181	3M24・25・3N4・5	不整形	弧状	半掘	354以上	70	9	4.01		
SD	182	3M19・20	不整形	弧状	半掘	190以上	115	2	4.06		
SD	183	2I	不整形	弧状	半掘	600以上	78	6	3.70		
P	10	6G14	楕円形	弧状	半掘	70	30	2	3.86		
P	11	6G13	楕円形	弧状	半掘	85	53	5	3.86		
P	12	6G13	楕円形	弧状	半掘	55	33	5	3.86		
P	13	6G12-13	楕円形	弧状	半掘	80	65	8	3.80		
P	14	5G5	楕円形	弧状	半掘	65	38	6	3.87		
P	15	6F17	楕円形	弧状	半掘	125	29	6	3.87		
P	16	6G16	楕円形	弧状	半掘	65	33	5	3.80		
P	17	6F18-23	円形	弧状	半掘	31	27	3	3.93		
P	18	6F22-23	楕円形	弧状	半掘	100	32	1	3.96		
P	19	6G6・7	楕円形	弧状	半掘	52	40	5	3.86		
P	20	6F14	円形	弧状	半掘	23	19	4	3.91		
P	21	6F14	楕円形	弧状	半掘	67	29以上	2	3.93		
P	22	6F18	楕円形	弧状	半掘	80	36	1	3.89	陶・土	
P	23	7F13	楕円形	弧状	半掘	27	20	5	3.85		
P	24	7F8-13	楕円形	弧状	半掘	65	55	7	3.80		
P	25	7F17	楕円形	弧状	半掘	68	49	3	3.84		
P	26	7F17	楕円形	弧状	半掘	58	32	5	3.83		
P	27	7F17-18	楕円形	弧状	半掘	98	25	10	3.78		
P	28	7F17-21	円形	弧状	半掘	23	21	7	3.82		
P	29	7F22	楕円形	弧状	半掘	26	30	4	3.86		
P	30	7F22	楕円形	弧状	半掘	40	34	4	3.86		
P	33	6G15-20	楕円形	弧状	半掘	69	23	5	3.86		
P	34	7G12	楕円形	弧状	半掘	85推定	52	3	3.87		
P	35	7G17	楕円形	弧状	半掘	70	28以上	2	3.86		
P	39	6G18	楕円形	弧状	半掘	85	42	5	3.90		
P	40	7G9	楕円形	弧状	半掘	71	42	7	3.83		
P	41	7G10	楕円形	弧状	半掘	57	26	5	3.86		
P	42	7G9	楕円形	弧状	半掘	39	25	10	3.81		
P	47	3N24	楕円形	弧状	半掘	39	31	7	3.96		
P	48	3N24・25	楕円形	U字状	半掘	30	21	15	3.90		
P	49	3N25	円形	半円状	半掘	37	35	10	4.00		
P	50	3N25	楕円形	半円状	半掘	25	20	11	4.02		
P	51	3N25・4N21	楕円形	U字状	半掘	30	26	13	3.95		
P	52	3N20	楕円形	U字状	水平	21	17	17	3.82		
P	53	3N19	楕円形	半円状	半掘	32	20	12	3.98		
P	54	3N19	楕円形	U字状	水平	27	15	7	3.91		
P	55	3N19・24	楕円形	U字状	半掘	24	19	28	3.78		
P	56	3N13	楕円形	半円状	半掘	37	32	11	3.91		
P	57	3N13	楕円形	U字状	半掘	25	22	31	3.77		
P	58	3N14	楕円形	半円状	半掘	25	20	9	4.01		
P	59	3N14	楕円形	U字状	半掘	20	15	18	3.94		
P	60	3N14	円形	U字状	半掘	18	18	16	3.92		
P	61	3N14	楕円形	U字状	半掘	25	21	13	3.95		
P	62	3N9	円形	半円状	半掘	25	24	11	3.98		
P	63	3N9	円形	U字状	半掘	26	25	17	3.95		
P	64	3N9	円形	U字状	半掘	26	23	31	3.78		
P	65	3N9	円形	半円状	半掘	20	18	10	3.93		

前波南道跡道構観察表(2)

種別	番号	グリッド	平面形	断面形	覆土	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面長 (m)	出土遺物	切り合い関係
P	66	3N5	楕円形	平円状	単層	29	17	10	3.98		
P	67	3N5	楕円形	弧状	単層	23	16	6	4.05		
P	68	3N5	楕円形	U字状	単層	80	59	17	3.93		
P	69	3M19	円形	U字状	単層	22	19	16	3.95		
P	70	3M14	楕円形	平円状	単層	31	26	10	3.96		
P	71	3M20	円形	U字状	単層	31	30	32	4.00		
P	72	3M14	楕円形	U字状	単層	47	31	13	3.95		
P	73	3M14	円形	平円状	単層	29	27	7	3.99		
P	74	3M14	楕円形	平円状	単層	24	13	8	4.00		
P	75	3M14	円形	U字状	単層	24確定	22	14	3.92		
P	76	3M14	楕円形	平円状	単層	64	49	13	3.96		
P	77	3M14	楕円形	U字状	単層	33	27	17	4.02		
P	78	3M14	円形	U字状	単層	29	26	15	3.93		
P	79	3M14	楕円形	U字状	単層	30	24	23	3.85		
P	80	3M9	円形	U字状	単層	24	24	16	3.93		
P	81	3M9	楕円形	平円状	単層	23	13	10	3.97		
P	82	4N21	円形	U字状	単層	20	17	13	4.00		
P	83	4N16	円形	U字状	単層	24	21	15	3.96		
P	84	4N16	円形	平円状	単層	22	19	9	4.04		
P	85	4N17	楕円形	平円状	単層	30	17	16	3.96		
P	86	4N22	楕円形	U字状	単層	30	25	14	3.95		
P	87	4N23	楕円形	平円状	単層	24	20	12	3.99		
P	88	4N16	円形	U字状	単層	9	9	12	4.02		
P	89	4N23	楕円形	U字状	単層	25	22	14	3.96		
P	90	4N23	楕円形	U字状	単層	—	22	14	3.95		
P	91	4N23	円形	U字状	単層	23	20	13	3.99		
P	92	4N18	円形	U字状	単層	24	23	18	3.94		
P	93	4N18	楕円形	平円状	単層	78	41	10	4.00		
P	94	4N18	円形	平円状	単層	24	21	11	4.01		
P	95	4N18	円形	U字状	単層	32	30	14	3.99		
P	96	4N13	円形	U字状	単層	23	20	16	4.02		
P	97	4N12	楕円形	U字状	単層	27	22	14	4.02		
P	98	3N13	楕円形	U字状	単層	47	43	9	3.82		
P	99	4N12	楕円形	U字状	単層	33	19	16	4.14		
P	100	4N8	円形	平円状	単層	23	23	11	3.99		
P	101	4N3	円形	平円状	単層	20	17	10	4.06		
P	102	4N9	楕円形	平円状	単層	24	20	7	4.05		
P	103	4N13	円形	平円状	単層	22	22	10	4.00		
P	104	4N13	楕円形	平円状	単層	25	22	12	3.98		
P	105	4N13	楕円形	U字状	単層	30	18	16	3.98		
P	106	4N2	楕円形	平円状	単層	21	17	8	4.05		
P	107	4N1	円形	U字状	単層	32	29	16	3.97		
P	108	4N19	楕円形	U字状	単層	33	26	14	3.95		
P	109	4N19	楕円形	U字状	単層	30	21	14	3.97		
P	110	4N19	楕円形	U字状	単層	33	27	14	3.97		
P	111	4N19	円形	U字状	単層	18	17	18	3.95		
P	112	4N19	楕円形	U字状	単層	21	18	14	3.97		
P	113	4N14・19	楕円形	平円状	単層	26	21	10	4.02		
P	114	4N19	楕円形	U字状	単層	26	20	14	3.97		
P	115	4N14	楕円形	U字状	単層	21	15	17	3.99		
P	116	4N14	楕円形	U字状	単層	19	15	19	3.96		
P	117	4N19	楕円形	平円状	単層	22	18	11	4.02		
P	118	4N19	楕円形	平円状	単層	24	20	10	4.02		
P	119	4N4	楕円形	平円状	単層	22	16	8	4.07		
P	120	4N5	楕円形	U字状	単層	21	16	31	3.93		
P	121	4N9	円形	U字状	単層	20	20	20	3.98		
P	122	4N9	楕円形	U字状	単層	36	27	5	4.12		
P	123	4N4	楕円形	U字状	単層	38	31	12	4.11		
P	124	4N10	楕円形	U字状	単層	20	17	18	3.98		
P	125	4N10	楕円形	U字状	単層	17	17	19	3.98		
P	126	4N15	楕円形	U字状	単層	19	14	25	4.08		
P	127	5N11	楕円形	U字状	単層	28	19	18	3.97		
P	128	5N11	楕円形	U字状	単層	27	24	14	4.03		
P	129	5N11・16	円形	U字状	単層	18	17	14	4.07		
P	130	5N12	楕円形	U字状	単層	28	21	11	4.04		

## 遺構観察表

前波南遺跡遺構観察表(3)

種別	番号	グリッド	平面形	断面形	覆土	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面高 (m)	出土遺物	切り合い関係
P	131	5N11-12	楕円形	U字状	単層	22	16	15	4.05		
P	132	5N11-6	楕円形	平円状	単層	39	32	5	4.11		
P	133	5N11	円形	U字状	単層	20	18	10	4.05		
P	134	3M25	円形	U字状	単層	26	24	13	3.94	土	
P	135	3M4	円形	U字状	単層	22	19	17	3.89		
P	136	3M3	楕円形	U字状	単層	30	24	19	3.83		
P	137	3M3	楕円形	U字状	単層	22	20	17	3.89		
P	138	3M3	楕円形	平円状	単層	23	18	9	3.91		
P	139	3M3	円形	U字状	単層	18	15	17	3.92		
P	140	3M3	円形	平円状	単層	20	27	11	3.91		
P	142	3M3	円形	U字状	単層	18	17	16	3.91		
P	143	3M3	円形	U字状	単層	23	21	16	3.90		
P	144	3L23	楕円形	U字状	単層	24	19	25	3.92		
P	145	3L23	楕円形	U字状	単層	26	19	19	3.88		
P	146	3L23	円形	U字状	単層	26	24	14	3.95		
P	147	3L23	円形	平円状	単層	25	23	12	3.95		
P	148	4N15	楕円形	U字状	単層	21	16	14	4.02		
P	149	3L7	楕円形	U字状	水平	26	20	28	3.71		
P	150	3L12	楕円形	U字状	単層	35	28	27	3.74		
P	151	3L6	円形	U字状	単層	27	26	22	3.70		
P	152	3L6	円形	U字状	単層	21	22	17	3.75		
P	153	3L12	楕円形	平円状	単層	23	15	12	3.81		
P	154	3L12	円形	U字状	単層	20	18	23	3.76		
P	155	3L12・3L17	楕円形	U字状	単層	35	30	33	3.61		
P	156	3L18	円形	U字状	単層	25	22	19	3.88		
P	157	3M2	円形	U字状	単層	23	20	10	3.80		
P	161	4N9	円形	U字状	単層	22	19	17	4.01		
SX	8	6G	不整形	弧状	単層	500	185	8	3.84	土	
SX	9	6F10・15, 7F6・11	(不整形)	弧状	単層	256	94以上	8	3.84	土	
SX	171	5M22・23, 5N2・3	不整形	弧状	単層	—	175	8	4.04	土	
SX	172	5N2・3・4・7・8	不整形	弧状	単層	428	72	5	4.11		
SX	173	5N3・8・9・14	不整形	弧状	単層	270以上	78	4	4.12	土	
SX	174	5N7・8	不整形	弧状	単層	337	98	3	4.15		
SX	175	5N9・10	不整形	弧状	単層	130以上	60	4	4.13		
SX	176	5N4・5・9・10	不整形	弧状	単層	105以上	65	4	4.14		
SX	177	4N5・10, 5N1・6	不整形	弧状	単層	—	82	6	4.10	土	
SX	178	6M	不整形	弧状	単層	490以上	160	1	4.15	土・陶・金	
SX	179	3N・4N	不整形	弧状	単層	1080以上	210	8	4.02	土	
SX	180	4N12・13・17・18	不整形	弧状	単層	—	85	3	4.07		

## 前波南遺跡遺物観察表

凡例

1. グリッド 遺構出土土層と包含層出土土層が重なった場合は、その位置・層位も記入した。
2. 注 記 ( ) は確定値を表す。
3. 残存率 1/3層部の残存率、口径を36分置して、0.5単位まで計測した。
4. 色 調 『新版標準土色帖』[小山・竹原1994]による。
5. 胎 土 胎土中の炭和材を記した。石：石炭；長石：金雲母 黒：黒雲母 角：角閃石 海：海綿骨針 チャ：チャート  
白：白色粒子 赤：赤色粒子を表す。
6. 調 整 ケズリ：ヘラケズリ ミガキ：ヘラミガキを表す。また、口：口縁部 頸：頸部 体：体部 底：底部 脚：脚部 受：受部  
部：部を表す。
7. 付着物ほか 土層の部位名称についての略号は上記と同様である。外：外面 内：内面 下：下手を表す。

## 前波南遺跡 縄文時代の土器

層位 No.	出土位置		形状	法 量 (cm)	残存率 (%)	調 整	胎 土	色 調	胎 土	取 入 物	備 考
	グリッド	層位									
1	2K24	旧河床 5	深鉢	口		内：口内面下部残存	灰黒・黒陶	普通	石・黒・砂粒	内：コゲ	
2	2L4	旧河床 5		胴		外：胴内面下部、前受文	赤・にんげい焼	内：黒陶	普通	石・砂粒	内：コゲ
3	2L4	旧河床 4	深鉢	胴下		外：残存部下、前受文	にんげい焼		普通	石・黒・砂粒	
4	4N16	田	深鉢	口		外：平底竹貫文	赤・灰黄	内：塩灰	良好	石・砂粒	

## 前波南遺跡 弥生時代～古代の土器・陶磁器

層位 No.	出土位置		種類	法 量 (cm)	残存率 (%)	調 整	胎 土	色 調				付着物ほか	
	グリッド	層位						外 面	内 面	外 面	内 面		
5	1H24	旧河床 5	弥生土器 壺	11.8	20.0	砂粒	黒・灰	焼	白・黒・ナデ→ミガキ? 体：黒粒	白・黒・ミガキ 体：黒粒	内：赤・赤粒		
6	2J18-23	田・田	弥生土器 深鉢				黒・砂粒	にんげい焼	黒陶	ハケメ		内：赤・赤粒	
7	2H16	旧河床 5	弥生土器 壺		6.2	26.0	石・黒・砂粒	黒・灰陶	焼	ハケメミガキ		内：赤・赤粒	
8	1H24	旧河床 5	弥生土器 壺	(10.0)	6.0	石・角・砂粒	にんげい焼	にんげい焼	黒コナデ	黒コナデ			
9	2J22	旧河床 6	土器 壺	(14.5)	4.0	石・灰・黒・砂粒	にんげい焼	にんげい焼	黒コナデ	黒コナデ		内：黒陶	
10	3M17	旧河床 4	土器 壺	(15.0)	4.0	石・黒・砂粒	洗黄	洗黄	ミガキ	白・黒・ミガキ 体：ハケ			
11	3M6	旧河床 6	土器 壺			石・金・砂粒	洗黄	洗黄	ミガキ・ケズリ	ナデ			
12	2K22	旧河床 5	土器 壺		2.9	石・黒・砂粒	にんげい焼	にんげい焼	黒コナデ・ミガキ	黒コナデ		赤：スス	
13	2K24	旧河床 5	土器 壺		3.0	石・黒・砂粒	にんげい焼	黒灰陶	ミガキ	ミガキ→ナデ? 体：ハケメ		赤：黒陶	
14	3M22	旧河床 4	土器 壺	9.5	20.0	石・灰・黒・砂粒	にんげい焼	にんげい焼	ミガキ	白：ミガキ? 体：ナデ		内：赤・黒陶	
15	3M22	旧河床 4-5	土器 壺	12.7	5.2	2.7	石・黒・砂粒	にんげい焼	にんげい焼	黒コナデ・ミガキ	黒コナデ・ミガキ		
16	2K24	旧河床 5	土器 高鉢	20.4	33.0	石・角・砂粒	にんげい焼	にんげい焼	ミガキ	ミガキ			
17	3M16	旧河床 5	土器 高鉢	18.3	9.0	石・黒・チャ・砂粒	灰黄	灰黄	ミガキ	黒面付焼			
18	2K24	旧河床 5	土器 高鉢			石・砂粒	にんげい焼	にんげい焼	ミガキ	受：ミガキ 脚：ハケメナデ		赤：黒陶	
19	2F12	SD2	1	高鉢		石・黒・角・砂粒	にんげい焼	にんげい焼	ミガキ?	受：ミガキ 脚：ハケメナデ		赤：黒陶	
20	2K22	旧河床 5	土器 高鉢		5.5	石・黒・砂粒	洗黄	洗黄	黒コナデ・ミガキ?	ヘラケズリ		内：黒陶	
21	3M22	旧河床 5	土器 高鉢			石・チャ・砂粒	焼	にんげい焼	ミガキ・ハケメ	黒粒			
22	2K22	旧河床 5	土器 高鉢			石・角・砂粒	にんげい焼	にんげい焼	ミガキ→ナデ?	ナデ・ミガキ			
23	3M16	旧河床 4-5	土器 高鉢			石・砂粒	灰陶	にんげい焼	黒陶	ミガキ	ヘラケズリ		
24	2L4	旧河床 4	土器 高鉢		10.2	29.0	石・角・チャ・砂粒	焼	黒 黒陶	黒陶	ミガキ	黒コナデ・ハケ?	
25	2K24	旧河床 5	土器 高鉢		13.0	24.0	石・角・砂粒	焼	にんげい焼	ミガキ	黒コナデ		内：黒陶
26	3M22	旧河床 5	土器 高鉢		(18.0)	3.0	石・金・角・砂粒	にんげい焼	にんげい焼	ミガキ	ナデ?		
27	2L4	旧河床 5	土器 壺	(19.2)	2.5	石・黒・砂粒	黒・にんげい焼	黒陶	白：黒コナデ 体：ハケメ	白：黒コナデ 体：ハケメ		赤：スス 内：コゲ	
28	2K22-24	旧河床 5	土器 壺	19.8	33.0	石・砂粒	黒 黒 黒 黒	黒 黒	白：黒コナデ 体：ハケメ	白：黒コナデ 体：ハケメ		赤：スス	
29	2K2-3	旧河床 5	土器 壺	17.3	22.9	5.5	21.0	石・黒・砂粒	黒 黒	白：黒コナデ 体：ハケメ	白：黒コナデ 体：ハケメ		赤：黒陶 内：赤中下コゲ
30	1H19.2H16-20	旧河床 5	土器 壺	17.4	19.0	石・金・チャ・砂粒	にんげい焼	にんげい焼	黒コナデ・ハケメ	白：黒コナデ 体：ハケ		白：スス	
31	3M12-13	旧河床 4	土器 壺	(15.1)	3.0	石・角・砂粒	黒 黒	黒 黒	白：黒コナデ・ハケメ	白：黒コナデ・ハケメ		内：黒陶	
32	2L9	旧河床 5	土器 壺	(10.0)	8.0	石・金・チャ・砂粒	にんげい焼	にんげい焼	ナデ?	ナデ? 黒コナデ			
33	5G6	田	弥生土器 高鉢			石・角・砂粒	灰 灰	灰 灰	赤々メ	ロクロナデ			
34	7G17	田上	弥生土器 高鉢			砂粒	灰白	灰白	ロクロナデ				
35	6G19	田上	弥生土器 高鉢		(15.9)	2.0	砂粒	灰白	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
36	5N2	田上	弥生土器 高鉢		(12.2)	1.0	砂粒	灰白	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
37	6G10	田上	弥生土器 高鉢			砂粒	灰 灰	灰 灰	平打タケ→タケ	鈍色内打て具			
38	1H3-15-20-24	旧河床 3-5	弥生土器 有台鉢	13.1	4.8	7.8	18.0	石・砂粒	灰白	灰白	底：ロクロナデ 体：ヘラケズリ		赤：鉄屑(ヘラケズリ?)
39	2F17	SD2	1	弥生土器 有台鉢		8.0	石・砂粒	灰白	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
40	5N9	田	弥生土器 高鉢	(11.8)		2.0	砂粒	灰 灰	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
41	5N6	田	弥生土器 高鉢	(11.0)		4.0	石・砂粒	灰 灰	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
42	1M2A.13	旧河床 4-5	弥生土器 長頸瓶		9.2	0.5	石・砂粒	灰 (黒土) 灰 (黒土)	灰 (黒土) 灰 (黒土)	白：ロクロナデ 体：黒陶		自然蝕	

遺物観察表

前波南遺跡 中・近世の土器・陶磁器

No.	グランド	出土位置	遺物	種類	形状	法 量 (cm)		出土層	色 遣		装飾・手法など		特 記	付随物ほか
						口径	高さ		外面	内面	外面	内面		
43		表土		白磁 陶	10.7		4.5	黒目・灰白	灰白(釉)・灰白(釉土)					口先だけ
44	2N3	Ⅱ		青磁 甕	11.2		5.5	黒目・灰白	灰オリーブ(釉)・灰オリーブ(釉)					内：片立罎りによる文様
45	2K4	Ⅱ-Ⅲ		青花 瓦			4.8	黒目・明青灰(釉)	明青灰(釉)					高台部分：無胎 見込：無文
46	4N19	Ⅲ		黒目・灰赤 陶	9.0		2.0	黒目・灰白	黒赤(釉)	黒赤(釉)				胎裏面入
47	2N9	Ⅱ		黒目・瓦器 陶		7.2	黒目・灰白	浅黄(釉)・灰白(釉土)	浅黄(釉)	付け高台				胎裏面入
48	4N12	Ⅲ		土器		5.0	砂粒	黒灰	黒灰	底：凹貼形罎り	ロクロナデ	右		
49	2J3	Ⅱ-Ⅲ		黒陶 甕			心・長・厚・砂粒	黒灰	黒灰	平行筋	無文で具			胴部：丸印取陶文
50	2M18		日河塚 1	黒陶 すり鉢			心・長・砂粒	黒灰	黒灰	ロクロナデ	ロクロナデ			口内：2条の浅線
51	2L10	Ⅲ		黒陶 すり鉢			心・長・厚・砂粒	灰	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			口縁部(前期) 5cmに7条の浅文
52	2N25	Ⅲ		黒陶 すり鉢			心・長・厚・砂粒	灰白	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ			口縁部(前期) 5cmに6条の浅文、部打単位不明(期2.5cm以上11条以上)
53	2N12	Ⅲ		黒陶 すり鉢			心・砂粒	黒青灰	黒青灰	ロクロナデ	ロクロナデ			口縁部(前期) 5cmに5条の浅文
54	4N3	Ⅲ		黒陶 すり鉢			心・砂粒	灰白	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ			口縁部(前期) 5cmに5条の浅文
55	4G8	Ⅲ		黒陶 すり鉢			心・砂粒	灰	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			部打単位不明(期2.5cm以上10条以上)
56	4N17	Ⅱ		黒陶 すり鉢			心・砂粒	灰白	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ			部打単位不明(期2.5cm以上9条以上)
57	4G21・22	Ⅲ		黒陶 甕		10.5	心・長・厚・砂粒	黒青灰	明青灰	後・ロクロナデ(期1)	ロクロナデ			
58	4N1	Ⅲ		黒陶 甕か壺			心・砂粒	灰	黒緑灰(自然釉)	平行筋	無文で具			
59	2L15・10	Ⅱ-Ⅲ		黒陶 甕か壺			黒・砂粒	灰	灰白	平行筋	無文で具			
60	2M6	Ⅲ		黒陶 甕か壺			黒・砂粒	灰白	灰白	平行筋	無文で具			
61	2N20	Ⅲ		黒陶 甕か壺			黒・砂粒	灰	灰	平行筋	無文で具			
62	4N2	Ⅲ		黒陶 甕か壺			黒・砂粒	灰	灰	平行筋	無文で具			
63	4G8	Ⅲ		黒目 甕			長・砂粒	灰オリーブ(自然釉)	黒青灰	ぬじたて技法	ぬじたて技法			
64	2N13	Ⅳ		黒目 鉢			砂粒	灰白	灰白	ぬじたて技法	ぬじたて技法			部打単位不明(期2.5cm以上10条以上)
65	6M15	Ⅲ		青津 甕		6.5	黒目・灰赤・白・砂粒	灰オリーブ黒(釉)・灰オリーブ黒(釉)・灰オリーブ黒(釉)	灰白(釉土)	にみい(罎土)	押し出し高台			
66	7P25	櫻丸		青津 陶		4.6	黒目・灰白	浅黄(釉)	浅黄(釉)	押し出し高台				高台内：無胎
67	2N8	Ⅲ		黒中瀬戸 陶	6.7	2.5	4.0	6.0	黒目・灰白	黒赤黒(釉)・灰白(釉土)	黒赤黒(釉)	底：高台		
68	2N12	Ⅲ		黒中瀬戸 甕			4.5	黒目・浅黄・黒	浅黄(釉)・浅黄(釉)・浅黄(釉)	黒赤(釉)・浅黄(釉)・浅黄(釉)				見込：印取文
69	2J21	Ⅲ		黒中瀬戸 香鉢	14.0	3.8	6.5	2.0	黒目・灰	黒赤黒(釉)	黒赤黒(釉)			
70	6M14	Ⅲ		黒中瀬戸 甕			5.9	心・砂	にみい(黒陶)・にみい(黒陶)	にみい(黒陶)				底高：浅線2条
71	6M	表土		瓦葺 磁鉢			心・砂粒	黒灰	黒灰					部打単位不明(期2.7cm以上10条以上)

前波南遺跡 土製品

No.	部材	グランド	遺物	部位	長さ (cm)	直径 (cm)	重さ (g)	備 考
72	土玉	4N8		Ⅱ	2.00	3.40	20.4	
73	土片	3I22	日河塚	6	4.60	3.20	44.1	
74	土片	3K1		Ⅱ	5.90	4.30	93.1	表：黒陶
75	土片	3N4		Ⅱ	6.45	2.80	45.1	表：黒陶

前波南遺跡 鉄貨

No.	グランド	遺物	部位	銭型名	銭跡年	書体	直径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
76	6M18	5X178	1	開元通寶	621	隷書	2.42	0.10	1.9	
77	5N12			永樂通寶	1408	楷書	2.50	0.13	2.6	
78	7M7		Ⅱ	永樂通寶	1408	楷書	2.40	0.11	2.0	

前波南遺跡 金属製品

No.	部材	グランド	遺物	部位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
79	押付 銅白	4N5		Ⅱ	6.75	1.05	2.40	6.0	銅製、火印不十分
80	押付 銅白	3M17		Ⅲ-Ⅳ	6.95	0.90		2.9	銅製、押印不十分
81	押付 銅白	4N6			4.75	0.90	1.00	6.5	銅製か、裏面をヤブにし丸彫あり



## 前波南遺跡 石器

No.	出土地点			種別	石材	重量 (g)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	備考
	グロッド	遺構	層位							
82	2J24	旧河原	4-5	石鏃	真砂	1.6	2.05	3.45	0.40	刃部無磨蝕、先端部欠損
83	2K23	旧河原	5	縄文鏃	安山岩	237.6	10.20	10.30	1.85	
84	2K2	旧河原	5	縄文鏃	安山岩	52.6	6.55	8.25	0.90	
85	3N-4N	旧河原	日-Ⅱ	縄文鏃	安山岩	63.8	7.05	7.00	1.15	
86	3M19	旧河原	1	有茎石鏃	安山岩	906.6	9.45	6.15	6.05	遺跡1.7-2.2cm
87	3N6	旧河原	4	磨石鏃	安山岩	2415.0	19.95	12.65	6.15	下部が大きく磨蝕、正面・裏面磨蝕、先端部・右側面打刃
88	2L9	旧河原	5	磨石鏃	ヒスイ	86.7	6.05	3.50	2.20	下部磨蝕打刃
89	2K22	旧河原	5	磨石鏃	ヒスイ	145.6	7.00	5.45	1.95	上面・下面・左側面・右側面打刃
90	3M22	旧河原	4	未成品	磨石	731.6	15.40	7.40	6.25	裏面に欠け、下部部を磨石か、磨石製砥石の未成品か
91	3M1	旧河原	4	砥石鏃	磨石	1925.0	13.00	11.15	3.65	大断面側面・右側面中央に長さ方向の溝
92	5C1-2	旧河原	Ⅲ	砥石鏃	磨石	233.4	13.70	4.65	3.75	上面・裏面・右側面・左側面打刃、磨石遺跡存在
93	7C1周辺	旧河原	Ⅲ	砥石鏃	真砂	13.6	4.00	2.95	0.95	上面・上面・左側面側面を磨石、磨石遺跡存在

## 前波南遺跡 木製品

報告No.	種別	出土位置			法部 (cm)			本高	厚	備考
		グロッド	遺構	層位	長さ	幅	厚さ			
94	櫛	2H16,23	旧河原	4層	100.6	12.0	2.4	櫛目	欠片	
95	田んぼ	1H3,1H4	旧河原	3層	45.4	26.0	4.2	櫛目	欠片	
96	大木片	2J23,24	旧河原	3層	18.7	4.3	1.2	櫛目	欠片	
97	刀片	1H15	旧河原	4層	23.6	3.2	1.3	櫛目	欠片	
98	陶物貯り	3K21	旧河原	4層	12.4	3.1	1.5	櫛目	欠片	
99	櫛	1H15	旧河原	3層	4.3	7.2	0.9		イスイキ	
100	曲物 (蓋)	2K4	旧河原	3層	12.5	11.7	0.9	櫛目	欠片	
101	曲物 (底/蓋)	2K10	旧河原	3層	10.5	10.9	0.6	櫛目	欠片	
102	曲物 (底/蓋)	3L21	旧河原	3層	13.0	0.7	0.7	櫛目	欠片	
103	用漆不明 (榫状)	2L5	旧河原	5層	59.8	3.6	0.8	櫛目	欠片	
104	用漆不明 (寸状)	1H10	旧河原	5層	70.0	2.6	2.6	志仲丸跡	ヒノキ科	
105	用漆不明 (榫状)	2K19	旧河原	5層	37.6	3.2	2.7	側面内縁	欠片	
106	用漆不明 (榫状)	1I	旧河原	4層	15.0	3.8	1.4	櫛目	欠片	
107	用漆不明 (榫状)	1I	旧河原	4層	14.3	3.8	1.5	櫛目	欠片	
108	用漆不明 (榫状)	2J19	旧河原	4層	27.0	3.5	1.8	櫛目	欠片	
109	用漆不明 (寸状)	2N2	旧河原	5層	64.2	4.0	1.6	櫛目	欠片	
110	用漆不明 (有面榫状)	2I6	旧河原	3層	78.0	41.0	1.4	側面丸跡	欠片	
111	用漆不明 (榫状)	3N12	旧河原	4層	75.2	2.6	2.6	側面丸跡	欠片	
112	用漆不明 (榫状)	2K2	旧河原	5層	85.8	6.0	6.0	側面丸跡	欠片	
113	用漆不明 (角榫状)	2K2-3	旧河原	3層	21.3	3.0	2.5	榫材	欠片	
114	用漆不明 (榫状)	3M22	旧河原	5層	77.8	4.0	2.4	櫛目	欠片	
115	用漆不明 (榫状)	2K5	旧河原	4層	34.1	2.4	1.6	榫材	欠片	
116	用漆不明 (榫状)	1I	旧河原	4層	26.8	1.6	0.8	櫛目	欠片	
117	用漆不明 (榫状)	2L6	旧河原	4層	65.6	3.8	1.8	櫛目	欠片	
118	用漆不明 (榫状)	3M14,15	旧河原	4-5層	13.8	2.0	0.8	櫛目	欠片	
119	用漆不明 (角榫状)	2K14	旧河原	4層	63.8	3.8	2.2	榫材	欠片	
120	用漆不明 (榫状)	7M6	遺構		9.4	1.4	0.8	櫛目	欠片	
121	用漆不明 (榫状)	3M17	旧河原	4層	59.8	2.2	0.4	櫛目	欠片	
122	用漆不明 (榫状)	1H20	旧河原	3層	44.8	1.2	0.5	櫛目	欠片	
123	用漆不明 (榫状)	2N7	旧河原	4層	22.4	1.6	1.0	櫛目	欠片	
124	用漆不明 (榫状)	1H24	旧河原	5層	60.4	3.8	2.2	側面丸跡	欠片	
125	用漆不明 (榫状)	2K18	旧河原	4層	38.6	4.3	1.6	櫛目	欠片	
126	用漆不明	2K20	旧河原	4層	36.2	3.0	5.0	櫛目	本質?	
127	用漆不明	1I	旧河原	4層	24.0	19.6	4.8	櫛目	本質	
128	用漆不明	2K13	旧河原	4層	24.0	12.8	8.6	榫材	本質?	
129	用漆不明	3M17,18	旧河原	4,5層	73.8	19.8	7.4	榫材	トネリコ属 本質?	
130	建築部材	3M17,18	旧河原	4,5層	204.4	10.4	3.6	櫛目	欠片	
131	建築部材	2K18	旧河原	4層	121.0	12.4	3.0	櫛目	欠片	
132	建築部材	3N4	旧河原	5層	64.6	5.2	1.8	櫛目	欠片	
133	建築部材	9G16	旧河原	Ⅳ上層	37.6	7.2	1.4	櫛目	欠片	
134	建築部材	2K15	旧河原	3層	126.0	7.4	1.6	櫛目	欠片	
135	建築部材	2L4	旧河原	4層	146.0	8.5	2.0	櫛目	欠片	
136	建築部材	2K14	旧河原	5層	144.4	7.2	5.4	榫材	欠片	
137	建築部材	3M22	旧河原	5層	85.0	6.4	2.0	櫛目	欠片	
138	建築部材	3M22	旧河原	5層	112.8	8.0	4.2	榫材	欠片	
139	建築部材	3M18	旧河原	4層	147.0	8.0	5.6	榫材	欠片	
140	建築部材	2K13	旧河原	4層	55.4	6.6	1.4	櫛目	欠片	
141	建築部材	3K20	旧河原	4層	119.8	15.2	5.4	櫛目	欠片	
142	建築部材	2K25	旧河原	5層	176.0	6.0	3.6	榫材	欠片	
143	建築部材	2J24	旧河原	3層	119.2	3.4	3.2	榫材	欠片	
144	杭	2J19	旧河原	5層	130.6		6.2	志仲丸本	欠片	
145	杭	1H3	旧河原	4,5層	195.2	14.6	12.0	志仲丸本	欠片	
146	杭	3M12,17	旧河原	4層	256.4	12.4	11.2	志仲丸本	欠片	
147	杭	2I	旧河原	3-4層	68.6	8.0	3.6	櫛目	欠片	
148	用漆不明	9P20	SD2	1層	201.0	18.0	16.0	平截木	本質?	
149	杭	9G13	杭列	Ⅴ層	46.4	4.8	4.2	榫材	欠片	
150	杭	9G19	杭列	Ⅴ層	36.2	6.0	2.8	櫛目	欠片	
151	杭	3M17	旧河原	4-5層	53.2	10.2	7.2	榫材	欠片	
152	編組製品	3M17,22	旧河原	4層	30.5	28.1	0.2	櫛目	欠片	
153	木簡	2J23	旧河原	3層	10.8	2.5	0.2	櫛目	欠片	

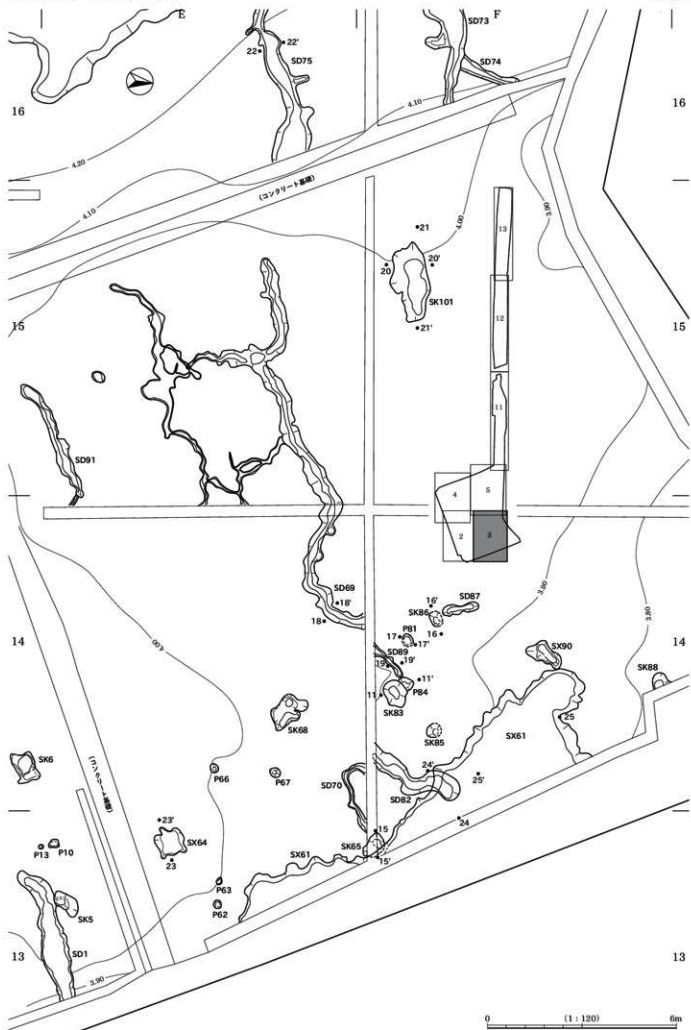
# 図 版

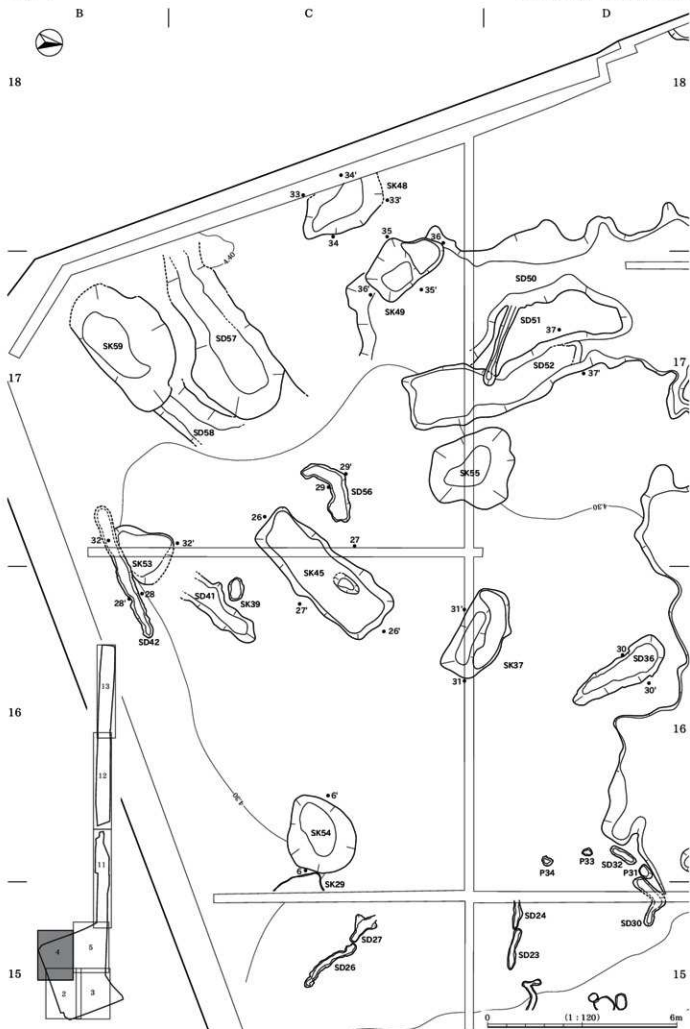
## 凡 例

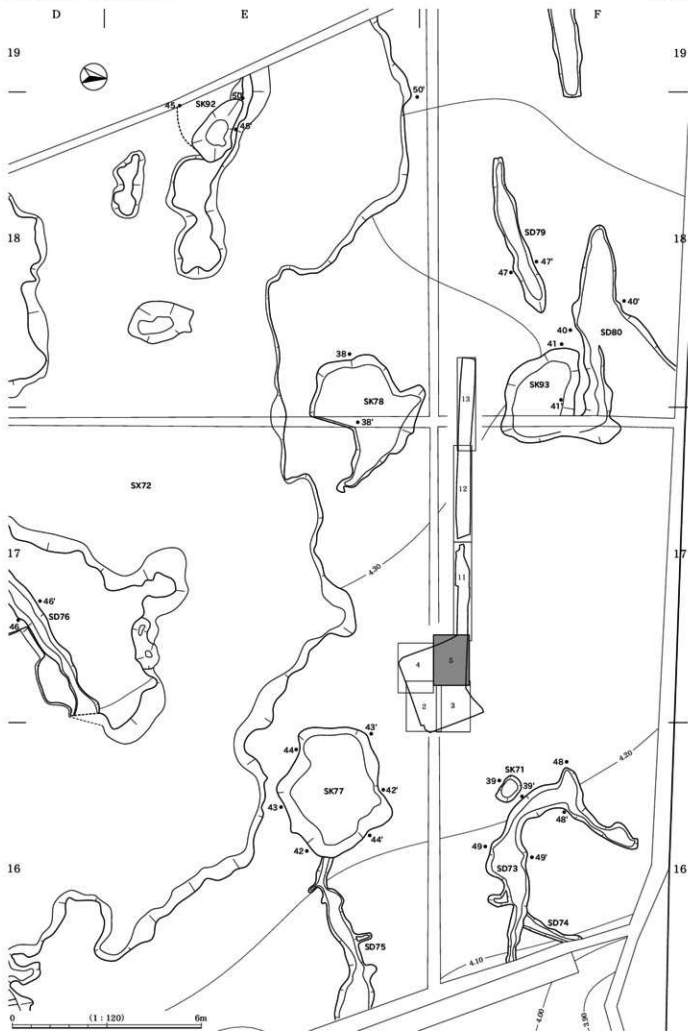
- 1 トーンについては、図版中に凡例を示した。
- 2 土器・陶磁器の断面は須恵器を黒塗りで表現し、その他は白抜きとした。
- 3 土器の口縁部実線を中心線両端で切っている場合は、口径を推定復元したものである。
- 4 木製品の木目は、木取りを表示したものであり実際の年輪幅とは異なる。
- 5 遺物の写真図版の番号・縮尺は、図面図版と統一してある。

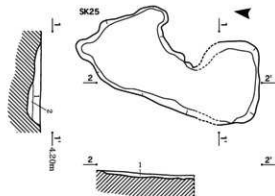




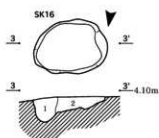




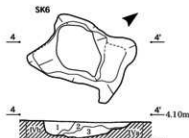




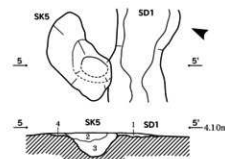
SK25  
1 黄灰色粘土 炭化物・砂を含む粘性中しまり面  
2 暗黄灰色粘土 炭化物を多量に含む粘性中しまり中



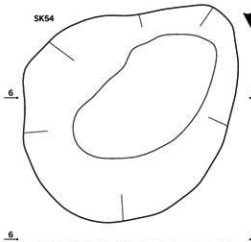
SK16  
1 黄灰色粘質土 炭化物をごく少量含む砂を多量に含む粘性中しまり中  
2 オリーブ褐色砂 黄灰色粘土が塊状に散じる粘性弱しまり面



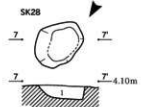
SK6  
1 黄灰色粘土 炭化物をごく少量含む砂を多く含む粘性中しまり中  
2 黄灰色粘質土 オリーブ褐色砂が塊状に散じる粘性弱しまり面 田圃に対応  
3 オリーブ褐色砂質土 粘性弱しまり中



SD1・SK5  
1 黄灰色粘質土 炭化物・砂を含む粘性中しまり中田圃に対応  
2 黄灰色土 炭化物をごく少量含む砂を多量に含む粘性弱しまり中  
3 黄灰色粘質土 オリーブ褐色砂が塊状に散じる粘性弱しまり面  
4 黄灰色土 炭化物・砂を含む粘性弱しまり中



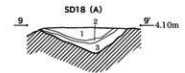
SK54  
1 黄灰色粘土 IVa層に対応  
2 黒褐色粘土 炭化物多量に含む  
3 にぶい黄褐色粘土 IVa層に近似



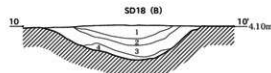
SK28  
1 暗黄灰色粘土 炭化物を少量含む田圃がベース



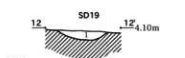
P7  
1 黄灰色土 黄灰色粘土がブロック状に散じる炭化物をごく少量含む粘性中しまり面 田圃に近似  
2 黄灰色粘質土 炭化物・砂を含む粘性中しまり面 田圃に対応  
3 黄灰色粘土 炭化物をごく少量含む砂を多量に含む粘性弱しまり中



SD18 (A)  
1 黄灰色粘土 IVa層がベース  
2 炭黄灰色粘土 植物遺体を多量に含む  
3 暗黄灰色粘土



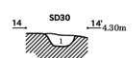
SD18 (B)  
1 黄灰色粘土 明黄灰色粘土が散じる IVa層がベース  
2 明黄灰色粘土 黄灰色粘土が散じる  
3 A-1層と同じ  
4 A-2層と同じ



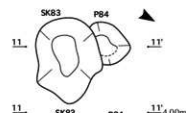
SD19  
1 暗黄灰色粘土 オリーブ褐色粘土が散じる



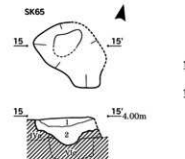
SD27  
1 黄灰色粘土 オリーブ褐色粘土が塊状に散じる粘性強しまり面 炭化物を少量含む田圃に対応



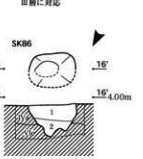
SD30  
1 黄灰色粘土 オリーブ褐色砂が塊状に散じる粘性強しまり面 田圃に対応



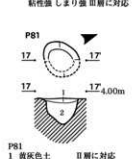
SK83・P84  
1 暗黄灰色粘土 粘性強しまり面 (SK83)  
2 黄灰色土 オリーブ褐色砂が塊状に散じる粘性弱しまり面 (P84)



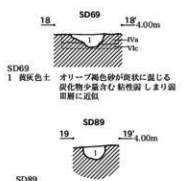
SK65  
1 黄灰色粘質土 炭化物・砂を含む粘性中しまり中  
2 黒褐色土 暗オリーブ褐色砂が塊状に散じる炭化物少量含む粘性弱しまり面



SK86  
1 黄灰色粘土 オリーブ褐色粘土がブロック状に散じる(下部に多い)粘性中しまり中  
2 黄灰色粘質土 粘性中しまり面



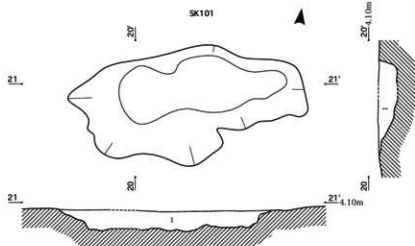
P81  
1 黄灰色土 田圃に対応  
2 黄灰色粘質土 オリーブ褐色粘土がブロック状に散じる粘性中しまり面 田圃がベース



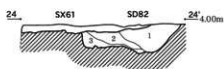
SD69  
1 黄灰色土 オリーブ褐色砂が塊状に散じる炭化物少量含む粘性弱しまり面 田圃に近似

SD89  
1 黄灰色土 オリーブ褐色砂が塊状に散じる粘性弱しまり面





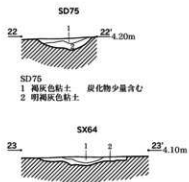
SK101  
1 黒褐色粘土 炭化物・植物遺体を含む 粘性強 しまり強



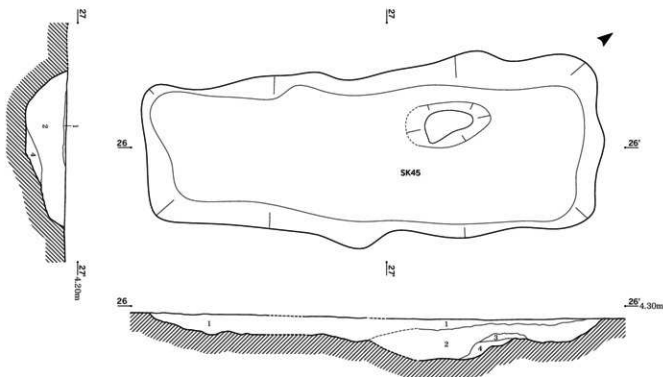
SD82  
1 黄灰色粘土 下部にオリブ褐色砂質シルトがブロック状に混じる 粘性中 しまり強  
2 オリブ褐色シルト 黄灰色土が塊状に混じる 粘性弱 しまり中  
3 黒褐色砂質シルト 同色の粘土が塊状に混じる 粘性弱 しまり中



SX61  
1 黒褐色砂質シルト 炭化物少量含む 砂多く含む 粘性弱 しまり弱



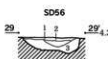
SX64  
1 黄灰色シルト オリブ褐色砂が塊状に混じる 粘性弱 しまり弱  
2 黄灰色粘質土 オリブ褐色砂が塊状に混じる 粘性弱 しまり弱



SK45  
1 黒褐色粘土 明オリブ灰色粘土が混じる 炭化物を含む Ⅲ層に対応  
2 にぶい黄灰色粘土 炭化物含む IVa層に近似  
3 浅黄灰色粘土 腐炭  
4 明オリブ灰色シルト



SD42  
1 黒褐色粘質土  
黄灰色粘質土がブロック状に混じる 炭化物を含む 粘性中 しまり中

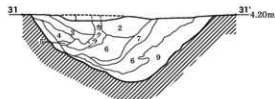
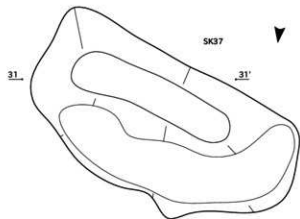


SD56  
1 暗灰黄灰色粘土 IVa層に対応  
2 灰黄色シルト  
3 灰黄色粘土 炭化物含む

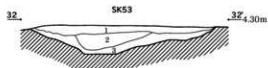


SD35  
1 黄灰色粘土 炭化物を多量に含む (特に下部) 粘性強 しまり強 IVa層に対応  
2 暗灰黄灰色粘土 炭化物を多量に含む 上面に炭化物、植物遺体が多とまって出土 粘性強 しまり中

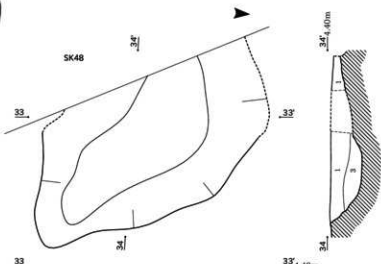
0 (1:40) 2m



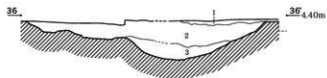
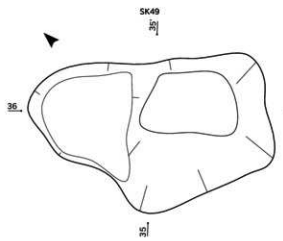
- SK37
- 1 黒褐色粘土 明オリーブ灰色粘土が混じる 炭化物を含む 田圃に対応 IVa層に対応
  - 2 オリーブ灰色粘土
  - 3 オリーブ灰色シルト
  - 4 オリーブ灰色粘土 炭化物を含む
  - 5 明オリーブ灰色粘土
  - 6 オリーブ灰色粘土 6層より色調やや暗い
  - 7 オリーブ灰色粘土 オリーブ灰色粘土が混じる
  - 8 灰色オリーブ砂



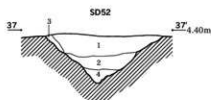
- SK53
- 1 明灰色粘土 炭化物を含む
  - 2 灰赤色粘土 しまり弱
  - 3 明灰色粘土



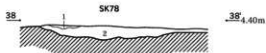
- SK48
- 1 にぶい黄色粘土 炭化物少量含む
  - 2 明オリーブ灰色粘土
  - 3 にぶい黄色粘土 植物遺体含む



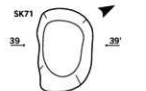
- SK49
- 1 黒褐色粘土 明オリーブ灰色粘土が混じる
  - 2 にぶい黄色粘土 炭化物含む
  - 3 黒褐色粘土 植物遺体含む



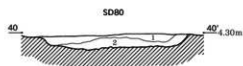
- SD52
- 1 褐色粘土 明灰褐色粘土、炭化物が混じる
  - 2 陶灰色粘土
  - 3 褐色砂
  - 4 灰褐色粘土



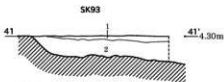
- SK78
- 1 灰色粘土 炭化物少量含む
  - 2 灰色粘土



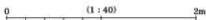
- SK71
- 1 黄灰色粘土 IVa層に対応

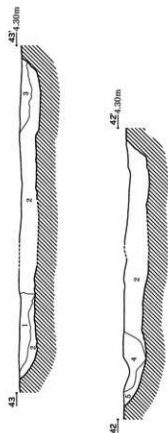
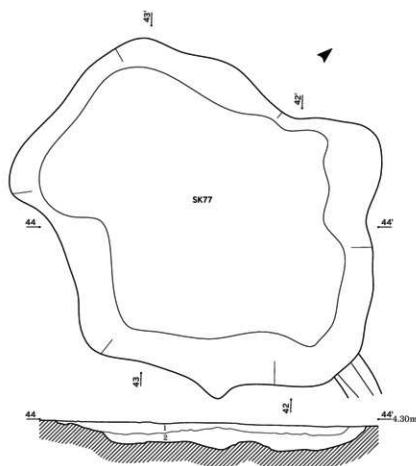


- SD80
- 1 灰白色粘土 黄灰色粘土が混じる
  - 2 灰白色シルト にぶい黄色砂が混じる

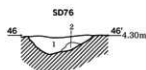
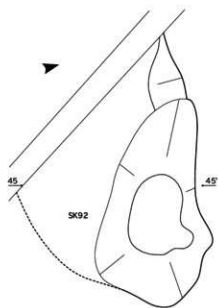


- SK93
- 1 黄灰色粘土
  - 2 灰白色シルト にぶい黄色砂が混じる

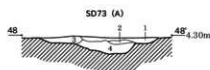




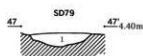
SK77  
 1 淡黄色シルト 黄灰色粘土が凝じる IVa層に対応  
 2 淡黄色シルト  
 3 黄灰色粘土  
 4 におい褐色シルト質粘土  
 5 明褐色シルト質粘土



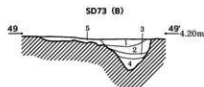
SD76  
 1 おい褐色シルト質粘土  
 2 明褐色シルト質粘土



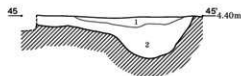
SD73 (A)  
 1 灰白色シルト 黄灰色粘土が凝じる  
 2 黄灰色粘土  
 3 浅黄色シルト 灰白色シルトが凝じる  
 4 灰白色粘土



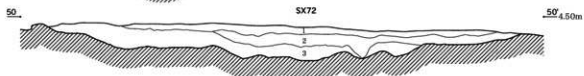
SD79  
 1 灰白色シルト質粘土



SD73 (B)  
 1 A-1層と同じ  
 2 浅黄色砂 灰白色シルトが凝じる  
 3 A-2層と同じ  
 4 A-4層と同じ  
 5 浅黄色砂 灰白色シルトが凝じる

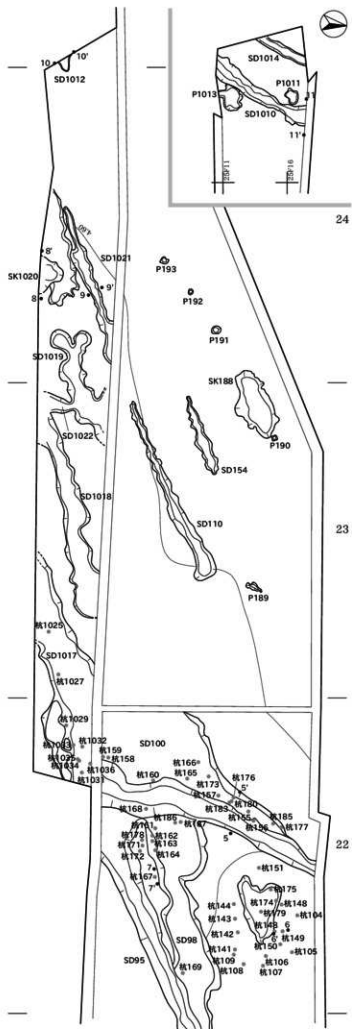
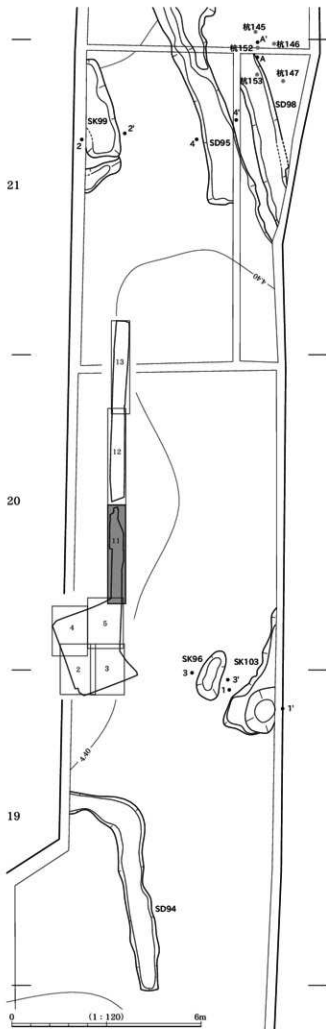


SK92  
 1 黄灰色粘土 炭化物少量含む II層に対応  
 2 灰白色粘土 植物遺体含む

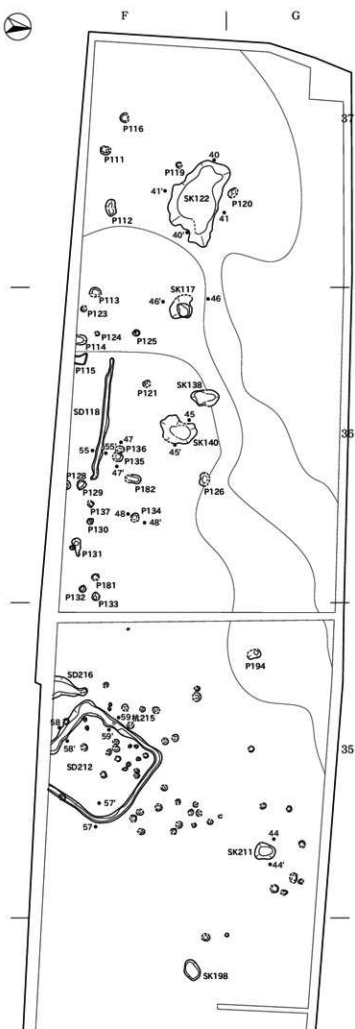
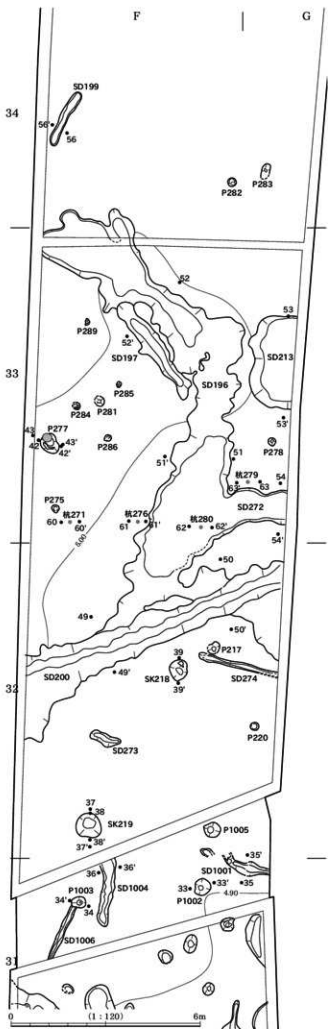


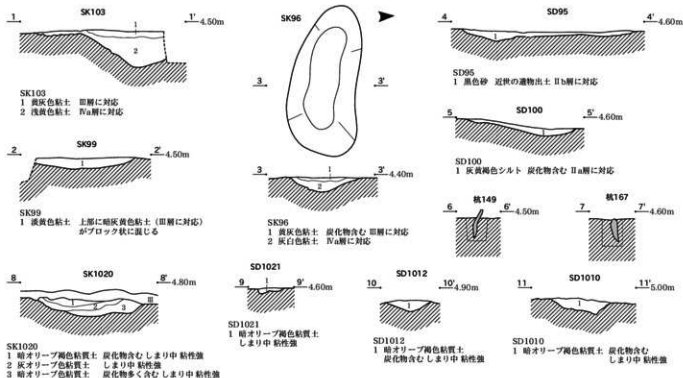
SX72  
 1 黄灰色粘土 炭化物含む III層に対応  
 2 黄灰色粘土 植物遺体含む  
 3 灰白色粘土 IVa層に対応

0 (1:40) 2m



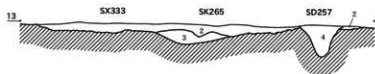
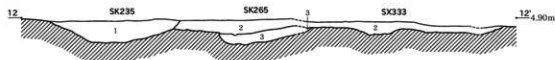
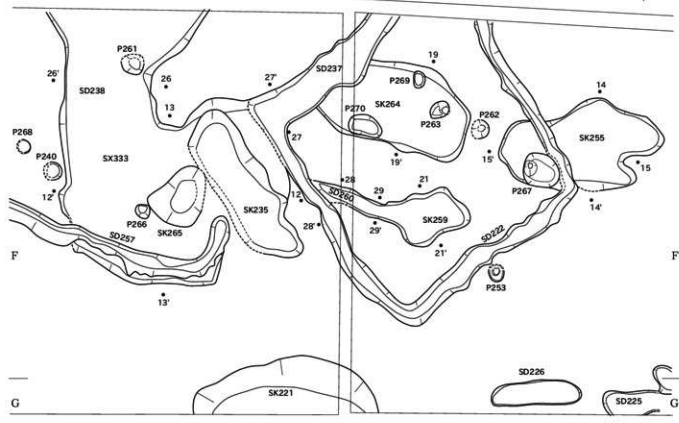






29

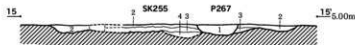
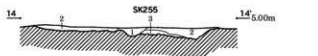
30



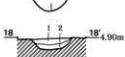
SX333・SK265・SD257

- 1 灰白色粘土 炭化物多く含む (SK235)
- 2 灰白色粘土 浅黄色砂が部分的に入る Ⅰ層に比べて粘性弱い (SX333)
- 3 灰白色粘土 炭化物少量含む (SK265)
- 4 黄灰色粘土 炭化物少量含む (SD257)

0 (1:40) 2m

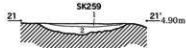


SK255・P267・SD222  
 1 灰黄色粘土 浅黄色砂 (V層に対応) が混じる 田圃がベース (P267)  
 2 黄灰色粘土 1層に比較して粘性強い (SK255)  
 3 灰黄色粘土 浅黄色砂が多く混じる (SK255)  
 4 (SD222)

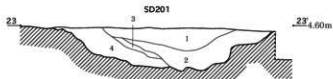


SK229  
 1 黒褐色粘土 炭化物多く含む  
 2 灰白色粘土 炭化物含む

SK264  
 1 黄褐色粘土 炭化物含む 田圃に対応  
 2 浅黄色砂 黄褐色粘土がブロック状で混じる



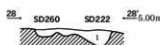
SK259  
 1 黄褐色粘土 炭化物含む 田圃に対応  
 2 浅黄色砂 黄褐色粘土がブロック状に混じる V層がベース



SD201  
 1 黄灰色粘土 田圃に対応  
 2 黄灰色砂質土  
 3 灰白色粘土  
 4 黄灰色粘土



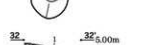
SD237  
 1 灰黄色粘土 浅黄色砂 (V層に対応) が多く混じる 田圃がベース



SD260・SD222  
 1 黄褐色粘土 浅黄色砂が混じる 炭化物含む 田圃に対応



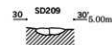
P232  
 1 灰白色粘土 炭化物少量含む



P203  
 1 黒褐色粘土 炭化物含む  
 2 灰白色粘土 炭化物少量含む



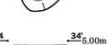
SD260  
 1 黄灰色粘土 炭化物少量含む 田圃に対応  
 2 浅黄色砂 黄灰色粘土が混じる



SD209  
 1 黄灰色粘土 田圃に対応



P1002  
 1 暗灰黄色粘質土 炭化物混じりしより弱粘性強  
 2 オリーブ黒色粘質土 砂粒混じりしより中粘性強



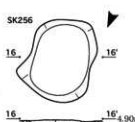
P1003  
 1 灰色粘質土 炭化物含む しまり中粘性強



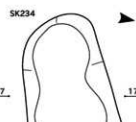
SD1001  
 1 灰オリーブ色粘質土 砂粒・炭化物混じりしより中粘性強



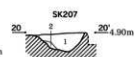
SD1004  
 1 灰オリーブ色粘質土 砂粒混じりしより中粘性強



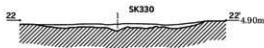
SK256  
 1 黄褐色粘土 炭化物含む 田圃に対応



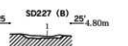
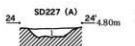
SK234  
 1 灰黄色粘土 田圃に対応  
 2 浅黄色粘土 IVa層に近接するがやや暗い色調



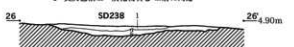
SK207  
 1 黄灰色粘土 黄灰色粘土が混じる  
 2 灰白色砂



SK330  
 1 黄灰色粘土 部分的に灰白色粘土が混じる 炭化物含む 田圃に対応



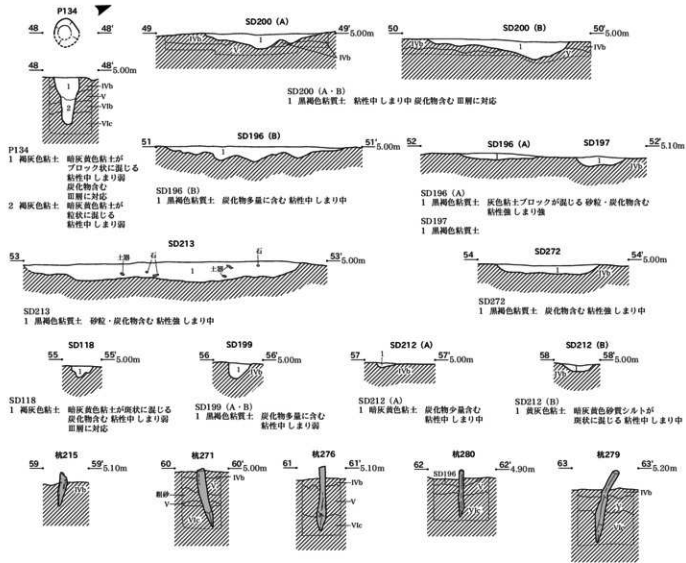
SD227 (A・B)  
 1 黄灰色粘土 炭化物含む 田圃に対応



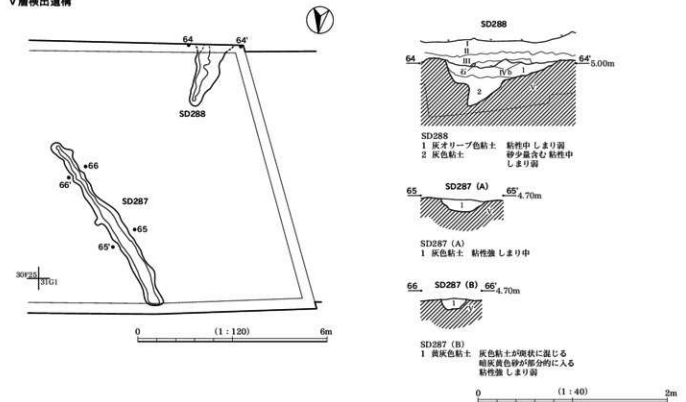
SD238  
 1 黄褐色粘土 炭化物含む 田圃に対応  
 2 浅黄色砂 黄褐色粘土がブロック状で混じる



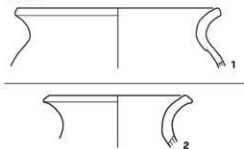




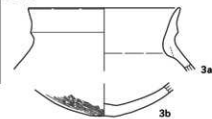
V層検出遺構



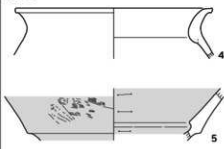
SK235



SK255



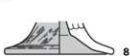
SK330



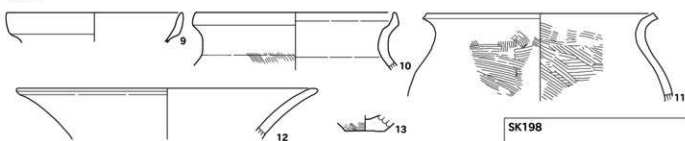
SK219



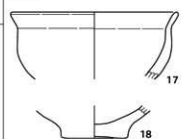
SK211



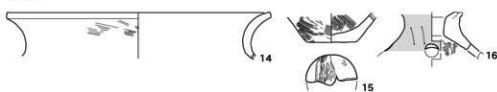
SK218



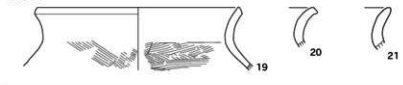
SK198



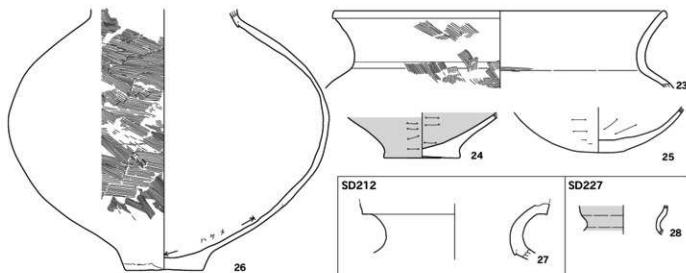
SK117



SK122



SD201



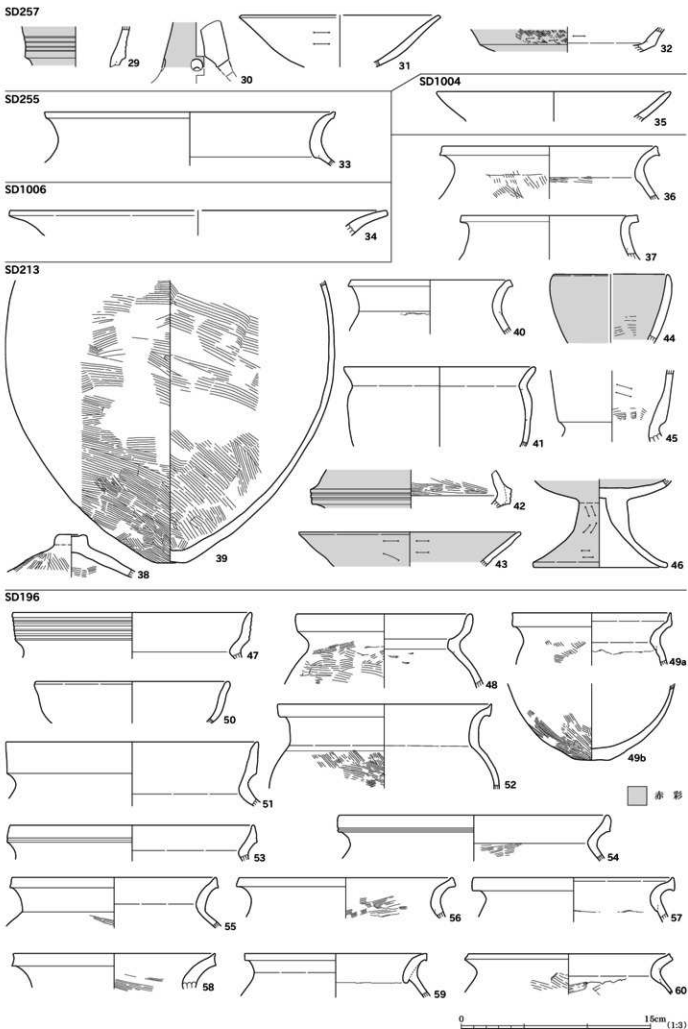
SD212



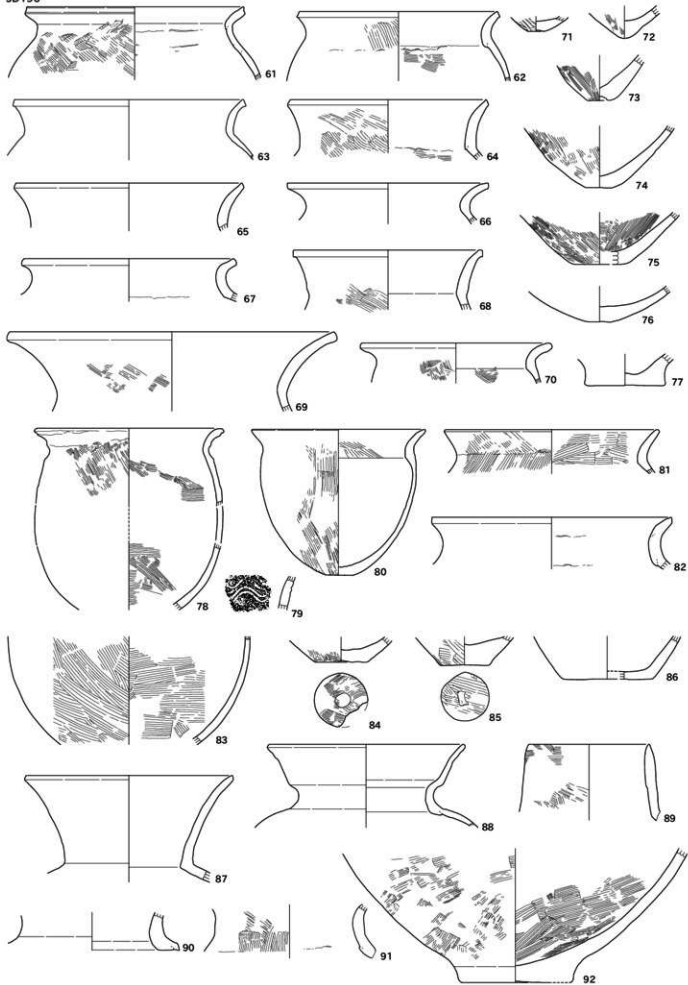
SD227



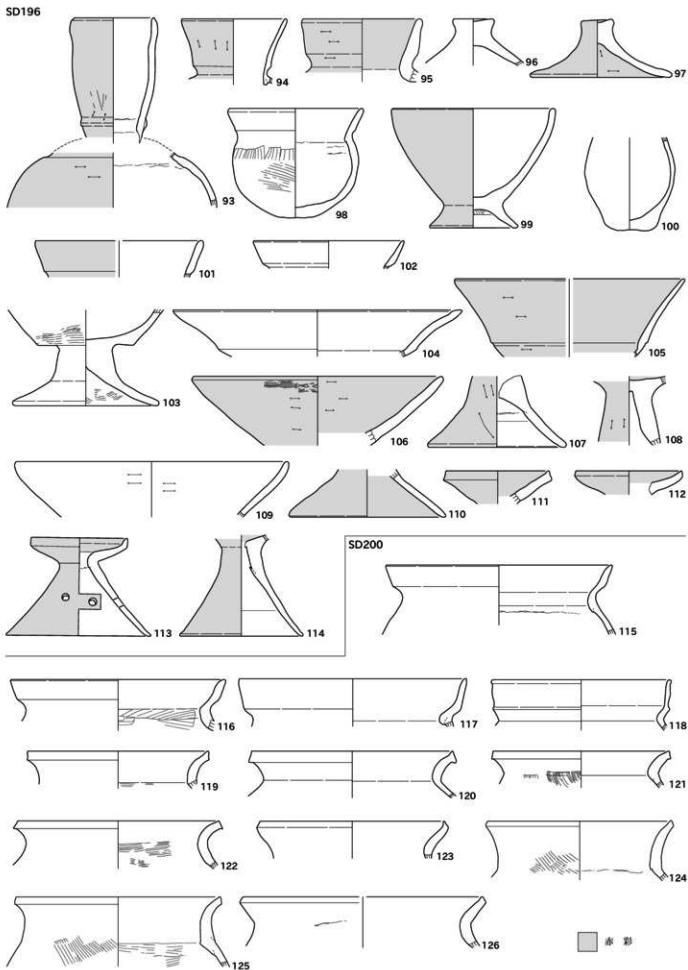
赤影



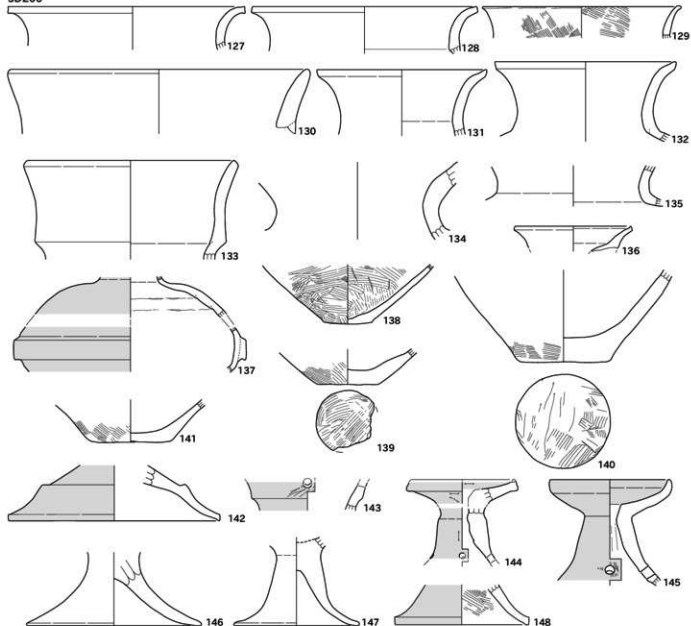
SD196



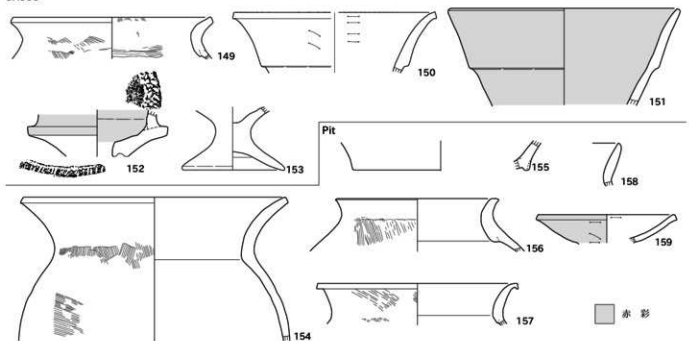
0 (79) 10cm (1:2) 0 (その他) 15cm (1:3)



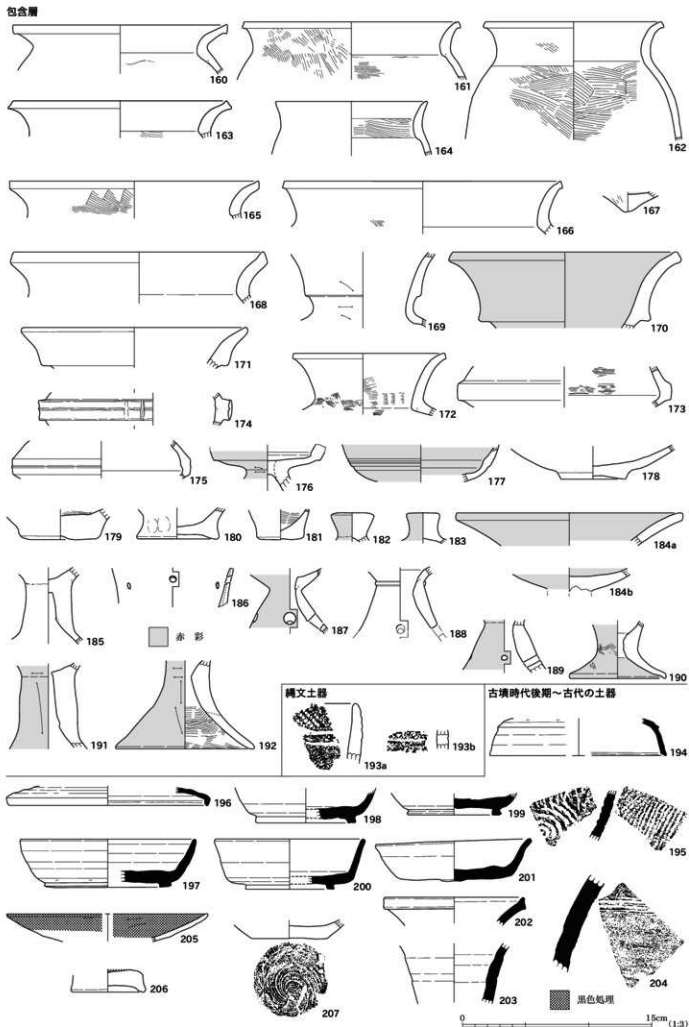
SD200



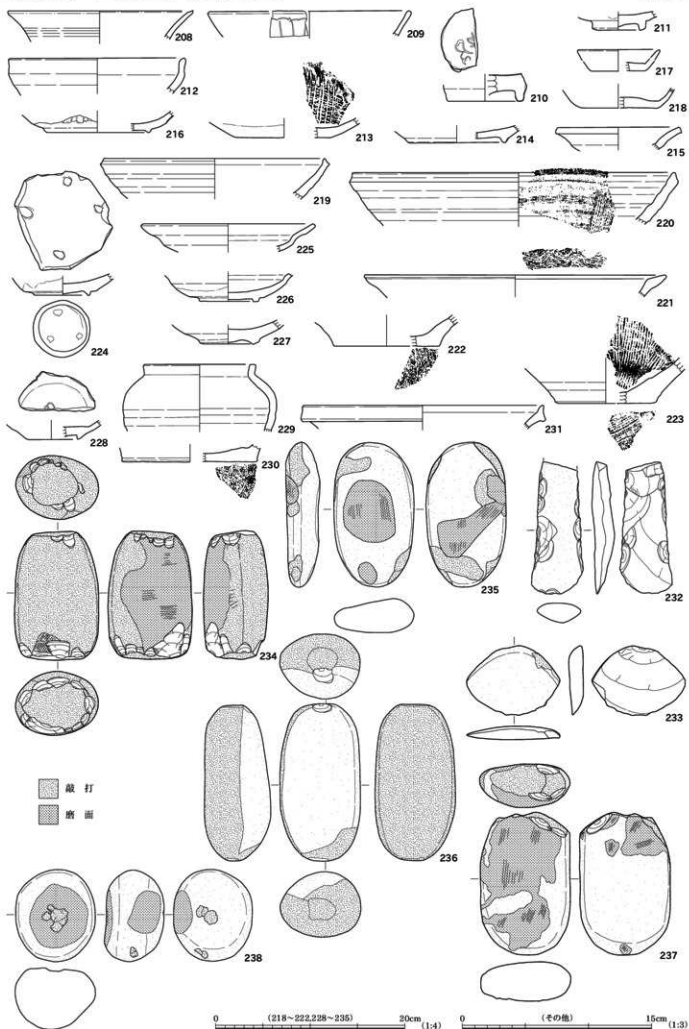
SX333

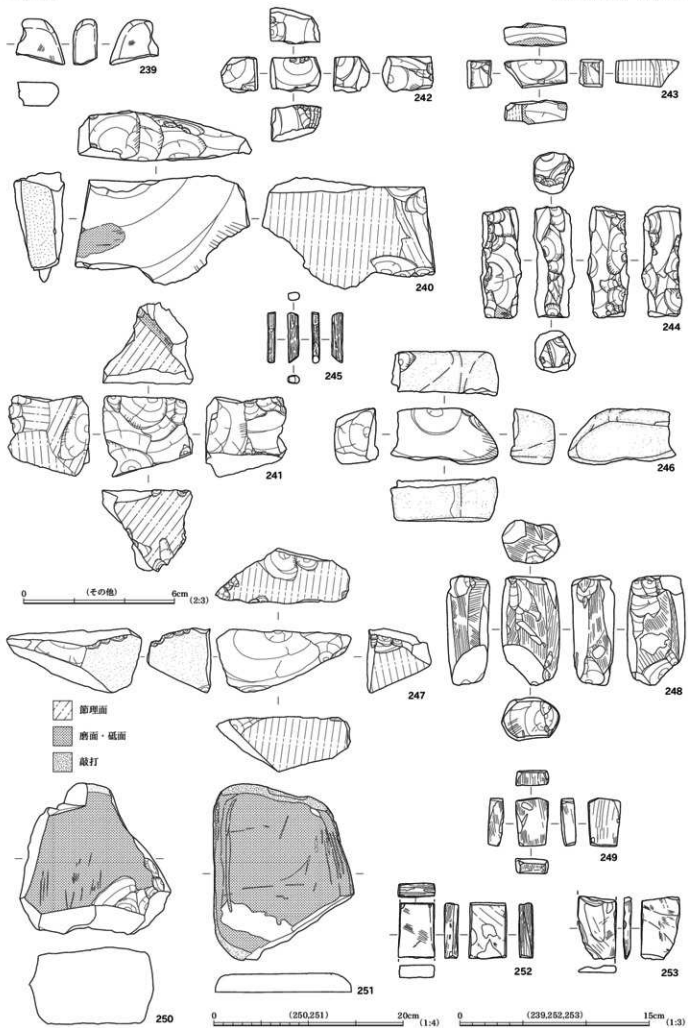


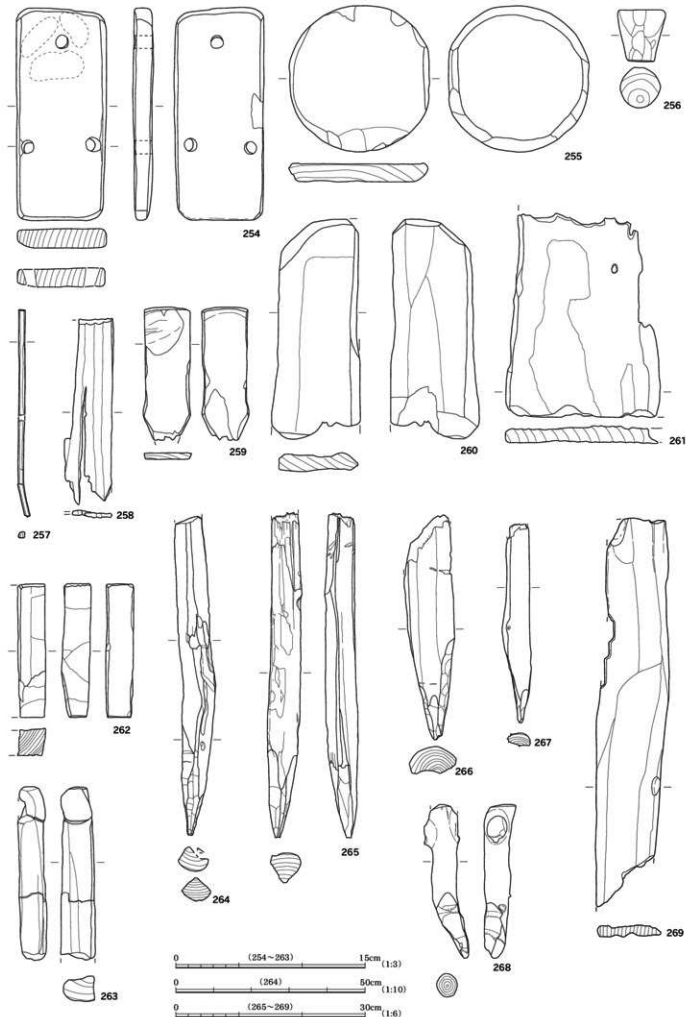
0 15cm (1:3)

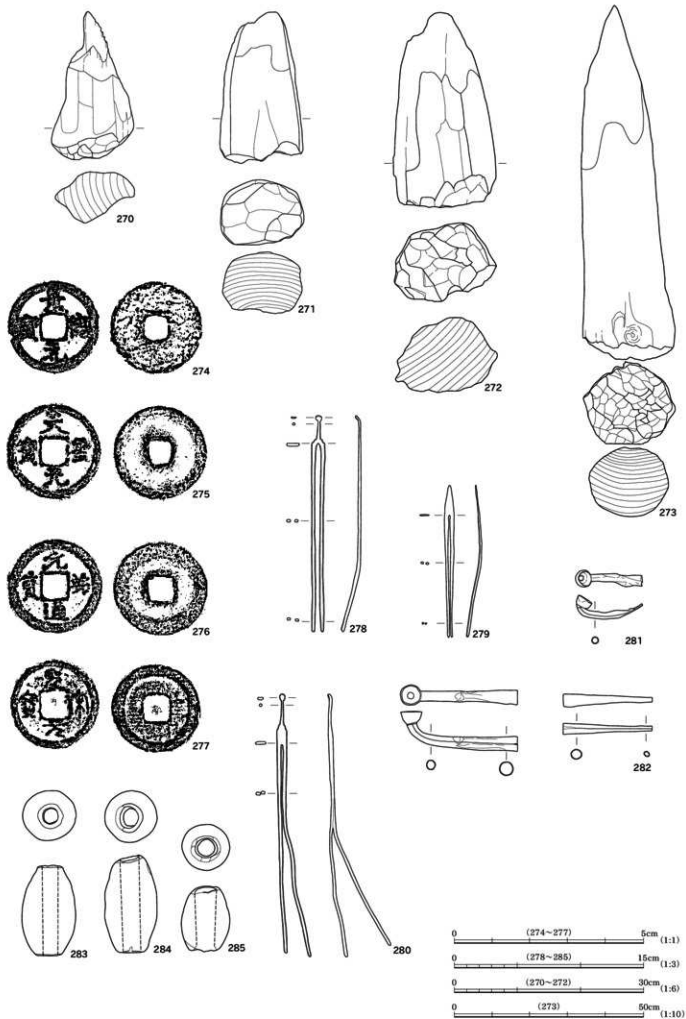


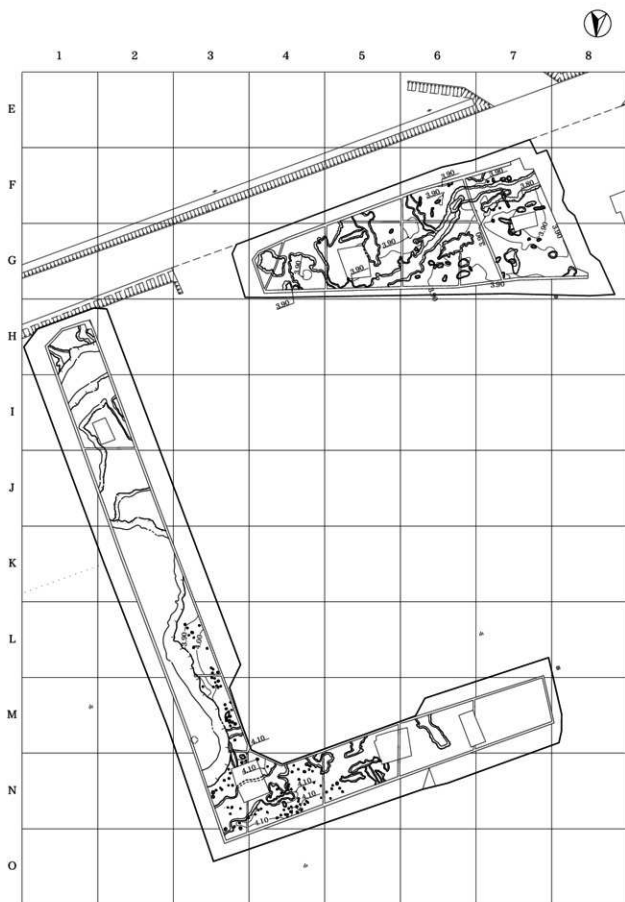


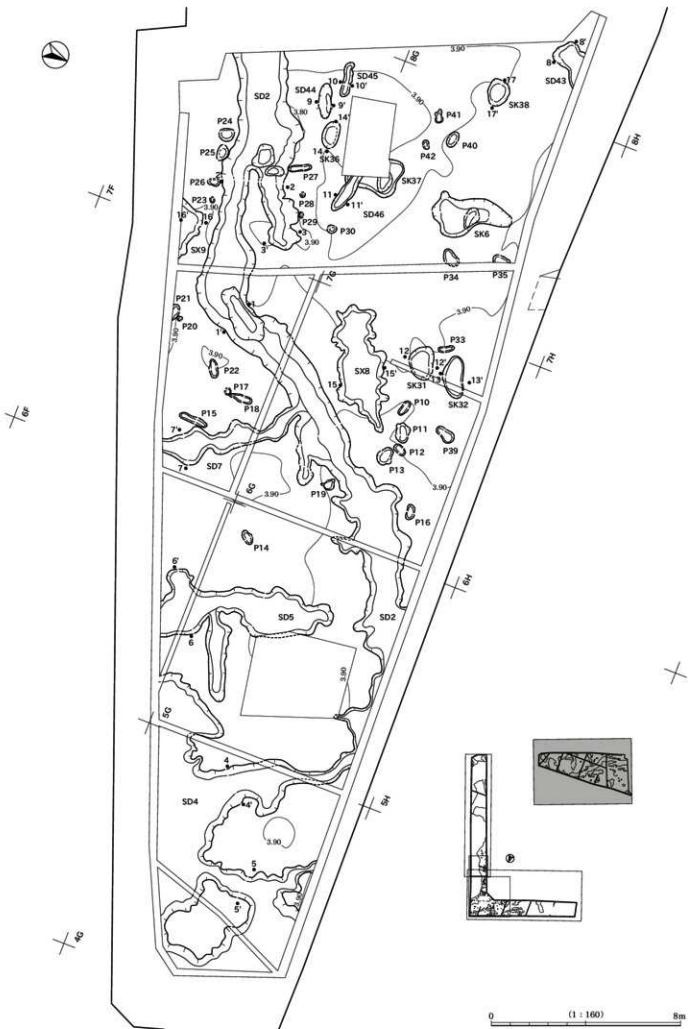


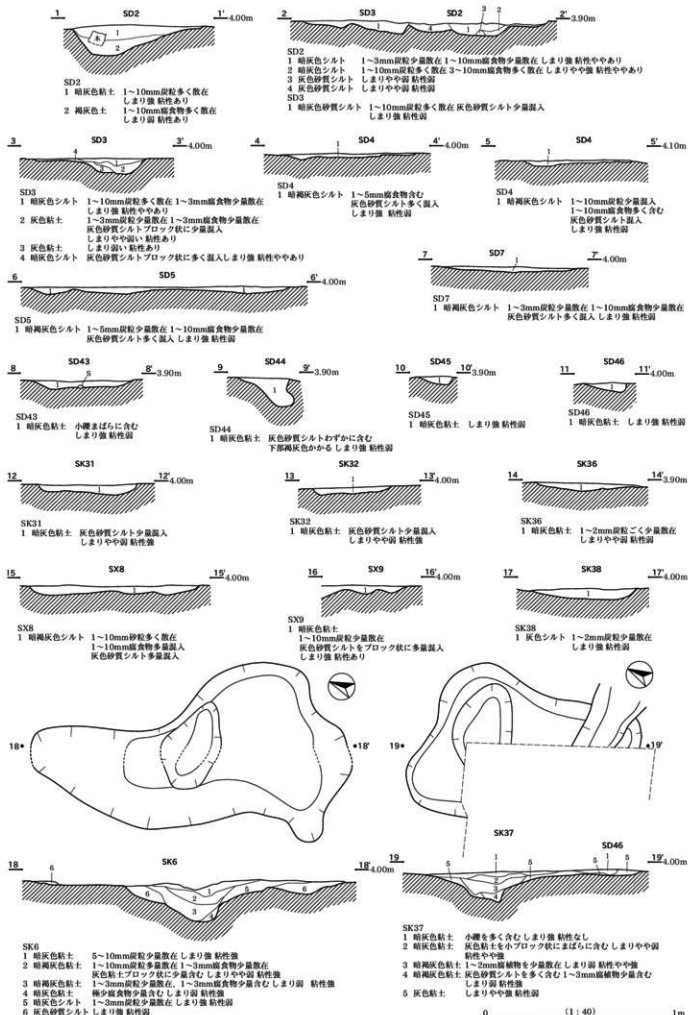


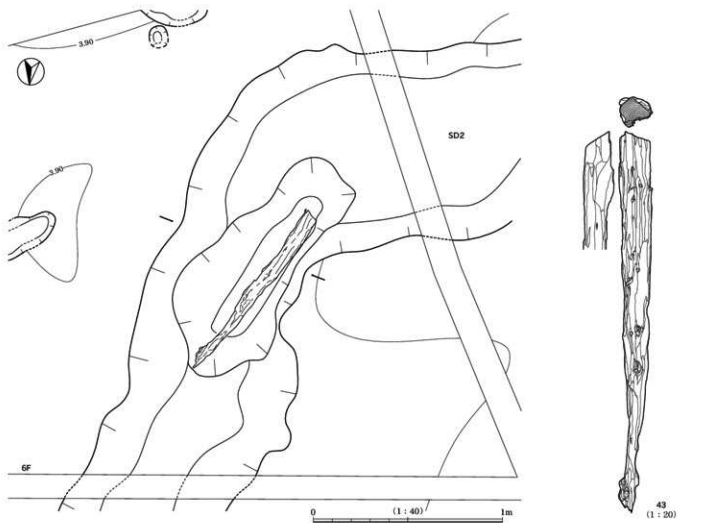
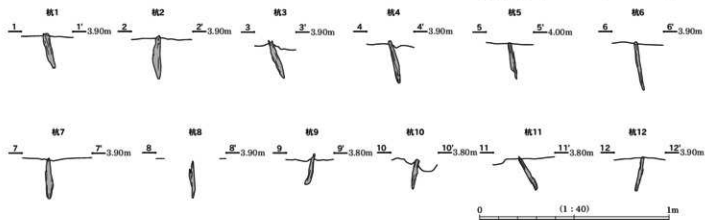
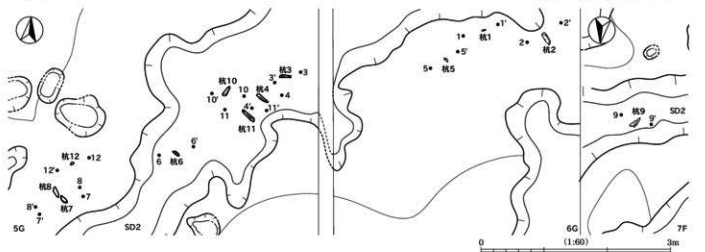




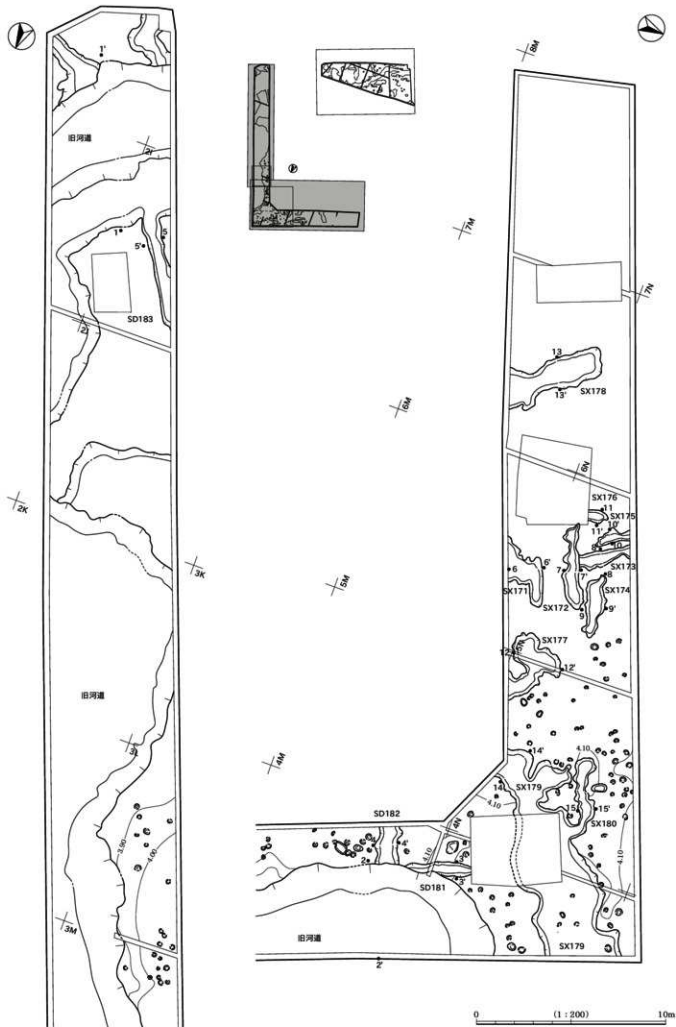


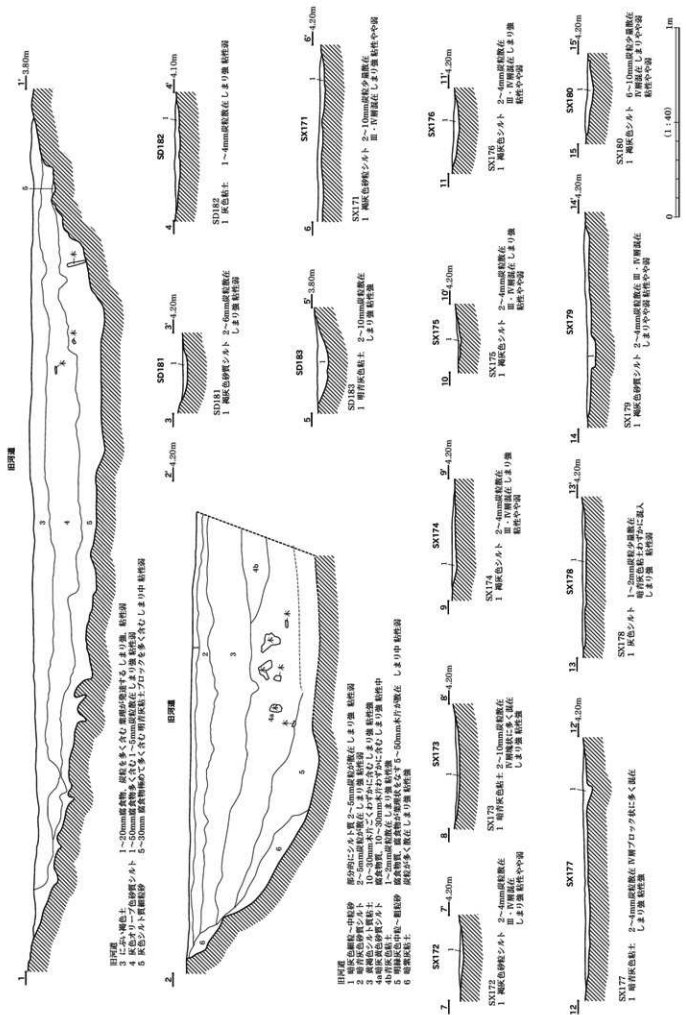


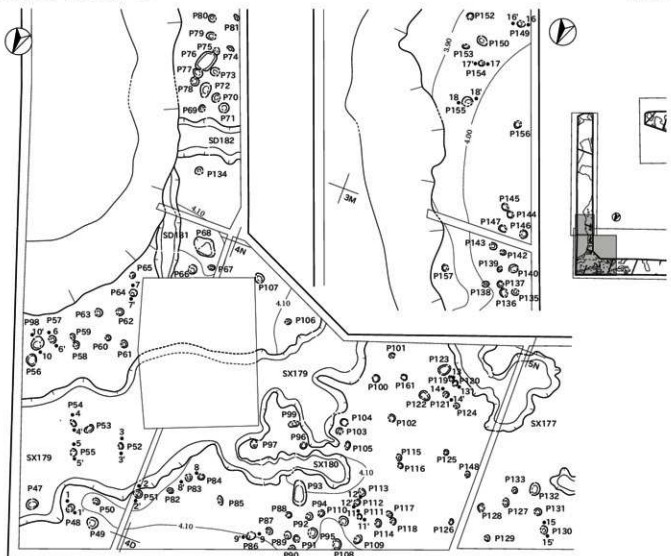




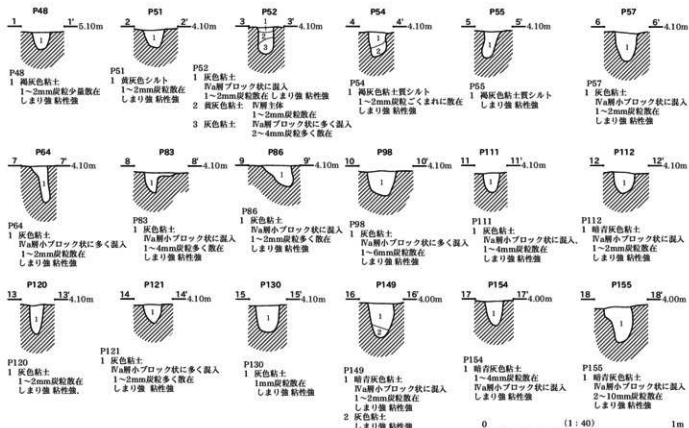


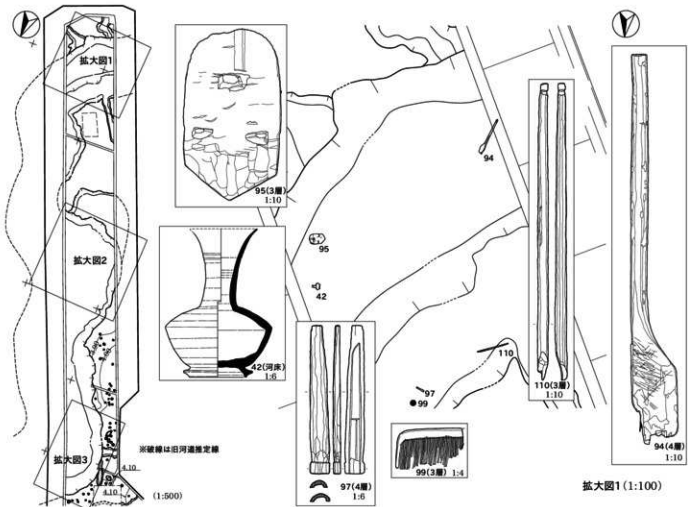




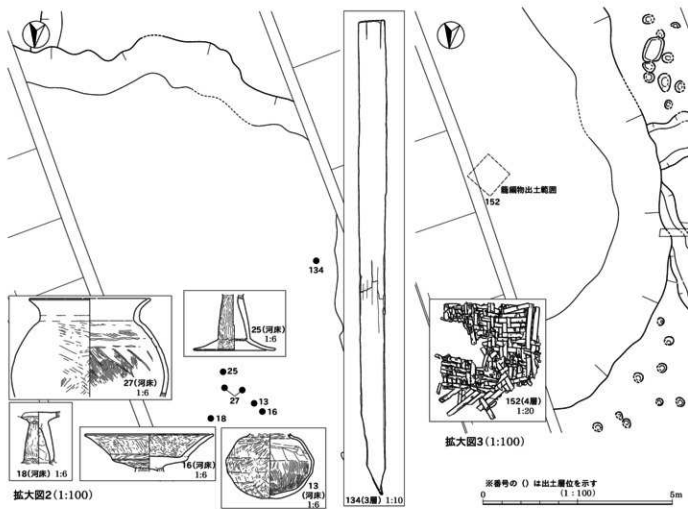


0 (1:120) 6m





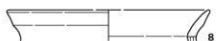
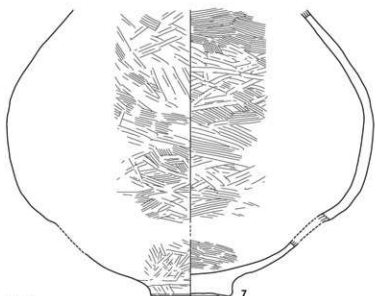
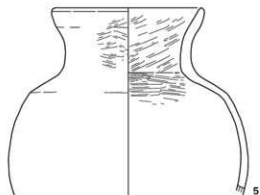
拡大図1 (1:100)



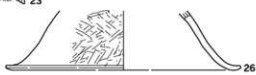
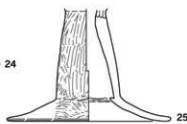
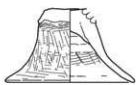
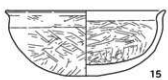
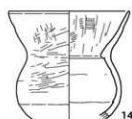
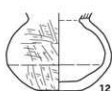
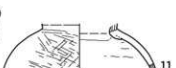
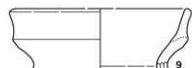
拡大図3 (1:100)

※番号の O は出土層位を示す  
(1 - 100)

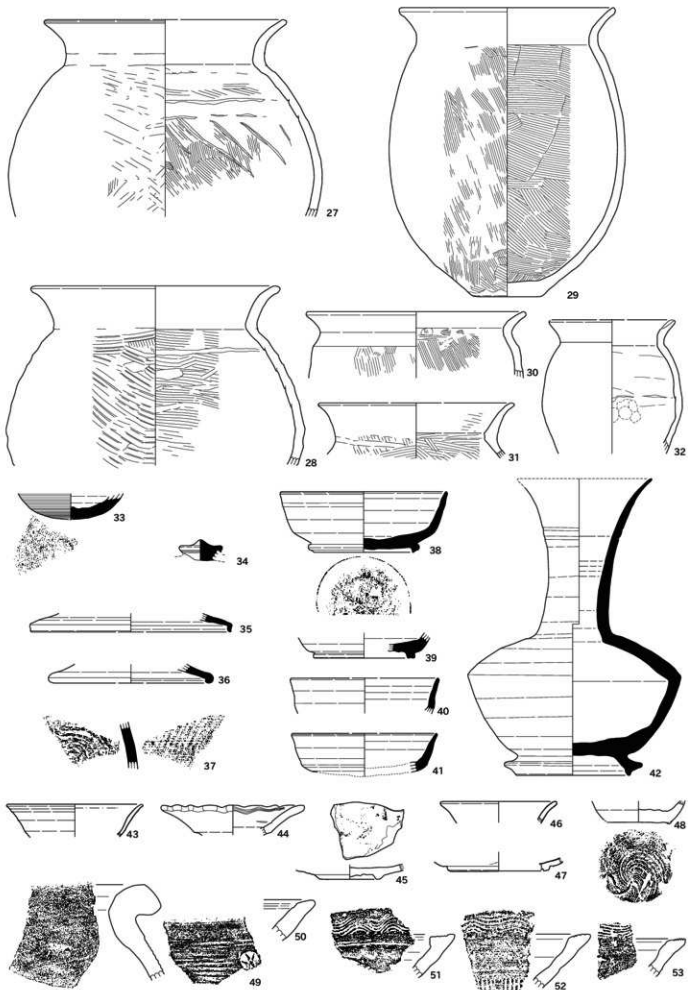
0 5m

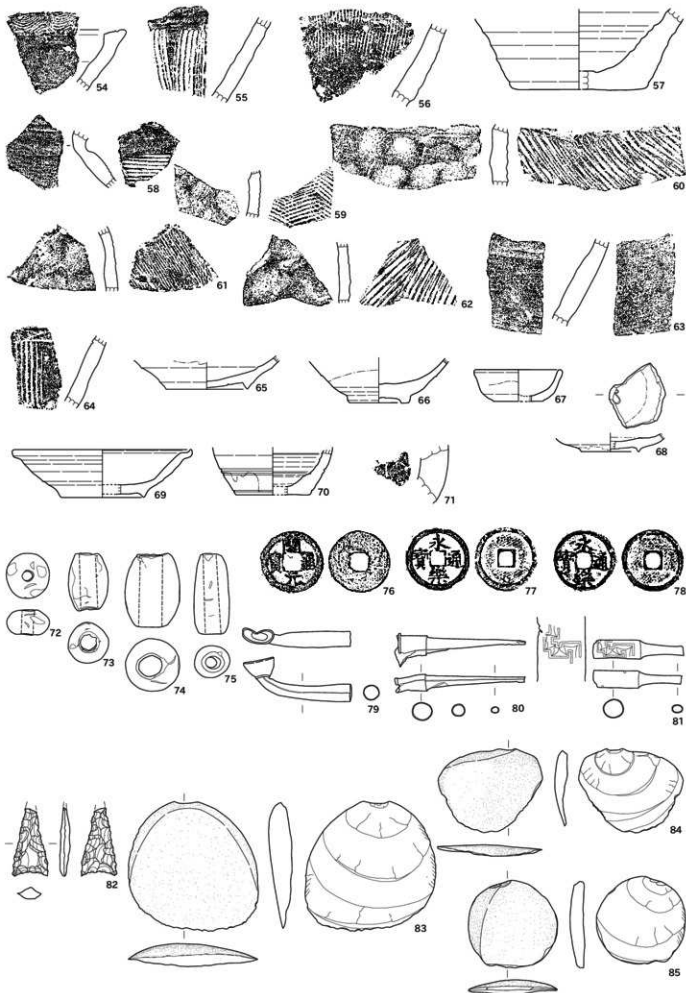


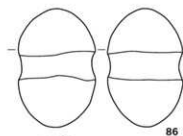
赤彩



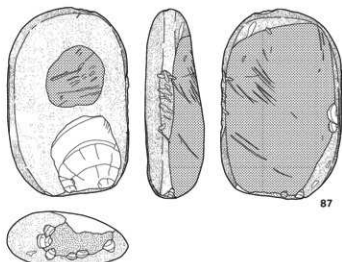
0 (1~4) 10cm (1:2)  
0 (その他) 15cm (1:3)







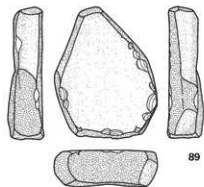
86



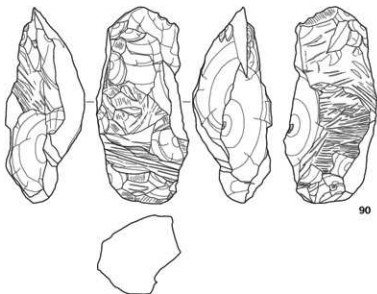
87



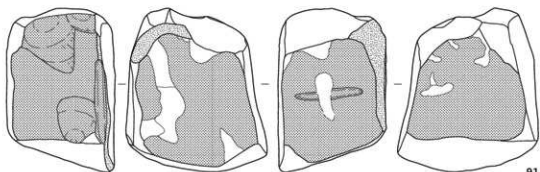
88



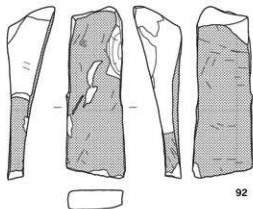
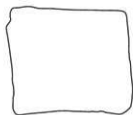
89



90



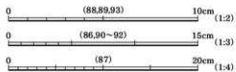
91



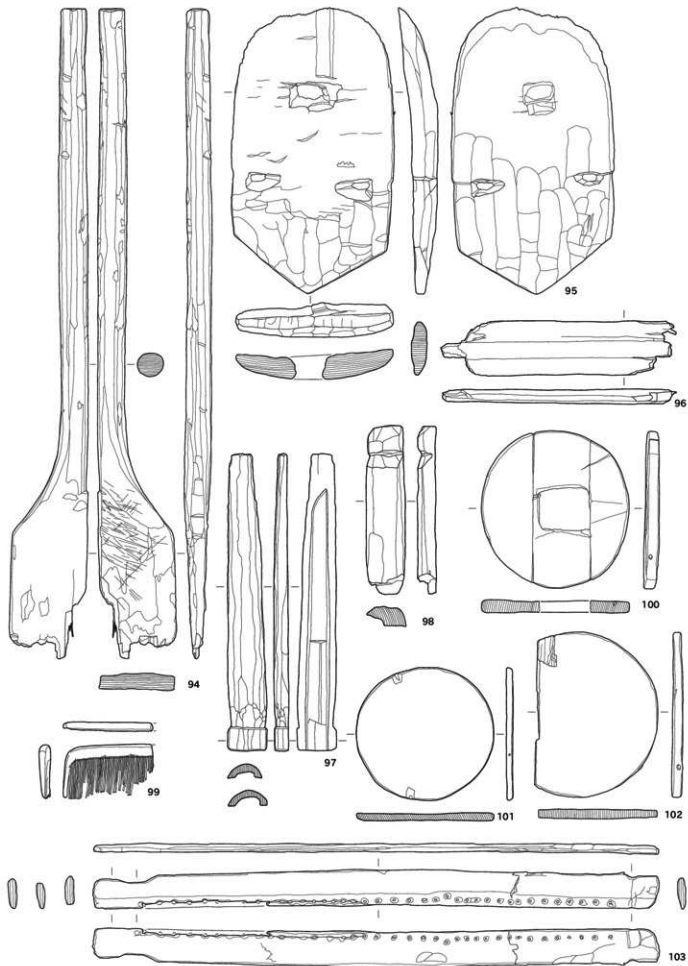
92



93



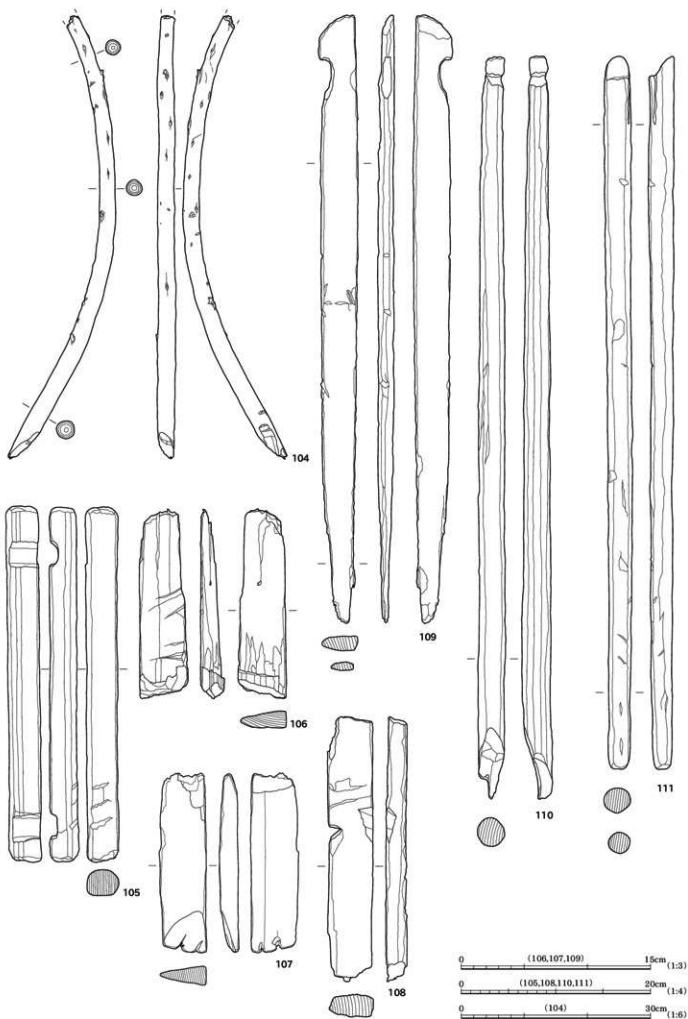


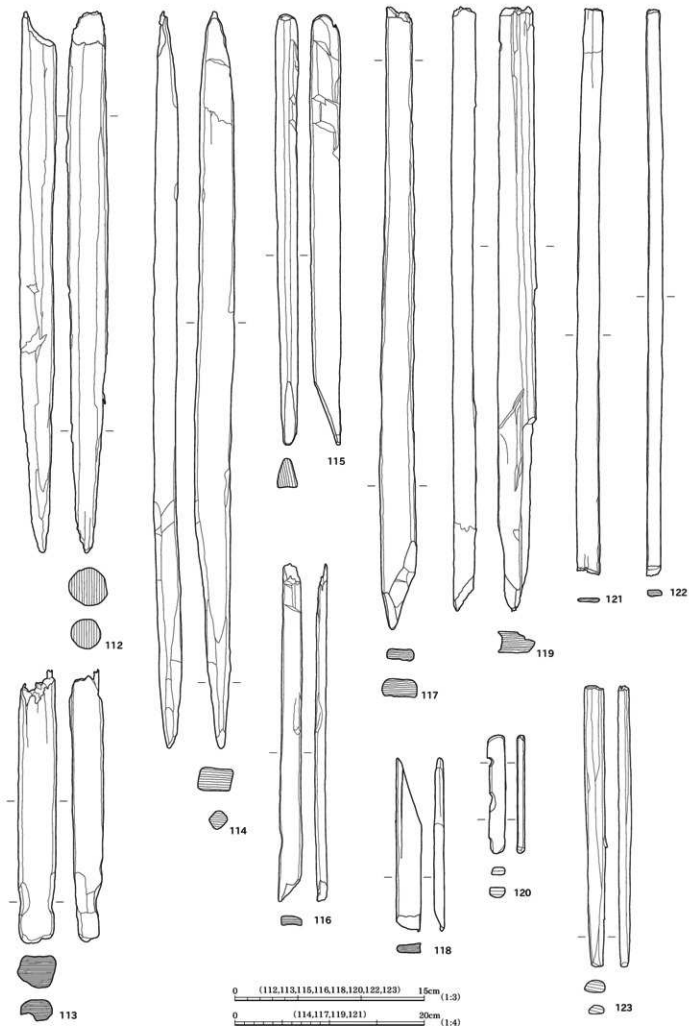


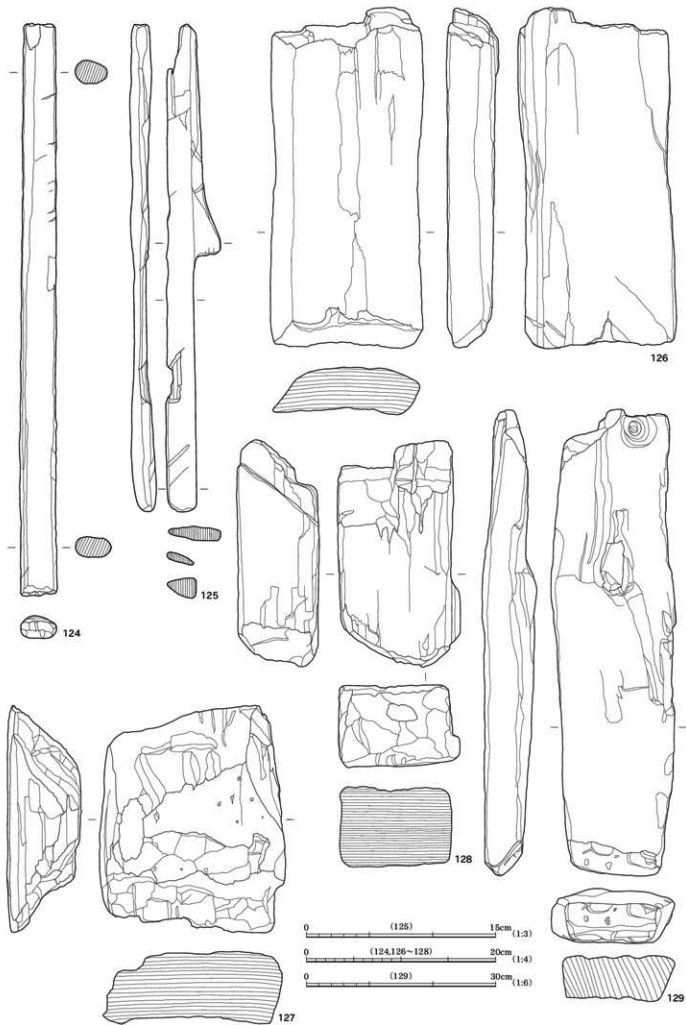
0 (96~102) 15cm (1:3)

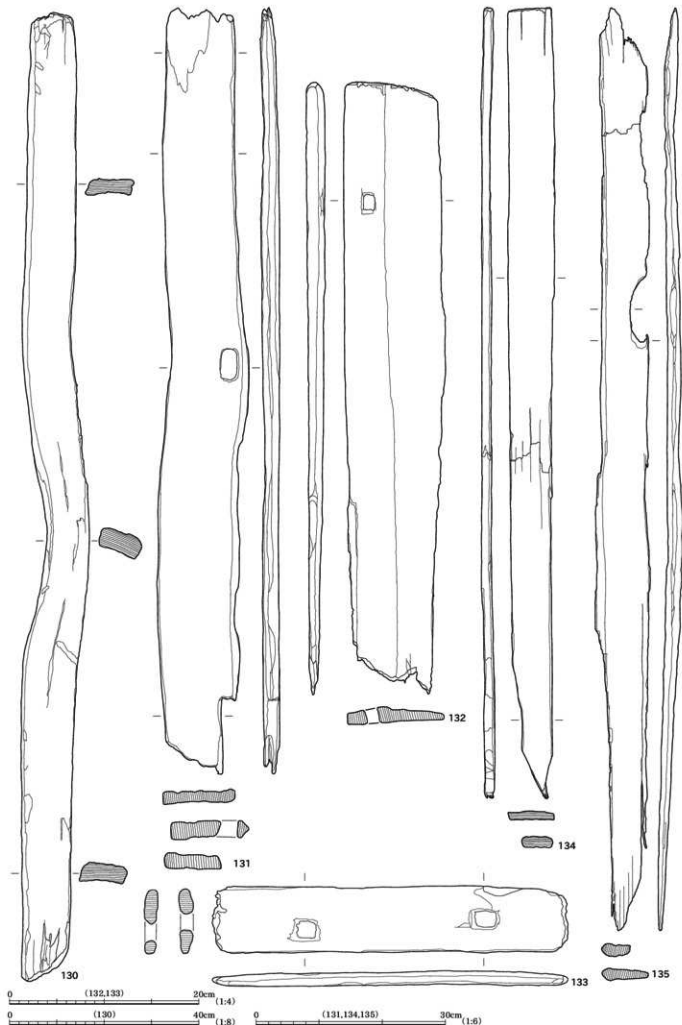
0 (103) 20cm (1:4)

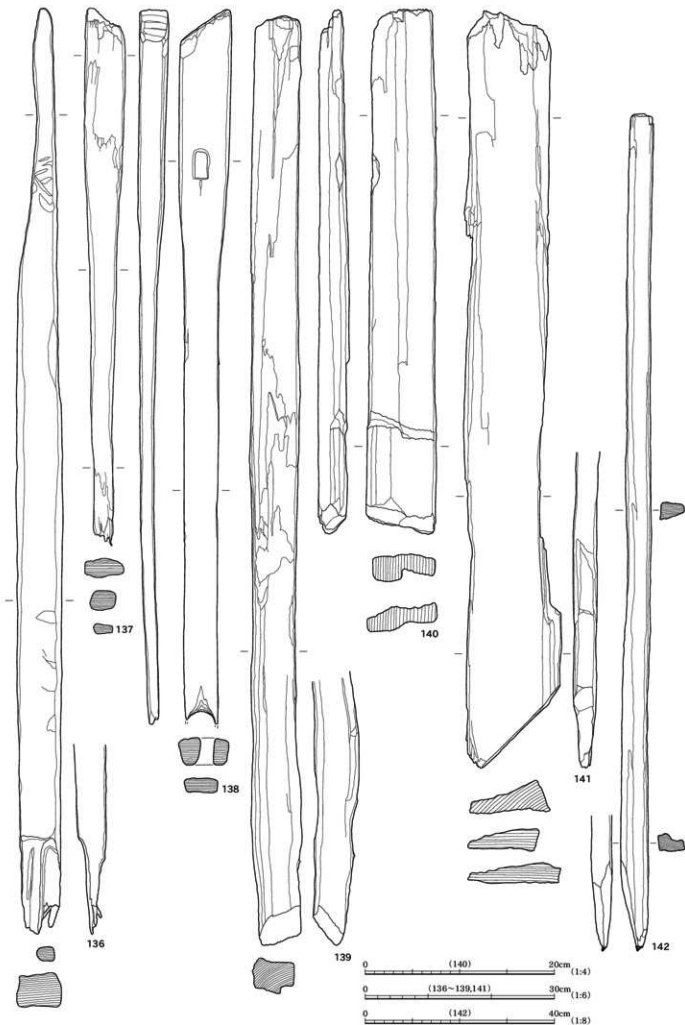
0 (94,95) 30cm (1:6)

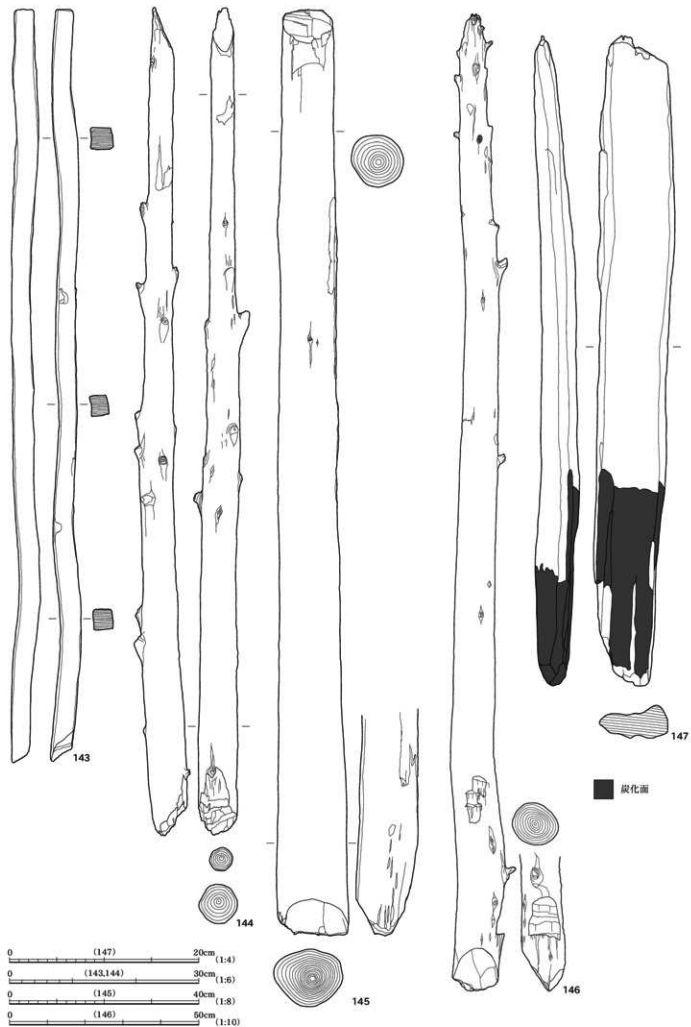


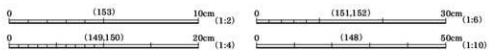
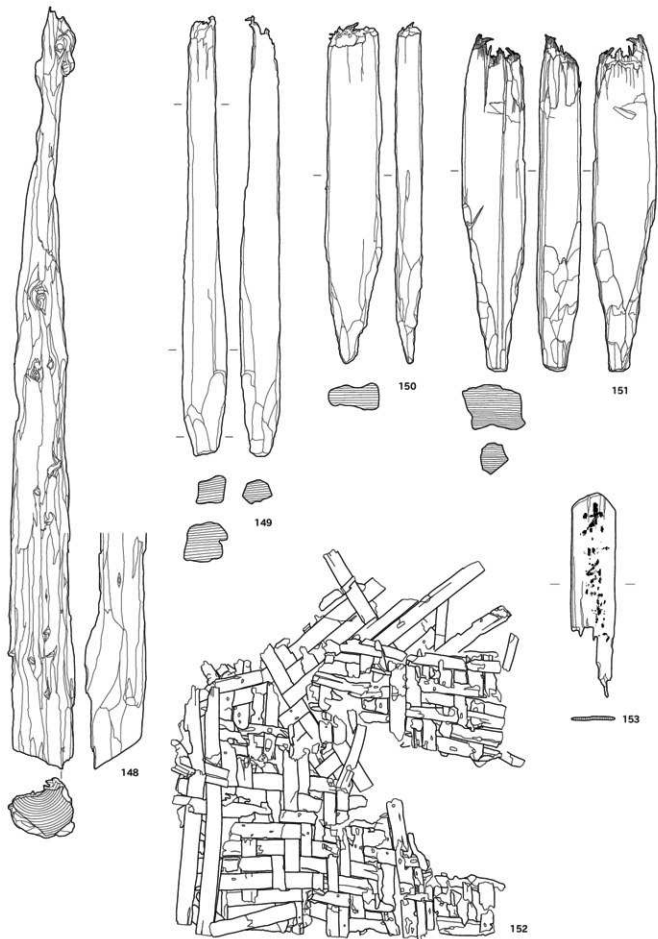
















遺跡近景 南西から



SD196 遺物出土状況 南東から



SD196・SD200 完掘 南東から



26～30列 完掘 南西から



32～37列 完掘 東から



基本層序 (18F) 南から



基本層序 (35F) 北から



遺跡遠景 南東から 北奥に日本海



5G 基本層序 南から



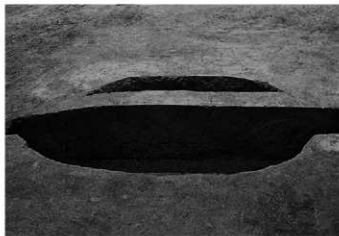
旧河道 土層断面 南から



須恵器長頸瓶 出土状況 南から



網代 出土状況 南から



SK16 セクション 北から



SK16 完掘 南から



SK54 セクション 南から



SK54 完掘 南から



P7 セクション 南から



SK28 完掘 北東から



SD18 セクション 東から



SD18 完掘 東から

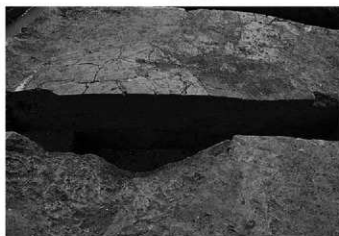




SD1・SK5 完掘 西から



P81 セクション 東から



SK83・P84 セクション 東から



SK83・P84 完掘 東から



SK101 完掘 南から



SD82 セクション 北西から



SD82 完掘 南西から



SD69 完掘 東から



SK37 セクション 北から



SK37 完掘 西から



SK45 セクション 南西から



SK45 完掘 南西から



SK48 セクション 東から



SD36 セクション 南東から



SD52 セクション 南東から



SK77 セクション 南東から



SK77 完掘 南から



SK92 セクション 東から



SK71 セクション 南東から



SD73 セクション 南から



SD73・SD74 完掘 北から



SX72 セクション 東から



19F 西壁セクション 東から



13~18列 完掘 西から



SK103 セクション 東から



SK103 完掘 東から



SK96 セクション 東から



SD95・SD98 完掘 東から



21・22列 完掘 南東から



23・24列 完掘 東から



SK1020 セクション 北から



SD1010・P1011 完掘 南から





SD1010・1014, SK1013 完掘 南東から



SK259 セクション 東から



SX333 遺物出土状況 南から



SX333 セクション 南から



SK264 セクション 東から



SK229 セクション 南から



SK255 セクション 東から



SK255・P267 セクション 南から



SK234 セクション 南西から



SK234 完掘 南西から



SK207 セクション 東から



P203 セクション 東から



P232 セクション 北から



SD201 遺物出土状況(№26) 南から



SD201 セクション 南から



SD201 完掘 南から



SD227 セクション 南東から



SD227 完掘 西から



SK265・SD257・SX333 セクション 東から



SD237 セクション 南西から



SD222 セクション 南西から



SD238・SX333ほか 完掘 南から



SD222・SK264 完掘 南西から



31列 完掘 南から



SK218 遺物出土状況 南から



SK218 完掘 南から



SK219 セクション 南から



SK219 完掘 南から



SK122 セクション① 南から



SK122 セクション② 南から



SK122 セクション③ 西から



SK122 完掘 南から



P277 セクション① 東から



P277 柱根出土状況 東から



P277 セクション② 東から



P134 セクション 西から



SD200 遺物出土状況 南東から



SD200 遺物出土状況 北から



SD196 遺物出土状況 (32F20・25) 東から



SD196 遺物出土状況 (33F15・34F11) 西から



SD196・SD197 セクション 南西から



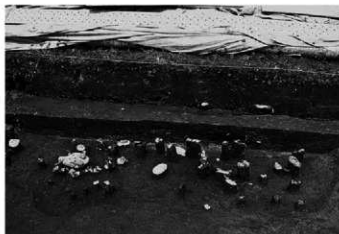
SD200 セクション 南から



SD196 セクション 西から



作業風景(32列) 北から



SD213 遺物出土状況 南から



32・33列 完掘 西から



SD212 セクション 南西から



SD212 完掘 南西から



SD199 セクション 北西から



SD199 完掘 北西から



杭215 セクション 南から



杭271 セクション 東から



SD288 セクション 北から



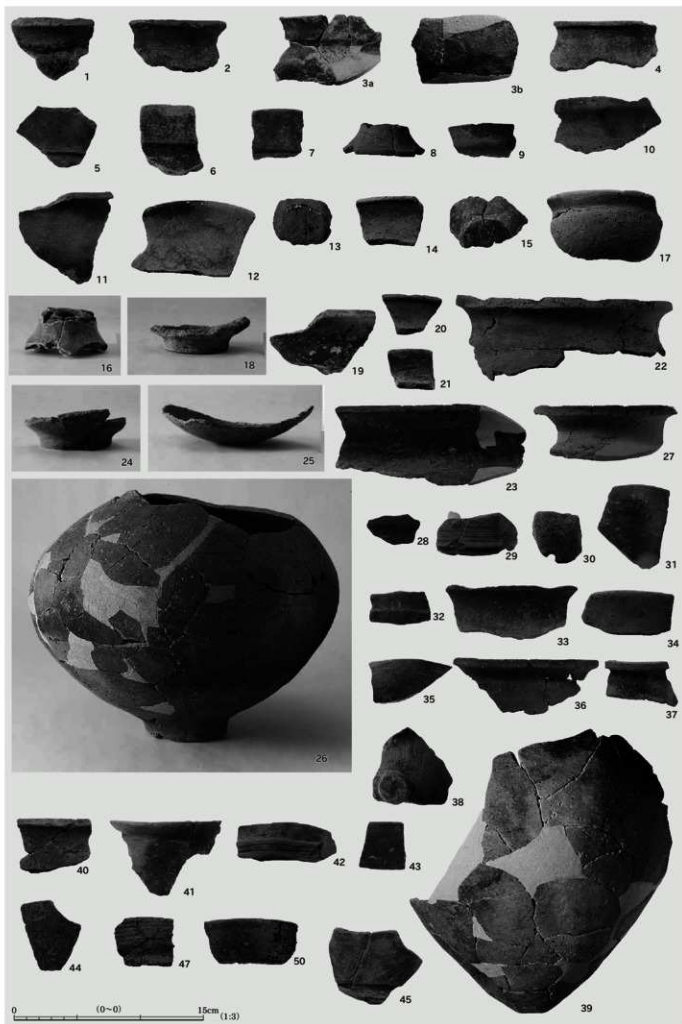
SD287 セクション 南から



SD287 完掘 南から

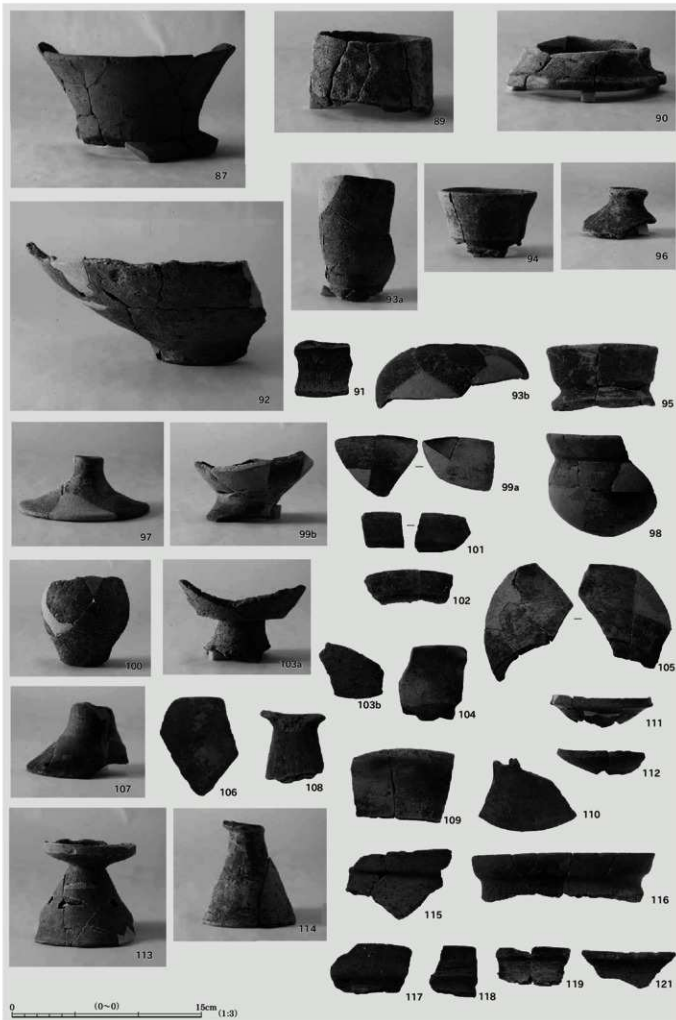


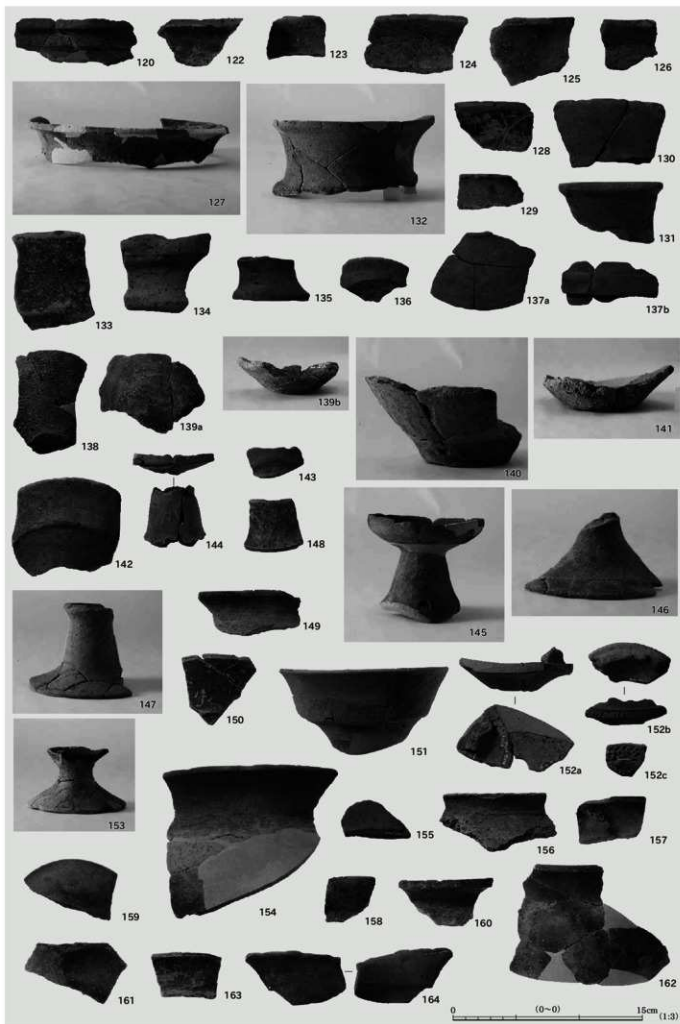
作業風景 東から

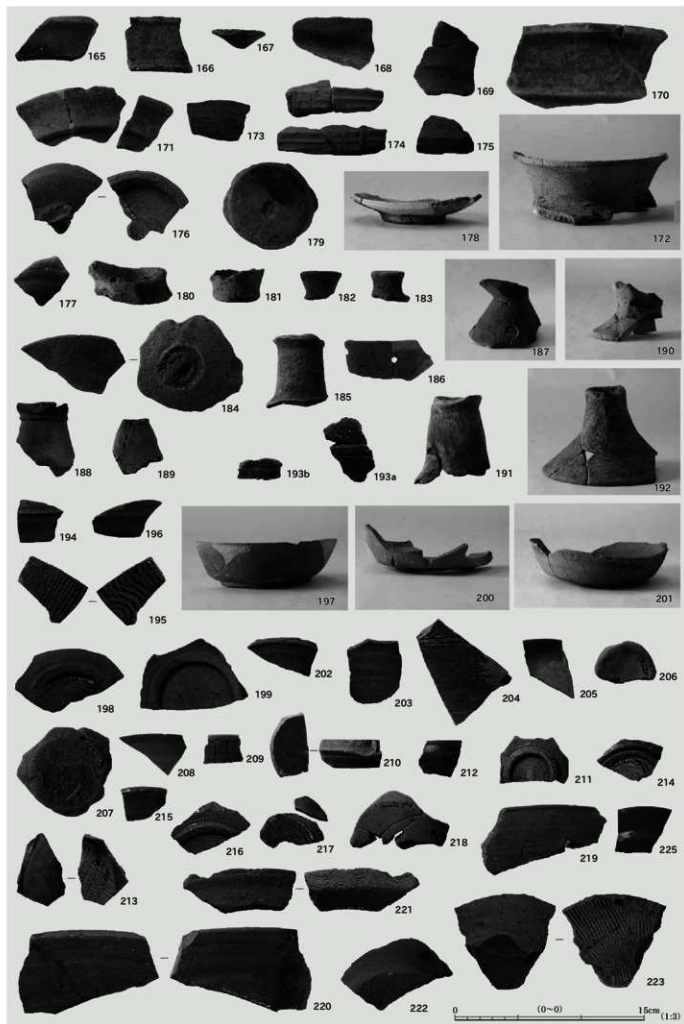


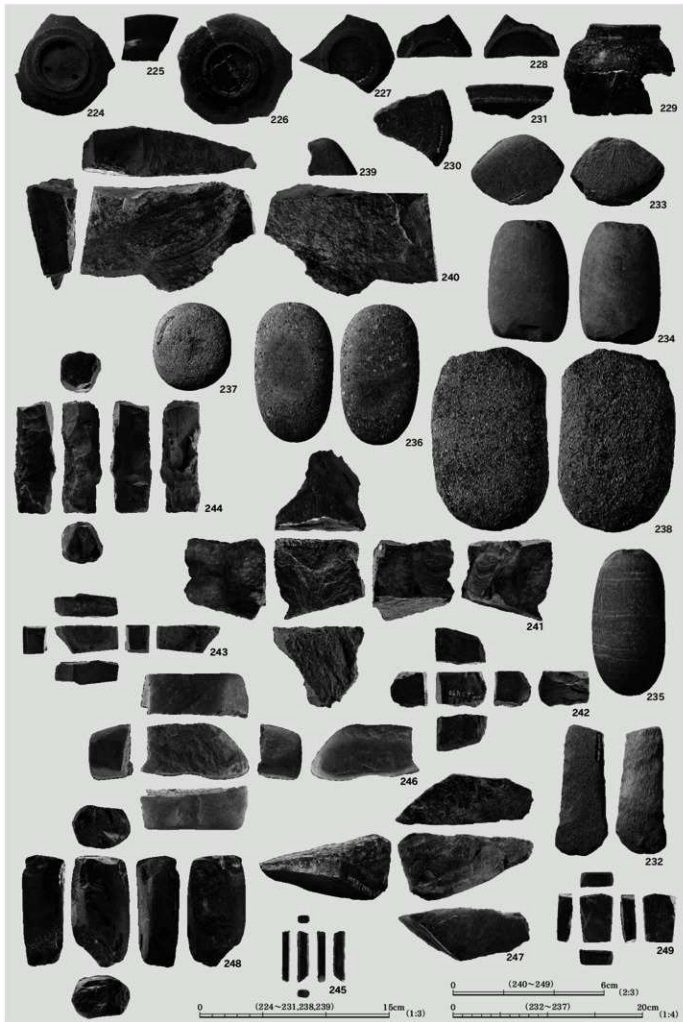


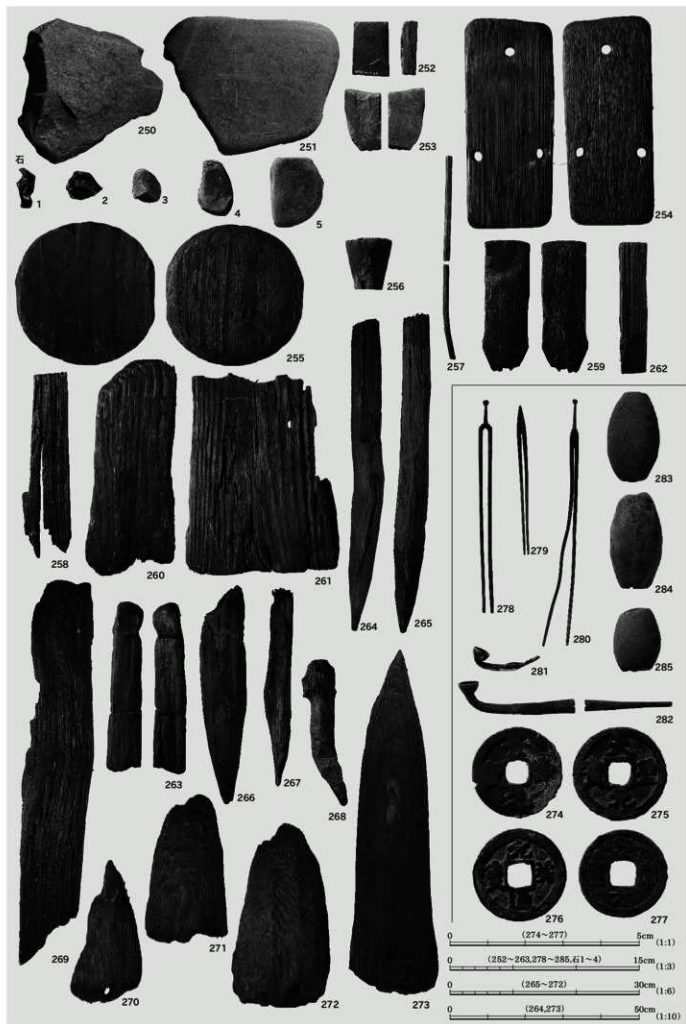














遺跡近景 東から 西奥に六反田南遺跡



調査区全景 上空から



SD2 土層断面 西から



SD2 遺物出土状況 南から



SD2 (右)・SD3 (左) 土層断面 西から



SD3 土層断面 西から



SD2 完掘 西から



SD4 完掘 東から



SK6 土層断面 西から



SK6 完掘 西から





SK37 土層断面 西から



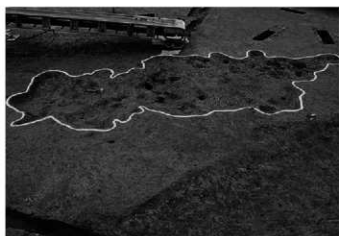
SK37 完掘 北から



SX9 土層断面 東から



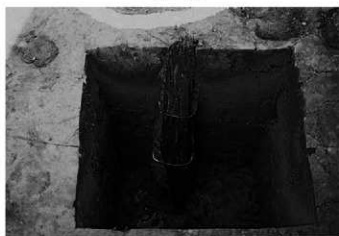
SX9 完掘 北東から



SX8 完掘



5・6G 杭列 検出状況 西から



杭2 南から



杭7・8 北から



6M 基本層序 北から



3・4N ビット群 西から



P52 土層断面 東から



P54 土層断面 東から



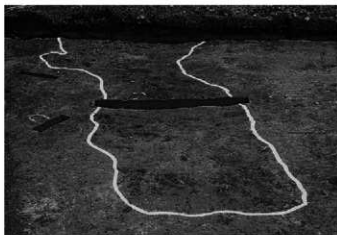
P149 土層断面 南から



P155 土層断面 北から



SX171～176 完掘 北から



SX178 完掘 北から



旧河道 土層断面 西から



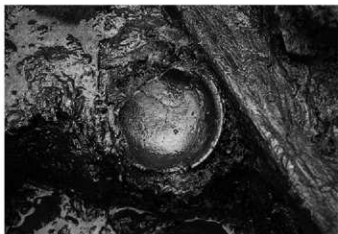
鏝 出土状況 東から



田下駄 出土状況 西から



有頭棒 出土状況 北から



土師器 掬 出土状況 西から



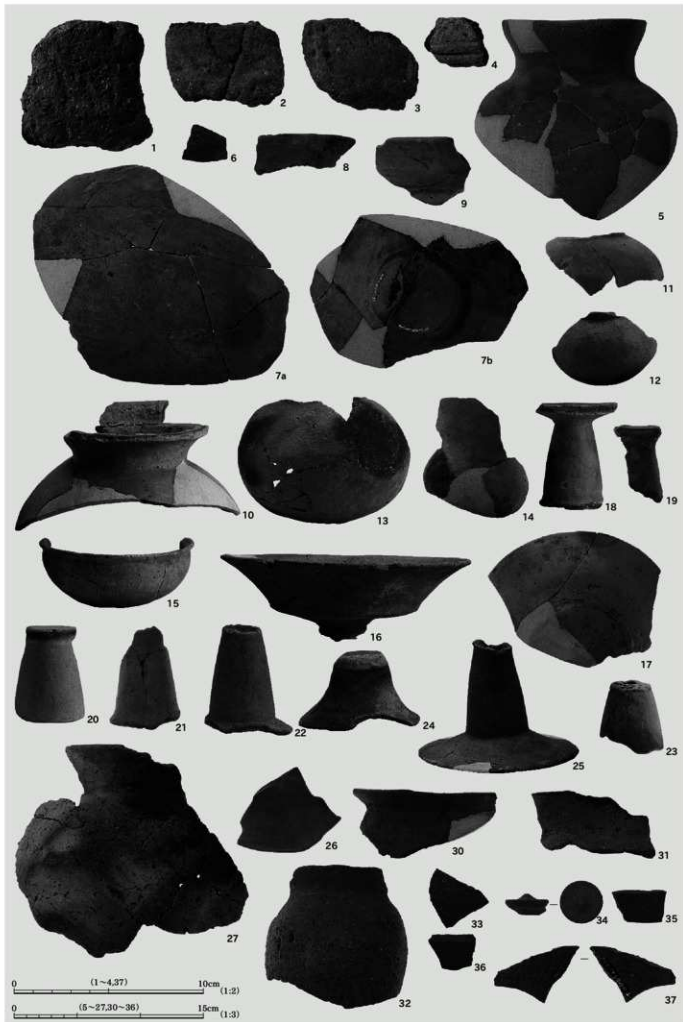
土師器 出土状況 東から

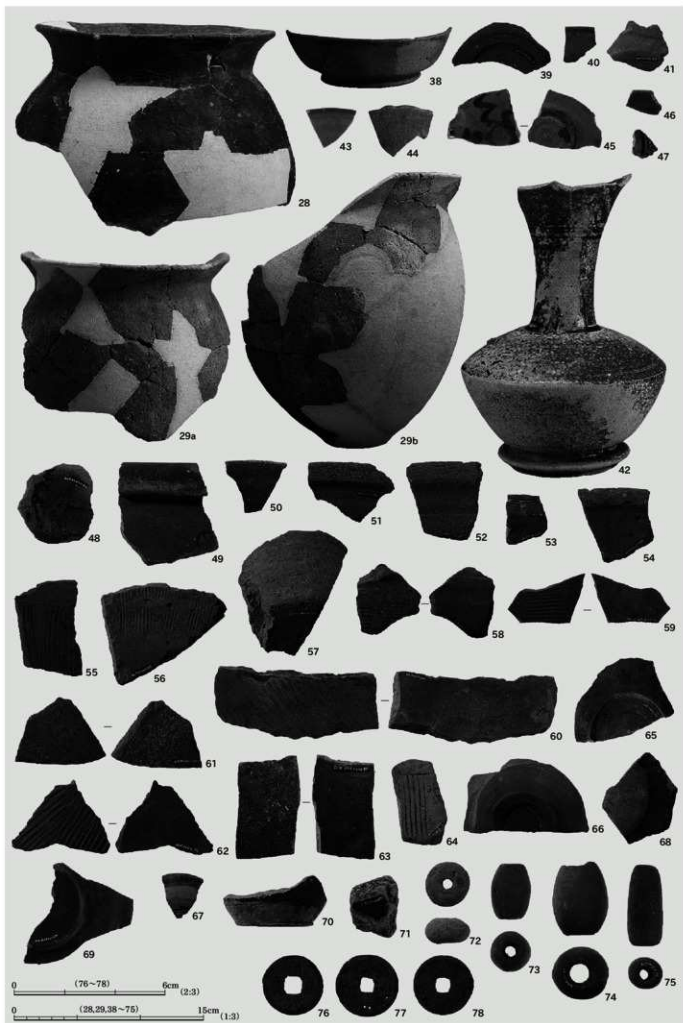


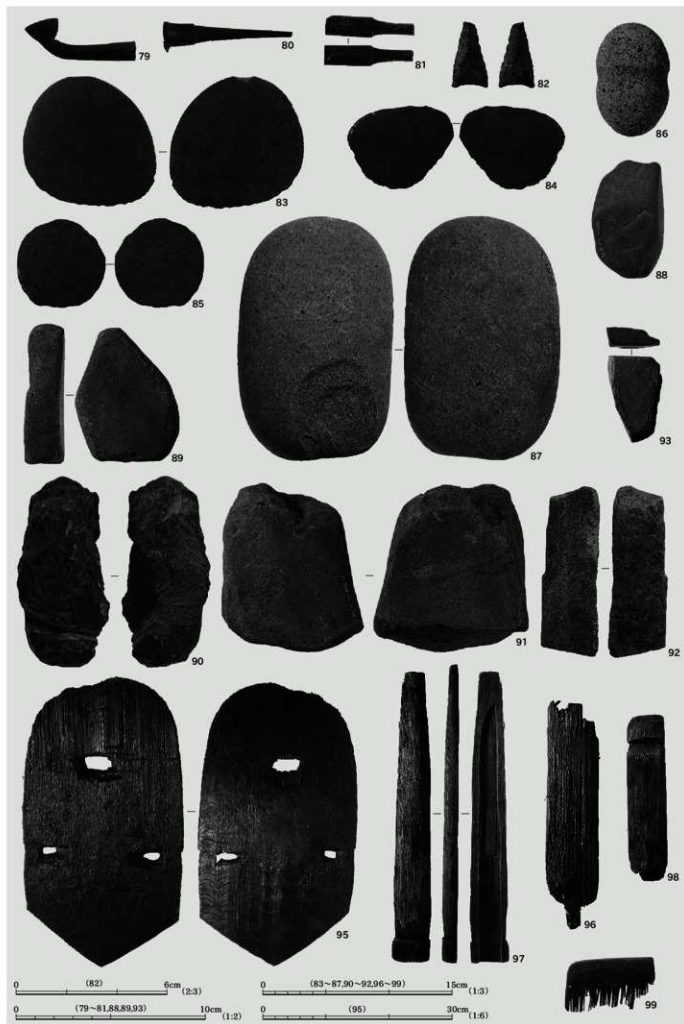
旧河道 完掘 北から

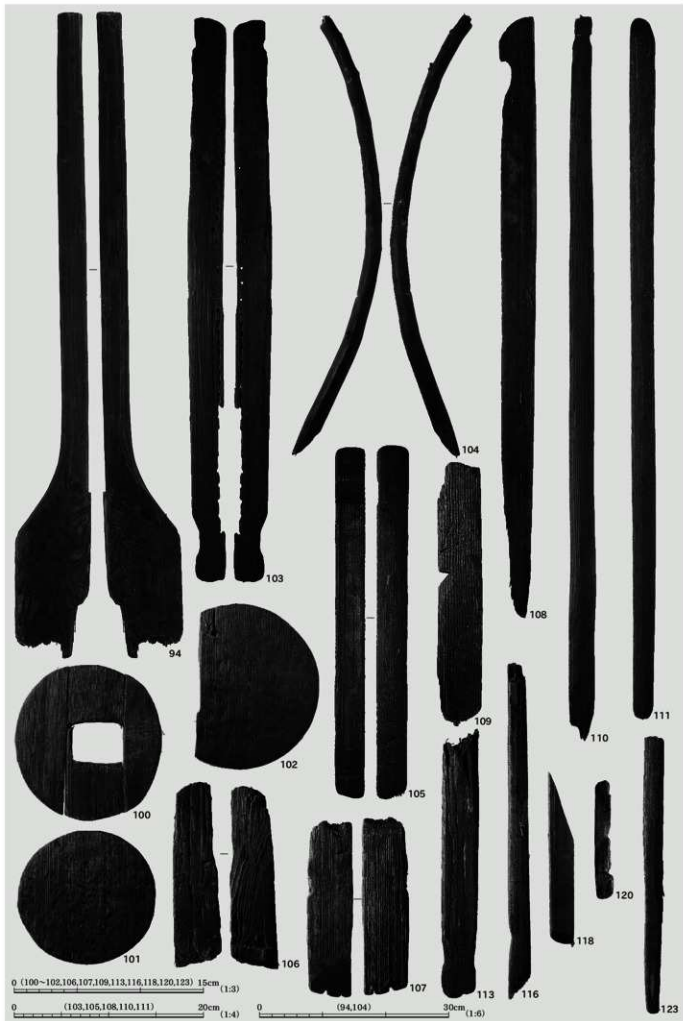


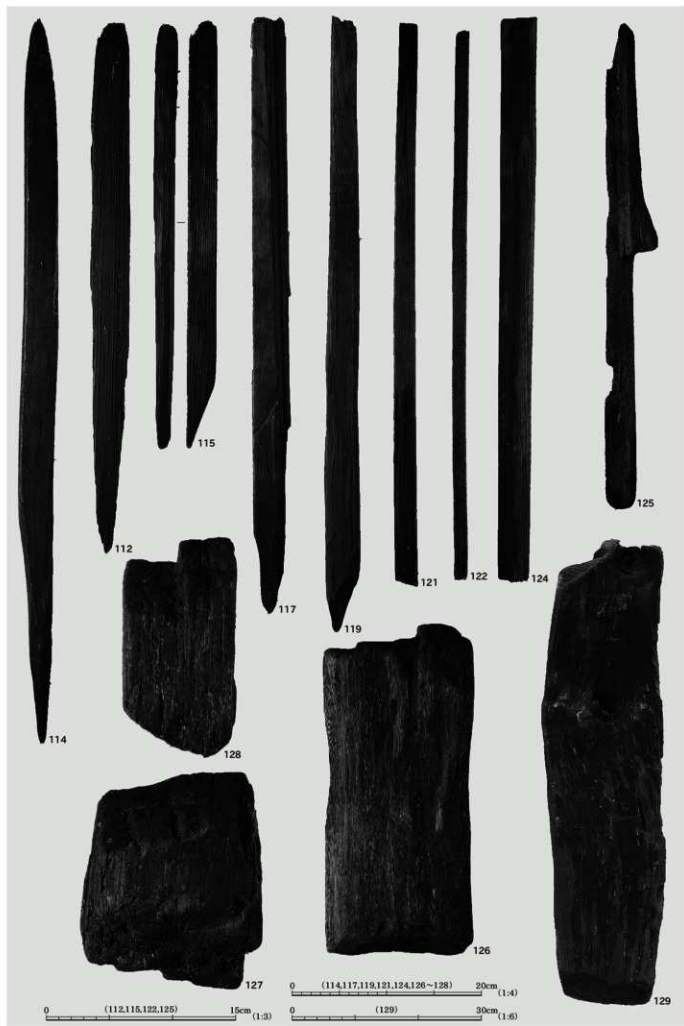
作業風景



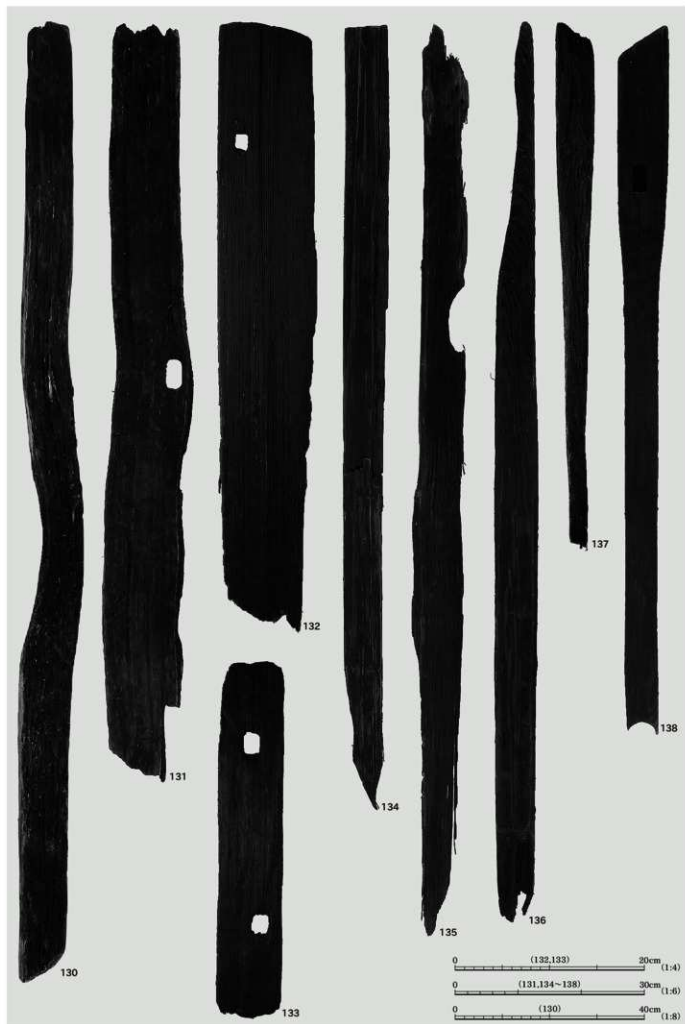


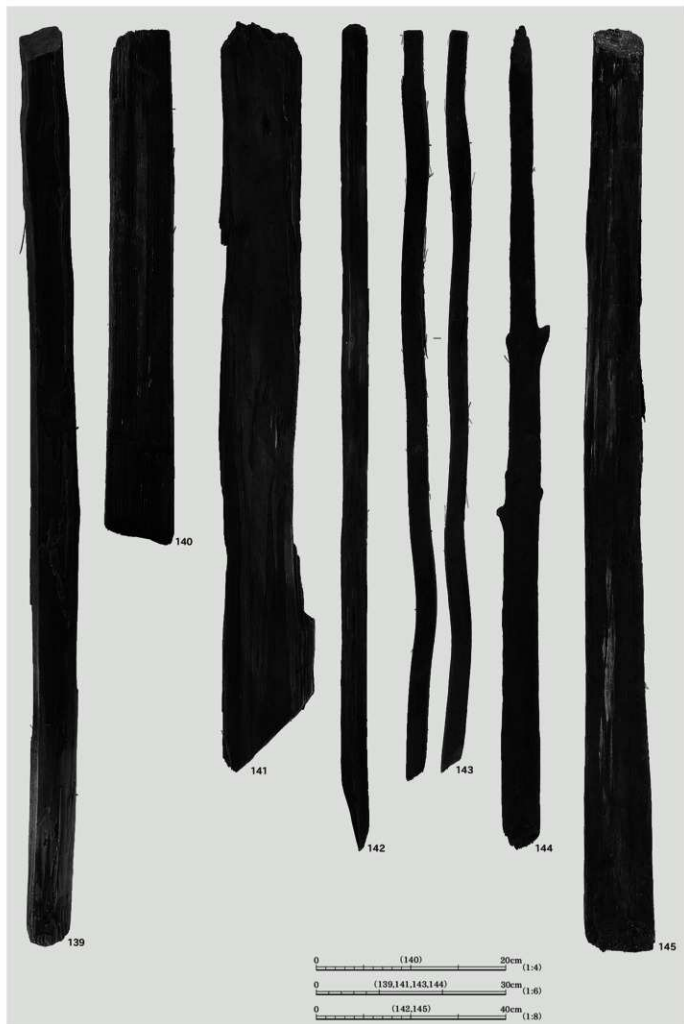


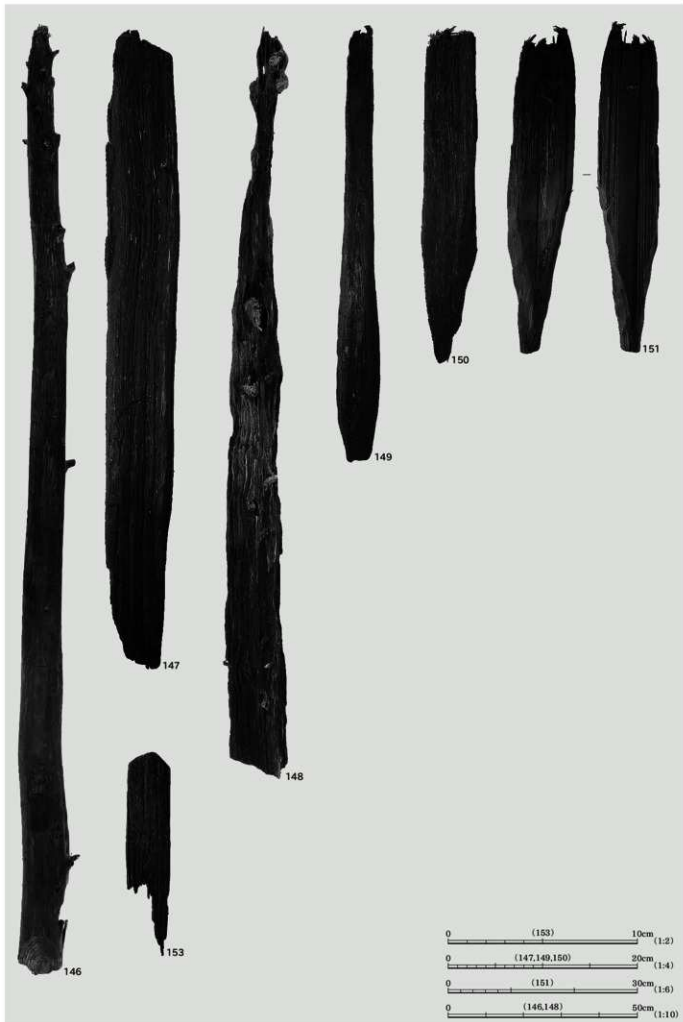












## 報告書抄録

ふりがな	ろくたんだみなみいせき・ぜんなみなみいせき							
書名	六反田南遺跡・前波南遺跡							
副書名	一般国道8号糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書							
巻次	Ⅲ							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第202集							
編著者名	春日真実・品野義昭・加藤 学・小川真一・入江清次・坂上有紀(以上 新潟県埋蔵文化財調査事業団) 細井佳浩・矢部英生(以上 株式会社吉田建設)・高橋 敦(ハリノ・サーヴェイ株式会社)							
編集機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団・株式会社吉田建設							
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津93番地1 TEL 0250 (25) 3981							
発行機関	新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団							
発行年月日	西暦2008(平成20)年10月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ろくたんだみなみいせき 六反田南遺跡	新潟県糸魚川市 大字大和川 大字六反田ほか	216	275	37度 3分 5秒	137度 53分 34秒	20060418 ～ 20061115	3,730 m <sup>2</sup>	道路 (糸魚川東バイパス)建設 鉄道 (北陸新幹線)
ぜんなみなみいせき 前波南遺跡	新潟県糸魚川市 大字大和川 大字前波ほか	216	276	37度 3分 7秒	137度 53分 43秒	20060418 ～ 20060803	1,150 m <sup>2</sup>	道路 (糸魚川東バイパス)建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
六反田南遺跡	集落か	古墳時代前期	平地式住居・ 土坑・溝・ ピット	土師器・須恵器・中近世陶磁器・ 石器・土錘・木製品・金属製品・ 銭貨				
前波南遺跡	遺物包含地	弥生時代・ 古墳時代・ 古代・中世	自然水路・ 土坑・溝・ ピット	木製品(銅代・木簡など)・ 縄文土器・弥生土器・土師器・ 須恵器・中近世陶磁器・土錘・石器				

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第202集	
一般国道8号糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ	
六反田南遺跡・前波南遺跡	
平成20年10月30日印刷 平成20年10月31日発行	編集・発行 新潟県教育委員会 〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1 電話 025 (285) 5511  財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1 電話 0250 (25) 3981 FAX 0250 (25) 3986  印刷・製本 株式会社ハイングラフ 〒950-2022 新潟市小針1丁目11番8号 電話 025 (233) 0321

## 新潟県埋蔵文化財調査報告書 第202集 六反田南遺跡・前波南遺跡正誤表

頁	行	誤	正
2	22行	4か所で遺構、23か所で遺物を検出した。	6か所で遺構、20か所で遺物を検出した。
2	下から7行	8か所で遺物	2か所で遺物
4	下から10行	4月24日から <u>掘削</u> を開始した。掘削の設定は・・・	4月24日から <u>発掘</u> を開始した。発掘の設定は・・・
4	下から8行	人力で開削することとした。	人力で掘削を開始することとした。
58	21～22行	珠洲Vしている土師器	珠洲V型としている土師器